

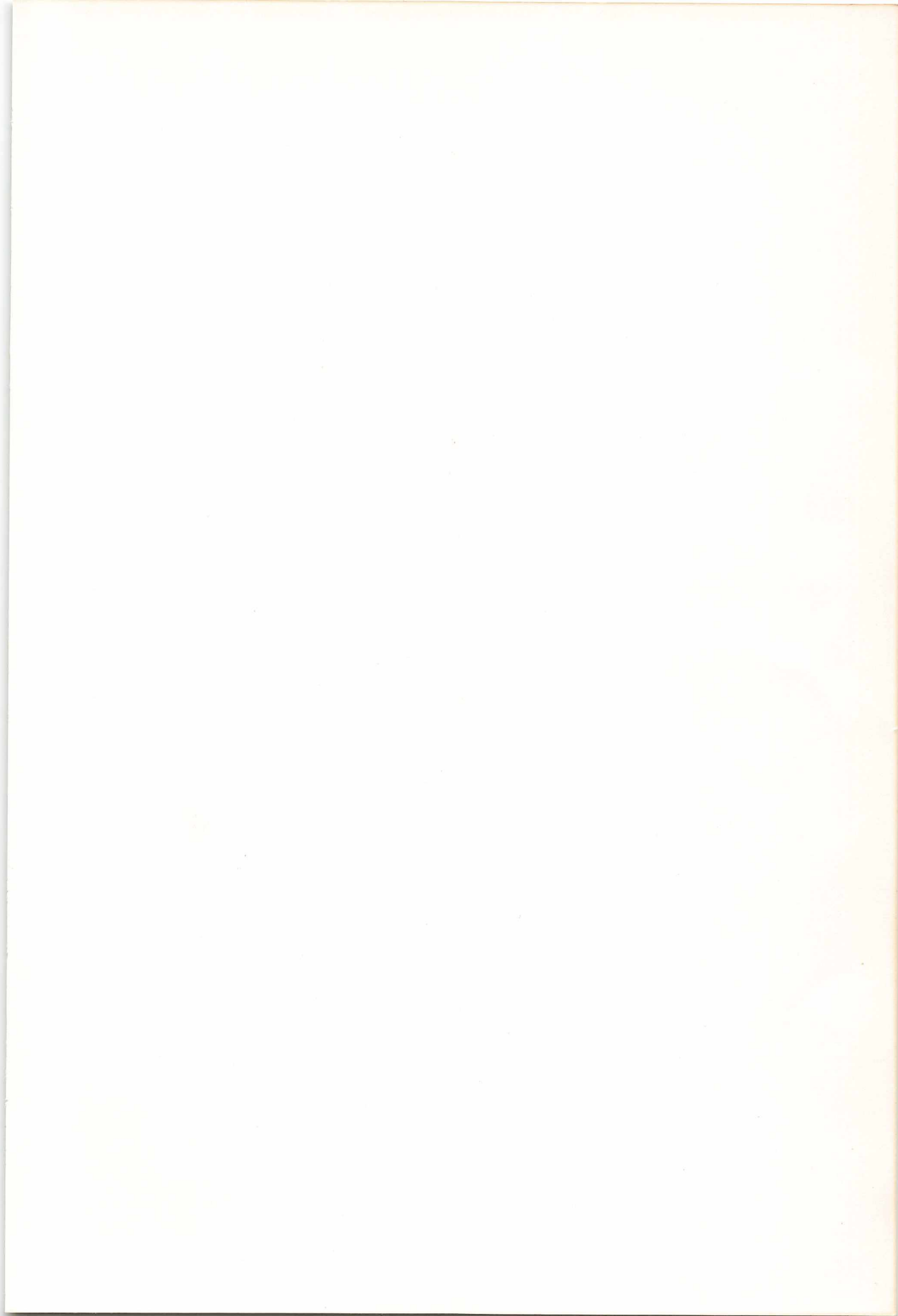
新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

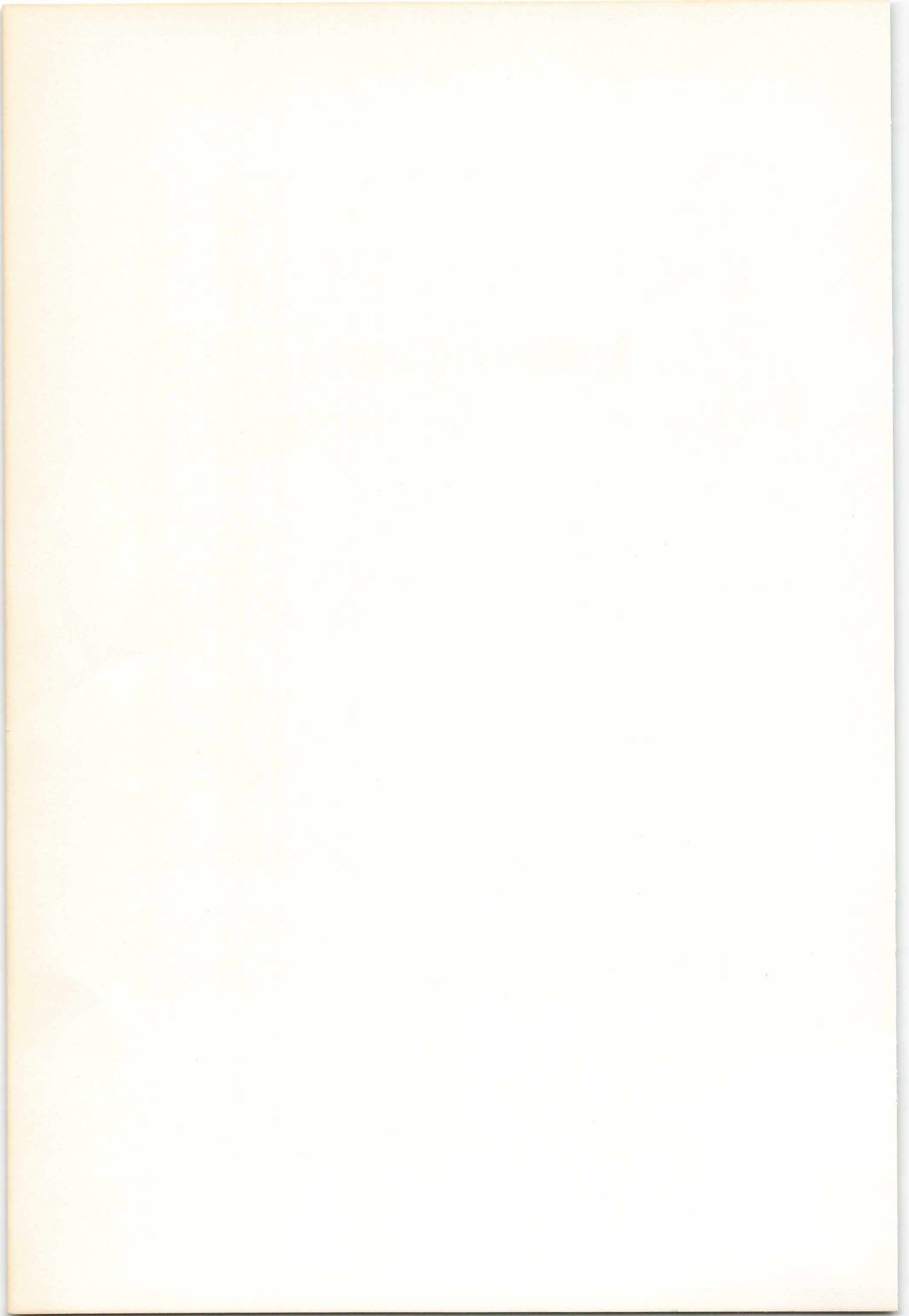
第4分冊 ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





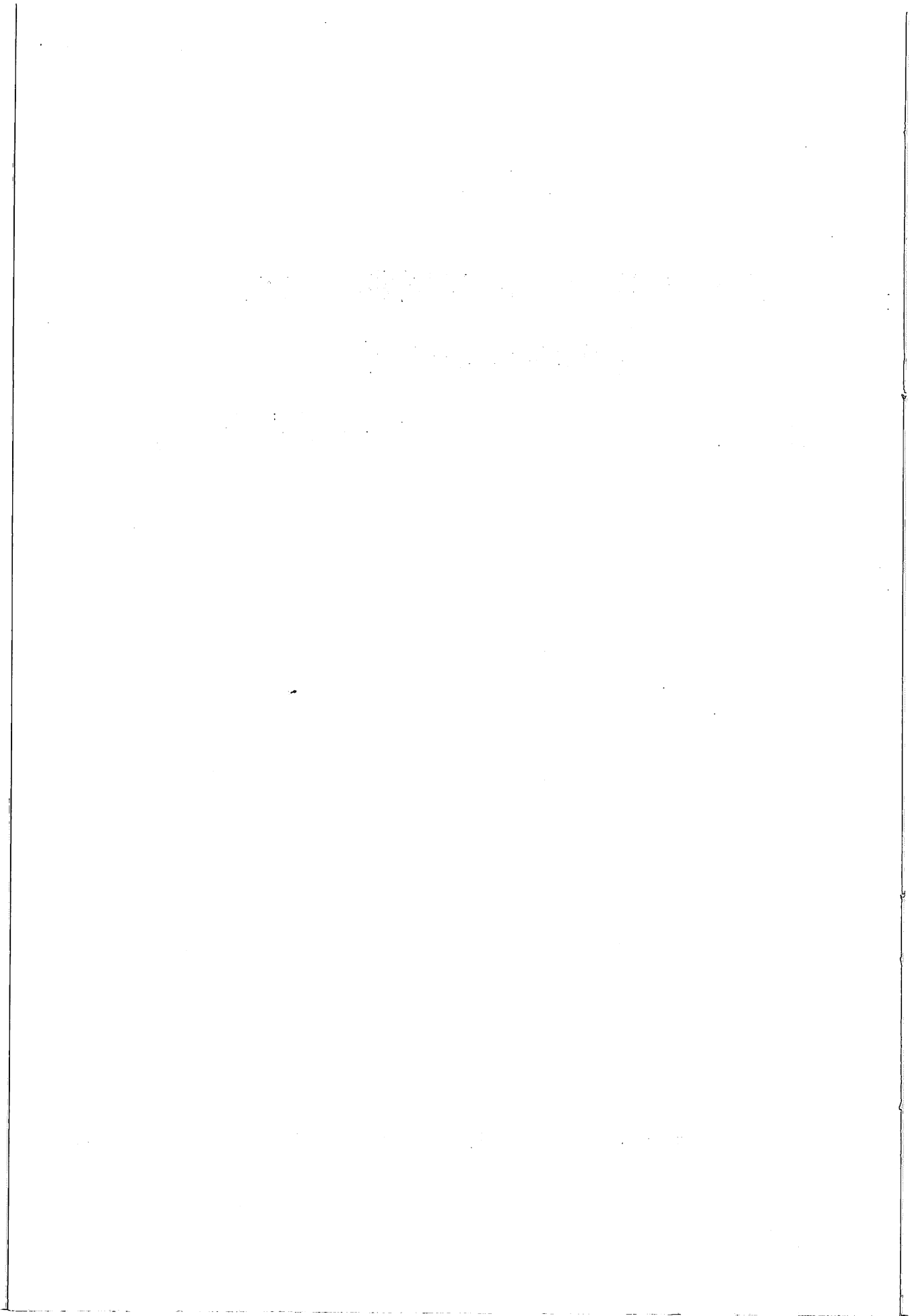


新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

第4分冊 ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ

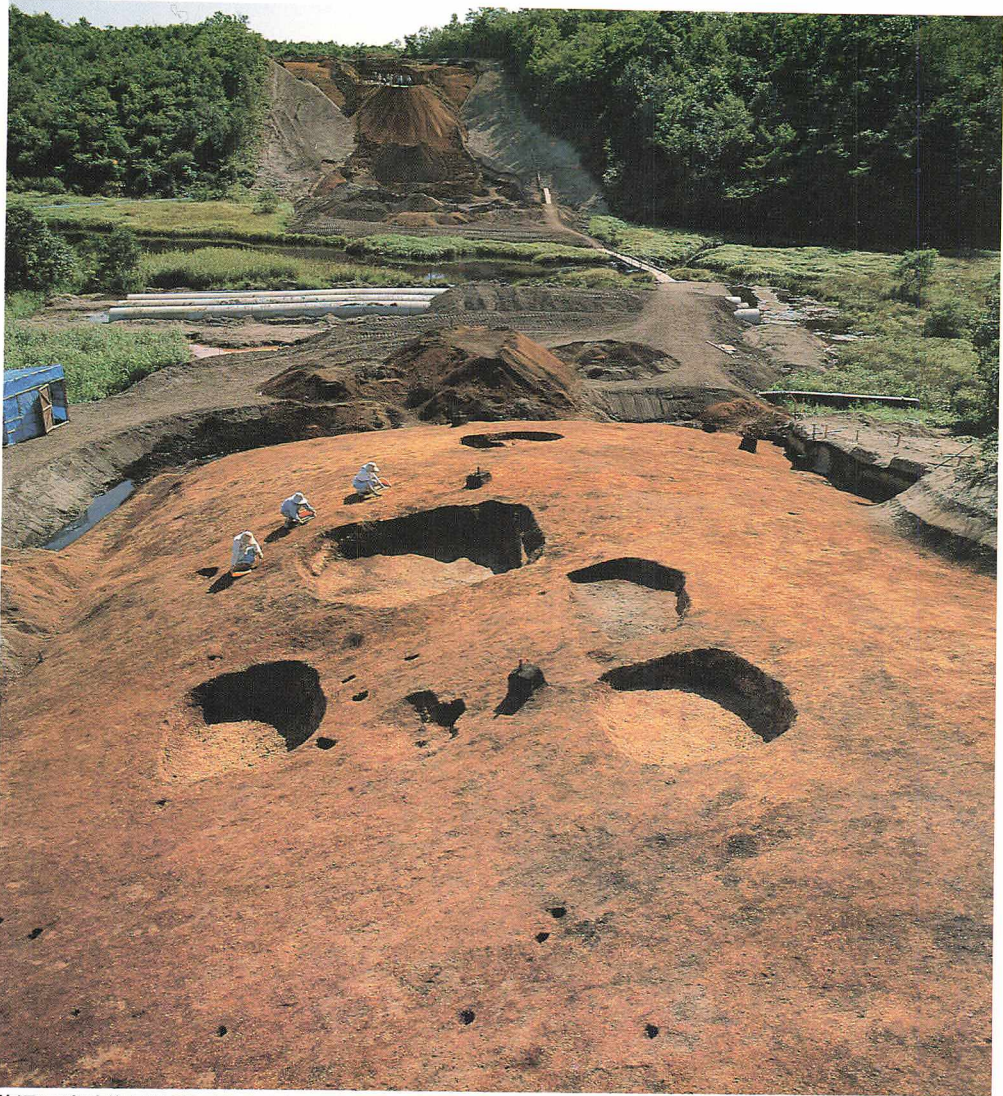
昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





ペンケナイ川に面する美沢10（手前）・11遺跡（南から）



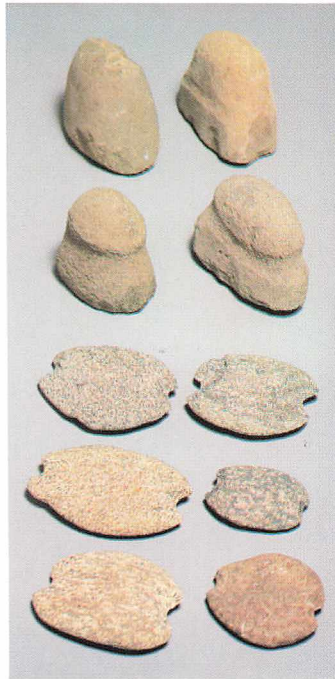
美沢11遺跡住居跡群（北から）



北海道式石冠・石錘出土状況（美沢10遺跡）



縄文前期の土器群（美沢10・11遺跡）

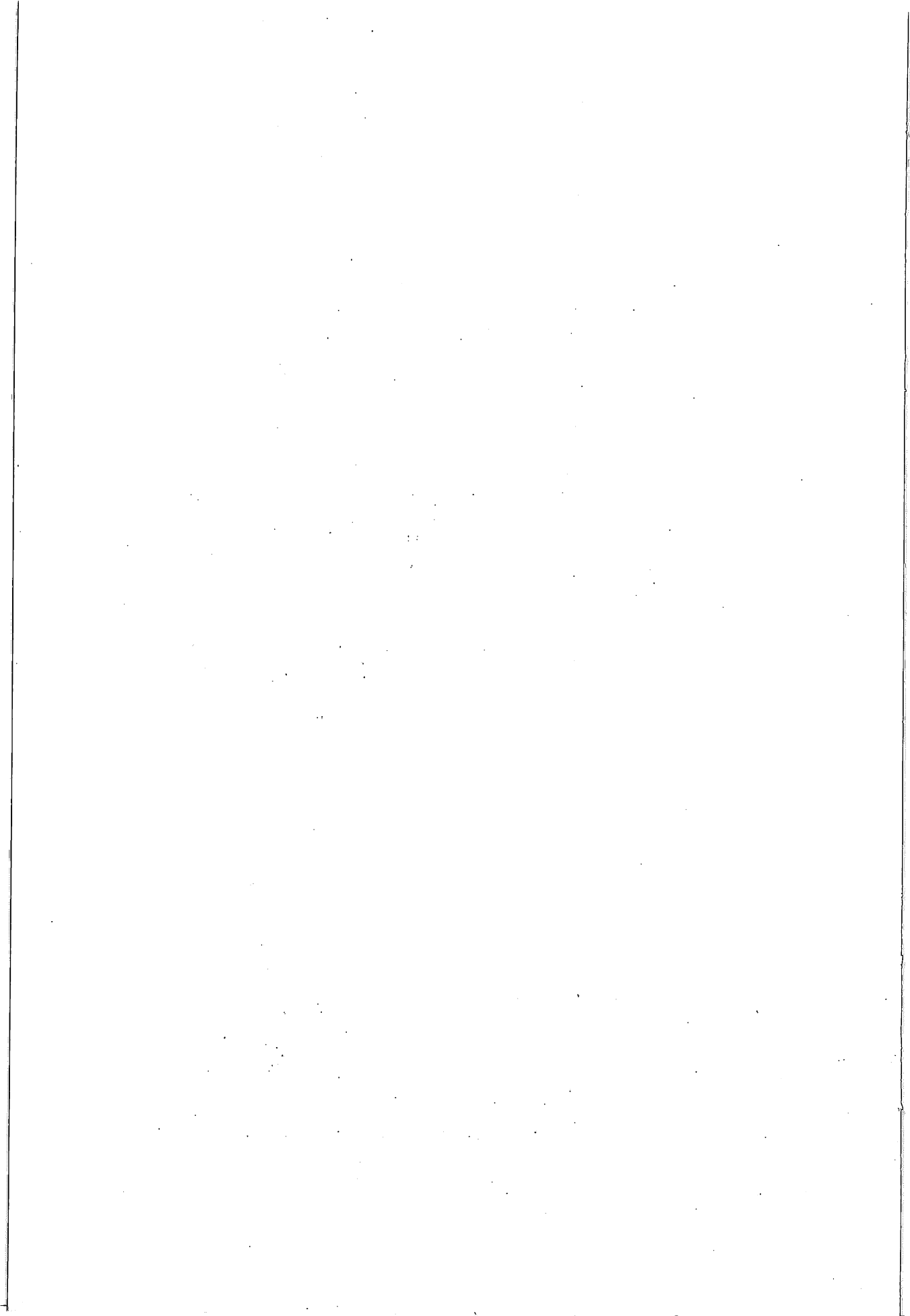


縄文前期の石器（美沢10・11遺跡）

縄文中期の火災住居跡（美沢10遺跡南から）



旧石器時代の遺物（美沢10遺跡）



目 次

口絵

目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 美沢10遺跡の調査	1
1. 概要	1
2. II黒層の遺構と遺物	3
(1) 遺構	3
1) 住居跡	3
2) 土壌	23
3) Tピット	47
(2) 遺物	52
1) 土器	52
2) 石器等	59
3. ローム質粘土層の調査	79
(1) 発掘区の設定と層序	79
(2) 遺物	81
4. 美沢10遺跡火災住居跡出土木炭の液化シンチレーション炭素年代について	83
5. 美沢10遺跡出土の黒曜石片の水和層年代	83
6. 美沢10遺跡旧石器出土層及び関連層	85
7. まとめ	89
(1) ローム質粘土層の石器について	89
(2) 縄文時代早期の遺構、遺物の分布について	90
1) 土壌について	90
2) 土器について	90
3) 石器等について	90
4) 小括	94
(3) 縄文時代前期の遺構、遺物の分布について	94
1) 土壌について	94
2) 土器について	95
3) 石器等について	95
(4) 縄文時代中期の遺構、遺物の分布について	104
1) 遺構について	104
2) 土器について	104
3) 石器について	104
写真図版	107

Ⅱ 美沢11遺跡の調査	143
1. 概要	143
2. Ⅰ黒層の遺構と遺物	145
1) 土墳墓	145
2) その他の土墳	147
3. Ⅱ黒層の遺構と遺物	154
(1) 遺構	154
1) 住居跡	155
2) 土墳	168
3) 柱穴様ピット	174
4) 焼土	174
(2) 遺物	177
1) 土器	177
2) 石器等	180
4 まとめ	189
引用参考文献	190
写真図版	193

挿 図 目 次

図1 Ⅱ黒層上面の地形	4	図18 P-22・24・25・27と遺物	38
図2 遺構位置図	5	図19 P-26・28・30・31と遺物	39
図3 H-1	9	図20 P-29・32・33と遺物	40
図4 H-1の遺物(1)	11	図21 P-35・36と遺物	41
図5 H-1の遺物分布と遺物(2)	12	図22 P-37・38・39・40・41と遺物	42
図6 H-1の遺物(3)	13	図23 P-42・43・44と遺物	43
図7 H-2	15	図24 T-1・2と遺物	49
図8 H-2炭化材出土状況と遺物	16	図25 T-3・4と遺物	50
図9 H-3・4と遺物	17	図26 T-5と遺物	51
図10 H-5と遺物	19	図27 包含層の土器(1)	54
図11 H-5炭化材出土状況	20	図28 包含層の土器(2)	55
図12 P-1・2・3・5と遺物	32	図29 包含層の土器(3)	56
図13 P-4・7・8・9・10と遺物	33	図30 包含層の土器(4)	57
図14 P-11・12・13と遺物	34	図31 包含層の土器(5)	58
図15 P-14・15・16・17と遺物	35	図32 包含層の土器(6)	59
図16 P-18・19・21・23と遺物	36	図33 包含層の石器等(1)	62
図17 P-20と遺物	37	図34 包含層の石器等(2)	63

図35 包含層の石器等(3)	64	図59 P-6・7・8・9	151
図36 包含層の石器等(4)	65	図60 P-11・12・13と遺物	152
図37 包含層の石器等(5)	66	図61 P-14・15・16	153
図38 包含層の石器等(6)	67	図62 II黒層の遺構位置図	154
図39 包含層の石器等(7)	68	図63 H-1	157
図40 包含層の石器等(8)	69	図64 H-1の遺物	159
図41 包含層の石器等(9)	70	図65 H-2	160
図42 包含層の石器等(10)	71	図66 H-3と遺物	161
図43 包含層の石器等(11)	72	図67 H-4と遺物	163
図44 旧石器確認調査区の地形と土層	80	図68 H-5・6と遺物	165
図45 遺物分布と遺物	82	図69 P-101と遺物	170
図46 美沢10遺跡土壌断面	86	図70 P-102・103・104・105・106	171
図47 土壌断面の斜方輝石の Mg / (Mg + Fe) 値の頻度図	88	図71 P-107・108・109・110と遺物	172
図48 縄文早期の土器分布	91	図72 柱穴様ピットと F-2・3	174
図49 縄文早期の土器分布頻度	93	図73 F-1と周辺の遺物分布	175
図50 縄文前期の土器分布頻度	96	図74 F-1周辺の遺物	176
図51 縄文前期の土器分布	97	図75 包含層の土器(1)	178
図52 北海道式石冠・石錘の分布	99	図76 包含層の土器(2)	179
図53 礫・礫片の分布	101	図77 包含層の石器等(1)	182
図54 石錘・礫・礫片の分布頻度	103	図78 包含層の石器等(2)	183
図55 縄文中期の土器分布頻度	104	図79 包含層の石器等(3)	184
図56 I黒層の遺構位置図	145	図80 包含層の石器等(4)	185
図57 P-10と遺物	146	図81 II群 a-2類に伴う石器 -中野 A 遺跡	189
図58 P-1・2・3・4・5と遺物	150		

表 目 次

表1 遺構一覧	2	表8 住居跡の掲載石器等一覧	22
表2 遺物一覧	2	表9 土壌一覧	44
表3 II黒層の分類別遺物一覧	2	表10 土壌別出土遺物一覧	44
表4 ローム質粘土層の分類別遺物一覧	2	表11 土壌の掲載実測土器一覧	45
表5 住居跡一覧	21	表12 土壌の掲載拓影土器一覧	45
表6 住居跡出土遺物一覧	21	表13 土壌の掲載石器一覧	45
表7 住居跡の掲載拓影土器一覧	21	表14 Tピットと出土遺物一覧	51
		表15 Tピットの掲載拓影土器一覧	51

表16	Tピットの掲載石器一覧	51	表32	住居跡の掲載実測土器一覧	167
表17	包含層の掲載実測土器一覧	73	表33	住居跡の掲載拓影土器一覧	167
表18	包含層の掲載拓影土器一覧	73	表34	住居跡の掲載石器等一覧	167
表19	包含層の掲載石器等一覧	74	表35	土壌一覧	173
表20	ローム質粘土層の石器一覧	81	表36	土壌別出土遺物一覧	173
表21	美沢10遺跡出土の黒曜石石片の 水和層年代	84	表37	土壌の掲載実測土器一覧	173
表22	土壌断面の重鉱物組成	87	表38	土壌の掲載拓影土器一覧	173
表23	遺構一覧	144	表39	土壌の掲載実測石器等一覧	173
表24	遺物一覧	144	表40	柱穴様ピット一覧	174
表25	土壌一覧	153	表41	焼土一覧	176
表26	土壌別出土遺物一覧	153	表42	F-1周辺出土の掲載拓影土器 一覧	176
表27	土壌の掲載実測土器一覧	153	表43	F-1周辺出土の掲載実測石器等 一覧	176
表28	土壌の掲載拓影土器一覧	153	表44	包含層の掲載実測土器一覧	186
表29	土壌の掲載石器等一覧	153	表45	包含層の掲載拓影土器一覧	186
表30	住居跡一覧	164	表46	包含層の掲載実測石器等一覧	186
表31	住居跡出土遺物一覧	167			

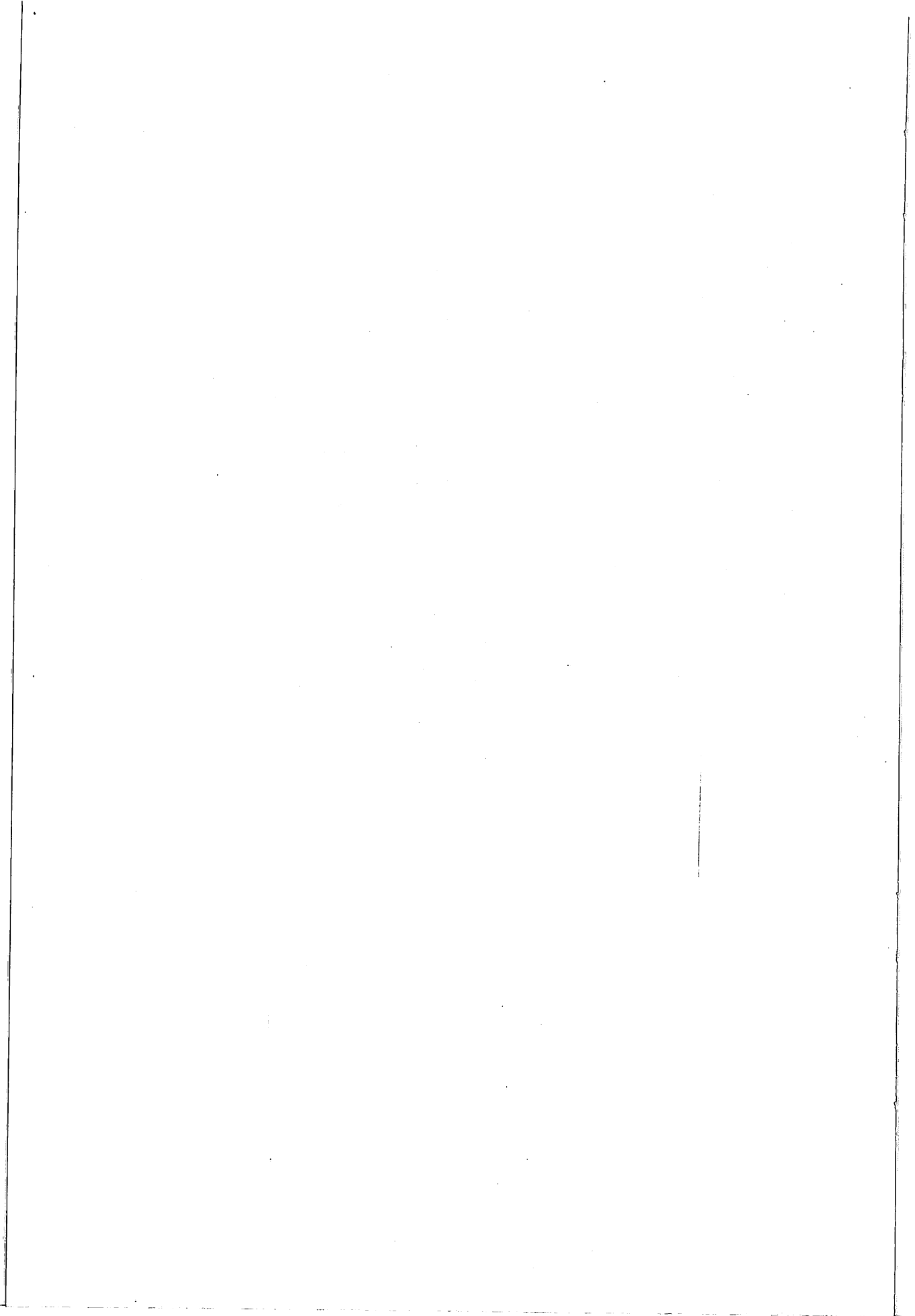
図 版 目 次

美沢10遺跡	107
図版 1 調査前風景	107
①遠景（北東から） ②近景（斜面部：南から） ③近景（平坦部：北から）	
図版 2 調査風景と調査後の風景	108
①斜面部調査風景（北から）②平坦部調査風景（南から）③平坦部（南から） ④斜面上部（北から） ⑤斜面下部（北から）	
図版 3 住居跡(1)―大型住居跡（H-1）―	109
①H-1（南から） ②床面の遺物 ③遺物出土状況（北西から）	
図版 4 住居跡(2)―H-1覆土の遺物―	110
①土器片 ②剥片石器 ③礫・礫石器	
図版 5 住居跡(3)―H-1排土の調査―	111
①調査風景（南から） ②排土出土の遺物	
図版 6 住居跡(4)―火災住居跡（H-2・5）―	112
①H-2 ②H-2炭化材実測風景 ③H-2炭化材出土状況 ④H-2の遺物	
図版 7 住居跡(5)―火災住居跡とその他の住居跡（H-3・4）―	113
⑤H-5調査風景 ⑥H-5炭化材出土状況 ⑦H-5の遺跡 ⑧H-4 ⑨H-3 ⑩H-4の遺物	

図版 8 土壙(1)	114
①土壙群(北東から) ②P-26遺物出土状況 ③P-26の焼成粘土塊	
図版 9 土壙(2)—P-20と遺物	115
①南から ②土器片 ③ナイフ	
④スクレイパー ⑤礫接合資料 ⑥礫石器等	
図版10 土壙(3)	116
①P-22遺物出土状況(南から) ②P-22(南から) ③P-22の遺物	
④P-28の遺物	
図版11 土壙(4)	117
①P-28遺物出土状況(東から) ②P-29遺物出土状況(西から)	
③P-36遺物出土状況(北から) ④P-29の遺物 ⑤P-36・39の遺物	
⑥P-42遺物出土状況(北東から) ⑦P-42の遺物	
図版12 土壙(5)	118
①P-1(南東から) ②P-3(西から) ③P-8(南から)	
④P-10(北から) ⑤P-4・5(東から)	
⑥P-12・13(北東から) ⑦P-14・15(西から)	
図版13 土壙(6)	119
①P-23(東から) ②P-20・27(北西から) ③P-30(北から)	
④P-31(北から) ⑤P-32(北から) ⑥P-40(北西から)	
⑦P-35(北西から) ⑧P-41(北西から)	
図版14 土壙(7)—土壙の遺物—	120
①土器 ②剥片石器 ③礫石器	
図版15 土壙(8)	121
①P-7(東から) ②P-9(北西から) ③P-11(北から)	
④P-16(南から) ⑤P-17(北から) ⑥P-19(南から)	
⑦P-21(東から) ⑧P-24(東から) ⑨P-25(東から)	
⑩P-35(北西から) ⑪P-43(南東から)	
図版16 Tピット	122
①斜面上部のTピット群(北西から) ②斜面下部のTピット(北から)	
図版17	123
③T-1(北西から) ④T-2(北西から) ⑤T-3(北東から)	
⑥T-4(南東から) ⑦T-5(北から) ⑧T-1・4・5の遺物	
図版18 包含層の遺物—土器(1)—	124
①P-4のI b-3類土器 ②文様部の拡大 ③I b-2・3類土器片	
図版19 土器(2)	125
①I b-4類土器片 ②II b類復元土器 ③II群土器片	
図版20 土器(3)	126
①II b類の底部 ②同左胎土中に含まれた植物性繊維	
③同上内面の縄文 ④II b類土器胎土中に含まれた植物性繊維	

⑤Ⅱb類土器地文の相違	⑥Ⅱb類土器内面の縄文	
図版21 土器(4)	①Ⅲ群土器片	②Ⅳ群土器片
①Ⅲ群土器片	②Ⅳ群土器片	
図版22 包含層の遺物—石器等(1)—	①A・B類石器	②C・D類石器
①A・B類石器	②C・D類石器	
図版23 石器等(2)	①E・01a類石器	②01・02類
①E・01a類石器	②01・02類	
図版24 石器等(3) F類石器		
図版25 石器等(4) G類石器		
図版26 石器等(5)	①G類片	②J類石器
①G類片	②J類石器	③J類片
③J類片	④J4類片	
図版27 石器等(6) J4類石器		
図版28 石器等(7)	①K・L類石器	②M類石器
①K・L類石器	②M類石器	
図版29 石器等(8) N類石器		
図版30 石器等(9)	①N類接合資料	②N類片
①N類接合資料	②N類片	
図版31 石器等(10) X群		
図版32 石器等(11) 礫片接合資料		
図版33 石器等(12)	①礫片接合資料	②土・石製品
①礫片接合資料	②土・石製品	
図版34 旧石器確認調査—ローム質粘土層の調査	①調査風景	②調査後の風景
①調査風景	②調査後の風景	③石核
③石核	④細かい剝離がみられる黒曜石石片	
④細かい剝離がみられる黒曜石石片		
図版35	⑤遺物出土状況	⑥調査風景
⑤遺物出土状況	⑥調査風景	⑦遺物
⑦遺物		
美沢11遺跡		
図版1 調査前・調査風景	①調査前風景(南から)	②調査風景(南東から)
①調査前風景(南から)	②調査風景(南東から)	③調査風景(南東から)
③調査風景(南東から)		
図版2 I黒層の土壌群		
図版3 I黒層の土壌	①P-12遺物出土状況(南東から)	②P-12の土器(1)
①P-12遺物出土状況(南東から)	②P-12の土器(1)	③P-12の土器(2)
③P-12の土器(2)	④P-10(北西から)	⑤P-10遺物出土状況(北西から)
④P-10(北西から)	⑤P-10遺物出土状況(北西から)	⑥P-10の土器
⑥P-10の土器		
図版4 II黒層の調査—縄文前期の住居跡群(北から)		
図版5 住居跡(1)—H-1—	①東から	②覆土の土器
①東から	②覆土の土器	③覆土の土器片
③覆土の土器片		

④石器等		
図版6 住居跡(2)	198
①H-2 (北から)	②H-3 (北東から)	
③H-4 (南西から)	④H-5・6 (東から)	
図版7 住居跡(3)	199
①H-3・4・5・6の土器片	②H-3・4・5・6の石器等	
図版8 土壌	200
①P-110遺物出土状況(東から)	②P-110の石器	③P-110の土器
④P-101の土器	⑤P-101の遺物出土状況(西から)	
図版9 包含層の調査—F-1周辺の遺物出土状況(北から)—	201
図版10 包含層の遺物(1)	202
①F-1周辺出土の遺物	②I b-4類土器片	
図版10 包含層の遺物(2)	203
①II a-2類土器片	②II b類土器片	
図版11 包含層の遺物(3) III群土器	204
図版12 包含層の遺物(4) IV・V群土器片	205
図版13 包含層の遺物(5) A・B・C・D類石器	206
図版14 包含層の遺物(6) D・E・00・01 a・01・02類石器等	207
図版15 包含層の遺物(7) F類石器	208
図版16 包含層の遺物(8) G・J・K・M類石器	209
図版17 包含層の遺物(9) N類石器	210



I 美沢10遺跡の調査

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

I 美沢10遺跡の調査

1. 概要

美沢10遺跡は、ペンケナイ川上流部に形成された舌状台地の先端付近にあり、標高25mの台地上からそれに続く北向きの斜面に立地している。本年度の調査は、付替道路工事範囲4,027m²についてⅡ黒層をおもな対象として行ない、下位のⅢ黒層、ローム質粘土層についても、それぞれ発掘面積の10%相当について確認調査を実施した。

調査の結果、Ⅱ黒層からは、住居跡5軒、土壙42個、Tピット5個の遺構とともに土器、石器等25,050点や住居跡に伴う多量の炭化材が検出された。

住居跡は、いずれも台地上にあり、縄文中期後葉（Ⅲ群b-2類期）に位置付けられる。これらは、長径10mを越す卵形の大型住居跡、長径3～4mほどの楕円形の中型住居跡、径3mほどの円形を呈する小型の住居跡で構成されている。大型住居跡（H-1）は、幅1mほどのベンチをもつ二段構造で、内壁沿いに柱穴がめぐるものである。中型の住居跡（H-2・5）は火災にあったもので、大量の炭化材が検出された。両者には、炭化材の分布や使用材の分布などに相違がみられるが、基本的な構造に大きな差はなかったものと推定される。これらの炭化材については、現在、三野紀雄氏（北海道開拓記念館）に樹種同定を依頼しており、詳細な鑑定結果を待って、構造等についても改めて報告したい。また、この炭化材の¹⁴C年代測定を行ったところ、H-2では4,110±60 y.B.P.（KSU-1390）、H-5では4,080±60 y.B.P.（KSU-1391）という極めて近似した値が得られた。小型の住居跡（H-3・4）は、一部が調査区外に及んでいるため、全容を明らかにできなかった。

土壙はすべて台地上に分布しており、径1m内外の円または楕円形を呈するものがほとんどである。時期が判明したのは、27個あり、4個は縄文早期に、14個は前期に、9個は中期に位置付けられる。これら以外についても、覆土の堆積状況や土器の分布からみて、前期～中期に属する可能性が高い。これらの機能については、1個が縄文早期の石器製作に関わると考えられるほかは不明であり、墓と判断できたものもない。

Tピットは、斜面下部に2個、台地縁に3個ある。形状は、T-2とした低地にあるものが小判型のタイプであるほかは、溝状の細長いタイプのものである。台地縁にある3個は、等高線に直交して作られ、列をなしている。このうちの2個からは杭穴が検出された。

検出された遺物のうち、土器は縄文早期後半～後期後葉にかけてのものが出土した。これらの中では、前期後半（Ⅱ群b類）が最も多く、全体の42%を占めており、Ⅲ群b-2類、Ⅰ群b-4類がこれに次ぐ。これらはおもに台地平坦部に分布しており、時期または型式ごと

に若干の分布域の差が認められる。石器等では全体の92%がフレイク、チップ、礫、礫片で、石器は極めて少ない。その中でも剥片石器および石斧の量が少なく、いわゆる北海道式石冠や石錘が多い。また、片磨岩の礫も非常に多く、大部分は火熱を受けて破砕している。

ローム質粘土層の調査では、台地縁から石核1点、剥片15点が出土した。本層表面下30~40cmほどのⅥ層中から検出されたもので、石片とともに微量ではあるが炭化物を含むスポットが2か所確認された。石核、剥片の石材は黒曜石、めのう、珪岩で、このうちの黒曜石片2点について水和層年代測定を依頼した結果、16,100

表1 遺構一覽

住居跡	5
土 壙	42
Tピット	5
計	51

表2 遺物一覽

	Ⅱ 黒層	ローム質粘土層	計
土 器	8,406		8,406
石器等	16,644	15	16,659
計	25,050	15	25,065

表3 Ⅱ黒層分類別遺物一覽

分 類		遺 構	包含層	計	分 類		遺 構	包含層	計			
土	I	b		4	118				3	3		
			2	5	357		2	8	20	28		
			3	123	332		3		4	4		
		4	40	1,377	1,417	破片	4	94	98			
	II	a	2		7	7	G		2	17	19	
		b		216	3,086	3,347	3		2	2		
	III	b	a		39	39	破片	4	37	41		
					1313	518	531	H		1	1	2
			1		37	37	J		3	4	7	
		2	475	1,443	1,918	破片		1	6	7		
	3	108	42	150	破片	8	26	34				
	IV	a		1	1	1破片	1	8	9			
		c		20	20	破片	2	83	85			
	計		1,029	7,377	8,406	L		2	2			
	石	O	0	1	4	5	破片	1	1	2		
1・2			4,042	8,844	12,886	M		1	1	2		
1 a			9	44	53	破片		67	67			
I		A	3	1	29	30	VI	N		10	3	41
			4	1	11	12			破片	15	199	214
			5		2	2	X	0	11	30	41	
			6		2	2		1	340	2,204	2,544	
			7		15	15	土製品	3	84	87		
			破片		22	22	石製品	1	2	3		
		B		2	11	13	計	4,492	12,152	16,644		
II		C		1	3	4	合 計	5,521	19,529	25,050		
		III	D		4	31	35					
破片				3	12	15						
E				7	31	38						
破片			4	12	16							

表4 ローム質粘土層分類別遺物一覽

分 類	計	
O	0	1
	1	13
X	1	1
計	15	

±1,000 y.B.P.、17,000±900 y.B.P. という値が得られた。(野中一宏)

2. II 黒層の遺構と遺物

(1) 遺構

1) 住居跡

5軒の住居跡はいずれも台地上にあり、2軒(H-2・5)は台地縁に、他の3軒は台地縁から離れた位置に作られている。これら5軒の構築時期は、竪穴の構造や出土遺物等から縄文中期後半(柏木川式、紅葉山式期)と考えられる。平面形は、卵型のもの1軒(H-1)、五角形に近い楕円形のもの2軒(H-2・5)、円形と思われるもの2軒(H-3・4)である。このうち、H-1・2はII黒層上面のレリーフからその存在が予想されたもので(図-1)、両者には、竪穴の周囲に掘り上げ土を盛っていることが確認された。また、H-2・5は火災にあった住居跡で、多量の炭化材が検出されている。

H-1は、長径11mほどの大型住居で、南側でしか確認できなかったが、幅1mほどのベンチをもち、内壁沿いに柱穴がめぐっているものである。

H-2・5の火災住居跡は、長径4m、短径3m前後の中型のものである。ともに炉跡はなく、支柱穴と考えられるものは、H-2では短軸線上に2個、H-5では長軸線上に4個並んでいる。H-2はさらに、径5cmほどの小柱穴が壁沿いにめぐっており、これらに関連すると考えられる炭化材も確認されている。炭化材の出土状況は、H-2では北東部および南西部に、H-5では中心部に集中する傾向が認められるが、一方では南東部(H-2)、南西部(H-5)にまったく炭化材が検出されていない部分がある。また、垂直分布では両者ともに、覆土中位から床面にかけて分布しており、主に、H-2では覆土9層中に、H-5では覆土7層中に含まれている。これらの土層は、住居が火災によって倒壊する際に、材とともに堆積したものであり、本来、構造材の上を覆っていたものと考えられる。材の遺存状態は、H-5が良好なのに対し、H-2は悪く、半分ほどしか材の種類を判別できなかった。両者の使用材には、割材、丸太、草本類、樹皮などがある。割材、丸太はいずれも数例を除き、径5~6cm以下のものに限定されており、割材は断面三角形で径5~6cmのものが、丸太は径2cm前後のものが多く使われている。しかし、両者にはH-2では割材が7割、丸太3割の使用頻度であるのに対し、H-5では丸太が9割を占めるという相違点が認められる。これらの割材、丸太は、竪穴中心部へ向って求心状に倒れているものと壁と平行に倒れているものがあり、ほとんどが屋根材として利用されたものと考えられる。以上のことから、両者の住居は使用材の違いが認められるものの、基本的には比較的細い材を用いて屋根を組み、その上に草本類や土砂を葺いた構造であったと推定される。(野中一宏)

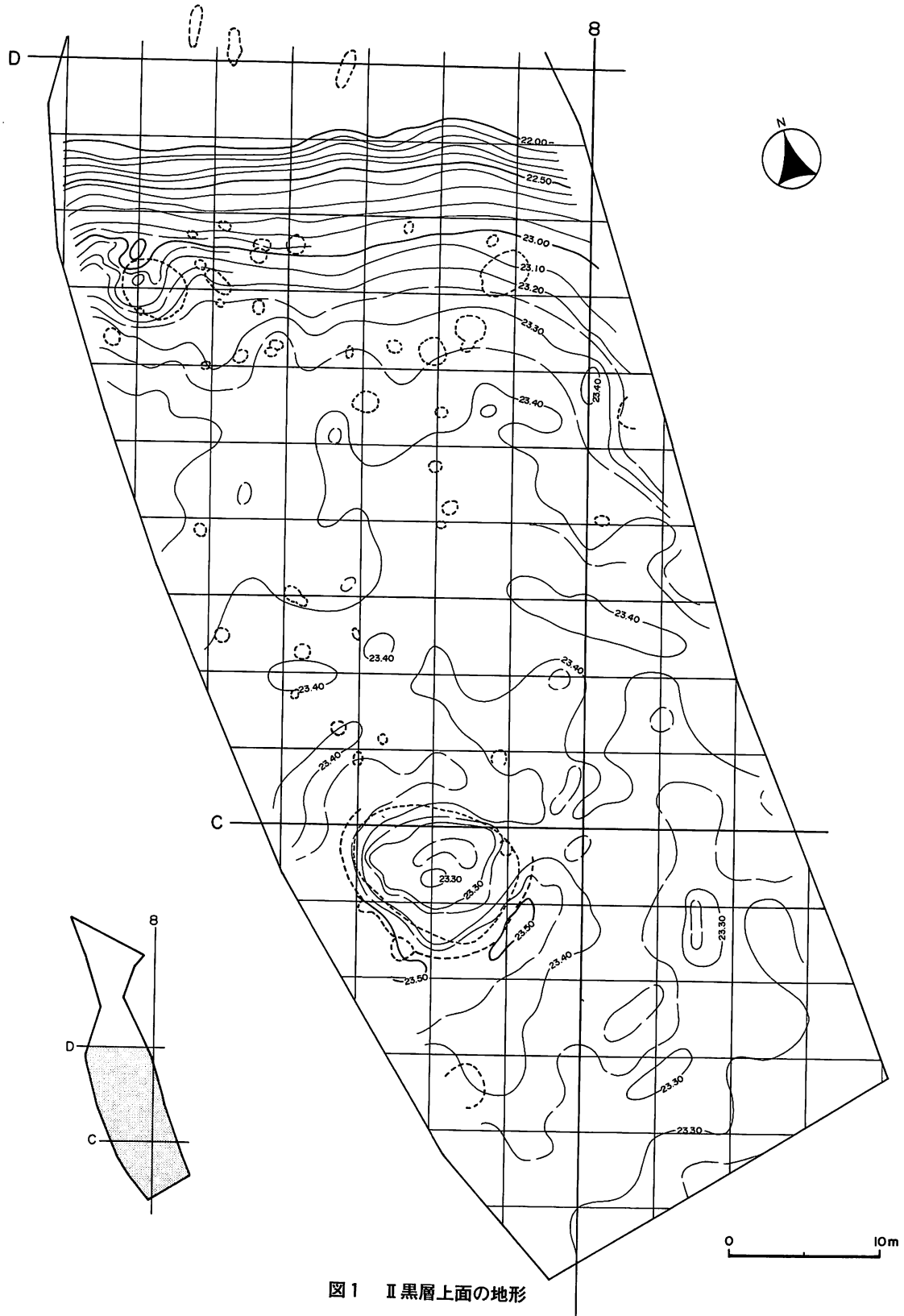


図1 II黒層上面の地形

H-1

Ta-C層を除去し、II黒層の上面を精査した段階で、台地上の平坦部、B7-79・89区を中心とした区域のII黒層が落ち込み、かつその周縁が盛り上がっているのを確認した(図1)。この規模や形状から周堤墓のような大形遺構の存在が予想されたため、落ち込みの中心から放射状に8本のベルトを設定した。その結果、この落ち込みは、住居跡であることが判明した(図3)。

平面形は、南北を長軸とする卵形に近い楕円形を呈する。南東端は範囲確認調査のテストピットによりわずかに破壊されていた。南西壁からこのテストピットのある南東壁の外側に深さ2~3cm位の不明瞭なテラスがあった。このテラスは本来、竪穴周縁を全周していたものと思われるが、東側では検出できなかった。

本住居跡はTa-d₁層をわずかに掘り込んで床を構築してあり、床面はほぼ平坦でよくしまっている。床面には部分的に炭化物粒がわずかに散在していた。炉は確認されていない。

柱穴は、床面のTa-d₁層が汚れており、この面での確認が困難なため床面全体をTa-d₂層上面まで掘り下げ、黒色土の落ち込みを検出するように努めた。また平面的に覆土を掘り下げていく方法では、柱穴や壁の十分な観察ができないため、すべて小トレンチによってセクションを切る方法をとった。この結果壁に沿って等間隔で並ぶ15個の柱穴と、壁からやや中央寄りの位置に2個の柱穴を検出することができた(図3)。これらの規模は、Ta-d₂上面での直径が、20~30cm、深さが15~70cmで、角度はすべて垂直方向であり、傾斜しているものはなかった。柱痕は確認できなかった。P-4の覆土からIII群b-2類の土器片が1点出土している。

壁はTa-d₁層以下の掘り方がきわめて浅いため検出が困難であったが、壁際にわずかに堆積している炭化物粒混じりの黒色土(土層断面図には図示していない)や遺物の存在を手がかりとして壁の立ち上がりを確認した。後述するP-16・17・21はこのH-1の壁面を追求していく過程で順次発見したものである(図2)。P-17は本住居跡を切って構築されているが、P-16・21についてはH-1との新旧関係は判然としない。

竪穴の覆土は単純で、先述した壁際の堆積土がある他は、覆土2層が床面の大部分を被覆している。これは本住居跡の掘り込みが浅く、竪穴が比較的短時間に埋没したためと考えられる。覆土1層は通常のII黒層である。

竪穴の外縁に堆積している遺構排土は、4~5m程の幅で本住居跡をとりまくようであるが、北西側の一部は、発掘区域外におよんでいるため完掘できなかった(図3)。排土は東側で一個所途切れる部分があり、この部分が出入口であった可能性がある。排土の最大層厚は約10cmで、外側に向かうにつれ薄くなり、一部は覆土2層の上に流れ込んでいる。この排土の上には、II黒層が被覆していた。排土部分の調査は、まずこのII黒層を除去して排土の範囲、形状を確認、記録したのち、これを掘り下げて遺構掘り込み面を検出した。出土遺物は、II黒層、排土、掘り込み面より下の包含層の別に全点出土地点をプロットしながら取り上げた。

位置 B7-87・88・89・96・97・98・99・C7-60・70・80 平面形 楕円形

規模 11.06×9.50/10.06×7.72/0.46 長軸方向 N-0°-W

覆土 1層 黒色(Ⅱ黒) 2層 黒色(Ⅱ黒+d₁)

3層 黒褐色土(Ⅱ黒) 4層 黒色(Ⅱ黒>d₁)

5層 黒色(Ⅱ黒>>d₁)

遺物 約1,000点の遺物のうち、遺構覆土や排土出土のものが大半を占め、床面出土遺物は30点程度にすぎない(表6)。床面における出土状況は図5に示すごとくまとまりのない状態であるが、土器片のいくつかは東側の壁側にやや集中する。土器はすべてⅢ群で、石器は剝片、礫、礫片ばかりであった。覆土中の遺物はほとんどが覆土2層から出土した。排土中の遺物出土状況は図5に示す通りで、これらは住居建築の際に古い包含層から掘りあげられたものである。Ⅰ～Ⅲ群の土器がみられる。

土器(図4-1~8、図6-1~7) 図6-1は、薄手で微隆起線の間に撚糸文と絡条体圧痕文を施文する土器である。図4-17・18、図6-2~5は胎土中に植物性繊維を含む土器で、表面の剝落したものが多い。図4-17、図6-2・4は口縁部破片で、17には内外面と口唇上の平坦面にも縄文が施文されている。2は口縁部に1条の縄線文が認められる。図4-18、図6-3・5・6は胴部破片であり、18は内面にも施文されている。3には縦位の撚糸文がある。5は横位の貼付帯をもつ。

図4-1~16、図6-7は、繊維を含まない砂っぽい胎土で、やや不揃いな単節斜縄文が施文され、貼付帯と竹管、半截竹管文を特徴とする土器である。図4-1・5~12、図6-17は口縁部破片で、図4-5~7は口唇上に突起があり、その突起に対応して縦位の貼付帯がある。貼付帯には5・6は縄線文が、7には半截竹管の内面刺突文が施文される。

図4-1、8~12、図6-7は平縁の部分で、図4-1・10・11・図6-7は口唇上に半截竹管による刺突列がある。10は口縁文に直径約3mmの竹管による浅い押捺が2列みられる。11は半截竹管の内面を用いて口縁部に3条の並行沈線を描出している。

図4-2・3・13~16は胴部破片である。2は頸部の屈曲部とおもわれ、幅広で横位の貼付帯上に棒状施文具を斜位に強く押捺している。13と14はやや細い貼付帯がやはり横位にあり、その上に13は半截竹管の外表面を、14は内面を用いた刺突列がある。16は底部に近い破片で、下側、すなわち底部により近い部分には縄文が施文されず半截竹管の内面を用いた縦位の集合沈線文がみられる。

石器等(図4-19~28、図5-1~18) 19と20は石槍またはナイフで、19は有茎、20は無茎である。19は茎部の一端を欠損している。21は尖頭部を欠くが、石錐と思われる。22~25はスクレイパーですべて破片である。26は石核で、打面転移を頻りに繰り返して加撃している。図5-1は全面磨製の石斧、2・3は未成品と思われる。2は研磨が、3は両側縁に剝離と敲打痕が認められるが刃部の形成までには至っていない。4・5は砥石で複数の使用面をもつ。6は石錘の破片、7は土器片を円盤状に加工している。8は有孔石製品の破片である。(森 秀之)

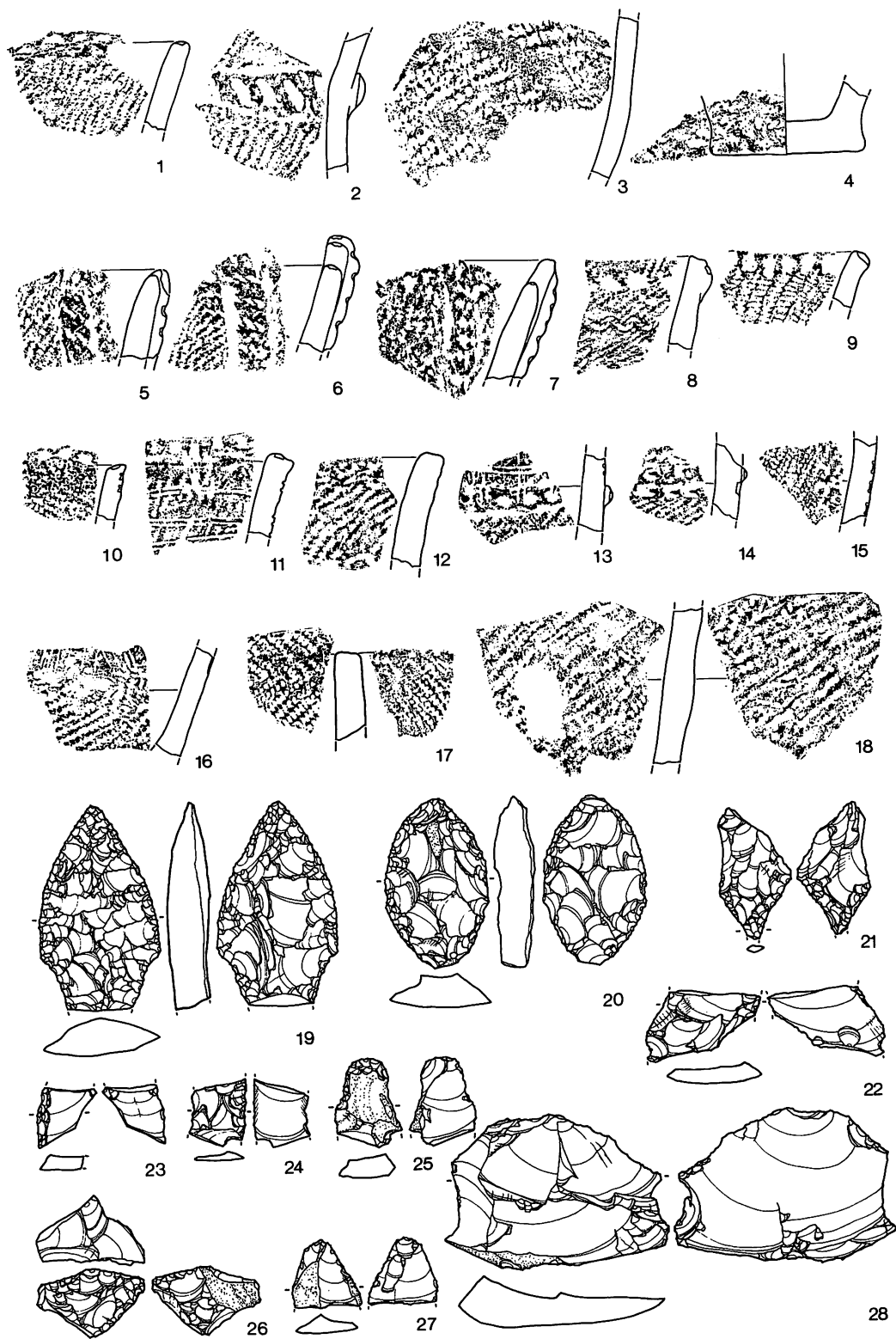


図4 H-1の遺物(1)

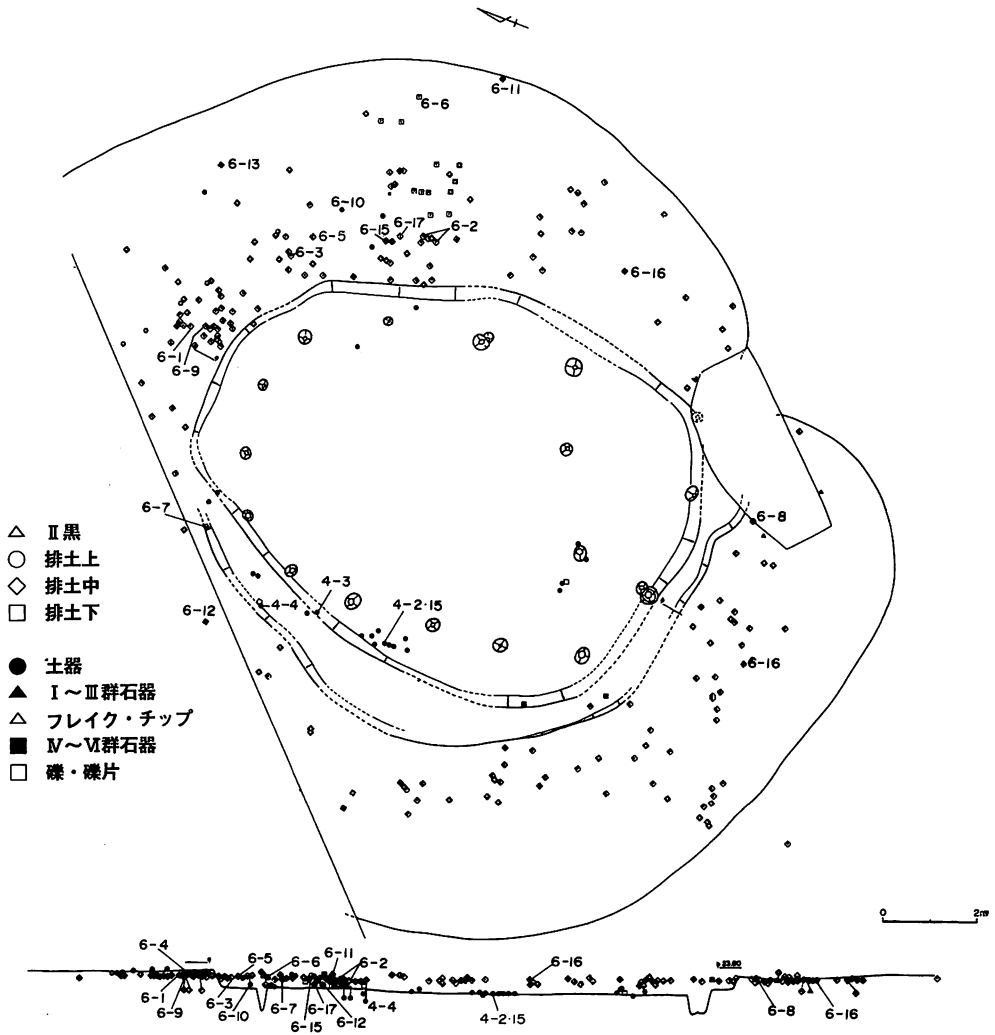
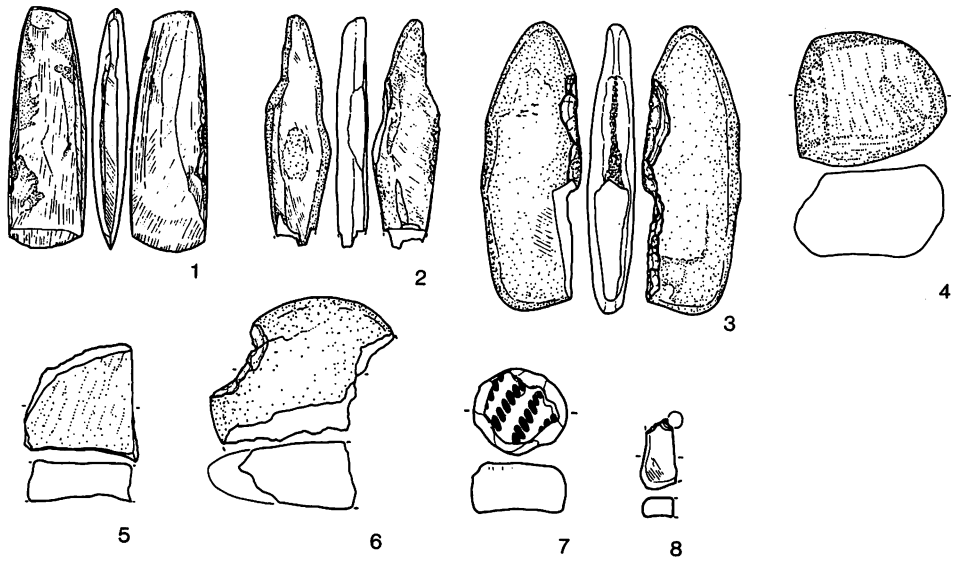


図5 H-1の遺物分布と遺物(2)

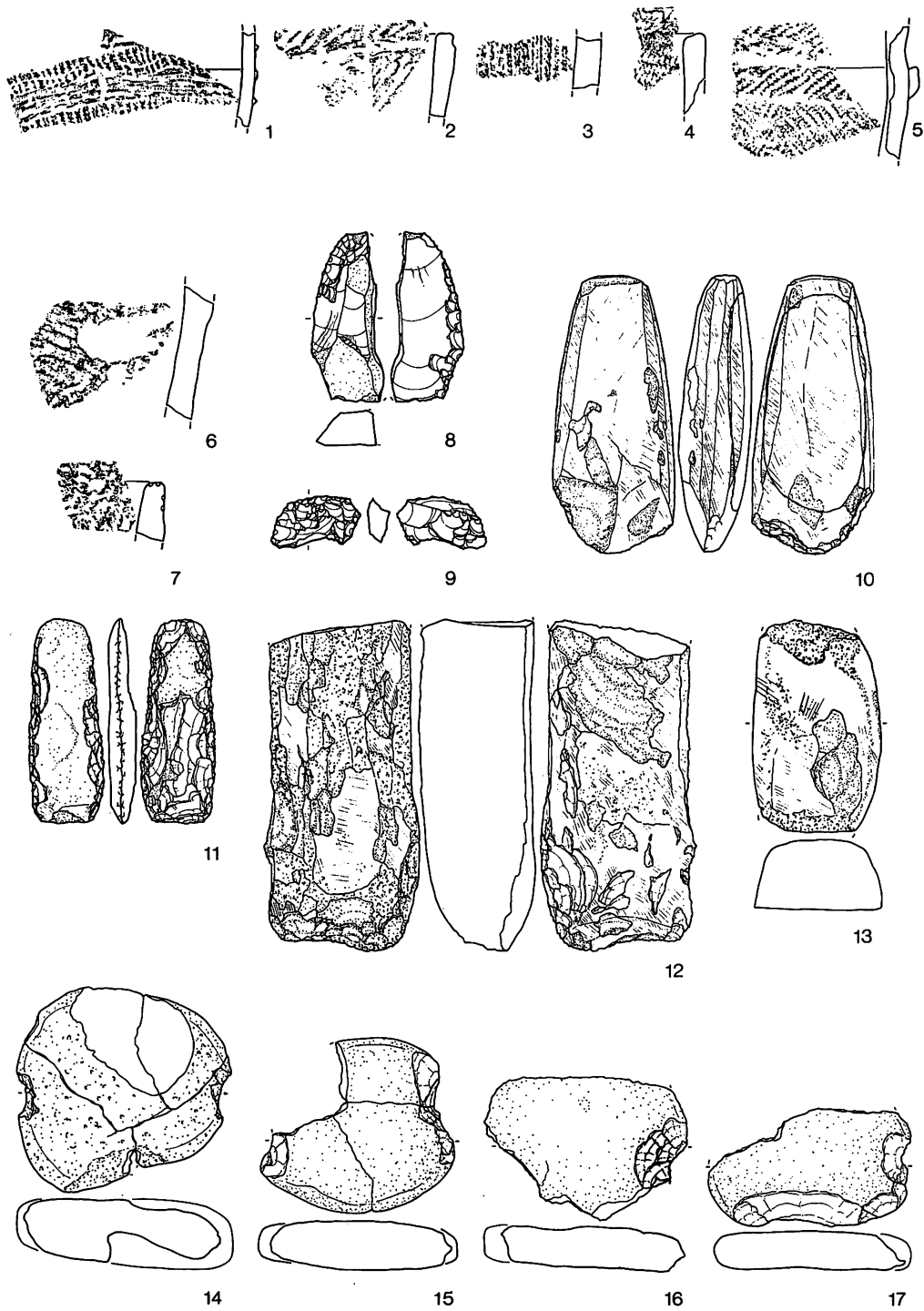


図6 H-1の遺物(3)

H-2 (図7・8)

南側壁の一部はP-38に切られ、南東側の一部とHP-2の周辺は木根によって壊されている。床面はほぼ平坦で、南東部は硬くしまっている。炉跡はなく、柱穴は床面に4個(HP-1・2、SP-13・14)、壁に沿って12個検出された。HP-1・2は短軸線上に位置し、支柱穴と考えられるが、これらに関連する炭化材は確認されなかった。壁沿いにめぐる小柱穴やSP-13・14は材を刺し込んだような断面形を呈し、SP-2・8~12は中心部へ向って傾斜している。このうち、SP-2~4・6・10・13の付近には、向きが違うものも若干あるが、竪穴中心部へ向って求心状に倒れた状態の小径炭化材が検出されており、これらが屋根材を構成していたものと考えられる。

炭化材は覆土6~9層中から検出され、主に9層中に含まれている。材の遺存状態は悪く、約半分ほどしか材の種類を判別できなかった。特に床面直上から検出されたものは、ほとんどが薄片、小片である。これらの分布は南東部を除き、ほぼ全面に広がっており、特に北東部と南西部に多い。材には割材、丸太、草本類、樹皮と思われるものがあり、種類が判別できたものの中では割材が73%、丸太が27%を占め、草本類、樹皮は極めて少ない。割材は断面三角形で径6cmほどのものが多い。丸太は径5cm以下に限られ、径2cmほどのものも含まれる。草本類、樹皮はそれぞれ1か所ずつでしか確認されていない。割材、丸太は壁と平行に倒れた状態のものや竪穴中心部へ向って求心状に倒れたものがあり、大半が屋根材と考えられる。

炭化材以外の遺物では、床面からⅢ群b-2類土器14点とE類1点、F類2点、剥片1点、礫片1点の石器が、覆土からⅡ群b類1点、Ⅲ群b-2類3点の土器片とA₃類1点、B類1点、D類2点、F類2点、N類1点、剥片30点、礫片1点の石器が検出された。また、床面直上の土を採取し、水洗選別を行ったところ、多量のフレイク・チップを採取した。しかし、選別が全て終わっていないため、これについては改めて報告したい。

位置 C 7-36・37・46・47

平面形 楕円形

規模 4.43×3.48/3.93×3.13/0.63

長軸方向 N-42.5°-W

覆土 1 黒褐色(Ⅱ黒>d₁、掘り上げ土)

2 黒色(Ⅱ黒)

3 黒褐色(Ⅱ黒>>d₁>>d₂/パミス)

4 暗黄褐色(d₁+d₂>>Ⅱ黒)

5 暗褐色(Ⅱ黒+d₂)

6 暗黒褐色(Ⅱ黒+d₂/パミス)

7 暗橙色(d₂>>Ⅱ黒)

8 黒褐色(Ⅱ黒>d₂)

9 暗褐色(Ⅱ黒+d₂)

遺物(図8) 1~7はⅢ群b-2類土器片。縄線文が施されたもの(1)、ボタン状突起や幅広の貼付帯をもつもの(2・3)、平行沈線や刺突文をもつもの(4~7)がある。5・6は同一個体の破片で、Ⅲ群b-1類に分類されるものかもしれない。8は床面出土の黒曜石製スクレイパー。側縁から下端にかけて二次加工が施されている。9はA₃類の黒曜石製石鏃。10は黒曜石製のB₁類。11・12は頁岩製のD類。片面の周縁にのみ二次加工が施されている。13は片麻岩製の+(プラス)型石錘片。(野中一宏、大野 亨)

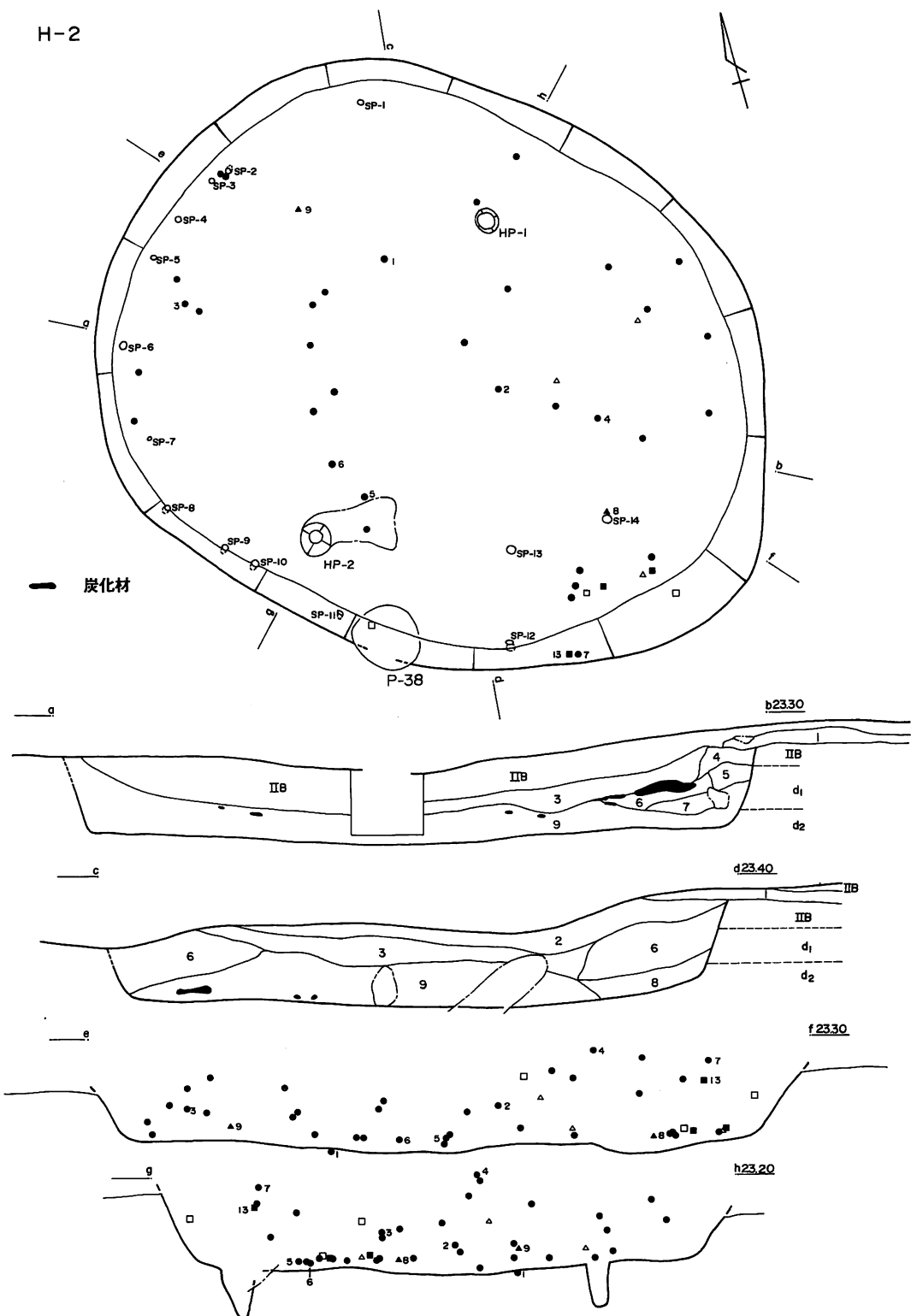
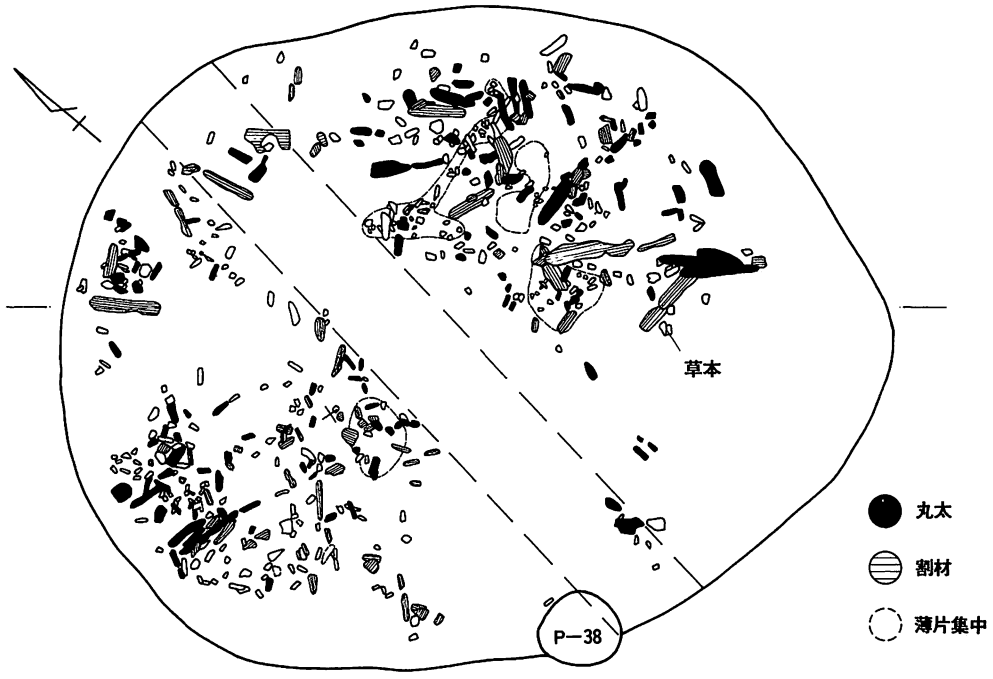


图7 H-2



23.20

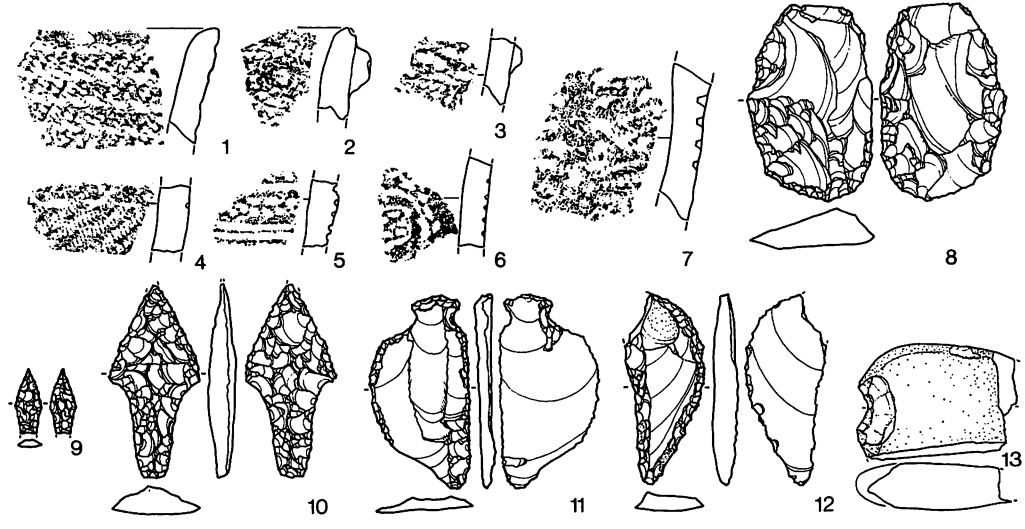


图8 H-2 炭化材出土状況と遺物

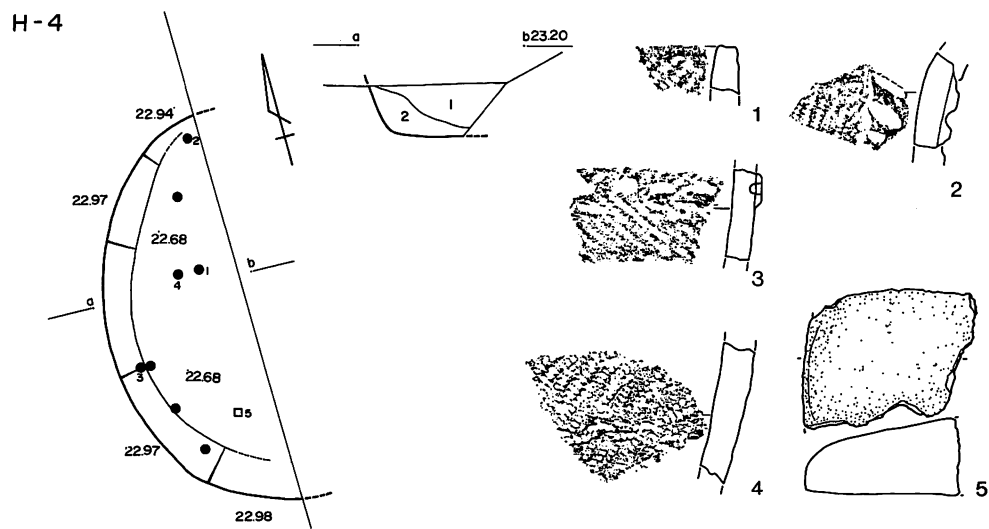
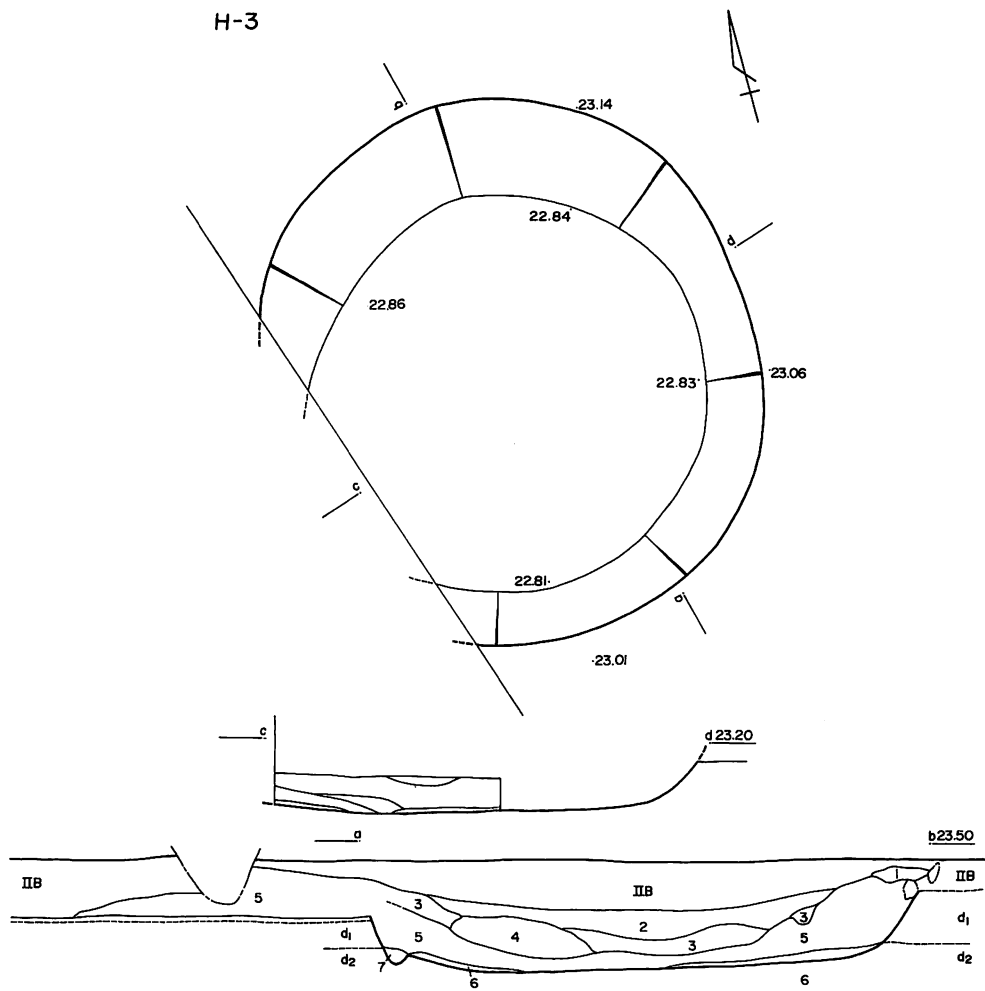


図9 H-3・4と遺物

H-3 (図9)

西側の一部は調査区外に及んでいる。炉跡や柱穴はなく、遺物も全く出土しなかった。

位置 B 7-86

平面形 円形

規模 $2.89 \times \text{---} / 2.03 \times \text{---} / 0.43$

覆土 1 黒色 (II黒 $> d_1$)

2 黒色 (II黒 $>> d_1$)

3 黒褐色 (II黒 $+ d_2 > d_1$)

4 暗橙色 ($d_2 + d_1 >> \text{II黒}$)

5 黒色 (II黒 $+ d_1 >> d_2$)

6 黒褐色 ($d_1 >> \text{II黒}$)

7 黒褐色 (II黒 $+ d_2 > d_1$)

(野中一宏)

H-4 (図9)

大半が調査区外に及んでおり、全容は不明である。床面から出土した遺物はなく、覆土中からⅢ群b-2類土器片10点と礫片1点が検出された。

位置 C 8-05

平面形 不明(円形?)

規模 $\text{---} / \text{---} / 0.28$

長軸方向 不明

覆土 1 黒褐色 (II黒)

2 黒褐色 (II黒 $> d_2$)

遺物(図9-1~5) 1~4はⅢ群b-2類土器。1は口唇断面が角型で、口縁下からLRの斜行線文が施されている。2・3は縦位または横位に幅広の貼付帯が付され、その上に棒状工具による刻みまたは刺突文が施されている。5は片麻岩の礫片。(野中一宏)

H-5 (図10・11)

北東壁付近の一部は木根によって壊されている。床面は若干凹凸があり、HP-2東側は硬くしまり、他よりも高い。炉跡はなく、柱穴は、南西壁付近に2個(HP-1・2)、北東壁付近に2個(HP-3・4)検出された。長軸線上に1列に並んでおり、支柱穴と考えられるが、これらに関連する炭化材は確認されなかった。

炭化材は覆土2・7・8層中から検出され、主に7層に含まれている。材の遺存状態は比較的良好で、竪穴中央部に集中する傾向がみられ、しかも重なり合った状態で検出されている。しかし、竪穴南西部にはほとんどなく、この付近が火元であった可能性がある。材には割材、丸太、草本類、樹皮と思われるものがある。このうち丸太が95%を占め、割材、草本類は非常に少ない。丸太はいずれも径4cm以下で、特に1.5~2cmの枝状のものが7割を占めている。これらは、壁と平行に倒れたものと竪穴中心部に向かって求心状に倒れたものがあり、後者は屋根材として使われたものと考えられる。草本類は竪穴中心部と北西壁付近に若干みられ、幅1cmほどの束になっているものもある。

炭化材以外の遺物では、床面からⅢ群b-2類2点、Ⅲ群b類2点の土器片とUフレイク71点、フレイク5点の石器等が、覆土からⅢ群b類4点の土器片とフレイク4点、礫片2点の石器等が検出された。

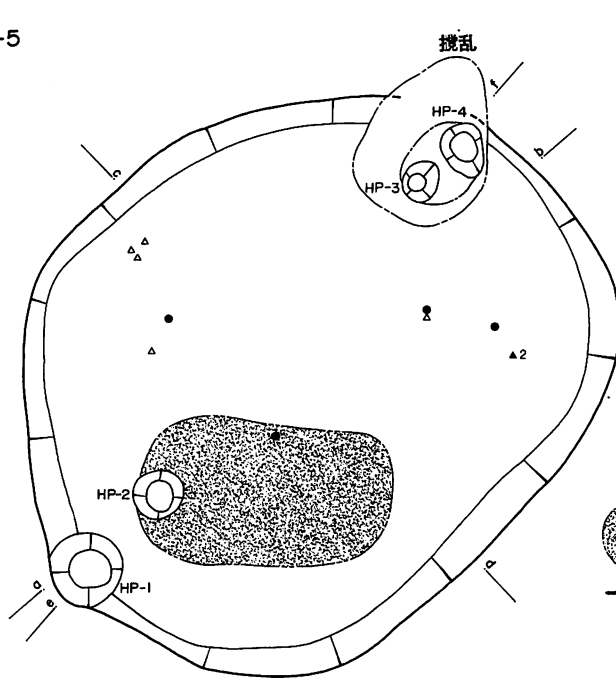
位置 C 7-87・97

平面形 楕円形

規模 $3.37 \times 2.72 / (3.08) \times 2.39 / 0.44$

長軸方向 N-64°-E

H-5



● 硬くしまった床面の範囲
 — 炭化材

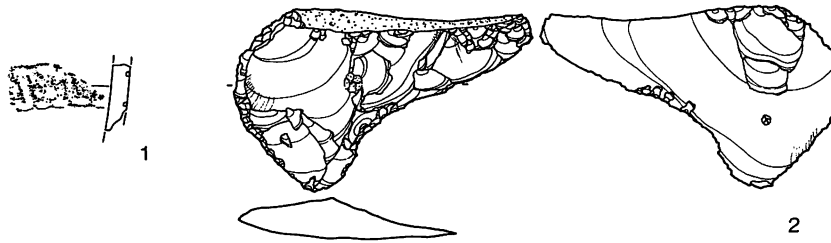
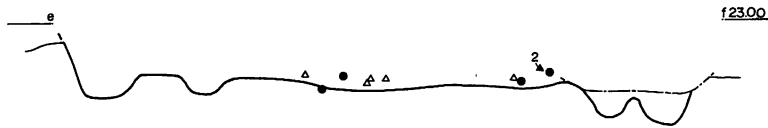
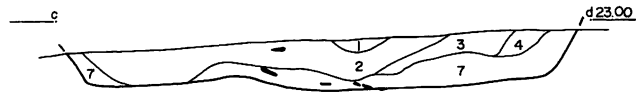
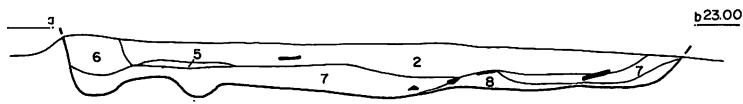


図10 H-5と遺物

- 覆土 1 黒色 (II黒) 2 暗茶褐色 (II黒 + d₁ + d₂)
 3 橙色 (d₂ >> II黒) 4 暗茶褐色
 5 暗橙色 (II黒 >> d₂) 6 暗黄橙色 (d₁ + d₂ >> II黒)
 7 黒褐色 (II黒 >>) 8 橙色 (d₂ >> II黒)

遺物 (図10-1・2) 1はIII群b類胴部破片。2は黒曜石の横長剥片を用いた01a。

(野中一宏、大野 亨)

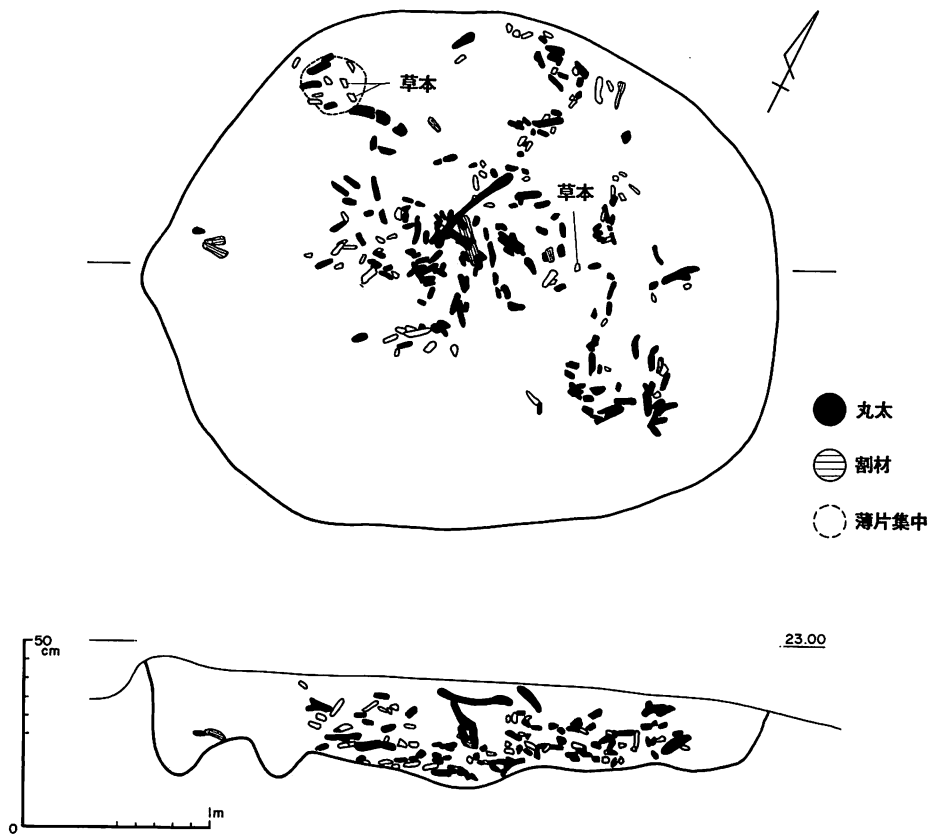
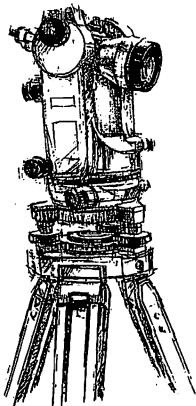


図11 H-5炭化材出土状態

表8 住居跡の掲載石器等一覧

図番号	遺構番号	名 称	分類	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	層 位	写 真 真 号 図 版 番 号	備 考
4-19	H-1	石槍またはナイフ	B	(6.2)×3.2×1.2	(23.8)	Obs.	覆土	4-②	
-20	H-1	〃	〃	5.1×3.2×1.1	17.7	Obs.	〃	〃	
-21	H-1	石 核	C	(3.9)×2.2×0.8	(5.2)	Obs.	〃	〃	
-22	H-1	スクレイパー	E	(2.3)×(2.8)×0.6	(4.0)	Obs.	〃	〃	
-23	H-1	〃	〃	(1.8)×1.5×0.5	(1.8)	Sh.	〃	〃	
-24	H-1	〃	〃	(2.0)×1.6×0.2	(1.0)	Sh.	〃	〃	
-25	H-1	〃	〃	(2.7)×1.9×0.8	(3.7)	Obs.	〃	〃	
-26	H-1	石 核	O O	3.2×2.1×2.2	7.9	Obs.	〃	〃	
-27	H-1	U.フレイク	Ola	(2.1)×2.1×0.7	(2.3)	Obs.	〃	〃	
-28	H-1	〃	〃	4.6×6.8×1.3	(46.8)	Che.	〃	〃	
5-1	H-1	石 斧	F	9.3×3.0×1.3	62.4	Sch.	〃	〃	
-2	H-1	石斧未製品	F	(8.9)×2.5×1.2	(38.1)	Mud.	〃	〃	
-3	H-1	〃	〃	11.3×3.8×1.7	114.0	Mud.	〃	〃	
-4	H-1	砥 石	K 1	5.3×5.4×3.4	139.9	Sa.	〃	〃	
-5	H-1	〃	〃	4.2×4.4×1.6	38.0	Sa.	〃	〃	
-6	H-1	石 錘	N	6.0×(5.3)×2.2	(104.6)	Gni	〃	〃	
-7	H-1	円盤状土製品		2.5×2.3×1.3	6.9		〃	〃	
-8	H-1	垂 飾		1.8×0.9×0.5	0.6	Mud.	〃	〃	
6-8	H-1	スクレイパー	E	(4.8)×1.8×1.0	(10.0)	Rhy.	排土中	5-②	
-9	H-1	〃	〃	2.7×1.5×0.7	2.0	Obs.	〃	〃	
-10	H-1	石 斧	F	11.8×5.2×2.5	285.2	Mud.	排土上	〃	C7-61と接合
-11	H-1	〃	〃	8.7×3.0×1.1	47.6	Mud.	排土中	〃	
-12	H-1	石斧未製品	〃	(14.4)×6.7×4.9	(832.0)	Mud.	〃	〃	
-13	H-1	たたき石	G	(9.0)×5.4×2.9	(265.2)	Mud.	〃	〃	
-14	H-1	石 錘	N	8.8×9.2×2.2	(201.8)	Gni	〃	〃	B7-99・接合 C7-92→C7-71
-15	H-1	〃	〃	7.5×(8.4)×2.2	(163.2)	Gni	〃	〃	
-16	H-1	〃	〃	(6.2)×(8.5)×2.1	(135.0)	Gni	〃	〃	
-17	H-1	〃	〃	(5.1)×(8.9)×1.8	(110.0)	Gni	〃	〃	
8-8	H-2	スクレイパー	E	5.2×3.2×1.0	17.6	Obs.	床	6-④	
-9	H-2	石 鏃	1A3	1.7×0.7×0.2	0.2	Obs.	覆土	〃	
-10	H-2	石槍またはナイフ	B	5.2×2.4×0.8	5.7	Obs.	〃	〃	
-11	H-2	つまみ付きナイフ	D	5.2×2.6×0.4	5.2	Sh.	〃	〃	
-12	H-2	つまみ付きナイフ	D	(5.0)×2.1×0.5	(4.7)	Sh.	〃	〃	
-13	H-2	石 錘	N	(4.4)×(6.1)×1.8	(84.1)	Gni	〃	〃	
9-5	H-4	礫 片	X 1	(5.6)×(6.9)×3.1	(177.0)	Gni	〃	7-⑩	
10-2	H-5	U.フレイク	Ola	4.8×7.9×1.4	25.3	Obs.	床	7-⑦	



2) 土壇

42個の土壇はすべて台地上にあり、台地縁とH-1北側に集中している。これらは、石器製作に関わると考えられる1個(P-28)を除き、どのような機能をもつものかは不明である。また、墓と判断できたものもない。時期を特定できたものは10個あり、4個(P-4・11・18・28)が早期に、5個(P-14・20・22・29・36)が前期に、1個(P-3)が中期に位置付けられる。また、これら以外でも構造や切り合い関係、覆土の堆積状態、出土遺物から時期を推定できるものがあり、P-1・2・7・8・15・27・32・40は前期に、P-10・17・19・25・30・35・38・39は中期に属する可能性が高い。

平面形は、円形、楕円形、隅丸方形、隅丸三角形を呈するものがあり、その内訳は10個、30個、1個、1個である。

早期に属するものは、台地縁に分布しており、覆土が $T_a-d_1-d_2$ を主体としたものである。形状はまちまちで、比較的浅い円形で竪穴様の大型のもの(P-4)、隅丸方形で深いもの(P-11)、円形で底面が傾斜し、壁の立ち上がりもゆるやかなもの(P-18)、円形で小型の浅いもの(P-28)である。P-28は覆土中に多量のフレイク、チップが混入しており、石器製作に関連するものと考えられる。

前期に属すると考えられる土壇は、1か所にまとまる傾向はなく、台地上に点在している。覆土は黒色土を主体としており、中期のものとは大差ない。しかし、両者では平面形に違いが認められ、中期のものほとんどが円形であるのに対し、前期のものは、すべて楕円形で、中型～小型のものに限られている。構造は大きく4つに分けられ、覆土の堆積状態や出土遺物などが若干異っている。1つは深さが30～40cm前後の中型のグループである(P-1・2・8・15・32・36・37・40)。2つめは、比較的大型で深さ40cmほどのものである(P-20・27)。これらは前者の覆土が黒色土を主体として単純に1～2層に分化されるのに対し、黒色土に $T_a-d_1-d_2$ が混じる土層が堆積している。また、P-20の壙口付近からは北海道式石冠や石錘などがまとまって検出されている。3つめは小型で浅いもので(P-22・29)、P-20と同様の遺物がまとまって出土したものである。最後は中型で浅いものである(P-7・14)。

中期に属するものには、円形を呈するもの(P-3・10・17・19・30・35・39)と楕円形のもの(P-25・38)があり、点在している。

これらのほかは、いずれも中型～小型の楕円形を呈しており、覆土の堆積物からみて、前期または中期に位置付けられると考えられる。(野中一宏)

P-1 (図12)

位置 C 7-73・74・83・84

規模 0.73×(0.46) / 0.28×0.23 / 0.29

覆土 1 黒色(II黒、柔らかい)

平面形 楕円形

長軸方向 N-77°-W

2 黒色(II黒、硬い)

P-2 (図12)

位置 C 7-74・84

平面形 楕円形

規模 0.85×0.58/0.43×0.27/0.34

長軸方向 N-86°-W

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒)

遺物図 (12-1) I群 b-4 類胴部破片。

P-3 (図12)

覆土上部からⅢ群 b-2 類の3個体分の破片とたたき石がまとまった状態で検出された。

位置 C 7-84

平面形 円形

規模 0.90×0.88/0.58/0.25

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒)

遺物 (図12-2~7) 2はI群 b-4 類胴部破片。3~5はⅢ群 b-2 類口縁部破片で、いずれも半截竹管状工具を用いた押し引き文、刺突文が口唇または口縁に施されている。地文は3が結束第2種のLR斜行縄文、4・5はLRの斜位または縦位の縄文である。6は3~5と同類の胴部破片で、地文は結束第2種のLRの斜行縄文で、幅広の貼付帯上には竹管状工具による円形刺突文が施されている。7は珪岩の楕円礫を用いており、端部に敲打痕が認められることからG類と分類したが、敲打ののちに背面の両端が打ち欠かれていることからみて、石錘の可能性もある。

P-4 (図13)

調査区東側の台地縁にあり、竪穴様の形状を呈している。南側壁の一部はP-5に切られている。覆土1層中からI群 b-3 類の同一個体の破片 (図13-1) がまとまって出土した。

位置 C 7-86

平面形 円形

規模 1.83×1.76/1.39×1.38/0.40

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒+d₁>d₂)

2 黄褐色 (d₁+d₂>>Ⅱ黒)

3 橙褐色 (d₂>d₁)

4 黄褐色 (d₁)

5 黒色 (Ⅱ黒+d₁>d₂)

6 暗黄褐色 (d₁+d₂Ⅱ黒)

7 橙褐色 (d₂)

遺物 (図13-1・2) 1は最大径が胴下半部にあるコップ形のI群 b-3 類土器で、全体の½ほどを復元した。口縁は波頂部を2か所もつ大きくゆるやかな波状口縁で、口縁に沿って1条の微隆起線文がめぐっている。その微隆起線下から胴下半の最大径部分までには、巻紐を柳葉形またはひょうたん形に押圧した文様が等間隔に施文され、その間を同じ原体を用いて横位または斜位に押圧して全体の文様を構成している。また、底部には、同じ原体を横位に9~10条押圧している。2は、つまみ付ナイフの刃部先端部と思われ、黒曜石製である。

P-5 (図12)

位置 C 7-86

平面形 楕円形

規模 —×0.70/0.69×0.44/0.27

長軸方向 N-47.5°-E

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒>>d₂)

2 暗褐色 (d₁>Ⅱ黒)

3 橙褐色 (d₂>d₁)

P-7 (図13)

位置 C 7-75・85

規模 0.70×0.61/0.37×0.29/0.25

覆土 黒色(Ⅱ黒)のみが堆積

平面形 楕円形

長軸方向 N-52°-W

P-8 (図13)

位置 C 7-78

規模 0.78×0.46/0.46×0.28/0.39

覆土 1 黒色(Ⅱ黒>>d₁+d₂粒)

平面形 楕円形

長軸方向 N-31.5°-E

2 暗褐色(Ⅱ黒+d₁)

遺物 (図13-3) Ⅱ群b類土器破片。地文はLRの斜縄文で、内面にも施されている。

P-9 (図13)

位置 C 7-56

規模 0.80×0.63/0.50×0.37/0.20

覆土 1 黒色(Ⅱ黒)

平面形 楕円形

長軸方向 N-12.5°-E

2 暗褐色(Ⅱ黒+d₁)

P-10 (図13)

位置 C 7-57・67

規模 1.21/1.00×0.96/0.21

覆土 1 黒色(Ⅱ黒>>d₂)

平面形 円形

2 茶褐色(d₁)

3 橙褐色(d₂パミス)

4 黒褐色(d₁)

遺物 (図13-4) Ⅲ群b-2類胴部破片。2条の平行沈線と幅広の貼付帯がみられ、貼付帯上には棒状工具による刺突文が施されている。地文はLRの斜縄文。

P-11 (図14)

塹底面は隅丸方形で、壁上部が大きく外へ開いている。覆土がTa-d₁・d₂を主としていることから早期に属すると判断した。遺物はない。

位置 C 7-76・86

規模 1.76×1.74/0.81×0.79/0.81

覆土 1 褐色(d₁)

平面形 隅丸方形

2 黒褐色(Ⅱ黒>d₁)

3 暗褐色(Ⅱ黒+d₁)

4 橙褐色(d₂>>d₁)

5 褐色(d₁)

6 暗灰褐色(d₁)

7 褐色(d₁)

8 暗灰褐色(d₁)

9 暗橙褐色(d₂パミス>>d₁)

P-12 (図14)

P-13に切られている。北~西側にかけて一段高いテラスをもつ二段構造で、底面の東側壁付近に径10cm、深さ40cmの小ピットがある。

位置 C 7-57

規模 1.21×—/0.57×0.47/0.47

平面形 楕円形

長軸方向 N-74°-E

覆土 1 橙褐色 (d_2) 2 暗黄褐色 ($d_1 > d_2$)

P-13 (図14)

P-12を切っており、南側壁の一部は木根によって壊されている。

位置 C 7-57

平面形 楕円形

規模 1.05/0.67×0.59/0.18

長軸方向 N-29°-E

覆土 1 黒色 (II黒 > d_1)

2 黒色 (II黒)

遺物 (図14-1) II群 b類胴部破片。地文はRLの斜行縄文で、内面にも施されている。

P-14 (図15)

北側壁の一部がP-15と接しているが、新旧関係は不明である。覆土中からII群 b類の同一個体の土器が粉々になった状態で検出された。

位置 C 7-56

平面形 楕円形

規模 0.80×0.59/0.46×0.34/0.21

長軸方向 N-77°-W

覆土 1 黒色 (II黒 > $d_1 > d_2$ パミス)

遺物 (図15-1) II群 b類土器胴部破片で、RLの斜縄文がしっかりと施文されている。

P-15 (図15)

南側壁の一部がP-14と接する。西側壁が二段構造となっており、底面も北西から南東へ若干傾斜している。覆土中から北海道式石冠が1点出土した。

位置 C 7-56

平面形 楕円形

規模 0.93×0.58/0.43×0.36/0.39

長軸方向 N-56.5°-W

覆土 1 黒色 (II黒 > $d_1 > d_2$ パミス)

遺物 (図15-2) 安山岩製のJ 4類で、背面及び側縁の一部が破損している。

P-16 (図15)

H-1と切り合っているが、新旧関係は不明である。底面の平面形は三角形を呈し、壁はゆるやかに立ち上る。

位置 B 7-78

平面形 隅丸三角形

規模 (1.63×1.32) / 1.05×0.77/0.45

長軸方向 N-13°-W

覆土 1 黒色 (II黒)

2 黒色 (II黒 + d_1)

P-17 (図15)

H-1東側の内壁コーナー付近を切って作られており、東側壁の一部は範囲確認調査時のトレンチにかかっている。

位置 B 7-89・99

平面形 円形

規模 0.82×(0.79) / 0.53×0.52/0.52

覆土 1 黒色 (II黒)

2 黒色 (II黒 + d_1)

P-18 (図16)

東側壁の立ち上がりが非常にゆるやかで、確認面では楕円形を呈する。底面は西から東へわ

ずかに傾斜しており、北西壁際が若干ゆがんだ円形である。覆土は主に $Ta - d_1 \cdot d_2$ である。

位置 C 7-65・75

平面形 円形

規模 $1.61 \times 1.22 / 1.05 \times 0.98 / 0.32$

覆土 1 黒色 ($II 黒 \gg d_1$)

2 暗褐色 (d_1)

3 橙褐色 ($d_2 \gg d_1$)

P-19 (図16)

底面上から厚さ 2 cm ほどの有機質を含む黒色土が部分的に検出された。遺物は全くない。

位置 C 7-62

平面形 円形

規模 $0.96 \times 0.93 / 0.75 \times 0.71 / 0.32$

覆土 1 黒色 ($II 黒 \gg d_1 + d_2$)

2 黒褐色 ($II 黒 + d_1 + d_2$)

3 黒色 ($II 黒 > d_1 + d_2$)

4 黄褐色 (d_1)

5 黒色 (有機質を含む)

P-20 (図17)

南東部は P-27 を切っている。壙口部北側からまとまった状態で、スクレイパー、北海道式石冠、石錘等が検出された。これらは壙外から出土しているが、本土壙に関わりをもつものと考えられる。また、覆土中から I 群 b-4 類土器片が検出された。

位置 C 7-62・63

平面形 楕円形

規模 $\text{—} \times 0.93 / 0.92 \times 0.73 / 0.36$

長軸方向 N-57.5°-W

覆土 1 黒色 ($II 黒 \gg d_2$)

2 褐色 ($II 黒 + d_1 > d_2$)

3 褐色 ($II 黒 + d_1 > d_2$ 、硬くしまっている)

4 黒褐色 ($II 黒 + d_1 + d_2$)

遺物 (図17-1~8) 1はI群b-4類胴部破片。2は珪岩の薄手の素材を用いたスクレイパーで、左側縁には細かい二次調整が認められる。3は頁岩の厚手の素材を用いた片面加工のスクレイパーで、入念な二次加工が施されており、両側縁はかなり磨耗している。さらに、この部分には油脂と思われる黒褐色の付着物質が認められた。4は安山岩製の所謂「北海道石冠」で、側縁の一端は欠損している。5~7は- (マイナス) 型の石錘で石材には安山岩 (5)、片麻岩 (6・7) が用いられている。これらはいずれも火熱を受けており、このために破碎したものである。8は片麻岩の円礫で、これも火熱を受けており、粉々に破碎している。

P-21 (図16)

H-1 西側のテラスおよび壁の一部と重複しているが、新旧関係は不明である。

位置 B 7-78・79

平面形 楕円形

規模 $(0.83 \times 0.73) / 0.50 \times 0.44 / 0.41$

長軸方向 N-70.5°-E

覆土 1 黒色 ($II 黒 > d_1$)

2 黒色 ($II 黒 > d_1 \gg d_2$)

P-22 (図18)

南側壁は木根によって壊されている。覆土上部からまとまった状態で、つまみ付ナイフ、ス

クレイパー、石錘、礫片が検出された。

位置 C 7-62

平面形 楕円形

規模 $(0.49) \times 0.36 / (0.39) \times 0.26 / 0.25$

長軸方向 N-7°-E

覆土 1 黒色 (II黒)

2 黒色 (II黒 > d₁)

3 褐色 (d₁ > II黒)

4 褐色 (d₁ > II黒)

遺物 (図18-1~5) 1はII群b類底部破片。胎土には砂礫が多く混入し、繊維の量は非常に少ない。体部の色調は灰褐色を呈し、RLの斜縄文を地文としている。2はつまみ部を欠くD類。頁岩製で周縁にのみ二次加工が施されたものである。3は頁岩製のエンドスクレイパー。4は片麻岩製の石錘片、5は安山岩製の- (マイナス) 型石錘で、4・5はいずれも火熱を受けている。

P-23 (図16)

位置 C 7-56

平面形 楕円形

規模 $0.83 \times 0.62 / 0.67 \times 0.53 / 0.16$

長軸方向 N-87.5°-E

覆土 1 黒色 (II黒 >> d₁ >> d₂パミス)

遺物 (図16-1) 片麻岩製の- (マイナス) 型石錘で、わずかに火熱を受けており、ひび割れがみられる。

P-24 (図18)

位置 C 7-57

平面形 楕円形

規模 $0.78 \times 0.60 / 0.54 \times 0.42 / 0.23$

長軸方向 N-55°-W

覆土 1 黒色 (II黒 >> d₁ >> d₂)

P-25 (図18)

位置 C 7-47・56・57

平面形 楕円形

規模 $1.99 \times 1.08 / 1.68 \times 0.75 / 0.25$

長軸方向 N-28°-W

覆土 1 黒褐色 (II黒 + d₁ > d₂パミス)

2 橙褐色 (d₁)

3 黒色 (II黒)

P-26 (図19)

石斧1点、焼成粘土塊2点が覆土中から検出されている。石斧は東側壁付近の上部に堆積している1層中につきささったような状態で、焼成粘土塊は土壙中央付近の覆土2層中からまともに出て出土している。

位置 C 7-76

平面形 楕円形

規模 $0.85 \times 0.76 / 0.67 \times 0.59 / 0.22$

長軸方向 N-15°-E

覆土 1 黒色 (II黒 >> d₁)

2 暗橙褐色 (II黒 + d₁ + d₂)

遺物 (図19-1~3) 1は泥岩製の両頭石斧。側縁の一部に剝離による調整痕がみられ、左側面下端には素材面を残している。また、両方の刃部には、使用痕と思われる縦方向の細かい傷跡が認められる。大きさからみて、石のみとしての機能をもつものかもしれない。2・3

は焼成粘土塊とした土製品。胎土に砂礫をほとんど含まず、色調は明黄褐色～灰黄褐色を呈しているが、焼成温度が低いいためか、非常にもろい。整形の際の指跡が認められる。

P-27 (図18)

P-20に切られている。P-19と同様に有機質を含む黒色土が壙底面に部分的に認められた。

位置 C 7-62

平面形 (楕円形)

規模 —×0.83/—×0.50/0.37

長軸方向 (N-22.5°-W)

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒>>d₂)

2 橙褐色 (d₂)

3 橙褐色 (d₁+d₂)

4 黒色 (Ⅱ黒+d₂)

P-28 (図19)

覆土はTa-d₁・d₂を主体としており、その中からI群b-3類土器とともに剝片石器片や4000点に及ぶフレイク、フレイクチップ(図版10-④)が検出されたことからみて、縄文早期の石器製作に関する土壙と考えられる。

位置 C 7-56

平面形 円形

規模 0.43×0.40/0.30×0.28/0.10

覆土 1 暗褐色 (d₁+d₂)

2 橙褐色 (d₂)

遺物 (図19-4~9) 4は石槍片、5~7はスクレイパー片、8・9はU. フレイクで、石材はいずれも黒曜石である。

P-29 (図20)

南西側は風倒木痕によって壊されている。覆土上部からたたき石、礫器、石錘が検出された。

位置 C 7-61

平面形 (楕円形)

規模 —×0.38/—×0.23/0.13

長軸方向 N-45°-E

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒+d₁>>d₂)

遺物 (図20-1~3) 1は片麻岩の楕円礫を用いたたたき石。周縁および背面中央部に敲打痕が認められる。火熱を受けており、表面は非常にもろい。2は泥岩の偏平楕円礫を用い、側縁を両側から打ち欠いている。刃部が作出されていないため礫器としたが、素材からみても石斧未成品の可能性がある。3は片麻岩製の-(マイナス)型石錘で、火熱を受けたために割れたものと思われる。

P-30 (図19)

南半部は掘り過ぎのため不明である。

位置 C 7-80・81

平面形 不明

規模 0.99×—/0.73×—/0.26

長軸方向 不明

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒+d₁>>d₂)

2 赤褐色 (d₁)

P-31 (図19)

位置 C 7-66

平面形 楕円形

規模 0.80×0.50/0.66×0.39/0.13

長軸方向 N-17.5°-E

覆土 1 黒色 (II黒 >> $d_1 + d_2$)

P-32 (図20)

東側に一段高いテラス部をもつ2段構造である。

位置 C 7-60・70

平面形 楕円形

規模 0.72×0.54/0.26×0.21/0.28

長軸方向 N-24°-E

覆土 1 黒色 (II黒 >> $d_1 + d_2$)

2 黒褐色 (II黒 > $d_1 + d_2$)

P-33 (図20)

位置 C 7-71

平面形 楕円形

規模 0.67×0.58/0.40×0.35/0.16

長軸方向 N-18°-W

覆土 1 黒色 (II黒 >> d_1)

2 黒色 (II黒 > d_1)

P-35 (図21)

位置 C 7-61

平面形 円形

規模 1.00×0.91/0.62/0.17

覆土 1 黒色 (II黒 + $d_1 > d_2$)

遺物 (図21-1) 背面に原石面を残した黒曜石のフレイクである。

P-36 (図21)

覆土中からII群b類の同一個体の破片が検出され、P-39出土のものと同接合した。

位置 C 7-52

平面形 楕円形

規模 0.84×0.72/0.37×0.13/0.37

長軸方向 N-72°-W

覆土 1 黒曜色 (II黒 + $d_1 > d_2$)

2 黒色 (II黒 > d_2)

遺物 (図21-2~4) 2~4はII群b類の同一個体の土器。胎土にはわずかに砂礫と繊維を含み、口縁部と内面には炭化物が付着している。口唇の断面は角形で、口縁下に2条の縄線文が施されている。地文はLRの斜行縄文で、内面にも底部付近まで施文されている。

P-37 (図22)

位置 C 8-04

平面形 楕円形

規模 0.83×0.56/0.61×0.33/0.25

長軸方向 N-68.5°-W

覆土 1 黒褐色 (II黒 > d_1)

2 黒褐色 (II黒 > d_2 、炭化物を含む)

遺物 (図22-1) 泥岩製の石斧。左側縁下端から刃部にかけては使用によって破損したものと考えられ、この部分には敲打による再調整が認められる。また、頭部から側縁にかけても敲打による調整が残されている。

P-38 (図22)

H-2の南西壁の一部を切っている。

位置 C 7-36・46

平面形 (楕円形)

規模 — / — ×0.23/0.32

長軸方向 (N-27.5°-E)

覆土 1 黒褐色 (II黒 > d_2)

遺物 (図22-2) 安山岩の礫片でわずかに火熱を受けている。

P-39 (図22)

北側壁際に径16cm、深さ14cmの円形の柱穴様ピットが検出された。

位置 C 7-43 平面形 円形

Ⅱ黒 0.66×0.61/0.50×0.49/0.19

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒>>d₁)

P-40 (図22)

位置 C 7-47 平面形 楕円形
規模 0.81×0.63/0.40×0.25/0.42 長軸方向 N-54.5°-W

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒)
2 黒色 (Ⅱ黒>d₂)
3 暗褐色 (d₂>>Ⅱ黒)

P-41 (図22)

位置 C 7-36 平面形 楕円形
規模 0.96×0.94/0.47×0.38/0.20 長軸方向 N-33°-E

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒)
2 黒色 (Ⅱ黒>>d₂)
3 明複色 (d₁)

遺物 (図22-3) 頁岩製のつまみ付ナイフ。側縁にのみ二次加工が施されたもので、左側縁の一部には原石面を残している。

P-42 (図23)

覆土中から使用面を上にした状態で石皿が検出された。

位置 C 7-47 平面形 楕円形
規模 0.57×0.48/0.40×0.33/0.20 長軸方向 N-65°-W

覆土 1 黒色 (Ⅱ黒>>d₂)
2 黒褐色 (Ⅱ黒+d)

遺物 (図23-1) 安山岩を用いた石皿。使用面は一面だけである。

P-43 (図23)

土壌の中ほどから底面までは、径15cmほどの先端が尖った木柱状のものを打ち込んだような断面形をしており、上部は内湾しながら外へ開いている。

位置 C 7-45・46 平面形 楕円形 (確認面)
規模 0.48×0.41/—/1.18 長軸方向 N-44°-E (確認面)

覆土 上部に暗褐色 (Ⅱ黒>>d₁) 土が堆積していることは確認できたが、破線以下は不明である。

P-44 (図23)

位置 C 7-87 平面形 楕円形
規模 0.87×0.61/0.66×0.40/0.17 長軸方向 N-45.5°-E

覆土 1 暗褐色 (Ⅱ黒>d₁+d₂)
2 暗橙色 (d₂>>Ⅱ黒)

(野中一宏)

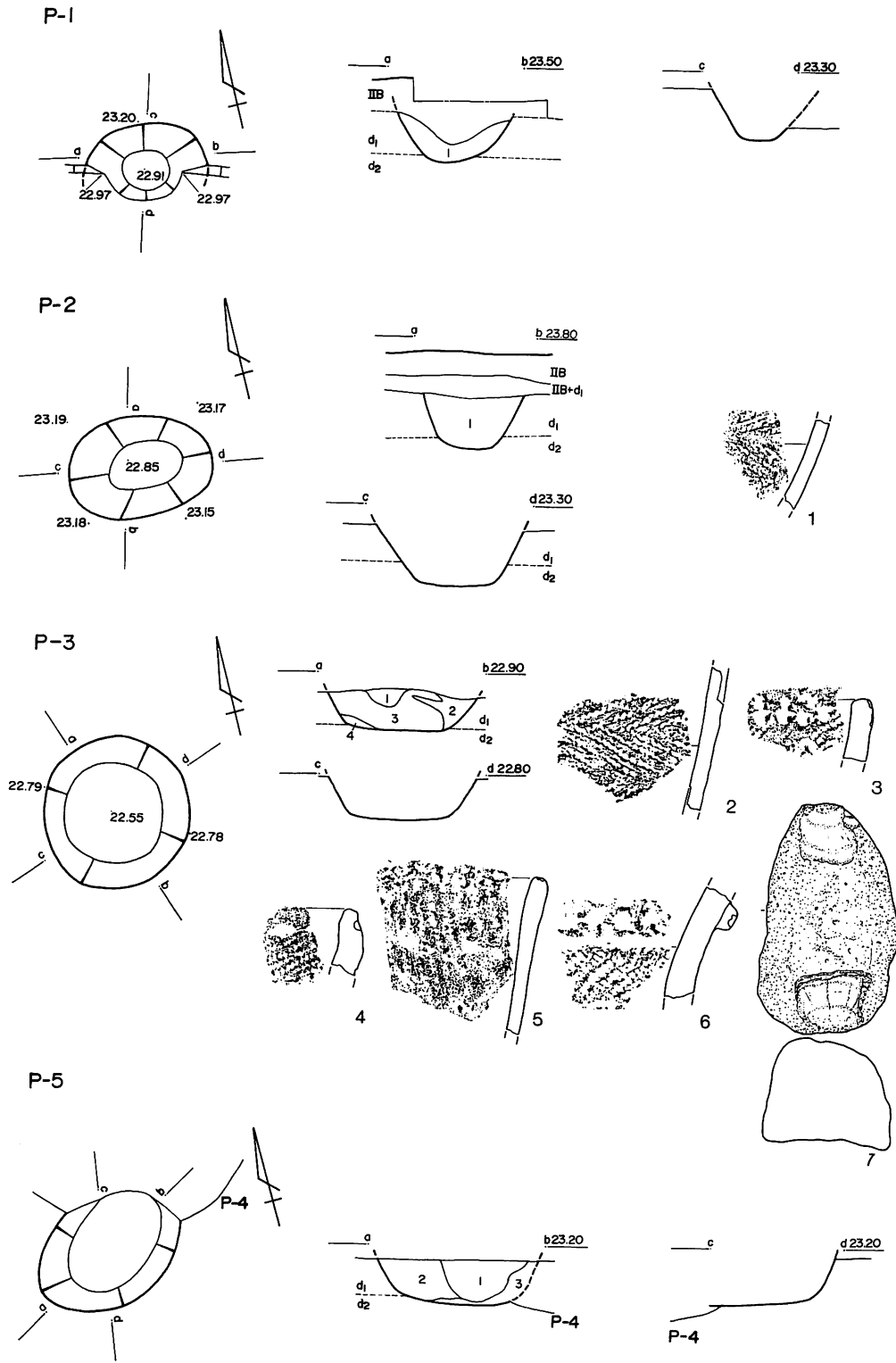


図12 P-1・2・3・5と遺物

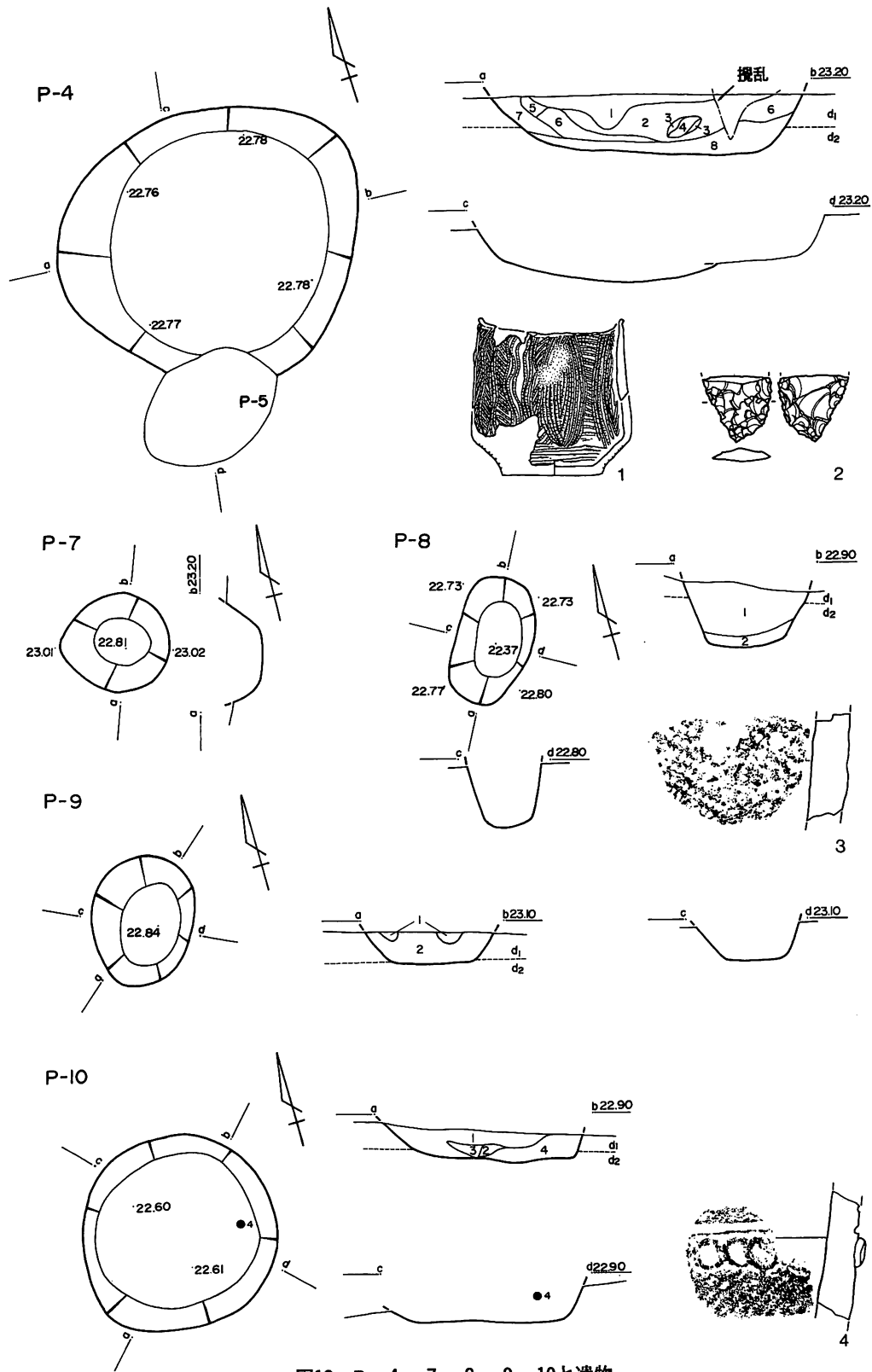


図13 P-4・7・8・9・10と遺物

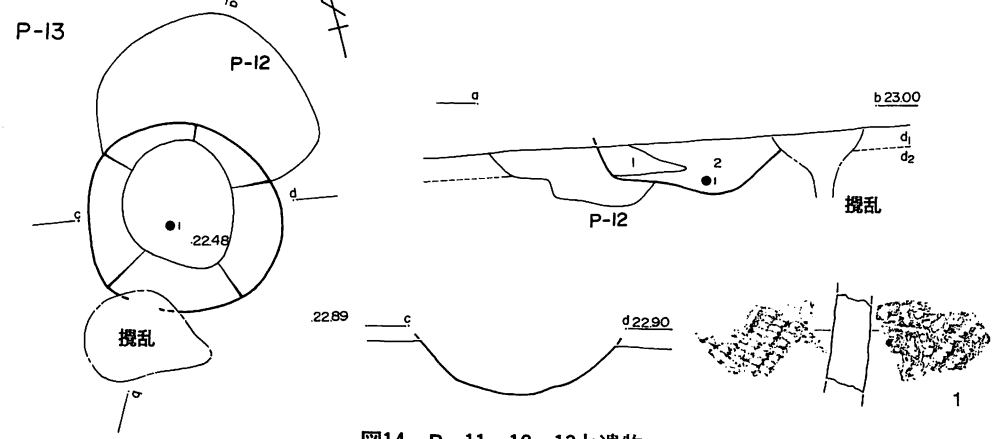
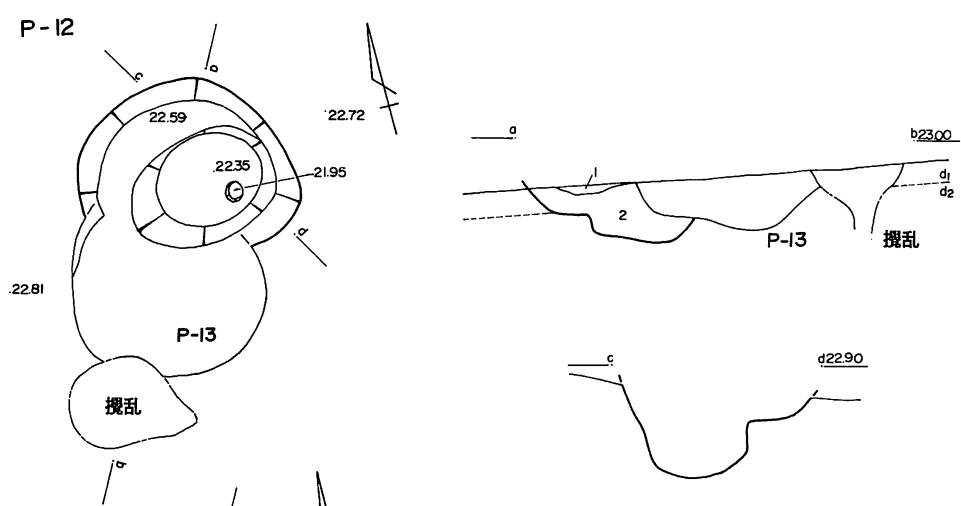
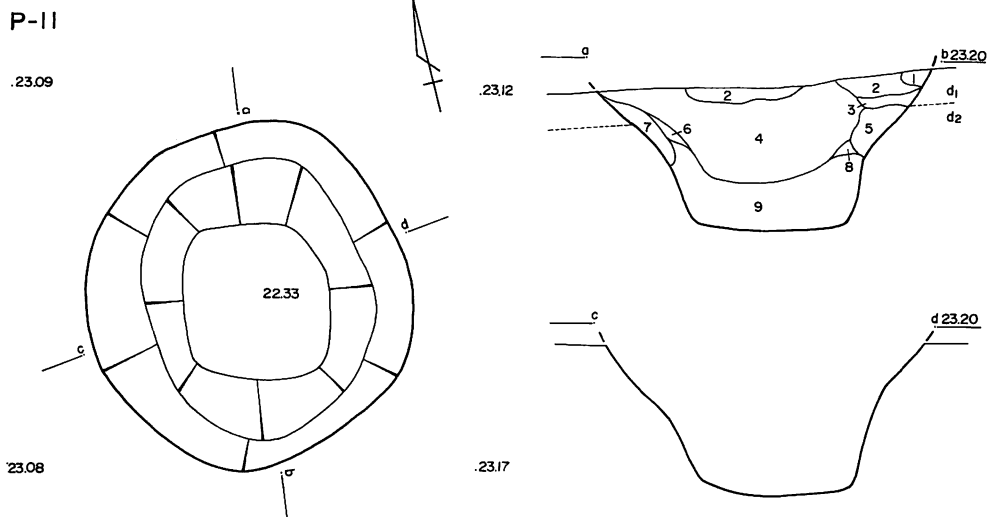


图14 P-11·12·13と遺物

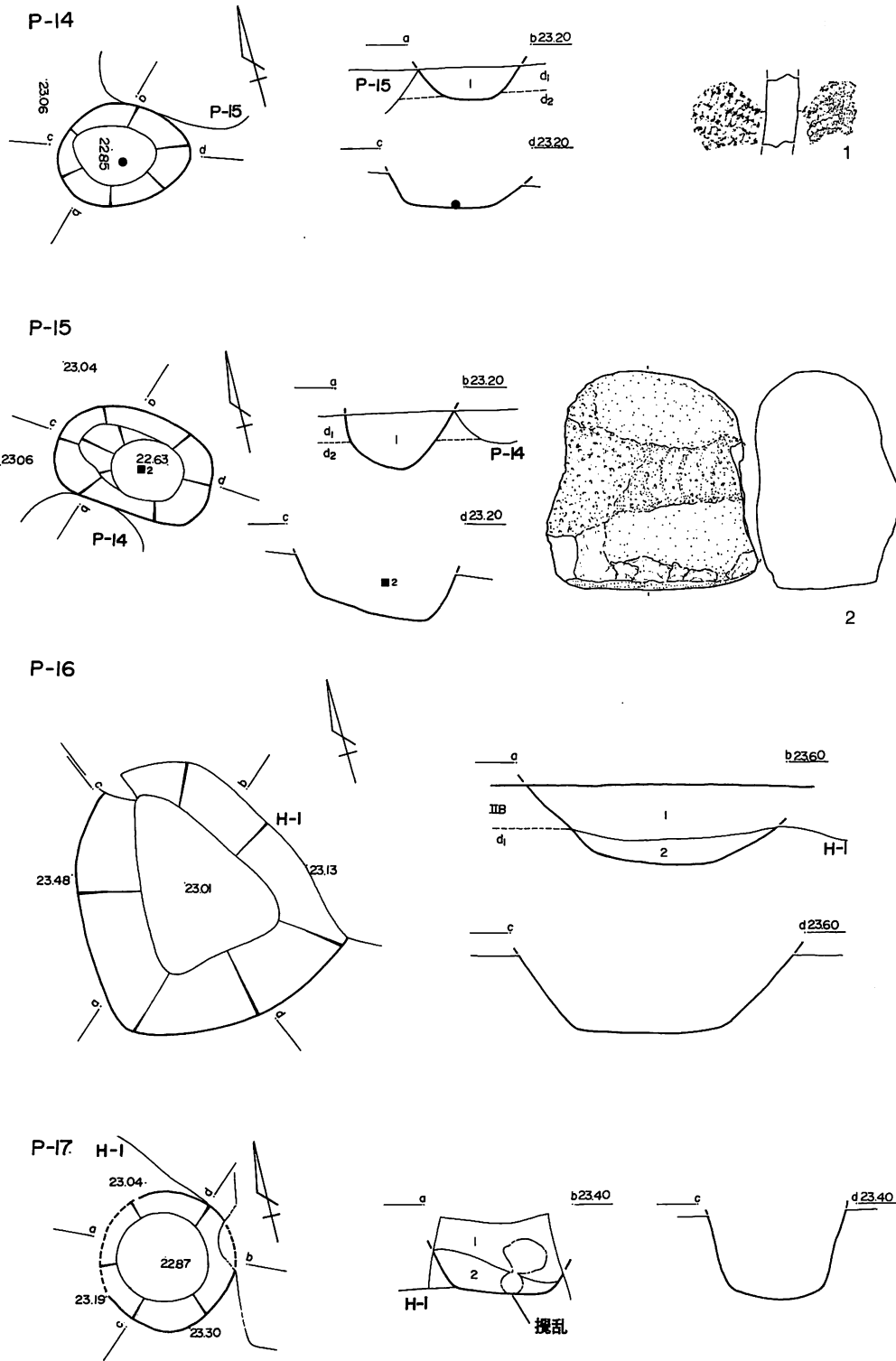
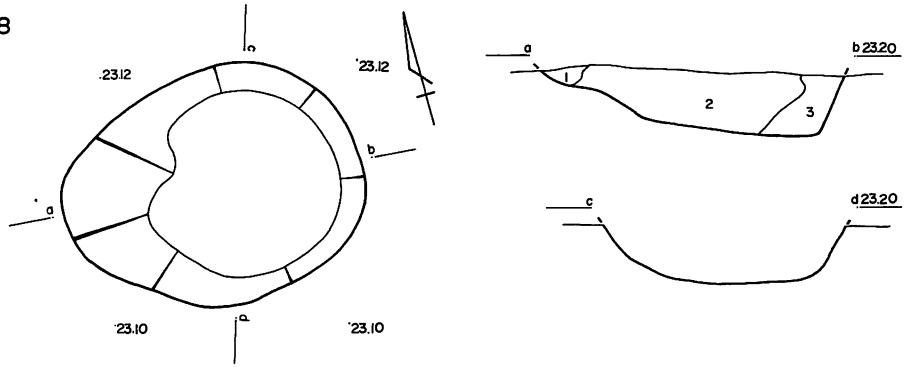
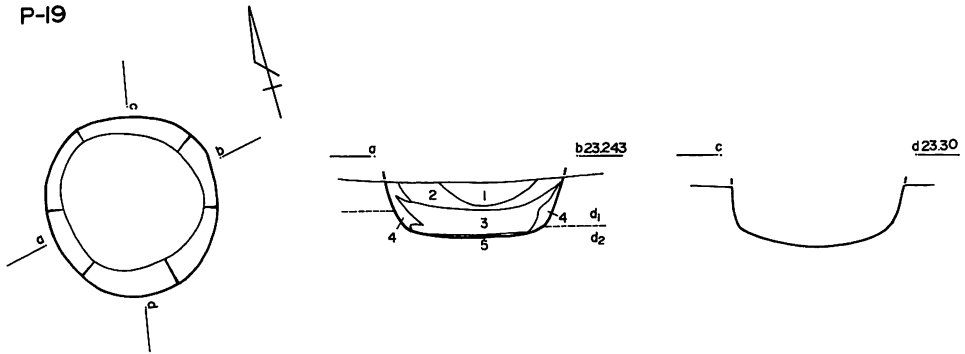


図15 P-14・15・16・17と遺物

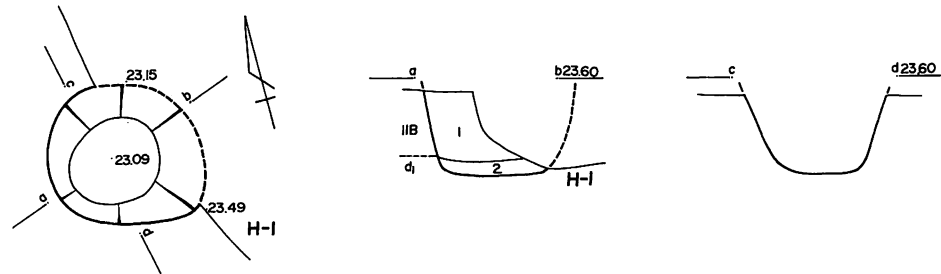
P-18



P-19



P-21



P-23

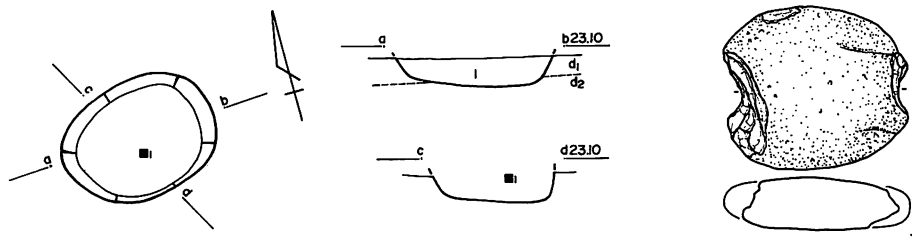


图16 P-18 · 19 · 21 · 23と遺物

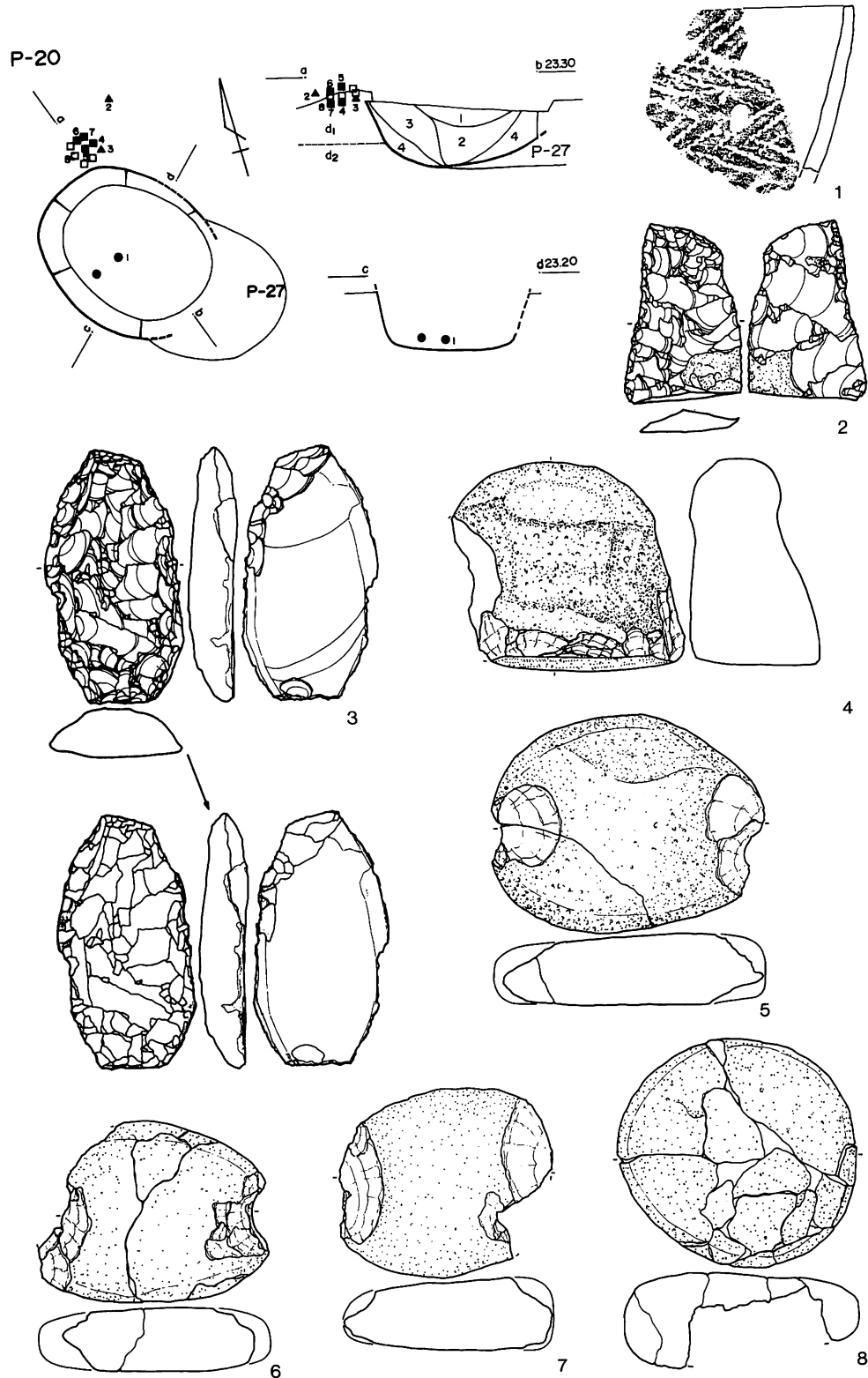


图17 P-20と遺物

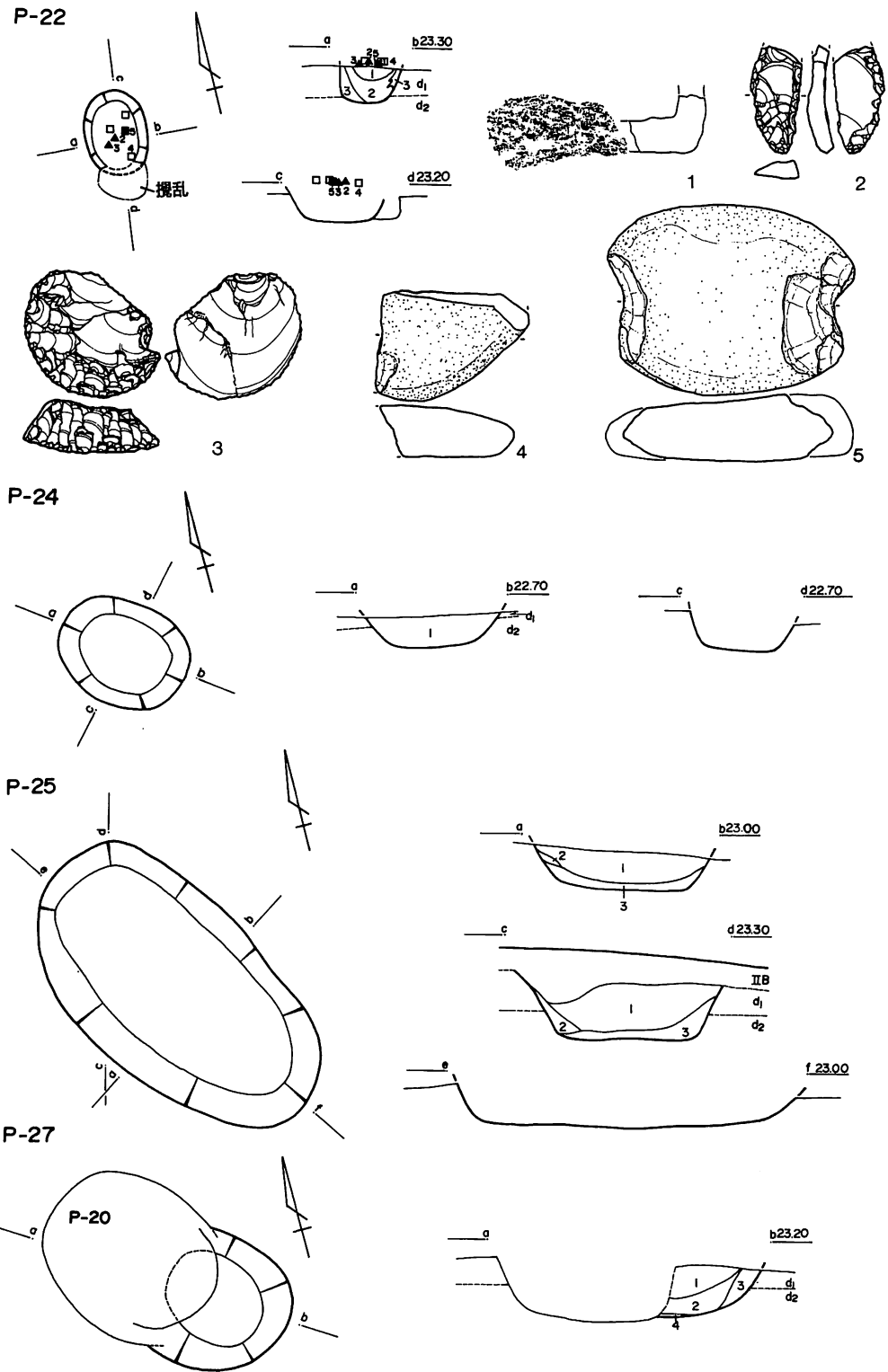


图18 P-22·24·25·27と遺物

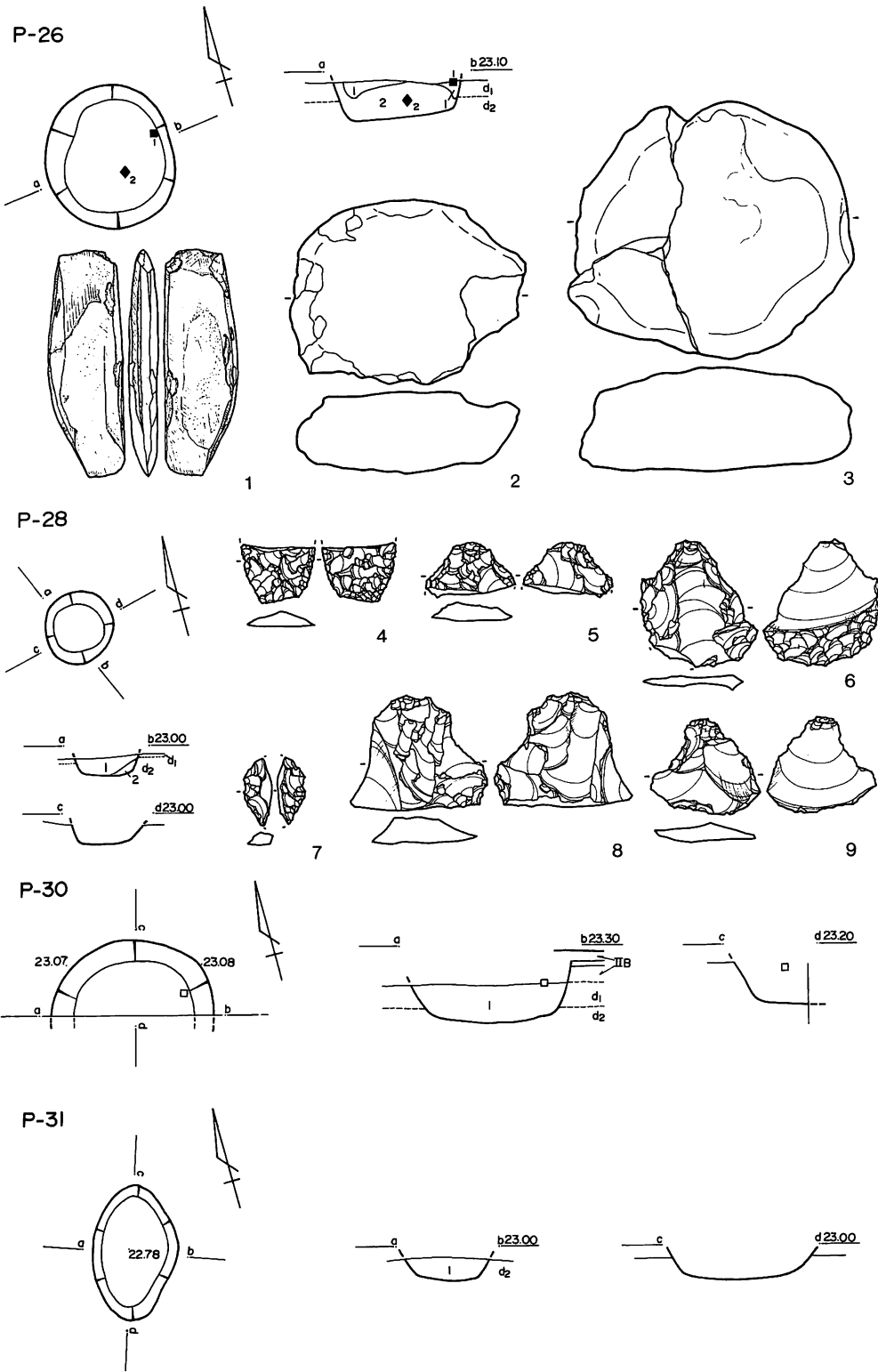


図19 P-26・28・30・31と遺物

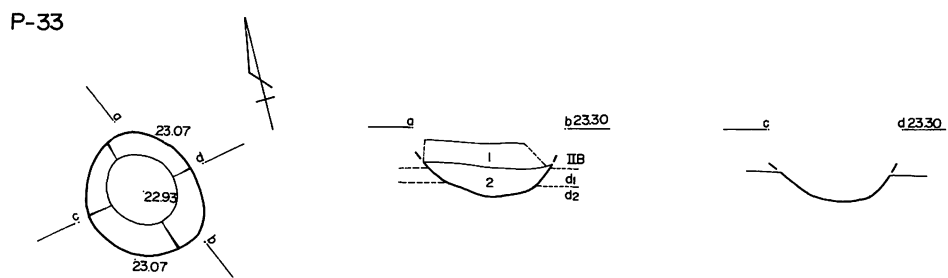
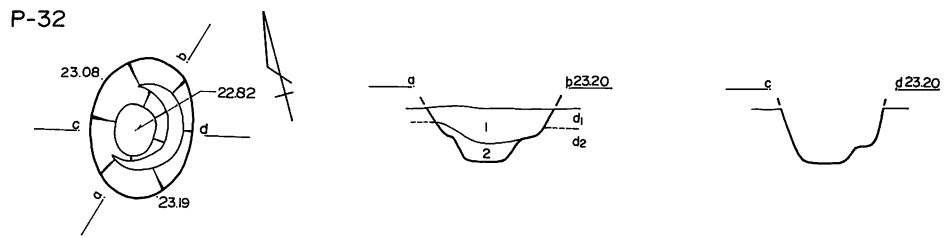
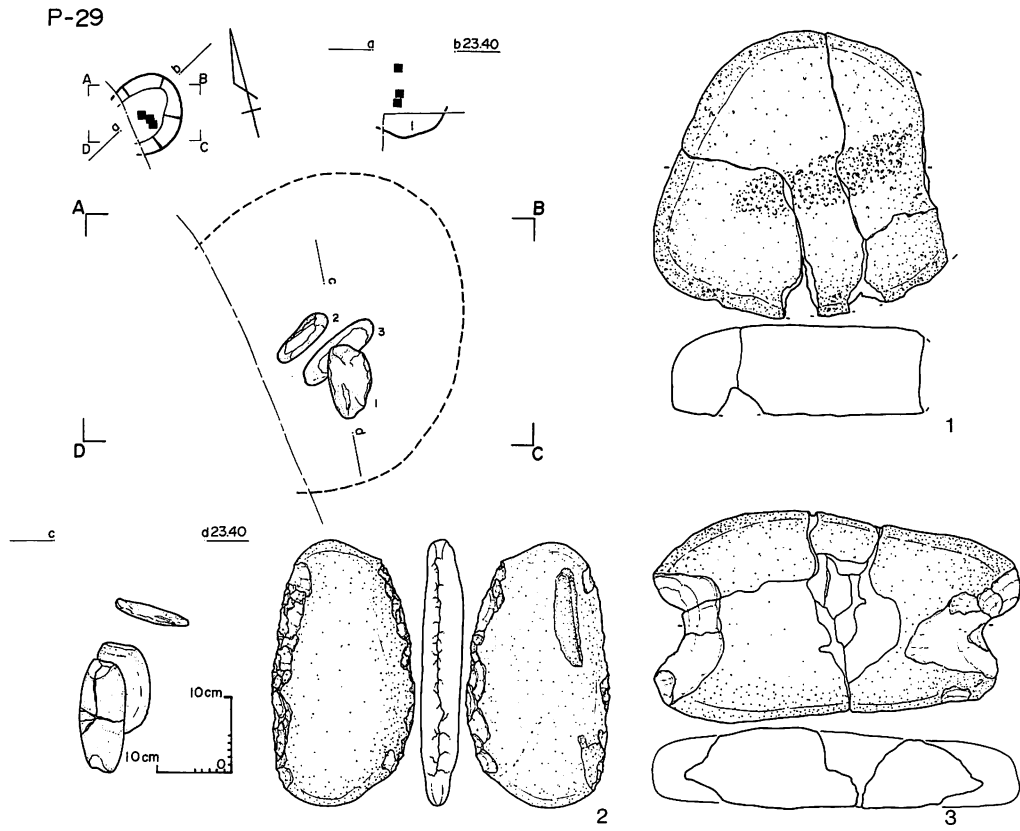
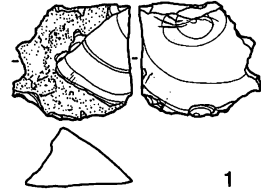
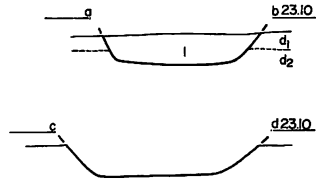
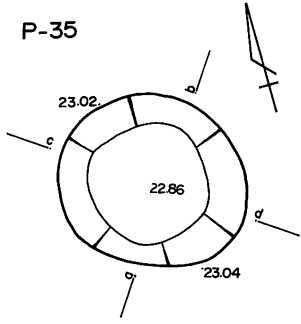


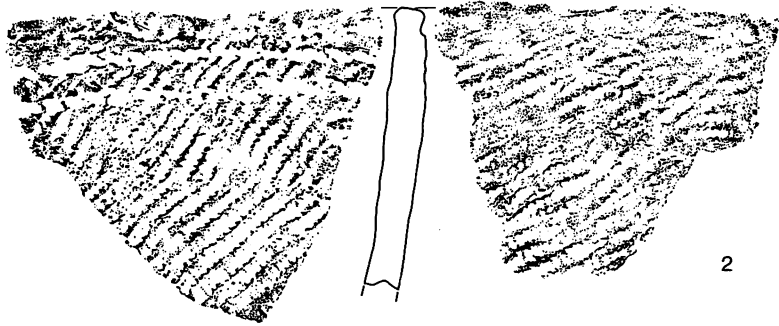
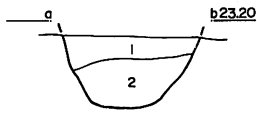
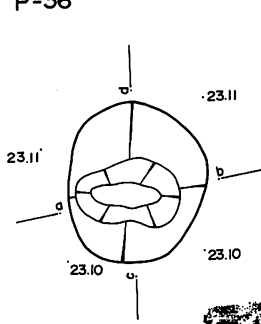
図20 P-29・32・33と遺物

P-35



1

P-36



2



3

4

图21 P-35・36と遺物

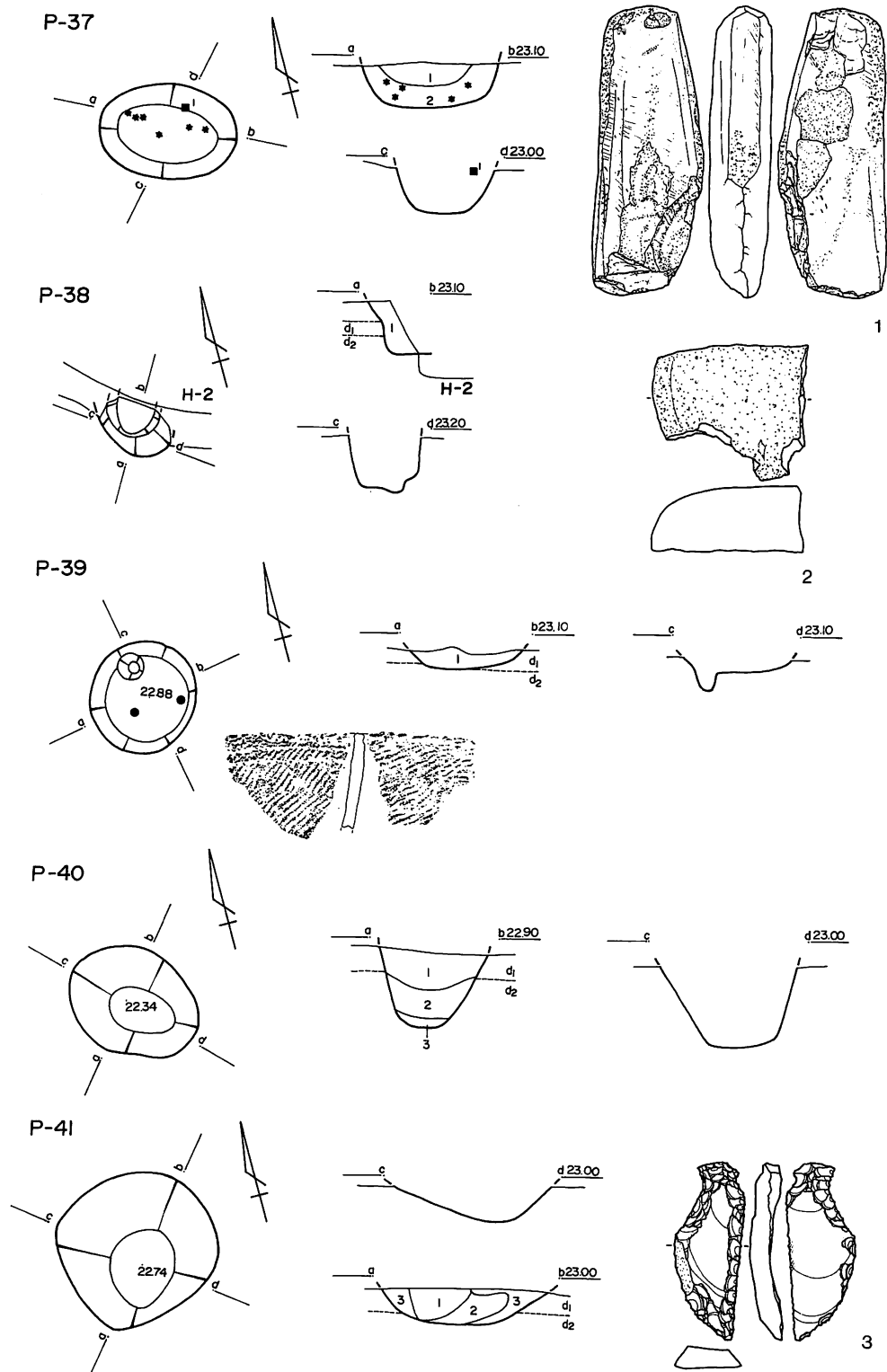
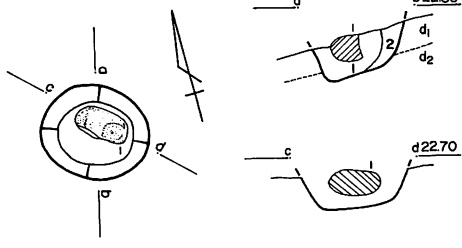
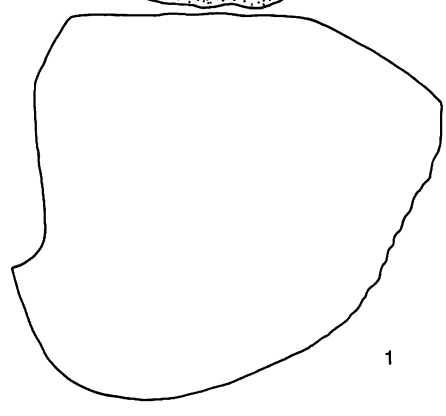
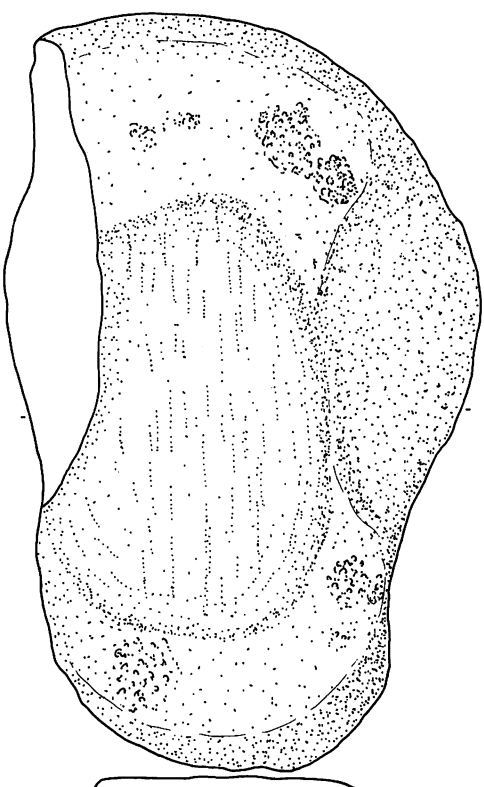
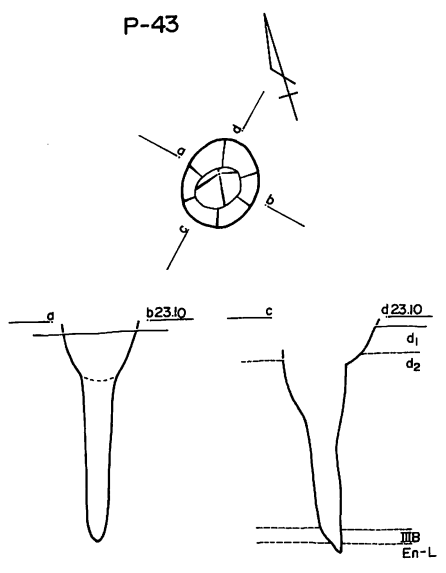


図22 P-37・38・39・40・41と遺物

P-42



P-43



P-44

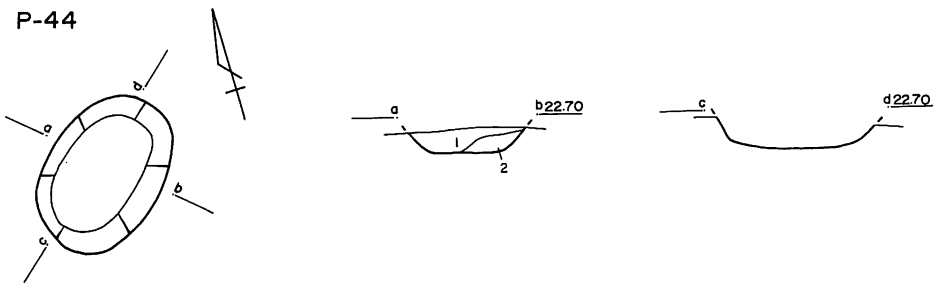


图23 P-42 · 43 · 44と遺物

遺構 番号	土器				石器											土製品	計							
	I		II		III		0群		I群			III群			V群			V群			X			
	b		b		b		1a	1・2	B	D	E	F	G	H	J			M	N	0	1			
	3	4	1	2	1	2																4		
P-5																						1	1	
8				1																		1	2	
10					1																		1	
13						1																	3	
14				126																		6	132	
15														1									1	
20		2								2				1				3	7	54			69	
22			2						1	1								1		3			8	
23																		1					1	
26												1										2	3	
27		1																					1	
28	21					2	3,947	1		3											5		3,979	
29											1	1			1			4					7	
30			2															1		5			8	
31									2											1			3	
32														1									1	
35							1																1	
36			15																	4			19	
37							1						1										7	
38																				1			1	
39			2																				2	
40							1																1	
41									1												1		2	
42																			1				1	
計	71	8	150	69	3	3,959	1	5	6	2	2	1	3	1	1	10	7	92	2				4,393	

表11 土壌の掲載実測土器一覽

図番号	遺構番号	名称	分類	大きさ (cm)			層位	写真 図版番号	備考
				器高	口径	底径			
13-1	P-4	鉢	Ib-3	9.8	9.1	(6.3)	覆土	14-①	

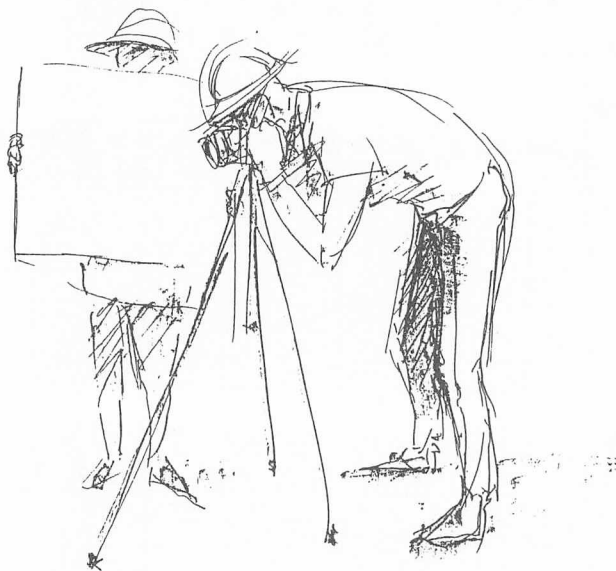
表12 土壌の掲載拓影土器一覽

図番号	遺構番号	分類	部位	層位	写真 図版番号	備考	図番号	遺構番号	分類	部位	層位	写真 図版番号	備考
12-1	P-2	Ib-4	胴	床	14-①		14-1	P-13	IIb	胴	覆土	14-①	
-2	P-3	〃	〃	覆土	〃		15-1	P-14	〃	〃	〃	〃	
-3	P-3	IIIb-2	口	〃	〃		17-1	P-20	Ib-4	口	〃	9-②	
-4	P-3	〃	〃	〃	〃		18-1	P-22	IIb	底	〃	10-③	
-5	P-3	〃	〃	〃	〃		21-2	P-39	IIb	口	〃	11-⑤	
-6	P-3	〃	胴	〃	〃		-3	P-36	IIb	胴	〃	〃	
13-3	P-8	IIb	〃	〃	〃		-4	P-36	IIb	底	〃	〃	
-4	P-10	IIIb-2	〃	〃	〃								

表13 土壌の掲載石器等一覽

図番号	遺構番号	名称	分類	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	層位	写真 図版番号	備考
12-7	P-3	たたき石	G	10.3×5.7×5.2	400.5	Che.	覆土	14-③	
13-2	P-4	つまみ付きナイフ	D	(2.0)×(2.0)+0.5	(2.0)	Obs.	〃	-②	
15-2	P-15	北海道式石冠	J4	(9.5)×(8.7)×6.5	(791.0)	And.	〃	-③	
16-1	P-23	石 錘	N	7.3×6.5×2.1	165.8	Gni.	〃	-③	
17-2	P-20	スクレイパー	E	(5.4)×3.6×0.7	(15.4)	Che.	-	9-③	壕口部外出土

図番号	遺構番号	名 称	分類	大 き さ (cm)	重さ(g)	材 質	層 位	写 真 図版番号	備 考
17-3	P-20	スクレイパー	E	7.6×4.0×1.2	45.8	Sh.	—	9-④	壙口部外出土
-4	P-20	北海道式石冠	J4	9.4×(9.5)×5.8	(818.0)	And.	—	9-⑥	〃
-5	P-20	石 錘	N	9.6×12.2×3.1	509.0	Anb.	—	〃	〃
-6	P-20	石 錘	N	8.2×(10.4)×2.6	(298.0)	Gni.	—	〃	〃
-7	P-20	石 錘	N	8.5×9.6×3.0	(346.2)	Gni.	—	〃	〃
-8	P-20	礫	X0	10.2×10.9×(4.1)	(426.1)	Gni.	—	〃	〃
18-2	P-22	つまみ付きナイフ	D	(3.1)×1.4×0.5	(2.8)	Sh.	覆土	10-③	
-3	P-22	スクレイパー	E	3.9×4.0×1.4	17.5	Sh.	〃	〃	
-4	P-22	石 錘	N	(4.6)×(6.5)×2.2	(95.8)	Gni.	〃	〃	
-5	P-22	石 錘	N	8.3×10.8×2.6	402.8	And.	〃	〃	
19-1	P-26	石 斧	F	10.0×3.3×1.3	74.3	Mud.	〃		
-2	P-26	土 製 品		(5.4)×(7.3)×2.4	(58.0)		〃	8-③	焼成粘土塊
-3	P-26	土 製 品		7.9×8.7×3.0	110.1		〃	〃	〃
-4	P-28	石槍またはナイフ	B	(1.6)×(2.2)×0.4	(1.6)	Obs.	〃	14-②	
-5	P-28	スクレイパー	E	(1.5)×(2.6)×0.6	(2.0)	Obs.	〃	〃	
-6	P-28	スクレイパー	E	3.8×3.4×0.9	(6.5)	Obs.	〃	〃	
-7	P-28	スクレイパー	E	2.0×(0.8)×0.4	(0.6)	Obs.	〃	〃	
-8	P-28	U フレイク	Ol1a	3.4×4.1×0.7	10.4	Obs.	〃	〃	
-9	P-28	U フレイク	Ol1a	2.9×3.3×0.7	4.1	Obs.	〃	〃	
20-1	P-29	たたき石	G	11.4×(11.3)×3.4	(630.0)	Gni.	〃	11-④	
-2	P-29	礫 器	H	10.3×5.5×1.6	(142.1)	Mnd.	〃	〃	
-3	P-29	石 錘	N	8.3×14.6×3.2	(481.0)	Gni.	〃	〃	
21-1	P-35	フ レ イ ク	Ol	3.2×3.2×1.5	12.8	Obs.	〃	14-②	
22-1	P-37	石 斧	F	12.7×4.7×2.5	272.6	Mud.	〃	—③	
-2	P-38	礫 片	X1	6.1×2.7×2.9	171.6	And.	〃	—③	
-3	P-41	つまみ付きナイフ	D	5.2×1.9×0.6	8.2	Sh.	〃	—②	
23-1	P-42	石 皿	M	29.9×(18.8)×15.3	(1,120)	And.	〃	11-⑦	



3) Tピット

Tピットは、5個検出されたうち、2個(T-1・2)が斜面下部に、3個(T-3~5)が台地縁に列をなして分布している。

構造は、斜面下部にある1個(T-2)が小判型のタイプであるほかは、すべて溝状のタイプのもので、台地縁に並ぶ3個のうち、2個(T-4・5)は杭穴を伴っている。T-2も、従来の調査例からみて杭穴をもつ可能性が高いと考えられるが、低地部分にあるため、墳底付近まで掘り進めた段階で水が湧き出し、確認することができなかった。また、長軸方向に切った土層断面にも杭の痕跡は認められなかった。

長軸の向きは、斜面下部の2個が等高線と平行なのに対し、台地縁のものは直交している。

壁はいずれも大きく崩落しており、横断面は上部が大きく外へ開く、V字またはY字形を呈している。底面は、斜面にあるものがほぼ平坦であるのに対し、台地縁のものは南から北へ傾斜している。

覆土の堆積状態は、いずれもTa-d₁・d₂を主体とする土層と黒色土(Ⅱ黒・Ta-d₁)が互層をなす部分が認められ、前者が後者よりも厚く堆積している場合が多い。

ちなみに、昭和60年度に調査した美々2遺跡のTピットは翌61年度の調査に着手した5月に確認したところ、全体の%ほどがすでに埋まっていた。このことからみると、空港周辺で発見されているTピットは手入れまたは再構築をしない限り、一冬でその機能を失うほどに埋まってしまうものと考えられる。(野中一宏)

T-1 (図24)

分布調査の際に発見されたものである。

位置 D 7-45・55

平面形 長楕円形(溝状のタイプ)

規模 3.22×0.90/2.98×0.22/1.48

長軸方向 N-57.5°-W

覆土	1 暗褐色(d ₁ 、ボール状スコリア)	2 暗茶褐色(d ₁ 、5mm前後の岩片)
	3 明褐色(d ₂)	4 橙色(d ₂ /パミス)
	5 暗褐色(Ⅱ黒+d ₂)	6 橙色(d ₂ /パミス、4より粒径大)

遺物(図24-1) 黒曜石製の無茎石鏃で、基部は若干内湾する。

T-2 (図24)

位置 D 7-38・48

平面形 楕円形(小判型のタイプ)

規模 (1.66×1.33)/0.98×0.50/1.50

長軸方向 N-4°-E

覆土	1 明黒褐色(Ⅱ黒+d ₁ >d ₂)	2 黒褐色(Ⅱ黒>d ₂)
	3 明黒褐色(Ⅱ黒+d ₁ >d ₂)	4 黒褐色(Ⅱ黒>>d ₂)
	5 暗黄褐色(Ⅱ黒+d ₁)	6 暗黄褐色(Ⅱ黒+d ₁)
	7 黄褐色(d ₁)	8 暗黄褐色(d ₁ +d ₂)
	9 黄褐色(d ₁ >Ⅱ黒)	10 暗黄褐色(Ⅱ黒+d ₁)
	11 黒色(Ⅱ黒)	12 暗橙色(d ₂)

T-3 (図25)

南半部は風倒木痕を切っている。

位置 C 7-69・D 7-60

平面形 長楕円形（溝状のタイプ）

II 黒 2.32×1.10/2.21×0.25/1.40

長軸方向 N-30.5°-E

1 暗茶褐色（II 黒 > d₁）

2 橙色（d₂）

3 黒褐色（II 黒 > d₁）

4 暗褐色（II 黒 + d₁）

5 橙色（d₂）

6 黒褐色（II 黒 >> d₂）

7 暗橙色（d₂）

8 橙色（d₂）

9 黒褐色（II 黒 >> d₁）

10 橙色（d₂）

T-4 (図25)

南側壁上部の崩落が非常に大きい。底面は北へ向って若干傾斜しており、中央部から杭穴が1個検出された。

位置 C 7-59・D 7-50

平面形 長楕円形（溝状のタイプ）

長軸方向 2.45×0.94/1.34×0.15/2.02

長軸方向 N-10°-E

覆土 1 暗黒色（II 黒 >> d₂）

2 黒褐色（II 黒 > d₁）

3 黒褐色（d₁ >> II 黒）

4 暗褐色（d₂）

5 橙色（d₂）

6 橙色（d₂ + EnL）

7 黒褐色（II 黒 + d₁）

8 暗褐色（II 黒 + d₁）

9 橙色（d₂ >> II 黒）

10 暗黒色（II 黒 + d₂）

11 暗褐色（d₁ > II 黒）

12 暗橙色（d₂ > d₁）

13 暗黒色（II 黒 + d₁）

14 橙褐色（d₁ + d₂）

15 橙褐色（d₁ + d₂）

16 橙褐色（d₁ + d₂）

17 橙褐色（d₁ + d₂）

18 暗黒色（II 黒 > d₁）

遺物 (図25-1) I 群 b-3 類胴部破片。

T-5 (図26)

底面は南から北へ傾斜しており、中央部に杭穴と思われる小ピットが2個検出された。

位置 D 7-40

平面形 長楕円形（溝状のタイプ）

規模 2.67×0.80/2.13×0.19/1.88

長軸方向 N-15°-E

覆土 1 黒色（II 黒 >> d₂）

2 黄白色（d₁）

3 暗茶褐色（d₂ > II 黒）

4 暗橙色（d₂ >> II 黒「

5 茶褐色（d₂ >> II 黒、3に近似）

6 暗黄褐色（d₂ > EnL）

7 明橙褐色（d₂、保水性が高い）

8 暗橙褐色（d₂ >> II 黒）

9 黒色（II 黒、粘性あり）

10 暗黄褐色（EnL + d₂）

11 黒色（II 黒、9より黒く、粘性あり）

遺物 (図26-1・2) 1はI群 b-2 類胴部破片。2は黒曜石製スクレイパー。

（野中一宏）

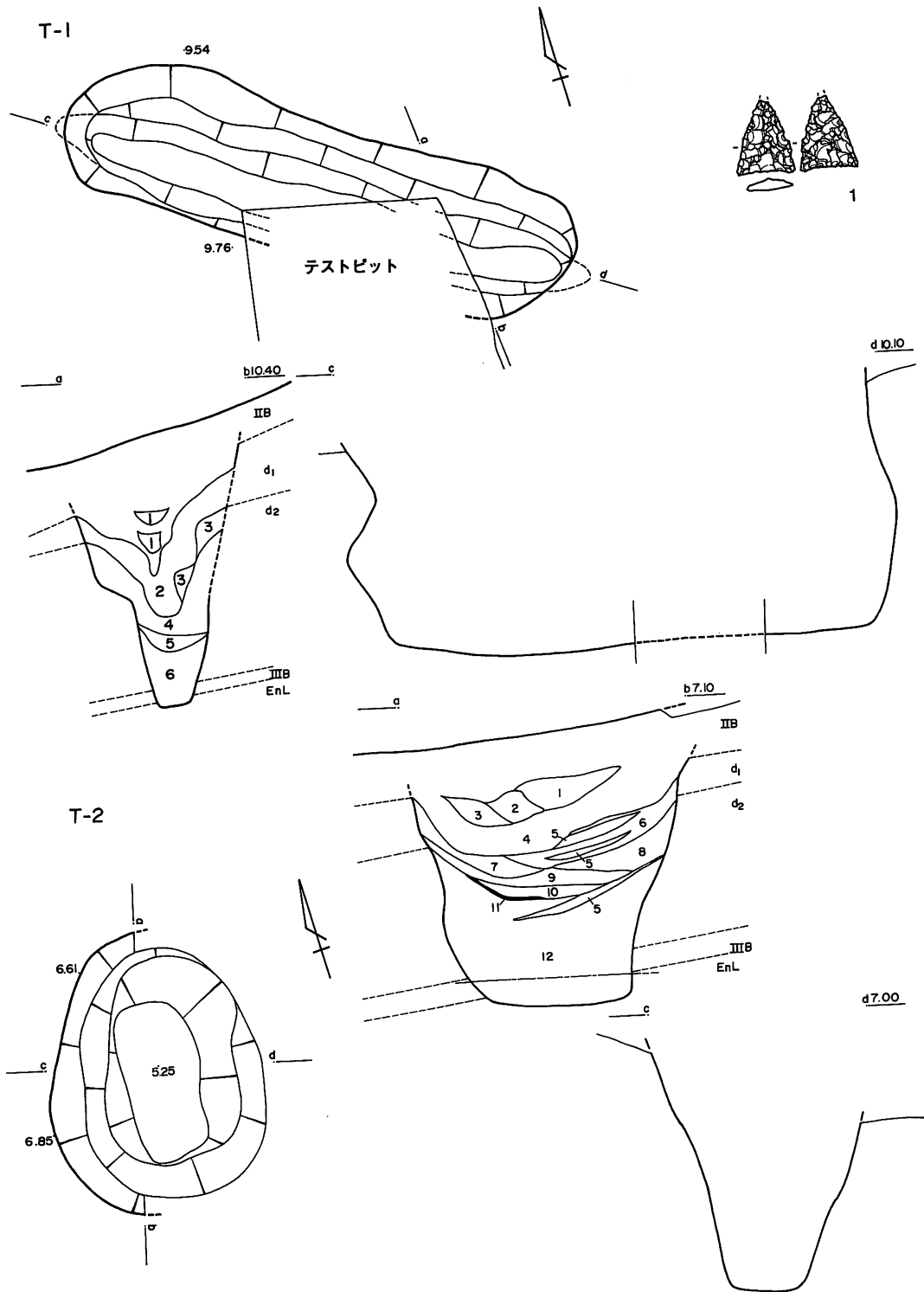


図24 T-1・2と遺物

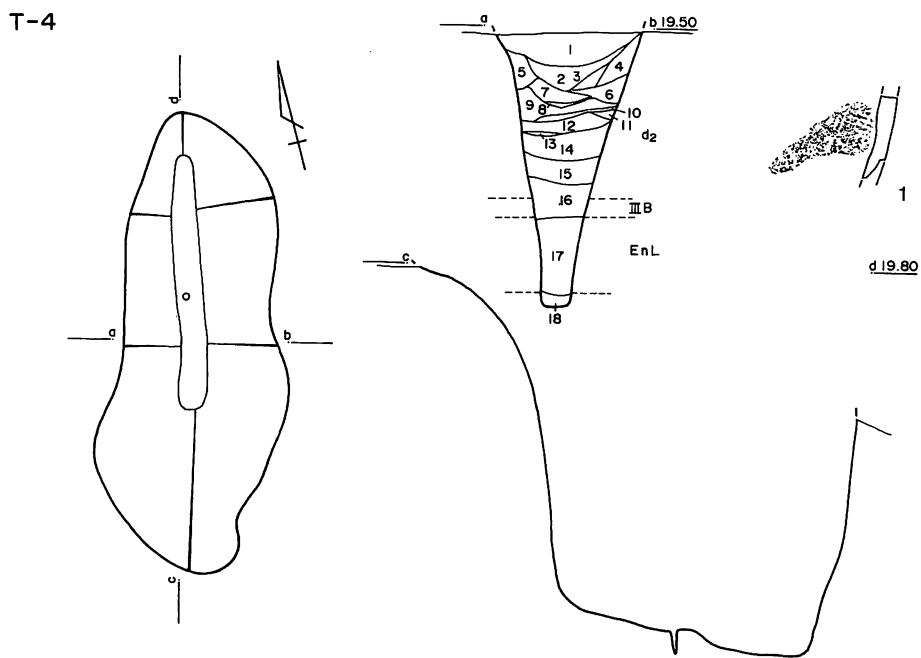
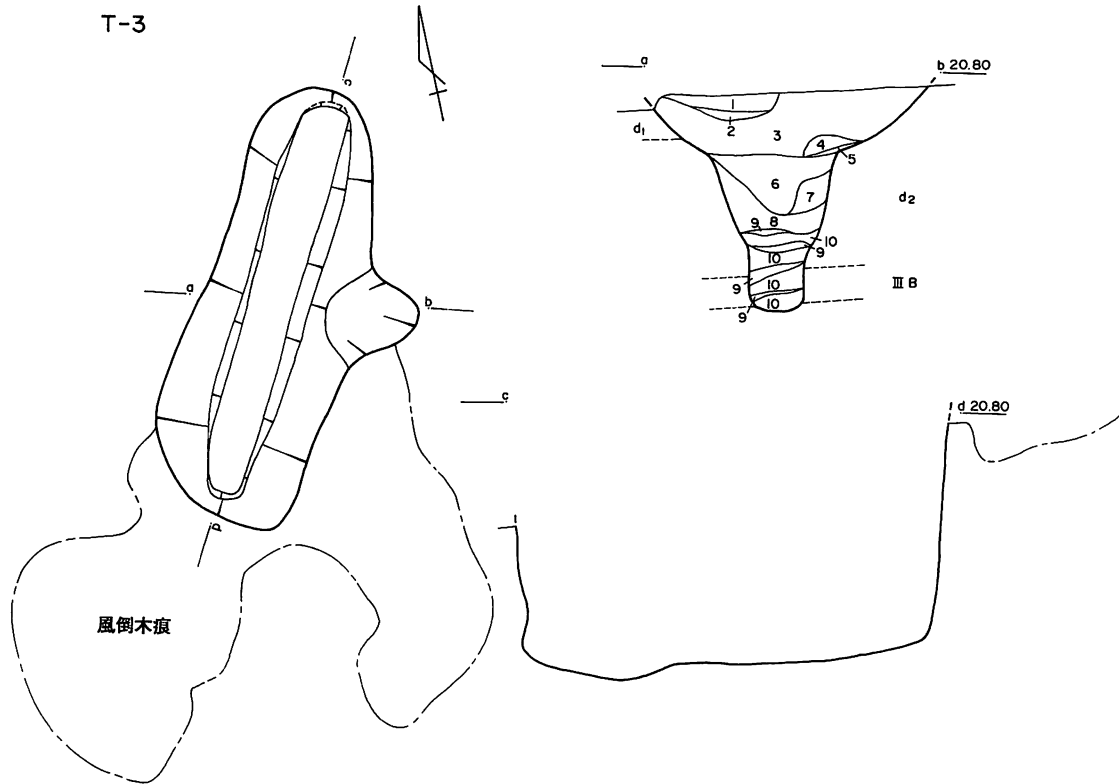


図25 T-3・4と遺物

T-5

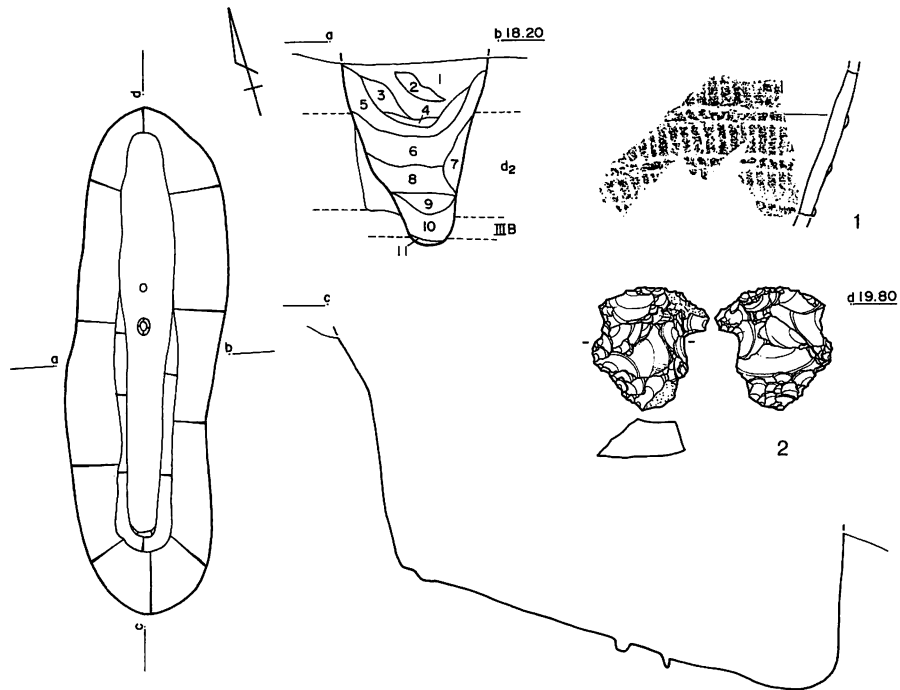


図26 T-5と遺物

表14 Tピットと出土遺物一覧

名称	位置	平面形	規模 (m)			長軸方向	土器		石器		計	備考
			確認面	底面	最大深		I	b	I	III		
T-1	D7-45・55	長楕円形	3.22×0.90	2.98×0.22	1.48	N-57.5°-W			1		1	
2	D7-38・48	楕円形	(1.66×1.33)	0.98×0.50	1.50	N-4°-E						
3	C7-69・D7-60	長楕円形	2.32×1.10	2.21×0.25	1.40	N-30.5°-E						
4	C7-59・D7-50	〃	2.45×0.94	1.34×0.15	2.02	N-10°-E		1			1	
5	D7-40	〃	2.67×0.80	2.13×0.19	1.88	N-15°-E	5			1	6	

表15 Tピットの掲載拓影土器一覧

図番号	遺構番号	分類	部位	層位	写 真 版 番 号	備 考
25-1	T-4	Ib-3	胴	覆土	17-⑧	
26-1	T-5	Ib-3	〃	〃	〃	

表16 Tピットの掲載石器等一覧

図番号	遺構番号	名称	分類	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	層位	写 真 版 番 号	備 考
24-1	T-1	石 鏃	1A4	2.2×1.7×0.4	1.1	Obs.	覆土	17-⑧	
26-2	T-5	スクレイパー	E	3.2×2.1×1.1	10.0	Obs.	〃	〃	

(2) 遺物

Ⅱ黒層からは、縄文時代早期～後期末葉の土器7,377点とこれらに伴うと考えられる石器等12,152点が検出された。

1) 土器 (図27～32)

7,377点検出されたうち、縄文前期(Ⅱ群)のものが42%を占め、早期(Ⅰ群)30%、中期(Ⅲ群)28%と続き、後期(Ⅳ群)は0.3%と非常に少ない。いずれも台地上に多く分布しているが、時期ごとに集中する地点が異っている(Ⅰ-7参照)。以下、時期別に分けて説明する。

Ⅰ群(1～59) 本群は全体の30%にあたる2,184点が検出された。これらはすべてb類に属するもので、2～4類に細分される。このうち、b-4類が最も多く、全体の63%を占め、b-2・3類はそれぞれ15%ほどである。

b-2類(1～4・11～16・22・24～28) 1～4は口縁部、11～16・22は胴部、24～28は底部破片。胎土には細かい砂を含み、体部の色調は橙褐色～褐色を呈している。口縁部および胴部破片には、横位または縦位に比較的幅広の貼付帯が付され、底部破片は底部がくの字に張り出したものである。2・3・12と4・14はそれぞれ同一個体の破片と思われる。これらは、斜行縄文(1)、羽状縄文(4・11・13・14・22・24～26)、短縄文(2・3・12・15)、捺糸圧痕文(28)、絡条体圧痕文(16)を地文としており、貼付帯上にも同様に施されている。

b-3類(5～10・17～21・23・29～32) 5～10は口縁部、17～21・23は胴部、29～32は底部破片。胎土は2類と大差ないが、体部の色調は若干黄色がかかるものが多く、器壁も薄くなる傾向が認められる。体部には2類同様、貼付帯が付されているが、これらは2類よりも細くなり、底部の張り出しも認められない。地文には、斜行縄文(6・9・29)、短縄文(7・8・19～21・30～32)、絡条体圧痕文(5・17・18・23)があり、貼付帯上にもこれらの文様が施されている。10は微隆起線の間が無文である。29は底部に捺糸の押圧による刻みがめぐるので、その上部は研磨され無文となっている。

b-4類(33～59) 33は図上復元した実測土器、34～49は口縁部、50～59は胴部破片である。胎土には2・3類ほど砂粒を含まず、体部の色調も赤褐色を呈するものがほとんどである。口縁には短縄文や捺糸圧痕文が施されたもの(33～45)と施されないもの(46～49)がある。48・49は同一個体の破片と思われる。33は胎土、色調、文様からみて同一個体と考えられる口縁部と底部破片を図上復元したもので、口径19cm、器高20cmほどと推定される。口縁部に短縄文を施し、Rの右巻きによる木目状捺糸文が底部まで施されている。これ以外のものでも、L・Rの原体を用いた木目状捺糸文が施されたものがほとんどで、中には、57のように2条を単位とした捺糸文もみられる。また、わずかではあるが、48・49のように網目状捺糸文が施されたものもある。

Ⅱ群(60～91) 本群は全体の42%ほどにあたる3,093点が検出された。a類はわずかに同

一個体の破片が7点出土ただけで、他はすべてb類に細分される。

a類 (62) a-2類に細分される口縁部破片である。胎土には、繊維と砂礫を含み、焼成は良い。口唇の断面は角型で、羽状縄文が施されている。

b類 (63~91) 本類はさらに、円筒下層式(C類)と植苗・大麻V式土器(A・B類)に細分される。円筒下層式は16点出土しており、他はすべて後者に属する。

円筒下層式 (63・64・81) 63・64は口縁部、81は胴部破片。63・64はいずれも口唇の断面が丸く、口縁下には横位に4条、それ以下には縦位に燃糸文が施されている。81も燃糸文がみられる。

植苗・大麻V式 (60・61・65~80・82~91) 65~80は口縁部、82~86は胴部、61・87~91は底部破片。このグループには、60・61に代表されるように、胎土に繊維と砂礫を含み、地文の縄文がはっきりと施文されたもの(A類)と前者よりも砂礫を多く含み、縄文が判然としないもの(B類)に分けられる。体部の色調は、前者が黄褐色、後者が灰褐色~褐色を呈するものが多い。

前者のグループ(60・61・65~71・82~84)には、口縁部に2~3条の縄線文をもつグループ(60・68~71)と幅広の貼付帯が付されたもの(65~67)がある。地文は原体を横位または縦位に回転させた羽状縄文をもつものが多く、大半は内面にも施されている。60は口縁部に2条の縄線文とLRの斜行縄文が施され、胴部は無文でヘラ状工具による整形痕がみられる。

後者のグループ(73~80・85~89)には、縄線文が施されたもの(73~78)と幅1cmほどの貼付帯が口縁に付されたもの(79)とこれらが全く施されないもの(80)がある。地文は前者のグループと大差ないが、内面にも施される割合が少ない。

Ⅲ群 (92~136) 本群は全体の28%にあたる2,079点が検出された。これらは、a類、b類に分けられ、b類はさらに1~3類に細分される。出土頻度はb-2類が最も多く、全体の69%を占めており、b-3類、b-1類がこれに次ぎ、a類はわずか1.8%にしかすぎない。

a類 (92) 口縁部が大きく外反し、肥厚帯をもつ。地文はRLの斜行縄文である。内面はていねいに研磨されている。

b-2類 (93~136) 93~125は口縁部、126~133は胴部、134~136は底部破片である。これらには、縄文だけのもの(93~99)、縄線文が施されたもの(100~104)や刺突文や沈線文が施されたもの(105~111・129)、横位または縦位に貼付帯が付されたもの(112~128・130~133)があり、貼付帯上には刺突文や押引文が施されている。底部(134~136)の張り出しは顕著ではなく、これらには斜行縄文、羽状縄文が施されている。

Ⅳ群 (137~139) わずかにa類1点、c類20点が検出されただけである。

a類 (137) 余市式の胴部破片で、幅1cmほどの貼付帯が付され、地文は羽状縄文である。

c類 (138・139) 口縁下に突瘤文がめぐる深鉢の破片で、139には4条の横走沈線がめぐる。

(野中一宏)

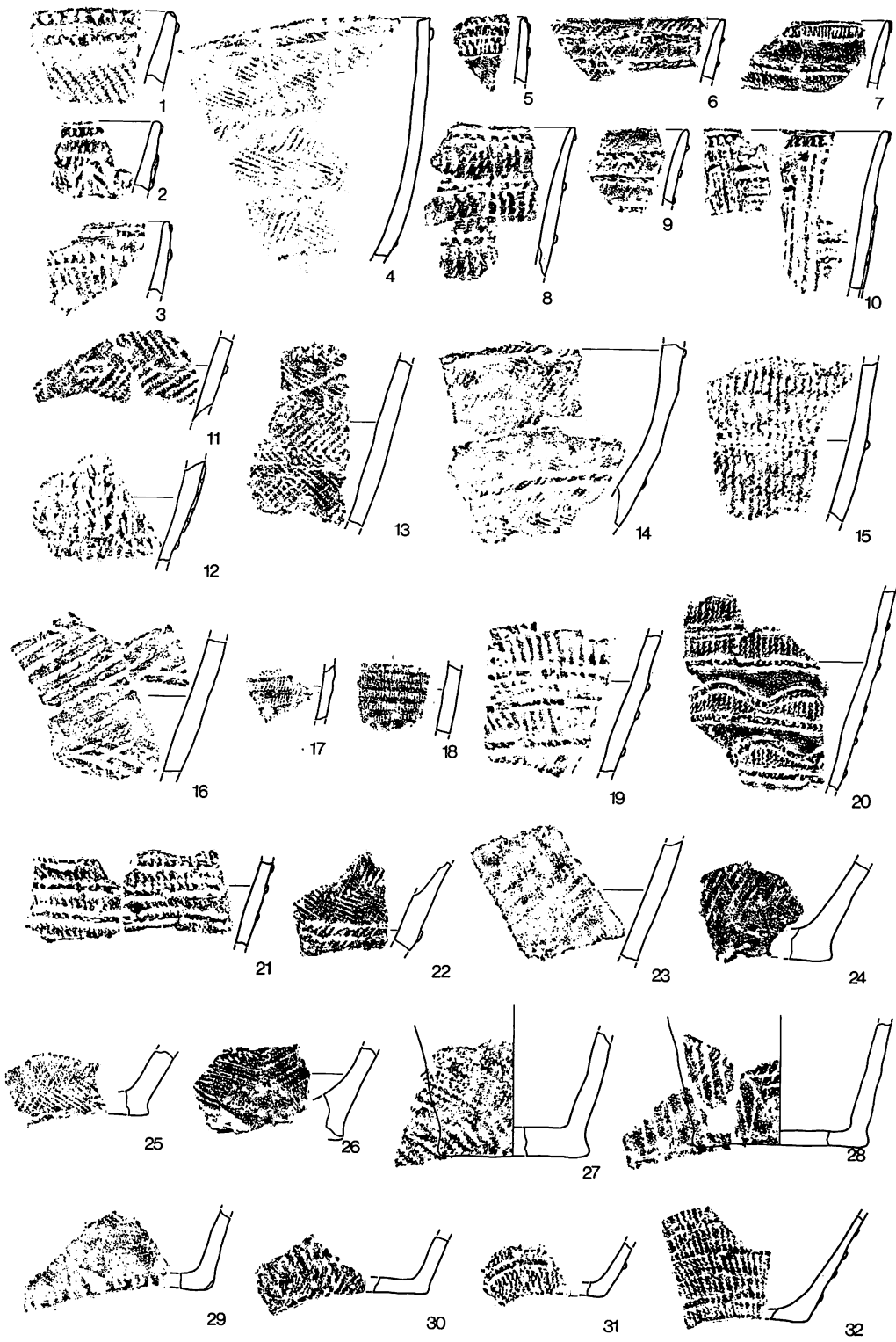


図27 包含層の土器(1)

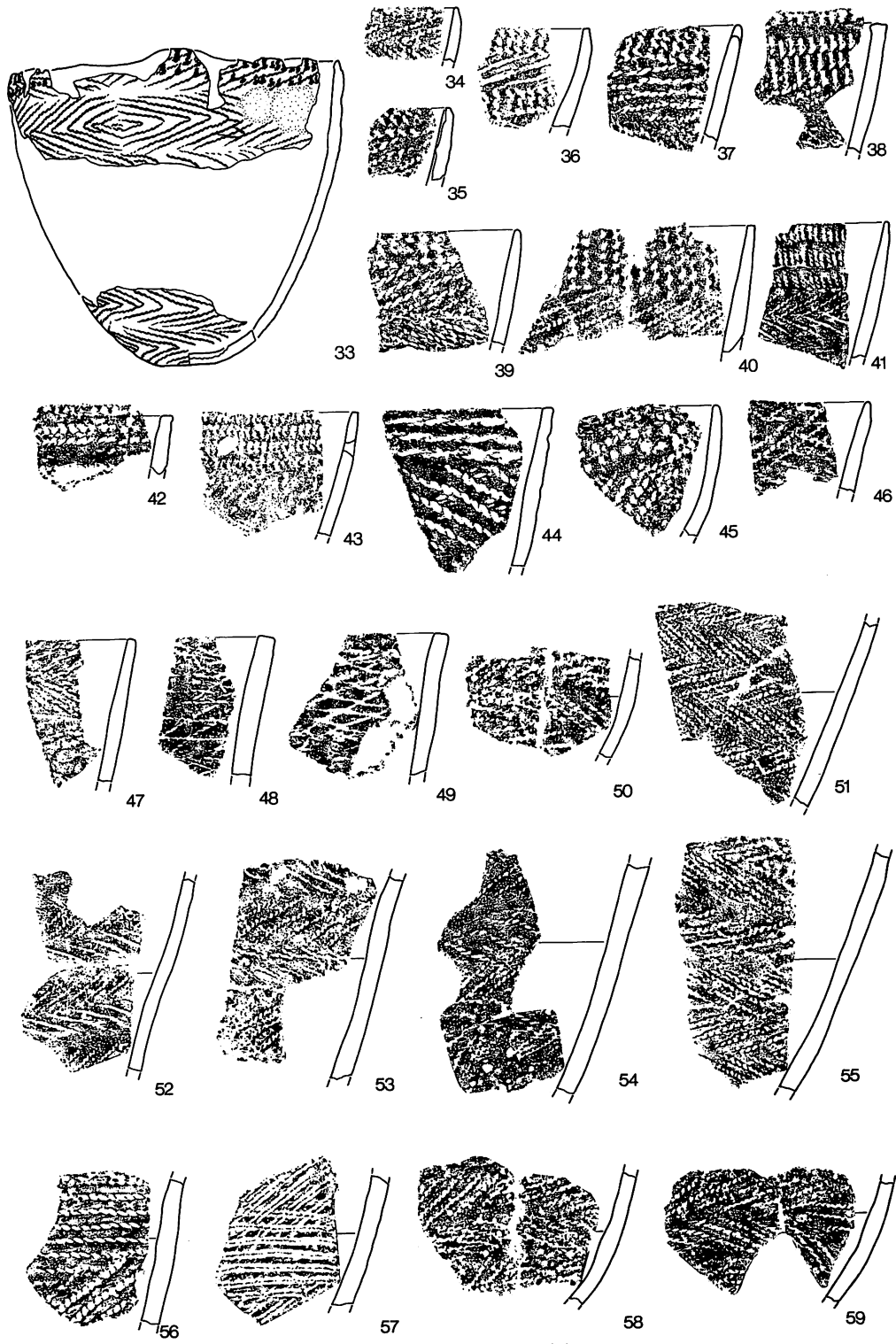


図28 包含層の土器(2)

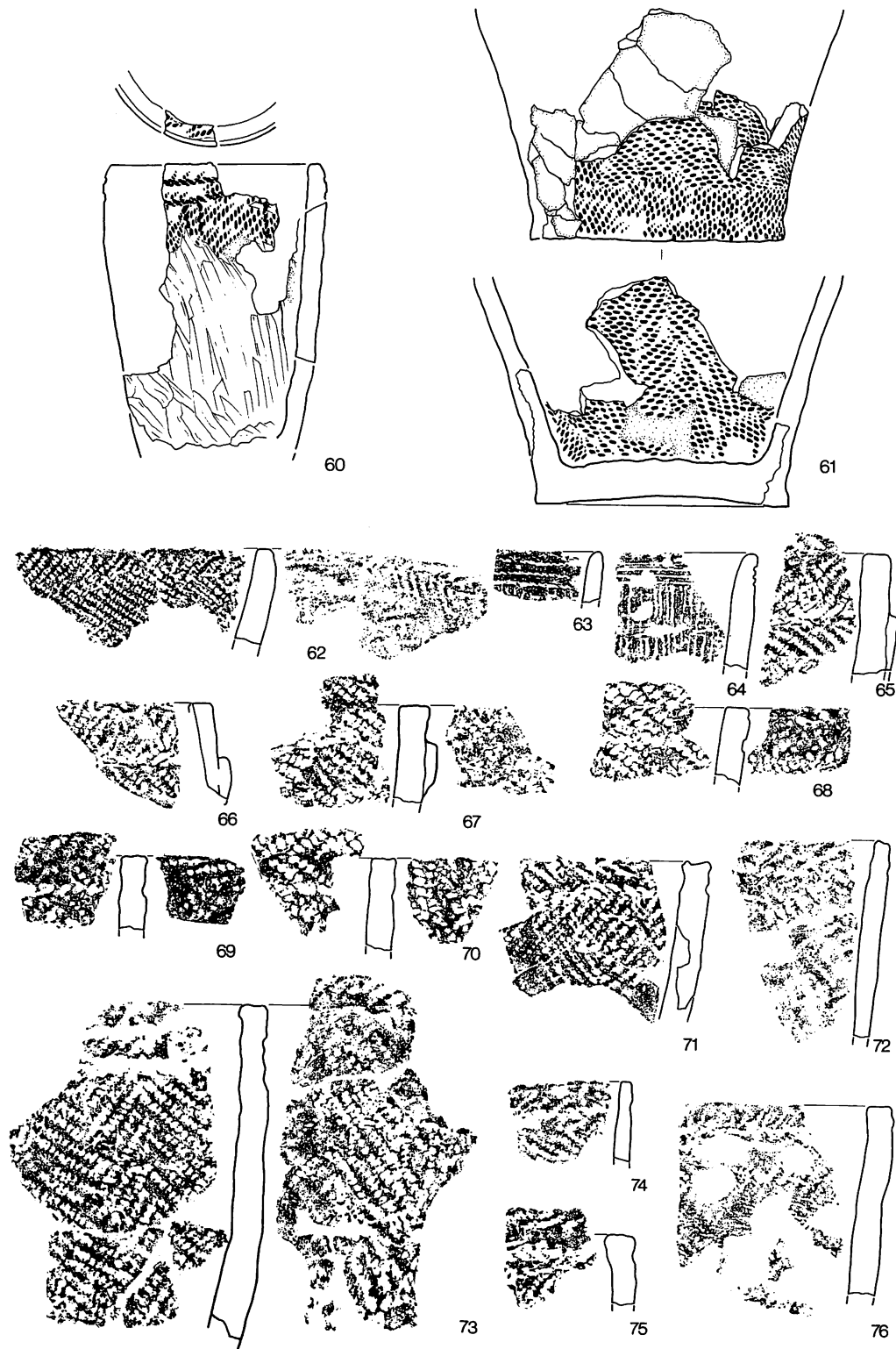


図29 包含層の土器(3)



図30 包含層の土器(4)

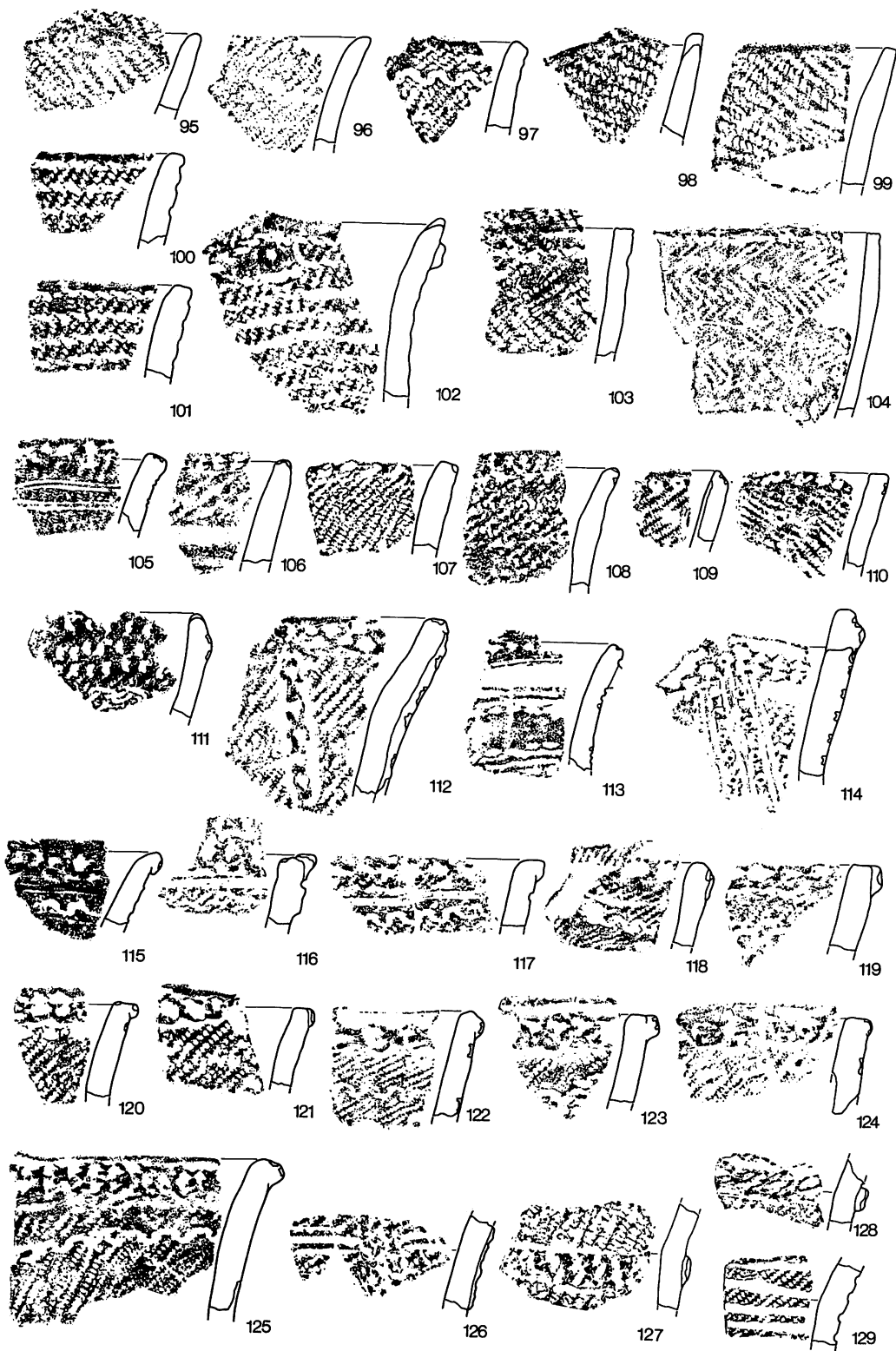


図31 包含層の土器(5)

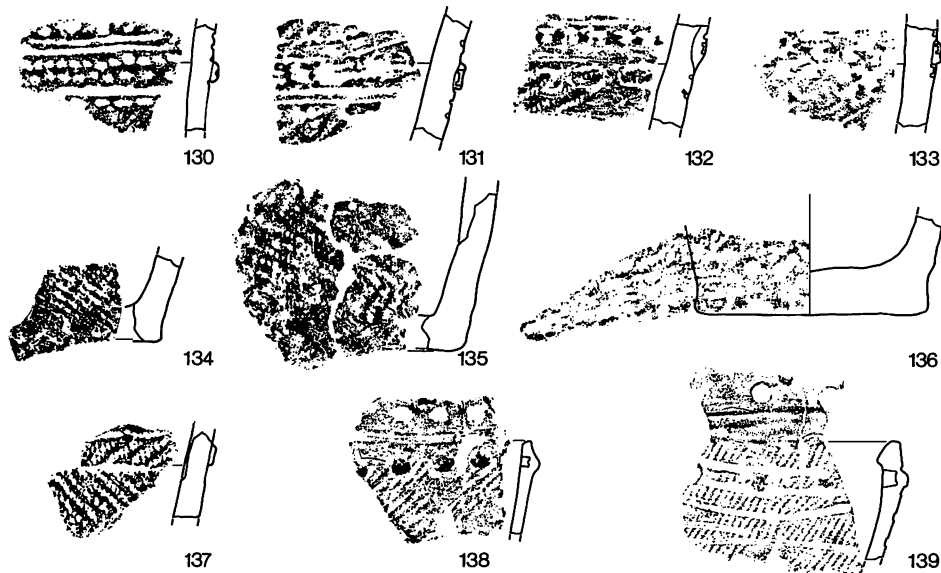


図32 包含層の土器(6)

2) 石器等

12,152点検出された石器等のうち、フレイク・チップ(01・02)、礫、礫片(X_0 ・ X_1)が92%を占め、石器および土、石製品は8%と比較的低い出現率である。

石器では8:2の割合で礫石器が多い。剥片石器の器種別出土頻度は、石鏃(A類)が39%を占め、以下、Uフレイク(01a)、つまみ付ナイフ(D類)、スクレイパー(E類)、石槍またはナイフ(B類)、石錐(C類)の順である。石材は、器種によって若干異なり、A・B・E・01a類は黒曜石、D類は頁岩が多用されている。礫石器の器種別出土頻度は、石錘(N類)が29%と最も多く、すり石(J類)、石斧(F類)、砥石(K類)、台石・石皿(M類)、たたき石(G類)、石鋸(L類)、礫器(H類)の順である。しかし、いずれの器種も完形品は少なく、破片が大部分を占めている。石材は器種によって選択されており、F類は泥岩、G・H・J・M類は泥岩や安山岩、K類は砂岩、N類は片麻岩が多用されている。また、礫、礫片の35%は石錘の石材と同じ片麻岩である。以下、器種別に記す。

石鏃(1~39) 81点出土したうち、59点は3~7類に細分され、残りの22点は破片である。

3類(1~18) 29点出土した。柳葉形、木葉形、五角形を呈する薄身の石鏃で、早期に属するものと考えられる。柳葉形のもの(1~4)はいずれも平基で、両面とも入念な二次加工が施されており、黒曜石を石材としている。木葉形のもの(5~15)には、平基のもの(5~10・14・15)と基部先端が尖るもの(11~13)がある。このうち、10・12が頁岩製であるほかはすべて黒曜石を材料としており、10~15には素材面が残されている。これらの木葉形石鏃は、形態からみて、美沢2遺跡のI群b-2類期の住居跡(AH-2)出土の資料と対比でき、

柳葉形のものと同様の時期と考えられる。五角形のもの（16～18）は、I群b-4類土器に伴うと考えられるもので、石材は黒曜石である。

4類（19～26） 11点出土した。基部がわずかに内湾するもの（19～25）と大きく内湾するもの（26）があり、前者には身部が直線をなすものと湾曲し、五角形を呈するもの（25）がある。石材はすべて黒曜石で、多くは前期に属すると考えられる。

5類（27） 2点出土した。27は先端部を欠く比較的厚手の石鏃で、黒曜石製である。

6類（28） 2点出土した。28は基部に比べ身部が長いもので、黒曜石製である。

7類（29～39） 15点出土した。かえしが明瞭なもの（29～31）と不明瞭なもの（32～39）があり、前者には身部側縁が直線をなすもの（29）と内湾するもの（30・31）がある。後者には菱形に近いもの（32～34）もみられる。石材はすべて黒曜石である。

B類（40～49） 22点出土したうち、11点は破片である。有茎のもの（40～44・48・49）、無茎のもの（47）、菱形のもの（46）、木葉形のもの（45）があり、石材には黒曜石（40～42・44・47）、頁岩（45・46・48・49）、玄武岩（43）が用いられている。48・49はつまみ付ナイフの可能性もある。

C類（50・51） いずれもフレイク的一端または両端に簡単な刃部を作出したもので、50

D類（52～75） 43点出土したうち、12点が破片である。片面の周縁にのみ加工を施したもの（52～60）、片面全面加工のもの（61～71）、両面加工のもの（72～75）がある。周縁にのみ2次加工が施されたものの多くは厚手の縦長の素材を用いており、幅広のつまみ部をもつ。52は唯一横長の剥片を素材としたものであり、これらの石材はすべて頁岩である。片面全面加工のものには、つまみ部が幅広のもの（62～66）と狭小なもの（67～71）があり、前者は厚手の、後者は薄手の素材が使われている。石材には、珪岩（61）、黒曜石（62）、頁岩（63～71）が用いられている。両面加工のものは、背面の全面と、腹面の周縁にのみ2次加工が施されたもの（72）と両面の周縁にのみ2次加工が施されたもの（73）、全面に入念な2次加工が施されたもの（73・74）がある。石材は黒曜石（72・73・75）、頁岩（74）である。

E類（76～87） 43点出土したうち、12点は破片である。定形的なスクレイパーは少なく、素材の側縁または端部に2次調整を加えて刃部としたものである。76は頁岩の薄い素材を用いた片面加工のもので、ナイフとしての機能をもつ可能性がある。87はエンドスクレイパーである。石材は頁岩（76～79・85）、黒曜石（80～84・86・87）である。

U. フレイク（88～92） 黒曜石のフレイクの側縁の一部に使用痕または2次加工によってできたと思われる細かな剝離がみられる。

石斧（93～117） 121点のうち、細分できたものは24点だけで、他は未成品または剥片である。細分できたものは、20点が2類に、4点が3類に属する。

2類（93～96・98～101・104～116） 擦り切り痕を残すもの（93～95）、ペッキングがみられるもの（96）、打ち欠きによる調整がみられるもの（98・99）、局部磨製のもの（100・101）、

全面磨製のもの(104・106~116)がある。このうち、93~95・99~101・104~111・113~115は比較的薄手の小型で、96・98・112・116は厚手で比較的大型の石斧である。117は擦り切り痕がみられる未成品の破片で、擦り切り部から割れたものが接合した。これらの石材はほとんどが泥岩であるが、わずかに片岩製のもの(99・109)もある。

3類(97・102・103・105) 2類同様に、打ち欠きによる調整痕が残されているもの(97)、局部磨製のもの(102)、全面磨製のもの(103・105)があり、これらの石材は泥岩である。

たたき石(118~133) 56点出土したうち、37点は破片である。円礫や楕円礫の側縁や腹背面に敲打痕がみられるもので、119・120・122~124・126・131には擦痕も認められる。132・133は、形態、敲打痕や剝離調整からみて、石斧未成品の可能性がある。これらの石材は泥岩(118~120・122・132・133)、砂岩(121・123・126・128)、安山岩(124・125・127・129・130)、片麻岩(131)である。

礫器(134) 泥岩の偏平礫を用い、側縁の一部に両側から調整を加えて刃部としている。

すり石(135~156) 178点出土したうち、148点が4類に細分されるが、接合資料を含めても完形品はわずかに8点だけである。

135・136は泥岩、砂岩の楕円礫の腹部を擦ったもので、135は側縁に敲打痕も認められる。137は断面三角形の砂岩製のもので、全面に擦痕が認められる。138は偏平な素材の中央部全面に擦痕がみられるもので、側縁の一端に抉入部が認められる。石材は凝灰岩である。

4類(139~156) 把握部を作出していないもの(139・141)と作出しているもの(140・142~156)がある。石材には安山岩、砂岩、泥岩が用いられているが、砂岩が最も多い。139~141は、142に代表されるような形態にする前段のものと考えられ、打ち欠きによる調整痕が周囲に残されている。141からみると、これらの石冠は、大型の楕円礫を半割し、打ち欠きによる調整後、敲打して形を整える作業工程で作られた可能性が高い。156は、石冠の破片を砥石として再利用している。

砥石(157~164) 91点出土した。偏平礫の一面を砥面としたもの(157~160)と両面を砥面としたもの(162・163)、角礫の両面を砥面としたもの(161・164)があり、石材はすべて砂岩である。

石鏟(165・166) 砂岩の偏平礫の側縁を擦ったもので、断面がV字形をなしている。

石皿・石台(167~173) 68点のうち、完形品は1点だけである。168~173はいずれも一面のみを使用しているものの破片で、使用面がくぼんでいるものもある。167は両面が使用されている。石材はいずれも安山岩である。

石錘(174~206) 230点のうち、完形品は31点である。-(マイナス)型(174~202)と+(プラス)型(203~206)があるが、後者は極端に少ない。プラス型のものでは、4ヵ所を明瞭に打ち欠いたものはなく、長軸の両端は明瞭に打ち欠いているが、短軸側は不明瞭で、1ヵ所しか打ち欠いていないものもある(203~205)。石材はわずかにメノウ(174)などがみられるが、ほとんどが片麻岩である。

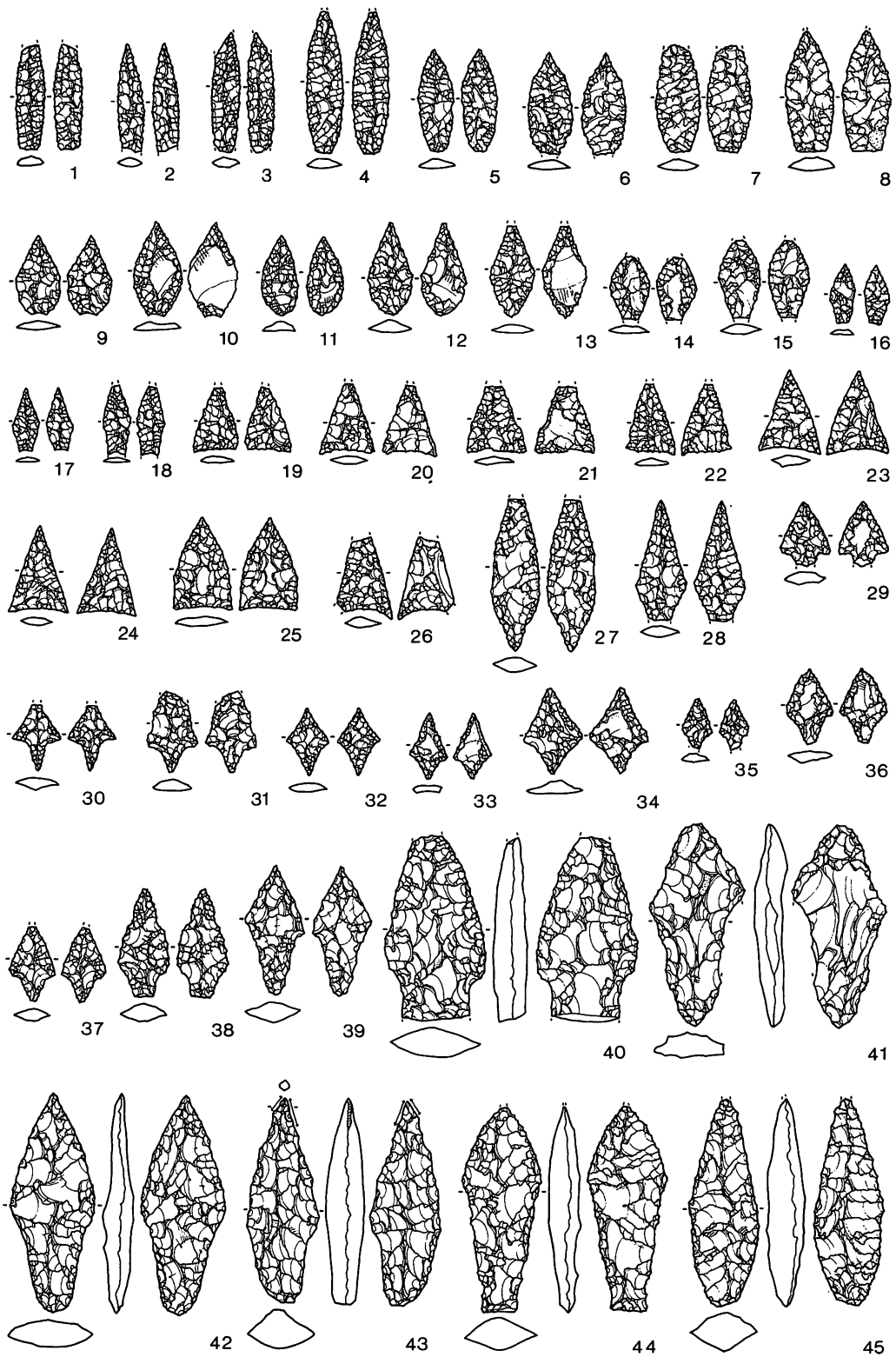


図33 包含層の石器(1)

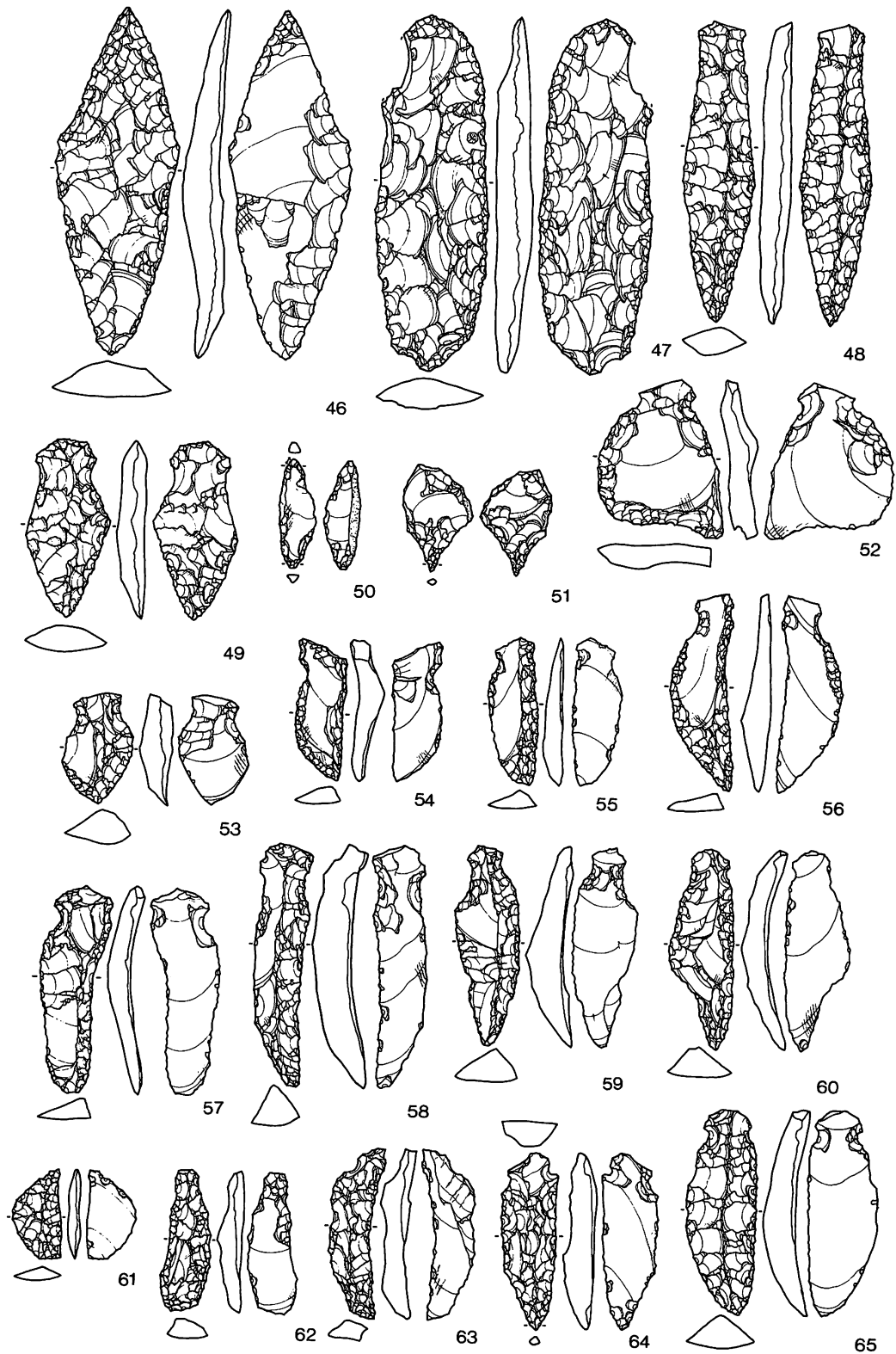


図34 包含層の石器等(2)

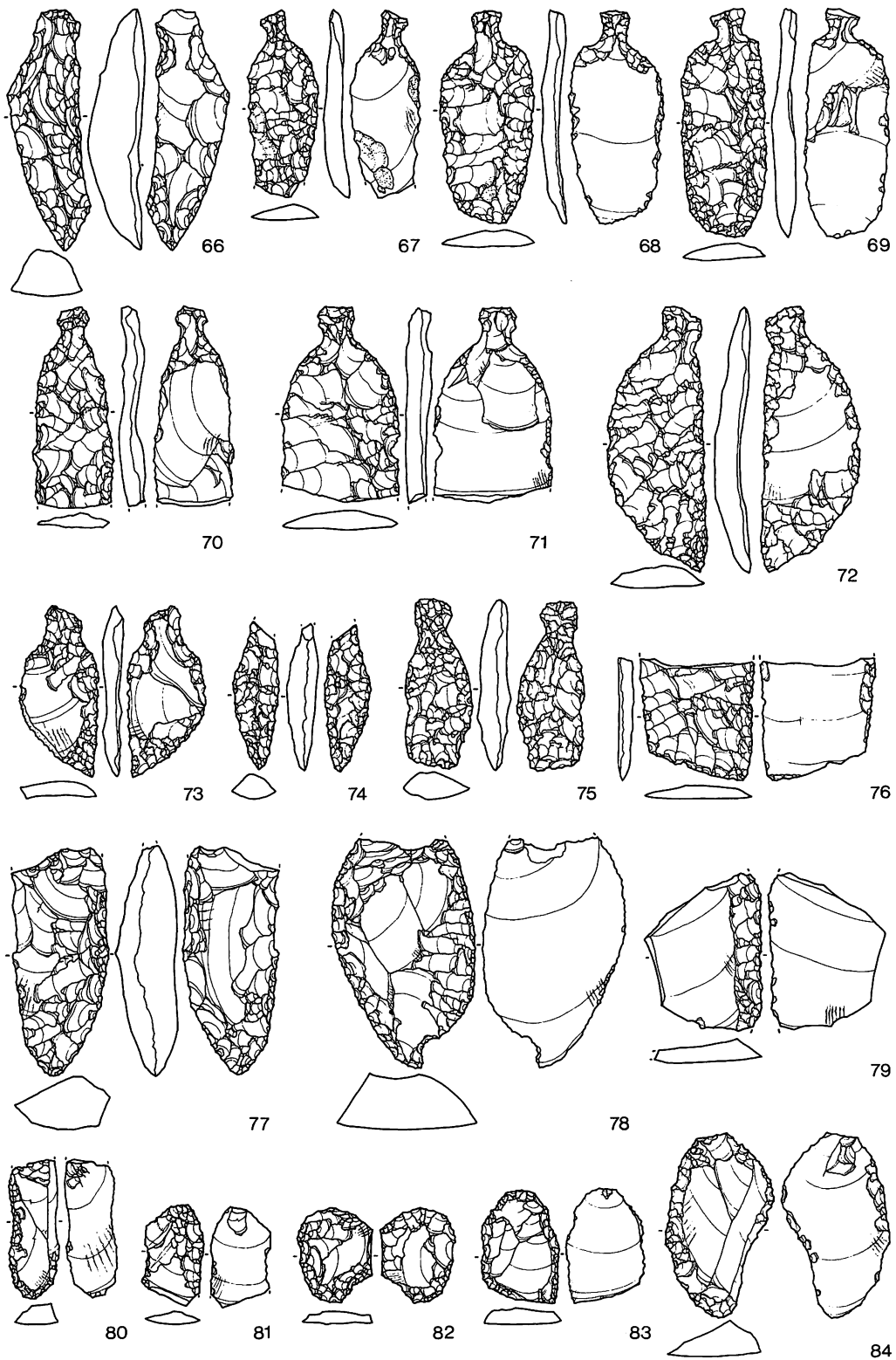


図35 包含層の石器等(3)

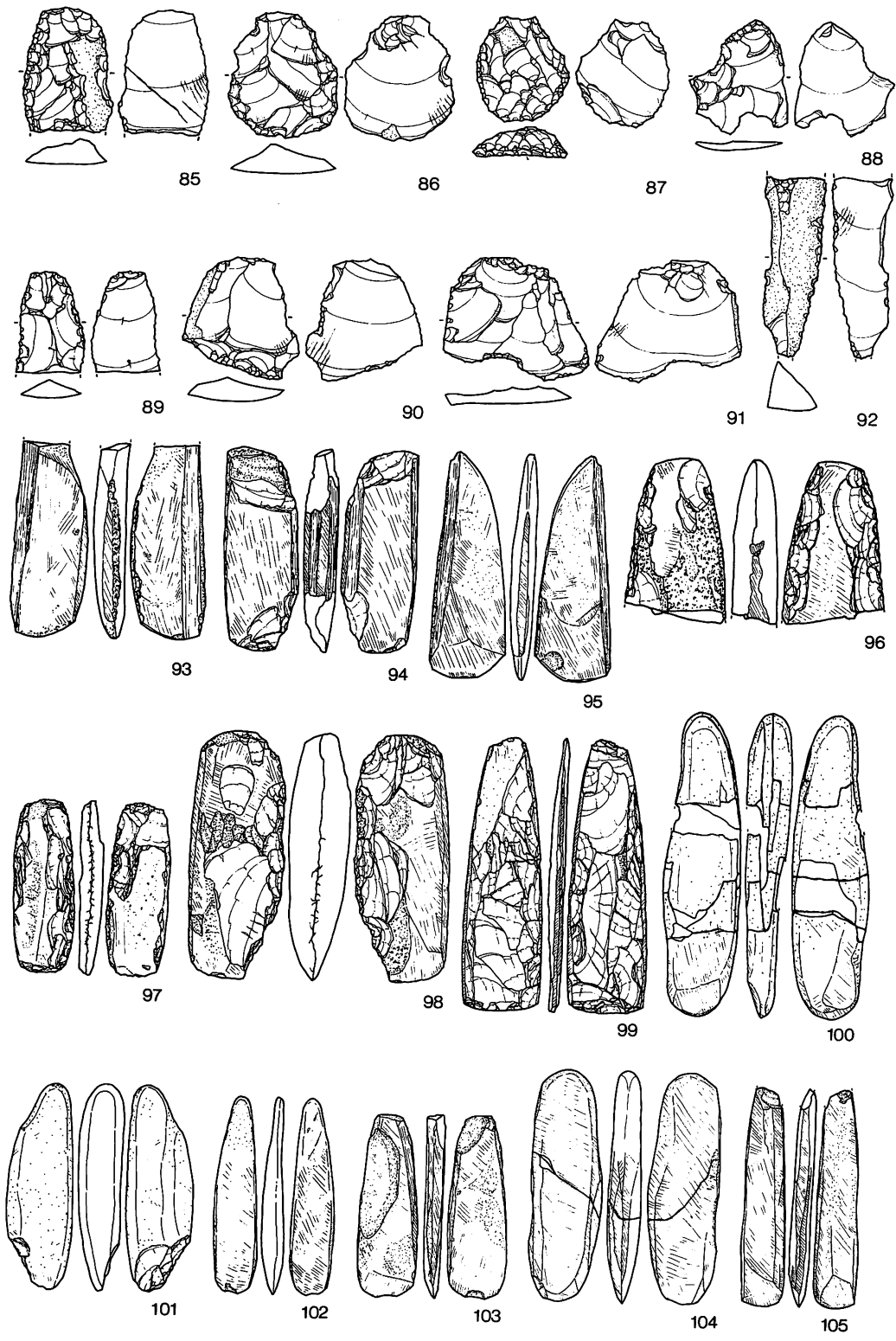


图36 包含層の石器等(4)

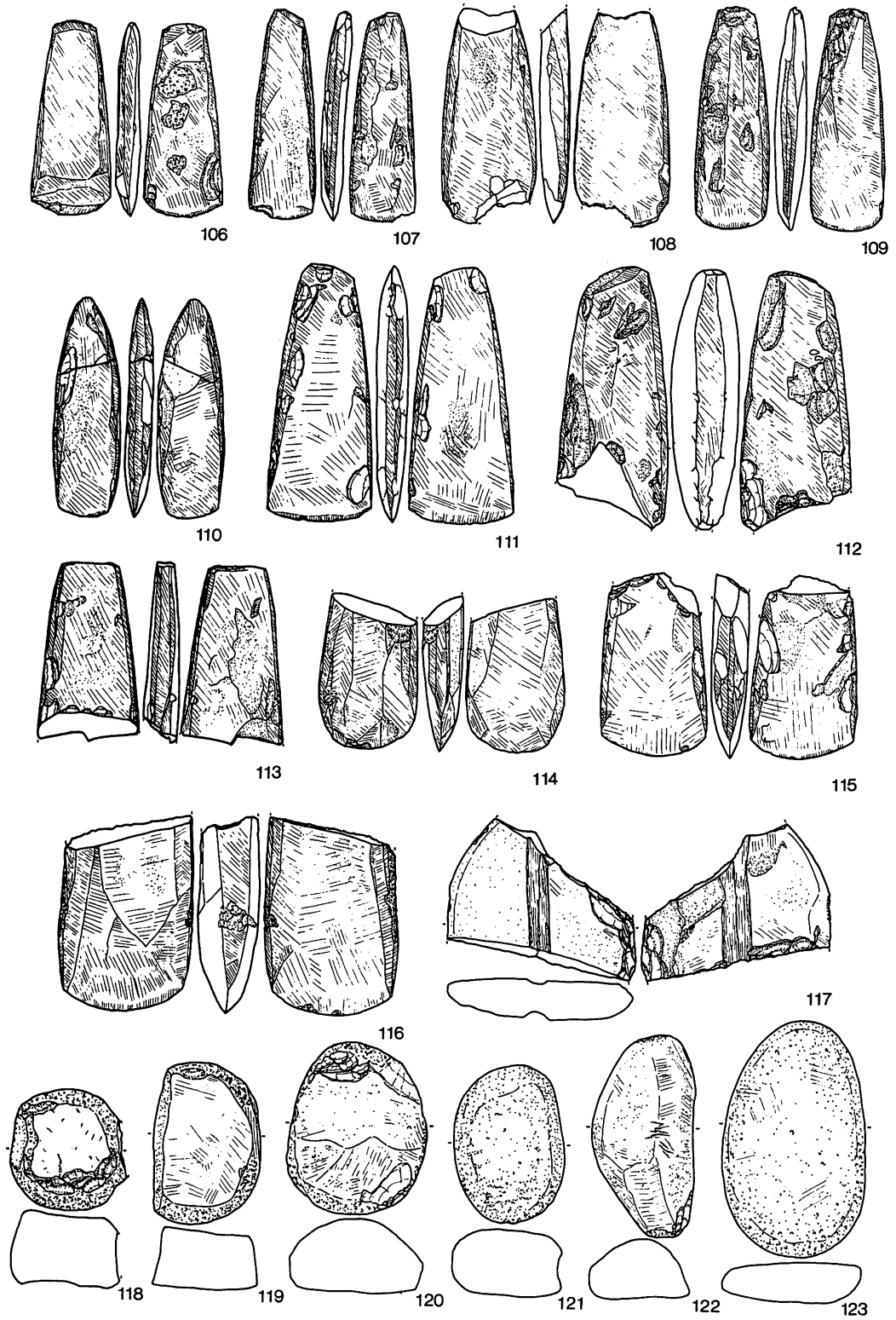


図37 包含層の石器等(5)

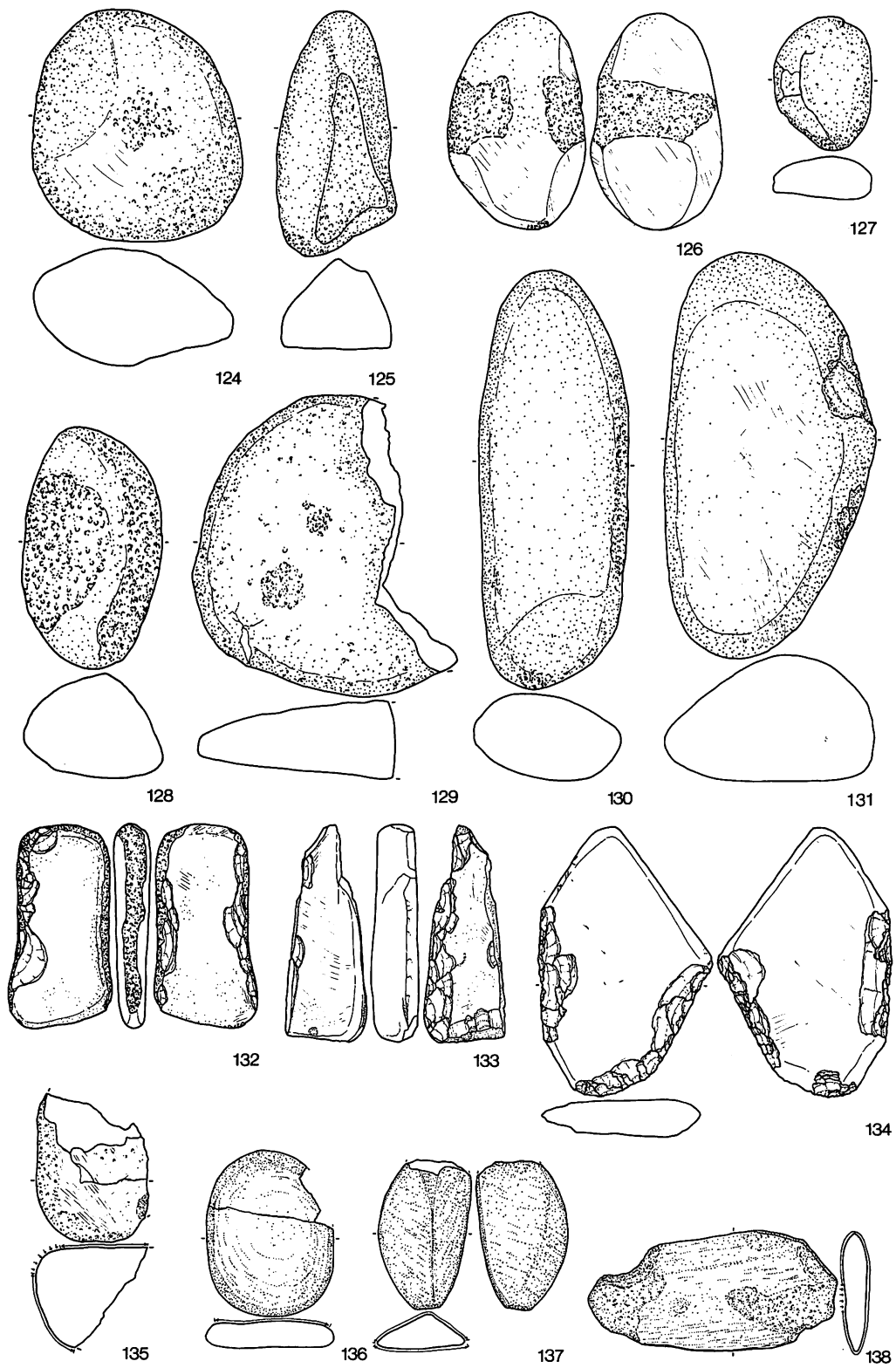


図38 包含層の石器等(6)

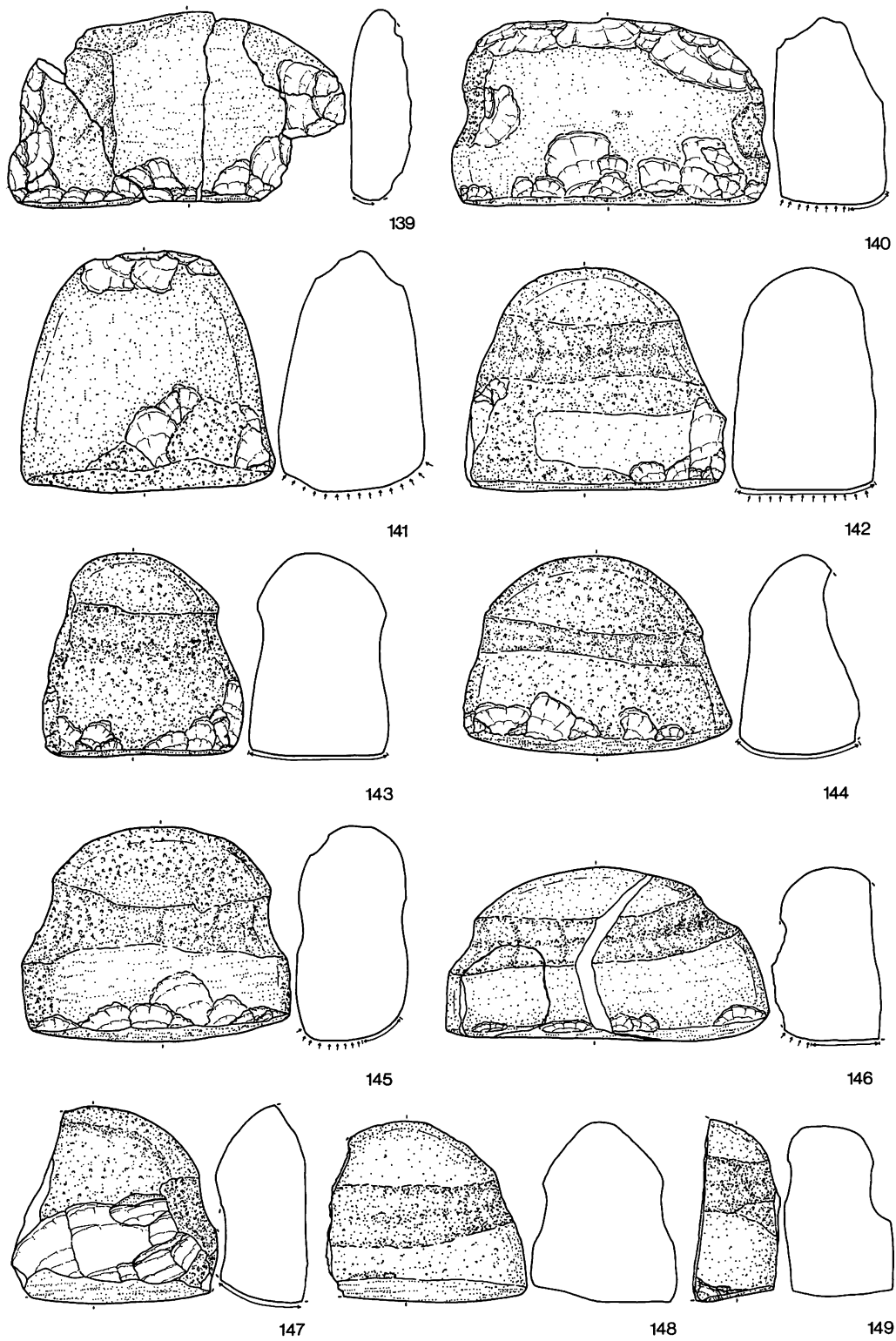


図39 包含層の石器等(7)

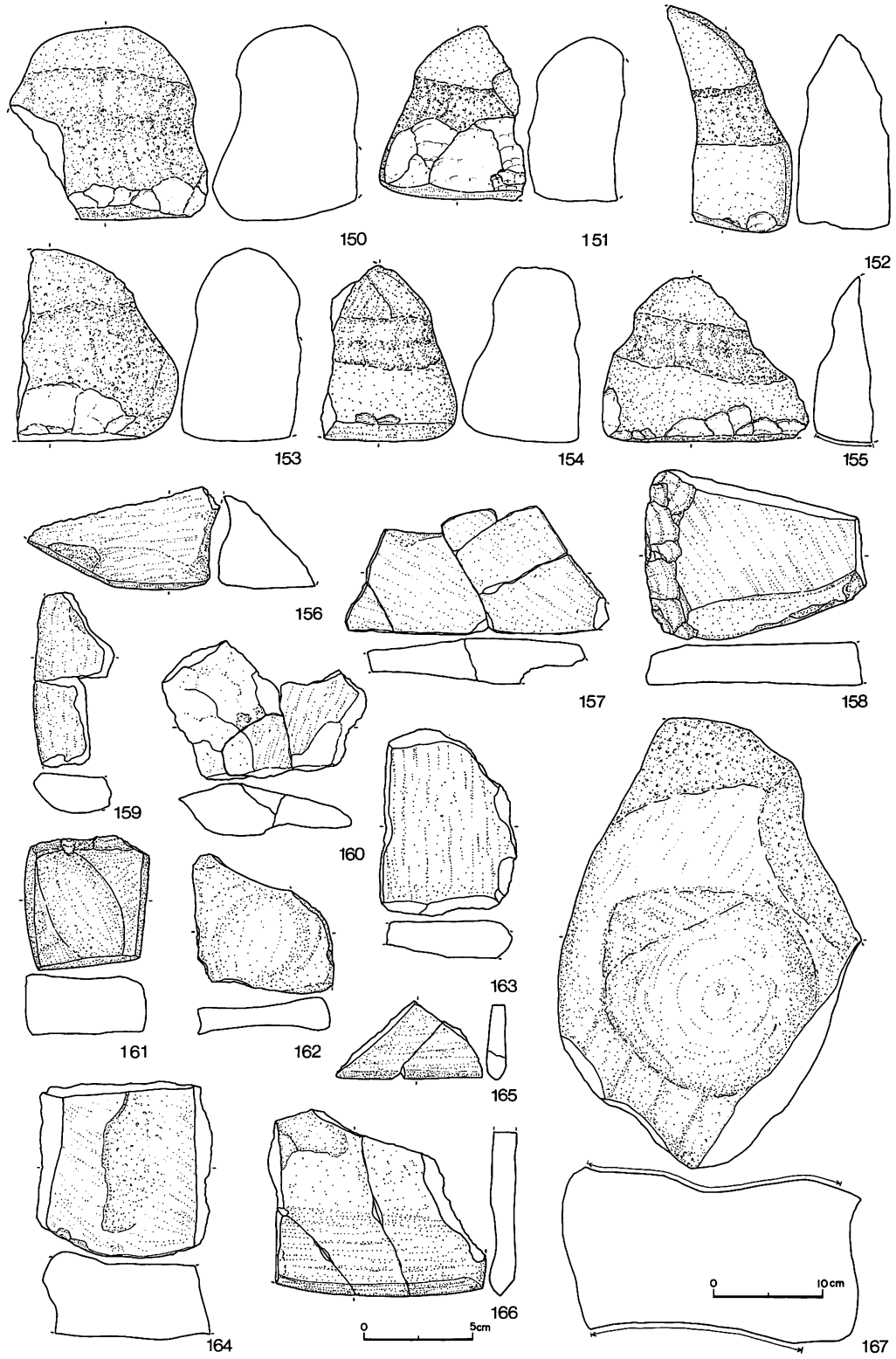


図40 包含層の石器等(8)

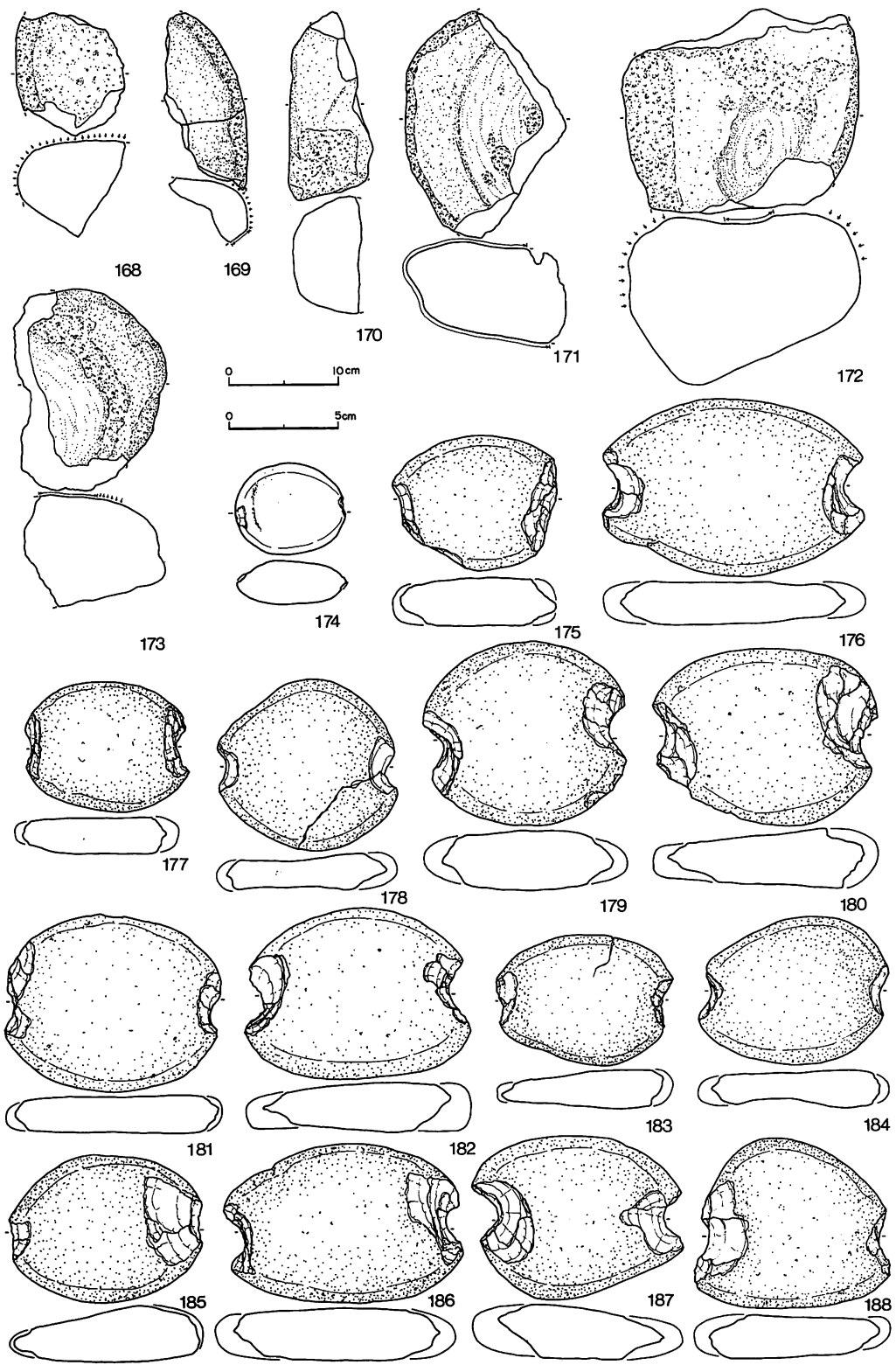


図41 包含層の石器等(9)

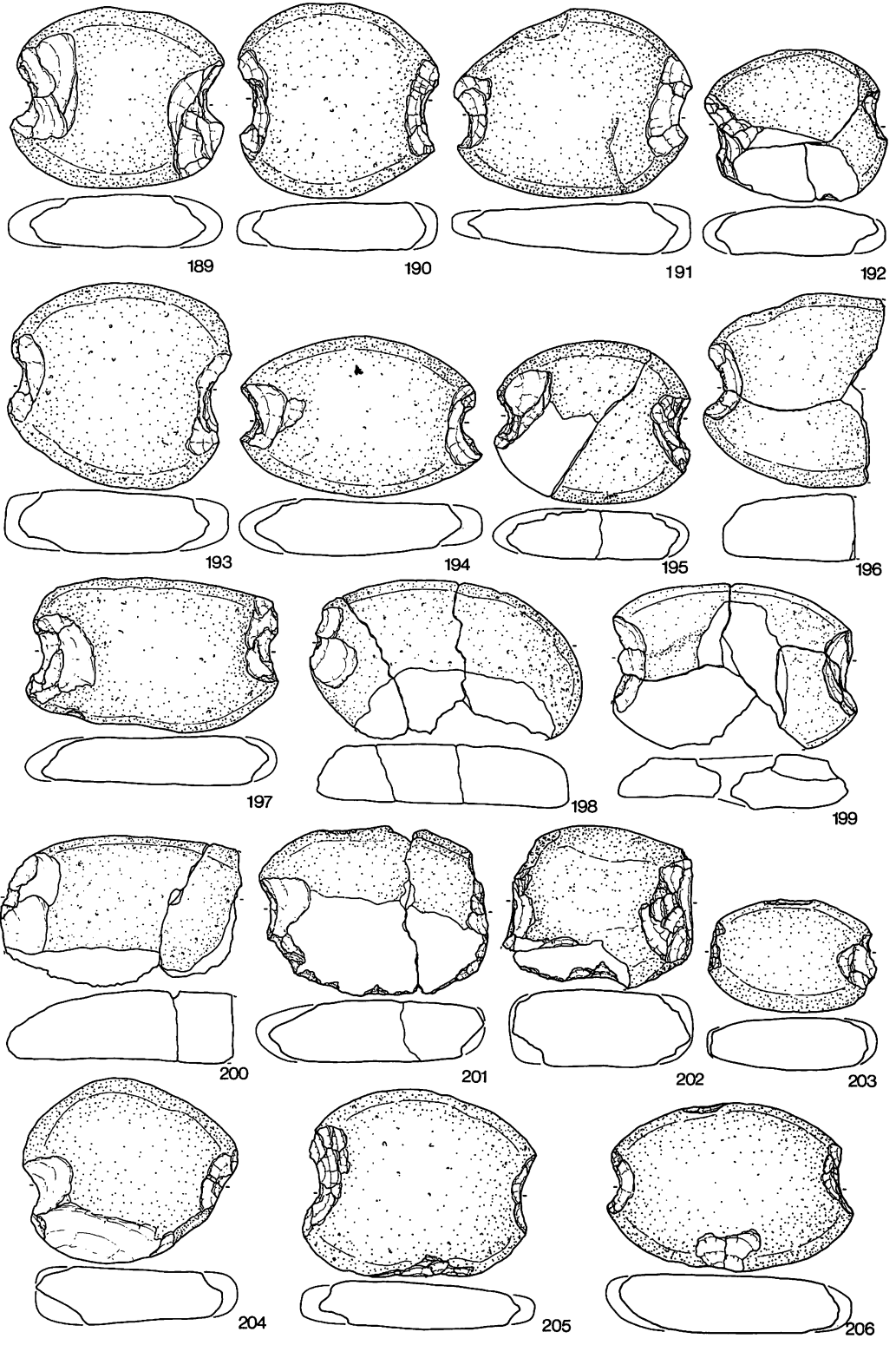


図42 包含層の石器等(10)

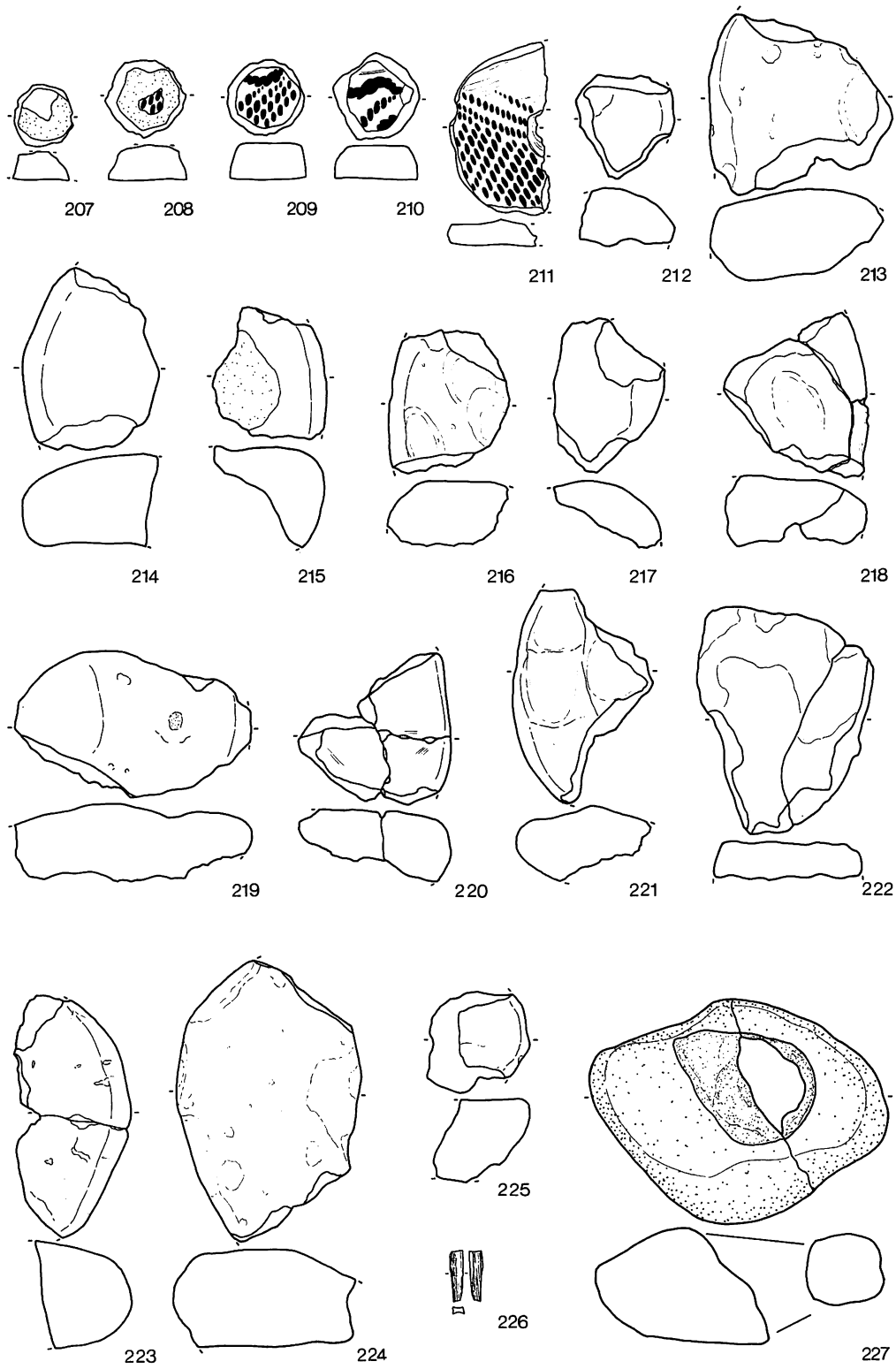


図43 包含層の石器等(11)

土製品 (207~225) 84点のうち、79点が焼成粘土塊としたものである。207~211は、土器片を再利用した円盤状土製品で、211には孔が穿たれている。212~225は焼成粘土塊の破片である。おそらく、こぶし大ほどの楕円形に整形して、焼いたものと考えられる。これらの中には、整形の際の指跡がみられるものもある。しかし、いずれも焼成が悪く、非常にもろい。

石製品 (226・227) 226は蛇紋岩製の管玉の破片。227は安山岩の穴あき石である。

表17 包含層の掲載実測土器一覧

(野中一宏)

番号	名称	分類	発掘区	大 き さ (cm)			写 真 図版番号	備 考
				器 高	口 径	底 径		
33	深 鉢	I b-4	D 7-70	(18.8)	(19.8)	3.5	19-①	図上復元
60	深 鉢	II b	C 7-76	(17.4)	(13.0)	—	19-③	〃
61	深 鉢	〃	C 7-49	(14.0)	—	15.5	20-①~③	底部のみ

表18 包含層の掲載拓影土器一覧

番号	分類	部位	発掘区	写真図版番号	番号	分類	部位	発掘区	写真図版番号
1	I b-2	口	D7-60	18-③	39	I b-4	口	C7-54	19-①
2	I b-2	口	D7-30	〃	40	I b-4	口	C7-94	〃
3	I b-2	口	D7-30	〃	41	I b-4	口	C7-44	〃
4	I b-2	口	D7-60	〃	42	I b-4	口	D7-67	〃
5	I b-2	口	D7-80	〃	43	I b-4	口	C7-80	〃
6	I b-3	口	C7-87	〃	44	I b-4	口	D7-56	〃
7	I b-3	口	B7-77	〃	45	I b-4	口	D7-67	〃
8	I b-3	口	D7-45	〃	46	I b-4	口	C7-56	〃
9	I b-3	口	C7-88	〃	47	I b-4	口	C7-48	〃
10	I b-3	口	C8-10	〃	48	I b-4	口	C7-64	〃
11	I b-2	胴	C7-58	〃	49	I b-4	口	D7-51	〃
12	I b-2	胴	D7-41	〃	50	I b-4	胴	C7-74	〃
13	I b-2	胴	D7-60	〃	51	I b-4	胴	C7-44	〃
14	I b-2	胴	D7-50・51	〃	52	I b-4	胴	C7-44	〃
15	I b-2	胴	D7-60・61	〃	53	I b-4	胴	D7-40	〃
16	I b-3	胴	D7-77・79	〃	54	I b-4	胴	C7-48	〃
17	I b-3	胴	D7-80	〃	55	I b-4	胴	C7-84	〃
18	I b-3	胴	D7-41	〃	56	I b-4	胴	D7-58	〃
19	I b-3	胴	D7-30	〃	57	I b-4	胴	D7-43	〃
20	I b-3	胴	C7-146	〃	58	I b-4	胴	C7-74	〃
21	I b-3	胴	B7-77	〃	59	I b-4	胴	C7-74	〃
22	I b-2	底	C7-51	〃	62	II a-1	口	C7-59	19-③
23	I b-3	底	D7-53	〃	63	II b	口	C7-48	〃
24	I b-2	底	D7-61	〃	64	II b	口	C7-58	〃
25	I b-2	底	C7-51	〃	65	II b	口	C7-38	〃
26	I b-2	底	D7-61	〃	66	II b	口	D7-41	〃
27	I b-2	底	D7-60	〃	67	II b	口	C7-97	〃
28	I b-2	底	D7-60	〃	68	II b	口	B8-08	〃
29	I b-3	底	D7-40	〃	69	II b	口	C7-38	〃
30	I b-3	底	C8-00	〃	70	II b	口	B7-99	〃
31	I b-3	底	C7-66	〃	71	II b	口	B7-98	〃
32	I b-3	底	D7-30	〃	72	II b	口	D7-51	〃
34	I b-4	口	C7-44	19-①	73	II b	口	C7-99	〃
35	I b-4	口	C7-74	〃	74	II b	口	D7-50	〃
36	I b-4	口	C7-63	〃	75	II b	口	C7-59	〃
37	I b-4	口	C7-81	〃	76	II b	口	C7-61	〃
38	I b-4	口	D7-40	〃	77	II b	口	D7-32	〃

(表18のつづき)

番号	分類	部位	発掘区	写真図版番号	番号	分類	部位	発掘区	写真図版番号
78	Ⅱb	口	C7-70	19-③	107	Ⅲb-2	口	B8-15	21-①
79	Ⅱb	口	C7-70	〃	108	Ⅲb-2	口	B8-06	〃
79	Ⅱb	口	C7-71	〃	109	Ⅲb-2	口	C7-73	〃
80	Ⅱb	口	C7-83	〃	110	Ⅲb-2	口	C7-85	〃
81	Ⅱb	胴	C7-47	〃	111	Ⅲb-2	口	C7-73	〃
82	Ⅱb	胴	C7-59	〃	112	Ⅲb-2	口	C7-85	〃
83	Ⅱb	胴	C7-49	〃	113	Ⅲb-2	口	C7-47	〃
83	Ⅱb	胴	D7-60	〃	114	Ⅲb-2	口	C7-83	〃
84	Ⅱb	胴	C7-69	〃	115	Ⅲb-2	口	C7-84	〃
85	Ⅱb	胴	C7-70	〃	116	Ⅲb-2	口	C7-83	〃
85	Ⅱb	胴	C7-71	〃	117	Ⅲb-2	口	C7-84	〃
86	Ⅱb	胴	C7-71	〃	118	Ⅲb-2	口	B8-17	〃
87	Ⅱb	底	C7-71	〃	119	Ⅲb-2	口	C7-92	〃
88	Ⅱb	底	D7-55	〃	120	Ⅲb-2	口	B7-99	〃
88	Ⅱb	底	B8-07	〃	121	Ⅲb-2	口	C7-46	〃
89	Ⅱb	底	C7-50	〃	122	Ⅲb-2	口	C7-93	〃
89	Ⅱb	底	C7-71	〃	123	Ⅲb-2	口	C8-11	〃
90	Ⅱb	底	C7-59	〃	124	Ⅲb-2	口	B7-86	〃
91	Ⅱb	底	C7-72	〃	125	Ⅲb-2	口	C7-75	〃
92	Ⅲa	口	C7-67	21-①	126	Ⅲb-2	胴	C7-45	〃
93	Ⅲb-2	口	C7-73	〃	127	Ⅲb-2	胴	B8-28	〃
94	Ⅲb-2	口	C7-74	〃	128	Ⅲb-2	胴	C7-46	〃
95	Ⅲb-2	口	C7-75	〃	129	Ⅲb-2	胴	C7-84	〃
96	Ⅲb-2	口	C7-74	〃	130	Ⅲb-2	胴	C7-87	〃
97	Ⅲb-2	口	C7-92	〃	131	Ⅲb-2	胴	C7-72	〃
98	Ⅲb-2	口	C7-94	〃	132	Ⅲb-2	胴	C7-86	〃
99	Ⅲb-2	口	C8-12	〃	133	Ⅲb-2	胴	B7-89	〃
100	Ⅲb-2	口	B8-07	〃	134	Ⅲb	底	D7-53	〃
101	Ⅲb-2	口	C7-67	〃	135	Ⅲb	底	C7-50	〃
102	Ⅲb-2	口	C7-55	〃	136	Ⅲb	底	C7-85	〃
103	Ⅲb-2	口	D7-41	〃	137	Ⅳa	胴	C8-04	21-②
104	Ⅲb-2	口	C7-48	〃	138	Ⅳc	口	C7-49	〃
105	Ⅲb-2	口	C7-64	〃	139	Ⅳc	口	D7-53	〃
106	Ⅲb-2	口	C7-75	〃					

表19 包含層の掲載石器等一覧

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	写真図版番号
1	石 鎌	1A3	D7-38	(3.1)×0.9×0.3	0.8	Obs.	22-①
2	石 鎌	1A3	D7-68	3.3×0.8×0.3	0.8	Obs.	〃
3	石 鎌	1A3	D7-49	3.6×0.7×3.5	1.1	Obs.	〃
4	石 鎌	1A3	B8-15	(4.3)×1.1×0.3	1.7	Obs.	〃
5	石 鎌	1A3	C7-49	3.1×1.1×0.3	1	Obs.	〃
6	石 鎌	1A3	C7-48	3.0×0.4×0.3	1.1	Obs.	〃
7	石 鎌	1A3	C7-46	(2.8)×1.4×0.4	1.6	Obs.	〃
8	石 鎌	1A3	D7-48	(3.6)×1.5×0.4	2.3	Obs.	〃
9	石 鎌	1A3	C7-52	2.4×1.4×0.3	0.8	Obs.	〃
10	石 鎌	1A3	C7-68	2.8×1.5×0.2	1.1	Sh.	〃
11	石 鎌	1A3	C7-94	2.4×1.1×0.4	0.8	Obs.	〃
12	石 鎌	1A3	C7-67	2.8×0.9×0.4	1.1	Sh.	〃
13	石 鎌	1A3	C7-66	(2.8)×0.4×0.2	0.8	Obs.	〃
14	石 鎌	1A3	C7-72	1.9×1.2×0.2	0.6	Sh.	〃
15	石 鎌	1A3	C7-93	(2.4)×1.3×0.3	0.9	Obs.	〃
16	石 鎌	1A3	C7-64	1.7×0.7×0.2	0.3	Obs.	〃

(表19のつづき)

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写真図版番号
17	石 鏃	1A3	C7-76	2.1×0.8×0.2	0.4	Obs.	21-①
18	石 鏃	1A3	C7-54	(1.9)×0.8×0.2	0.2	Obs.	〃
19	石 鏃	1A4	B8-15	(1.9)×1.9×0.3	0.5	Obs.	〃
20	石 鏃	1A4	D7-58	(2.1)×1.7×0.3	0.8	Obs.	〃
21	石 鏃	1A4	C7-91	(2.0)×1.8×0.3	0.8	Obs.	〃
22	石 鏃	1A4	D7-67	(2.1)×0.9×0.2	0.6	Obs.	〃
23	石 鏃	1A4	D7-43	2.5×1.9×0.3	0.9	Obs.	〃
24	石 鏃	1A4	D7-54	2.6×1.8×0.4	1.0	Obs.	〃
25	石 鏃	1A4	B 調	2.8×1.7×0.3	1.3	Obs.	〃
26	石 鏃	1A4	D7-61	(2.5)×(2.0)×3.5	1.2	Obs.	〃
27	石 鏃	1A5	D7-48	(4.6)×1.5×0.5	3.0	Obs.	〃
28	石 鏃	1A6	D7-58	3.6×1.5×0.3	1.5	Sh.	〃
29	石 鏃	1A7	C7-81	(1.9)×1.5×0.4	0.8	Obs.	〃
30	石 鏃	1A7	D7-55	(1.0)×1.5×0.3	0.5	Obs.	〃
31	石 鏃	1A7	B8-28	(1.9)×1.5×0.3	0.8	Obs.	〃
32	石 鏃	1A7	D7-47	2.0×1.3×0.3	0.4	Obs.	〃
33	石 鏃	1A7	C7-91	2.0×1.2×0.3	0.5	Obs.	〃
34	石 鏃	1A7	D7-41	1.8×2.6×0.4	1.1	Obs.	〃
35	石 鏃	1A7	C7-44	(0.8)×0.4×0.3	0.1	Obs.	〃
36	石 鏃	1A7	C7-43	2.2×1.4×0.4	0.8	Obs.	〃
37	石 鏃	1A7	C7-63	(2.2)×1.3×0.4	0.7	Obs.	〃
38	石 鏃	1A7	D7-48	2.3×1.1×0.5	2.6	Obs.	〃
39	石 鏃	1A7	出土地点不明	3.9×1.8×0.7	3.0	Obs.	〃
40	石 槍またはナイフ	B1	C7-83	(5.5)×3.1×1.0	16.5	Obs.	〃
41	石 槍またはナイフ	B1	C7-54	5.9×(2.7)×0.7	11.8	Obs.	〃
42	石 槍またはナイフ	B1	C7-94	6.7×2.7×0.8	10.2	Obs.	〃
43	石 槍またはナイフ	B1	C7-90	5.8×1.8×1.1	10.4	Ba.	〃
44	石 槍またはナイフ	B1	C7-66	5.8×2.4×1.0	11.1	Obs.	〃
45	石 槍またはナイフ	B4	C7-58	6.3×2.0×2.1	12.2	Sh.	〃
46	石 槍またはナイフ	B3	水 付	10.6×3.4×1.1	35.4	Sh.	〃
47	石 槍またはナイフ	B4	C8-04	10.9×3.4×1.0	40.0	Obs.	〃
48	石 槍またはナイフ	B3	C7-47	8.8×1.8×0.4	16.5	Sh.	〃
49	石 槍またはナイフ	B1	C7-76	5.4×2.5×0.8	11.1	Sh.	〃
50	石 鏃	C	C7-87	3.2×1.1×0.4	1.4	Sh.	22-②
51	石 鏃	C	C7-36	3.3×2.1×0.7	4.1	Obs.	〃
52	つまみ付きナイフ	D	C7-36	5.1×4.8×0.8	13.2	Sh.	〃
53	つまみ付きナイフ	D	C7-63	3.4×2.1×0.9	6.2	Sh.	〃
54	つまみ付きナイフ	D	C7-43	3.8×1.4×0.7	4.7	Sh.	〃
55	つまみ付きナイフ	D	D7-50	4.0×1.5×0.5	3.3	Sh.	〃
56	つまみ付きナイフ	D	C7-99	6.0×1.7×0.7	5.8	Sh.	〃
57	つまみ付きナイフ	D	D7-60	6.4×1.9×0.6	7.5	Sh.	〃
58	つまみ付きナイフ	D	C7-72	7.3×1.5×1.1	10.0	Sh.	〃
59	つまみ付きナイフ	D	C7-51	6.0×1.9×1.0	9.9	Sh.	〃
60	つまみ付きナイフ	D	C7-68	6.2×2.1×0.7	7.1	Sh.	〃
61	つまみ付きナイフ	D	C7-72	2.8×1.4×0.4	0.7	Ch.	〃
62	つまみ付きナイフ	D	C7-55	4.4×1.5×0.7	4.2	Obs.	〃
63	つまみ付きナイフ	D	C7-36	5.3×1.4×0.7	5.2	Sh.	〃
64	つまみ付きナイフ	D	C7-81	5.5×1.7×1.0	9.1	Sh.	〃
65	つまみ付きナイフ	D	C7-46	6.3×2.2×0.9	11.0	Sh.	〃
66	つまみ付きナイフ	D	B7-88	7.2×2.1×1.4	14.6	Sh.	〃
67	つまみ付きナイフ	D	C7-75	5.6×2.2×0.5	6.8	Ch.	〃
68	つまみ付きナイフ	D	C7-63	6.4×2.7×0.5	10.3	Sh.	〃
69	つまみ付きナイフ	D	C7-94	6.9×2.5×0.6	12.9	Sh.	〃
70	つまみ付きナイフ	D	C7-51	6.0×2.3×0.6	10.0	Sh.	〃

(表19のつづき)

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	写真図版番号
71	つまみ付きナイフ	D	C7-84	6.0×3.6×0.6	14.9	Sh.	22-②
72	つまみ付きナイフ	D	C8-11	7.9×2.9×0.7	18.3	Obs.	〃
73	つまみ付きナイフ	D	B8-18	5.2×2.4×0.5	6.4	Obs.	〃
74	つまみ付きナイフ	D	C7-52	4.5×1.4×0.8	5.0	Sh.	〃
75	つまみ付きナイフ	D	D7-39	5.1×2.1×0.9	9.3	Obs.	〃
76	スクレイパー	E	C7-54	3.6×3.5×0.5	7.6	Sh.	23-①
77	スクレイパー	E	C7-48	6.5×2.5×1.2	35.0	Sh.	〃
78	スクレイパー	E	C7-64	6.7×4.2×1.5	51.5	Sh.	〃
79	スクレイパー	E	C7-49	4.7×3.6×0.6	10.8	Sh.	〃
80	スクレイパー	E	C8-02	4.2×1.5×0.6	4.4	Obs.	〃
81	スクレイパー	E	C7-91	3.0×1.8×0.4	1.9	Obs.	〃
82	スクレイパー	E	C7-96	2.2×2.8×0.5	3.6	Obs.	〃
83	スクレイパー	E	D7-68	3.5×2.4×0.6	4.7	Obs.	〃
84	スクレイパー	E	C7-83	5.7×3.1×1.0	16.0	Obs.	〃
85	スクレイパー	E	C7-69	3.8×2.8×0.7	9.8	Sh.	〃
86	スクレイパー	E	C7-56	3.9×3.4×0.8	9.7	Obs.	〃
87	スクレイパー	E	C7-48	2.9×2.5×0.4	7.9	Obs.	〃
88	U フレイク	O1a	C7-85	3.5×2.9×0.4	2.3	Obs.	〃
89	U フレイク	O1a	D7-30	3.1×2.1×0.5	4.9	Obs.	〃
90	U フレイク	O1a	C7-74	3.5×3.6×0.6	8.2	Obs.	〃
91	U フレイク	O1a	C7-74	3.4×4.5×0.7	10.1	Obs.	〃
92	U フレイク	O1a	C7-46	5.5×1.8×1.4	11.8	Obs.	〃
93	石 斧	F2	C7-72	(8.8)×3.2×1.5	70.0	Mud.	24
94	石 斧	F2	C7-91	9.2×3.3×1.5	80.0	Mud.	〃
95	石 斧	F2	C7-63	10.4×3.4×1.0	50.0	Mud.	〃
96	石 斧	F2	D7-70	(7.1)×(4.0)×(2.0)	90.0	Mud.	〃
97	石 斧	F3	D7-58	7.8×2.7×1.0	30.0	Mud.	〃
98	石 斧	F2	C7-89	11.2×4.1×2.6	200.0	Mud.	〃
99	石 斧	F2	C7-59	12.4×3.5×0.6	45.0	Sh.	〃
100	石 斧	F2	C7-54	13.8×3.3×1.9	(94.4)	Mud.	〃
101	石 斧	F2	C7-98	9.3×2.9×1.8	80.0	Mud.	〃
102	石 斧	F3	D7-32	9.0×1.9×1.0	25.0	Mud.	〃
103	石 斧	F3	C7-86	8.4×2.7×0.8	20.0	Bl-Mud.	〃
104	石 斧	F2	D7-52	10.7×3.1×1.4	79.0	Mud.	〃
105	石 斧	F3	C7-85	10.3×1.9×0.9	31.9	Mud.	〃
106	石 斧	F2	C7-38	8.9×3.6×1.1	55.0	Mud.	〃
107	石 斧	F2	C7-95	9.7×3.0×1.0	50.5	Mud.	〃
108	石 斧	F2	C7-93	(9.8)×4.3×1.4	101.6	Mud.	〃
109	石 斧	F2	C7-64	10.3×3.3×1.4	79.7	Sch.	〃
110	石 斧	F2	D7-55	10.1×3.0×1.1	60.0	Mud.	〃
111	石 斧	F2	C7-94	12.8×4.9×1.5	130.0	Mud.	〃
112	石 斧	F2	D7-43	(11.7)×4.4×3.0	250.0	Mud.	〃
113	石 斧	F2	C7-76	(8.3)×(4.6)×1.3	90.9	Mud.	〃
114	石 斧	F2	D7-55	(7.2)×(4.6)×(1.7)	88.5	Mud.	〃
115	石 斧	F2	C7-61	(8.3)×4.8×1.7	120.0	Mud.	〃
116	石 斧	F2	B8-26	(8.7)×6.0×2.5	277.6	Mud.	〃
117	石 斧 未製品	F	D7-40-C7-45	(5.8)×(9.3)×(1.7)	134.6	Mud.	〃
118	た た き 石	G	C7-76	5.8×5.1×3.3	180.0	Mud.	25
119	た た き 石	G	C7-49	4.8×7.6×3.0	205.0	Mud.	〃
120	た た き 石	G	C7-56	8.0×6.4×3.2	285.0	Mud.	〃
121	た た き 石	G	C7-73	7.5×5.2×3.1	150.8	Sa.	〃
122	た た き 石	G	D7-41	4.8×9.5×3.2	219.2	Mud.	〃
123	た た き 石	G	D7-41	11.2×6.7×2.2	241.2	Sa.	〃
124	た た き 石	G	B7-98	11.0×9.7×5.1	740.0	And.	〃

(表19のつづき)

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写真図版番号
125	た た き 石	G	C 7-65	9.5×5.4×3.5	290.0	And.	25
126	た た き 石	G	C 7-38	9.7×6.4×5.8	480.0	Sa.	〃
127	た た き 石	G	D 7-48	6.1×4.5×1.8	80.0	And.	〃
128	た た き 石	G	D 7-56	10.9×5.7×4.8	355.0	Sa.	〃
129	た た き 石	G	C 7-71	13.4×(12.1)×3.2	(670.0)	And.	〃
130	た た き 石	G	C 8-10	18.5×6.7×3.8	790.0	And.	〃
131	た た き 石	G	C 7-97	18.3×9.6×6.8	1,510.0	Gni.	〃
132	た た き 石	G	C 7-74	9.2×4.2×1.4	132.0	Mud.	〃
133	た た き 石	G	C 7-74	9.6×3.6×2.1	110.0	Mud.	〃
134	礫	H	C 7-55	12.1×8.0×1.5	249.0	Mud.	〃
135	す り 石	J	C 7-85	(6.7)×4.0×4.1	(216.7)	Mud.	26-②
136	す り 石	J	C 7-68	7.5×5.8×1.4	(95.3)	Sa.	〃
137	す り 石	J	C 7-70	(6.8)×4.1×2.2	(58.0)	Sa.	〃
138	す り 石	J	C 7-92	5.4×11.4×1.2	85.8	Tu.	〃
139	北 海 道 式 石 冠	J4	D 7-67	8.8×15.3×2.9	565.0	And.	27
140	北 海 道 式 石 冠	J4	B7-88	8.4×14.3×4.9	1,020.0	Sa.	〃
141	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-95	10.6×11.6×6.6	1,220.0	Sa.	〃
142	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-94	10.3×11.7×6.0	1,012.0	Sa.	〃
143	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-57	9.2×9.2×6.7	815.0	Sa.	〃
144	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-94	8.4×11.7×5.0	810.0	Mud.	〃
145	北 海 道 式 石 冠	J4	C8-03	12.2×9.7×4.8	880.0	Sa.	〃
146	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-74	7.9×14.5×4.8	831.0	Sa.	〃
147	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-46	9.0×8.1×4.2	553.0	And.	〃
148	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-56	8.2×8.9×6.3	650.0	Sa.	〃
149	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-77	8.2×3.6×4.7	256.0	Sa.	〃
150	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-51	8.7×7.3×6.5	660.0	And.	〃
151	北 海 道 式 石 冠	J4	D7-44	8.0×(6.6)×4.8	311.2	Sa.	〃
152	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-73	(10.0)×(4.5)×(4.9)	259.7	Sa.	〃
153	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-63	8.7×(7.1)×5.5	490.0	And.	〃
154	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-38	(7.8)×6.5×5.2	348.6	Sa.	〃
155	北 海 道 式 石 冠	J4	C8-04	(7.6)×(9.7)×(3.7)	280.0	And.	〃
156	北 海 道 式 石 冠	J4	C7-67	(4.3)×(8.7)×(3.2)	122.8	Sa.	〃
157	砥 石	K1	C7-86	(5.7)×(11.8)×(2.1)	112.4	Sa.	28-①
158	砥 石	K1	C7-66	(7.5)×(9.8)×(1.8)	174.5	Sa.	〃
159	砥 石	K1	C7-51	8.0×3.7×1.7	46.5	Sa.	〃
160	砥 石	K1	C7-70	6.4×8.9×2.3	104.8	Sa.	〃
161	砥 石	K1	C7-93	5.6×5.7×2.6	160.0	Sa.	〃
162	砥 石	K1	C7-92	5.8×6.2×1.5	67.4	Sa.	〃
163	砥 石	K1	C7-36	8.2×5.9×1.7	96.4	Sa.	〃
164	砥 石	K1	D7-41	8.0×7.9×3.8	310.4	Sa.	〃
165	石 鋸	L	C7-94	(3.5)×(6.6)×(1.3)	21.3	Sa.	〃
166	石 鋸	L	C7-48	(8.3)×(9.5)×1.2	123.0	Sa.	〃
167	石 皿	M	C7-46	40.9×26.0×15.1	19,400	And.	28-②
168	台 石	M	D7-45	11.1×9.9×8.8	945.0	And.	〃
169	石 皿	M	C7-48	16.9×7.0×6.1	450.0	And.	〃
170	台 石	M	C7-48	17.0×7.7×10.6	157.5	And.	〃
171	石 皿	M	C7-37	20.5×14.7×9.0	3,000	And.	〃
172	石 皿	M	C7-83	18.3×21.3×15.0	8,200	And.	〃
173	石 皿	M	B8-26	18.3×14.0×10.1	3,200	And.	〃
174	石 錘	N	C7-89	4.0×4.8×1.8	50.0	Aga.	29
175	石 錘	N	C7-40	8.5×6.2×2.2	160.0	Gni.	〃
176	石 錘	N	C7-56	7.8×10.0×2.8	395.0	Gni.	〃
177	石 錘	N	C7-96	5.7×6.6×1.6	125.0	Gni.	〃
178	石 錘	N	D7-52	8.1×8.3×1.6	155.0	Gni.	〃

(表19のつづき)

番号	名 称	分 類	発掘区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写真図版番号
179	石 錘	N	C7-56	8.3×7.6×2.5	295.0	Gni.	29
180	石 錘	N	C7-83	8.9×7.9×2.3	295.0	Gni.	〃
181	石 錘	N	C7-71	8.0×8.9×1.6	215.0	Gni.	〃
182	石 錘	N	C7-56	7.7×8.5×2.1	255.0	Gni.	〃
183	石 錘	N	C7-69	7.2×5.9×1.6	111.0	Gni.	〃
184	石 錘	N	C7-64	8.2×6.7×1.4	143.0	Gni.	〃
185	石 錘	N	C7-56	6.7×8.4×2.2	210.0	Gni.	〃
186	石 錘	N	C7-56	7.2×9.2×2.2	305.0	Gni.	〃
187	石 錘	N	C7-55	7.6×7.6×2.3	235.0	Gni.	〃
188	石 錘	N	C7-64	7.6×7.6×1.7	196.0	Gni.	〃
189	石 錘	N	C7-56	8.2×8.1×2.3	295.0	Gni.	〃
190	石 錘	N	C7-56	8.9×7.9×2.1	305.0	Gni.	〃
191	石 錘	N	C7-56	8.6×9.7×1.9	305.0	Gni.	〃
192	石 錘	N	C7-51	7.3×7.9×2.1	154.6	Gni.	〃
193	石 錘	N	C7-63	9.2×8.7×2.6	405.0	Gni.	〃
194	石 錘	N	C7-56	7.3×9.5×2.8	310.0	Gni.	〃
195	石 錘	N	C7-81	8.8×7.3×2.2	217.2	Gni.	〃
196	石 錘	N	C7-69	8.8×7.8×2.9	331.2	Gni.	〃
197	石 錘	N	C7-89	6.8×10.4×2.0	280.0	Gni.	〃
198	石 錘	N	C7-63	6.9×12.4×3.0	397.6	Gni.	〃
199	石 錘	N	C7-69	7.2×10.8×2.1	185.6	Gni.	〃
200	石 錘	N	C7-71	6.8×10.9×3.7	422.0	Gni.	〃
201	石 錘	N	C7-36	7.6×10.3×2.8	310.2	Gni.	〃
202	石 錘	N	D7-68	8.5×7.0×3.5	316.8	Gni.	〃
203	石 錘	N	D7-54	7.7×5.1×1.9	150.0	Gni.	〃
204	石 錘	N	C7-56	8.4×8.4×2.5	305.0	Gni.	〃
205	石 錘	N	C7-71	8.6×9.3×2.4	350.0	Gni.	〃
206	石 錘	N	C7-56	7.9×10.3×2.0	320.0	Gni.	〃
207	円盤状土製品		C7-92	1.9×1.7×0.8	2.4		33-②
208	円盤状土製品		C7-85	2.2×2.2×1.0	5.1		〃
209	円盤状土製品		C7-94	2.1×2.2×1.1	6.0		〃
210	円盤状土製品		B7-98	2.6×2.6×1.1	6.4		〃
211	有孔円盤状土製品		C7-93	5.1×2.7×0.7	12.1		〃
212	土製品		C7-95	3.1×2.9×1.8	8.9		〃
213	土製品		C7-52	4.8×5.2×2.9	37.1		〃
214	土製品		C7-69	5.2×4.0×2.8	33.2		〃
215	土製品		C7-95	4.0×3.3×3.0	13.5		〃
216	土製品		C7-55	4.1×3.7×2.0	18.0		〃
217	土製品		C7-95	4.5×3.2×1.8	13.4		〃
218	土製品		C7-77	4.8×4.3×2.0	23.2		〃
219	土製品		C7-95	3.8×7.1×2.3	31.5		〃
220	土製品		C7-86	4.7×4.6×2.1	20.5		〃
221	土製品		C7-63	6.2×4.4×1.9	26.4		〃
222	土製品		C7-68	6.9×5.0×1.0	27.9		〃
223	土製品		C7-86	7.4×3.3×3.0	36.5		〃
224	土製品		C7-63	7.9×5.2×2.9	79.6		〃
225	土製品		C7-69	2.7×3.6×2.1	13.3		〃
226	玉		C8-04	1.6×0.4×0.2	0.1	Ser.	〃
227	磔	X0	C7-88	6.7×8.9×3.1	171.6	And.	〃

3. ローム質粘土層の調査

本遺跡では、I-1で述べたように、更新世の堆積物である恵庭 a 降下軽石層と支笏軽石流堆積物の間のローム質粘土層を対象に、旧石器確認調査を実施した。調査の対象は当初、全体の面積の4%に相当する160㎡であったが、遺物が検出されたことから、発掘区を拡張し、最終的には400㎡ほどとなった。この結果、石核1点を含む15点の遺物が検出された。

(1) 発掘区の設定と層序 (図44)

今回の調査では、台地縁辺部を対象にし、D 7-60杭とC 7-72杭を結ぶ直線を中心とした幅10m、長さ41mほどの範囲を調査区とした。調査区はC 7-52・62・72区～C 7-59・69・79区の小区内にあり、調査区の南北軸は、発掘区の南北軸に対して14°西へ偏く。

旧石器包含層については、現地で岡村聰氏の指導を受けながら分層し、合わせて、これらの土壌についての化学的分析を依頼した (I-6参照)。この結果、検出された遺物は、羊蹄第3軽石、スコリア層 (Yo. PS-3) の降下年代以降のものであり、本層の層準は美沢1遺跡の層準 (「美沢川流域の遺跡群」Ⅲ 昭和53年度 道教委) とほぼ一致することが報告されている。以下、下位の層準から順次説明を記す。

XI層 淡赤褐色土 支笏軽石流堆積物 (SP fl) で、図46のXI・X層に対応する。

X層 暗黄褐色土 径2～3cmの支笏軽石を含む。図46のX層に対応する可能性がある。

IX層 黄褐色土 径4mmほどの岩片を含む。図46のIX層に対応する。本層中には部分的に炭化物が混入しており、本層をIX a、炭化物を含むスポットをIX bとした。

VIII層 赤褐色を呈する径1～2mmの軽石層 (VIII a) と暗褐色を呈する径1mm以下の細粒スコリア層 (VIII b) からなるもので、レンズ状に薄く堆積している。図46のVIII層に対応するもので、Yo.Ps-3の下半部に対比されている。

VII層 暗黄褐色土 径1mmほどの火山灰を含み、炭化物も少量混入する。粘性に富み、しまりのある層で、図46のVII層に対応し、Yo.Ps-3の上半部のスコリア質火山灰を多量に含むものとみられている。

VI層 黄褐色土 遺物出土層。径1mmほどの火山灰を含み、炭化物が比較的多量に混入する。本層をVI a、炭化物を含むスポットをVI bとした。図46のV・VI層に対応する。

V層 暗灰色火山灰 レンズ状に断続的に堆積している。図46のIV層に対応し、Yo.Ps-3の直上にみられるスコリア質火山灰に似ているとされている。

IV層 黄褐色土 粘性があり、若干炭化物を含む。図46のIII層に対応する。

III層 灰白色土 岡村氏の報告では細分されておらず、III層に含められていると思われる。

II層 暗灰色火山灰 レンズ状に堆積し、V層と近似する。図46のII層に対応する。

I層 明黄褐色土 図46のI層に対応する。(野中一宏)

(2) 遺物 (図45)

検出された遺物は、石核1点、フレイク13点、礫片1点で、これらはC7-67・68区にまたがる炭化物のスポット周辺(A群)、C7-77・78区にまたがる炭化物のスポット周辺(B群)とC7-58区の壁際に1点分布している。垂直分布では、IV層下位から出土した15の礫片を除き、VI層中位～下位に包含されている。石核、剥片群は、1・2・4～8・10・11・13・14がA群に、9・12がB群に属する。1は珩岩の偏平礫を母岩とし、上面と下面に黒褐色を呈した原石面が残された両接打面の石核で、最終的には下方からの剥片剥離を施した際に段が生じたため放棄したものとみられる。2・3は黒曜石の剥片で、2には背面に刃こぼれ状の細かい剥離が認められる。4～7・10～14は珩岩の剥片で、4・6・9・10・12には原石面が残っている。8・9はメノウの剥片で、9は原石面を残している。15は泥岩の礫片である。

このうち、黒曜石の剥片については、原産地分析と水和層年代測定を依頼したところ、原産地はともに白滝と考えられるもので、年代測定では17,000±900 y.B.P. (2)、16,100±1,000 y.B.P. (3)という値がいられた。また、珩岩を石材とした遺物のうち、1・10・13、2～4・12、11・14は剥離面と原石面の色調や質感からみて、それぞれ同一母岩である可能性が極めて高い。1・10・13はともにA群に分布しており、剥離面の色調は縞模様が見られる青灰色である。2～4・12は、3個(2～4)がA群に、12がB群に分布し、剥離面の色調は灰褐色～乳白色、原石面は灰黄褐色～茶褐色である。11・14はともにA群に分布し、色調は赤褐色を呈している。これらの遺物のうち、同層準から検出された石核、剥片群は、前述のごとく平面的には若干離れた位置に分布している。しかしながら、同一母岩の剥片の分布や水和層年代の近似値からみて、これらは同一スポット内に分布する一群として扱われる可能性が高い。

(野中一宏)

表20 ローム質粘土層の石器等一覧

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写 真 図 版 番 号
1	石 核	O0	C7-67	4.8×5.3×3.4	65.6	Che.	34-③
2	フ レ イ ク	O1	C7-67	2.2×1.9×0.6		Obs.	—④
3	フ レ イ ク	O1	C7-58	1.9×1.7×0.2		Obs.	35-③
4	フ レ イ ク	O1	C7-67	1.3×0.5×0.3	0.2	Che.	〃
5	フ レ イ ク	O1	C7-67	2.4×0.7×0.5	1.2	Che.	〃
6	フ レ イ ク	O1	C7-67	1.7×1.2×0.6	0.9	Che.	〃
7	フ レ イ ク	O1	C7-68	2.7×1.6×0.2	0.5	Che.	〃
8	フ レ イ ク	O1	C7-67	2.8×2.2×0.4	3.3	Aga.	〃
9	フ レ イ ク	O1	C7-77	2.3×1.5×0.7	1.9	Aga.	〃
10	フ レ イ ク	O1	C7-67	1.8×2.1×0.5	1.7	Che.	〃
11	フ レ イ ク	O1	C7-67	1.3×2.4×0.6	1.4	Che.	〃
12	フ レ イ ク	O1	C7-76	2.4×1.5×0.7	1.8	Che.	〃
13	フ レ イ ク	O1	C7-67	2.7×2.8×0.8	3.0	Che.	〃
14	フ レ イ ク	O1	C7-67	3.6×4.8×0.6	14.8	Che.	〃
15	礫 片	X1	C7-76	3.8×2.0×0.9	6.6	Mud.	〃

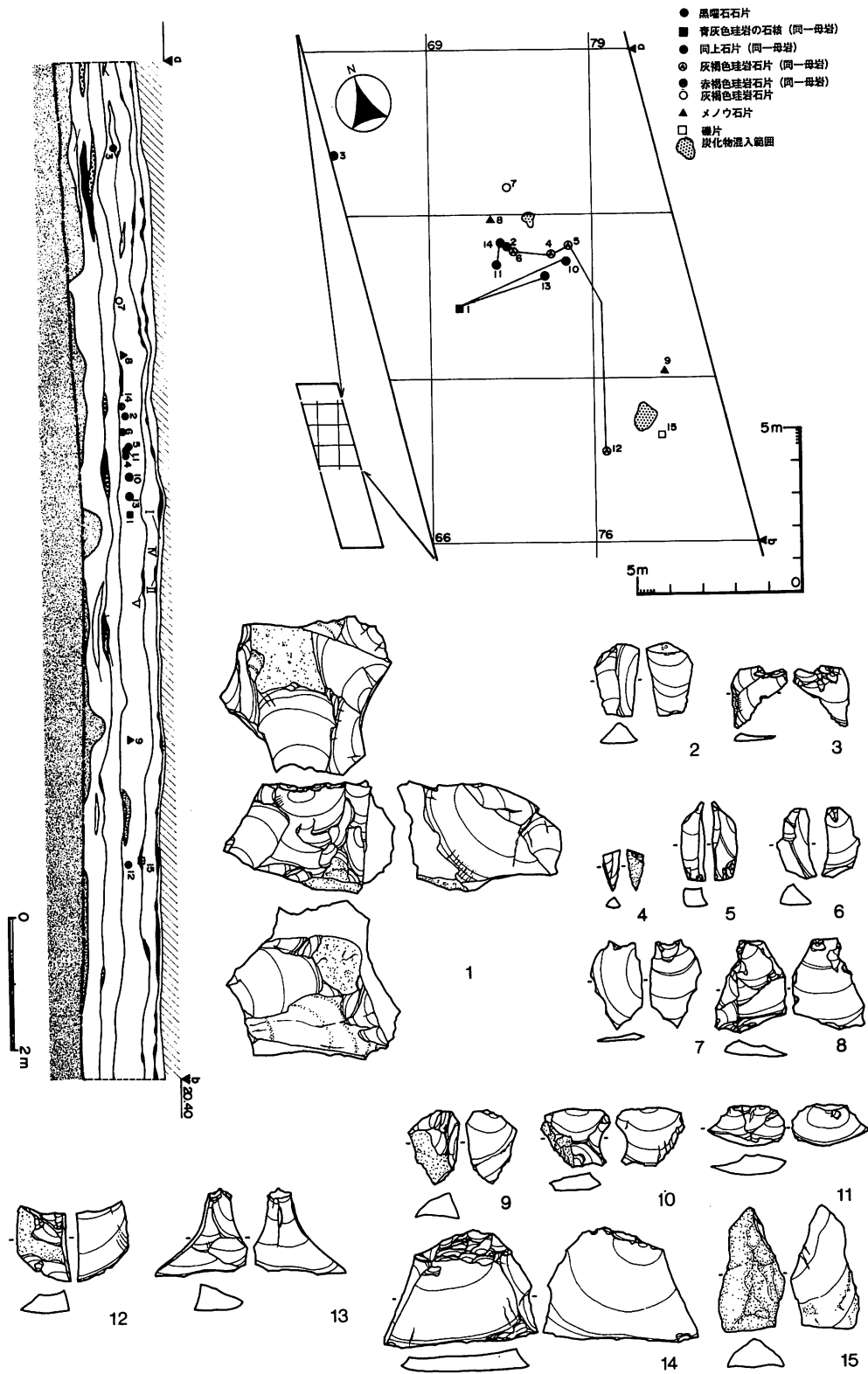


図45 遺物分布と遺物

4. 美沢10遺跡火災住居跡（H-2・5）出土木炭の液体シンチレーション炭素年代

測定者 京都産業大学 山田 治

KSU-1390 H-2 炭化材 4,110±60 y.B.P.

KSU-1391 H-5 炭化材 4,080±60 y.B.P.

5. 美沢10遺跡出土の黒曜石石片の水和層年代

帯広畜産大学 近堂祐弘

(1) はじめに

昭和61年度の新千歳空港建設用地内における埋蔵文化財発掘調査結果、苫小牧市美沢10遺跡で恵庭 a (En-a) 降下軽石層（降下年代約14,000 B.P. 年）下位のローム質粘土層から、後期旧石器時代のもともみられる各種石片が出土した。

今回、上記遺跡を発掘調査中の北海道埋蔵文化センターの依頼により、黒曜石片 2 試料の水和層年代測定を行ったので、その結果を報告する。

札幌-苫小牧低地帯における En-a 降下軽石層下位の旧石器については、現在までのところ年代測定資料に乏しいので、本遺跡出土の黒曜石石片の年代測定は、編年上から意義あるものと考えられる。

(2) 試料、測定方法および年代測定結果

年代測定に用いた 2 試料は昭和61年度発掘調査で出土した、小形の黒色透明な黒曜石石片である。2 試料のうち、C 7-67-31 試料（図45-2）は、水和層厚測定用薄片製作後の小片（0.5g）を用いて、産地推定のための化学分析を試みた。

すなわち、黒曜石の主要無機成分であるチタン（Ti）とマンガン（Mn）の測定を行った結果、Ti=0.021%、Mn=0.032%の分析値をえた。北海道内の産地別黒曜石の上記 2 元素の分析値（西沢、1979）を参照すると、道東の白滝産黒曜石は、Ti=0.022±0.001（%）、Mn=0.033±0.001（%）であり、本遺跡出土の 1 試料 C 7-67-31（図45-2）の分析値と一致している。なお、上記の試料について黒曜石薄片の晶子形態を観察したところ、白滝産黒曜石に一般的な微球体（Globulite）から毛状晶子（Trichite）の発達しているのが認められた。

以上の分析結果から、C 7-67-31 試料は、白滝産黒曜石に由来するものとして以下の年

代測定を試みた。なお、2試料のうち、C7-58-61試料(図45-3)は極めて小形の剥片で、水和層測定のための薄片製作後、化学分析用の細片はえられなかった。したがって、C7-58-61試料については、産地推定の補助手段である薄片の晶子形態観察をもって、一応、白滝産と概定の上年代測定を試みた。

薄片製作および水和層厚の測定は、常法(近堂、1975)に準じて行った。年代測定の基準となる水和速度($\mu\text{m}^2/1000\text{年}$)は、日本産黒曜石の水和速度と効果温度にかんするワーキングカーブ(近堂、1986)から、札幌-苫小牧低地帯(道央)における後期更新世の推定効果温度 8.5°C の条件で、白滝産黒曜石 $1.60\mu\text{m}^2/1000\text{年}$ を採用した。2試料の年代測定については、表21に示したとおりである。

表21 美沢10遺跡出土の黒曜石石片の水和層年代

試料番号	出土層位	水和層測定数	水和層厚 $\bar{X}\pm 0'$ (μm)	水和管年代(B.P.年)	図番号
C7-67-31	En-a下位ローム質粘土層	10	5.21 ± 0.14	$17,000\pm 900$	図45-2
C7-58-61	ク	9	5.08 ± 0.15	$16,100\pm 1,000$	図45-3

2試料の水和層年代は、 $16,100\pm 1000$ および $17,000\pm 900$ 年B.P.を示し、計測誤差の範囲を考慮すると、両試料間に格差はないと考えられ、ほぼ同じ時期の石器製作に由来するものと推定される。また、2試料はいずれも約20,000 B.P.年までは遡らない。

美沢1遺跡の発掘調査で、En-a降下軽石層下位から出土した黒曜石石器・石片については、勝井・根本(1979)の報告がある。この年代測定の結果は、 $18,500\pm 1,000$ B.P.年を示しており、今回の測定値は計測誤差の範囲を考慮するとほぼ同じ年代とみて差支えないであろう。

参考文献

- 北海道教育委員会(1979):美沢川流域の遺跡群Ⅲ。
 近堂祐弘(1975):黒曜石の水和層による石器の年代測定。考古学と自然科学、No. 8、17-29。
 近堂祐弘(1986):北海道における黒曜石年代測定について。北海道考古学、第22輯、1-15。
 西沢保人(1979):北海道産黒曜石の化学組成と産地分析法。1-48(帯広畜産大学卒業論文手記)。

6. 美沢10遺跡旧石器出土層及び関連層

北海道教育大学札幌分校 岡村 聡

(1) 土壌断面

- XI 最下位にあたる支笏軽石流堆積物 (Spfl) は、淡赤灰色を呈し軽石の最大粒径は20cm以上に達する。上位層との境界は不規則な擾乱を受けており、クリオターベーションによるものと考えられる。
- X Spflの二次堆積物で淡褐色を呈し、数mm径の軽石片はよく円磨されている。
- IX 灰黄褐色土層。細粒な火山灰を母材とする土層。最大粒径1cmの岩片を含んでいる。
- VIII 暗褐色軽石層のレンズ状薄層。分級の状態、重鉱物組成、斜方輝石の化学組成などの特徴は、羊蹄第3軽石・スコリア層 (Yo.Ps-3) (柏原ほか、1976) の下半部によく一致する。粒径は4mm以下のものがほとんどである。
- VII 暗灰色のスコリア質土層。1-3mm大のスコリア粒を多数含んでいる。Yo.Ps-3の上半部のスコリア質火山灰層を多量に混入しているとみられる。
- VI 石器を包含する褐色土層。部分的に火山灰、スコリア粒を混入する。炭化物を特徴的に含んでいる。
- V 石器を包含する褐色土層。VIに比べスコリア粒がほとんど含まれない。
- IV 暗灰色のスコリア質火山灰層のレンズ状薄層。Yo.Ps-3の直上にしばしばみられるスコリア質粗粒火山灰層に似ている。このレンズ状の形態は、風成二次堆積の影響を受けたことを示す。
- III 黄褐色の火山灰質土層。スコリア質火山灰やSpflの風成二次堆積物を混入している。炭化物を含む。
- II 暗灰色のスコリア質火山灰層のレンズ状薄層。層厚は最大で3cm程度であるが、上部がやや粗粒なスコリア層からなる。IVと同様なYo.Ps-3の直上のスコリア質粗粒火山灰層と考えられる。
- I 褐色土層。最大2mm大の岩片を含む。まれに炭化物を含む。
- Iの層準の直上には、恵庭a降下軽石堆積物が層厚約2mで降下堆積し、さらに上位には樽前d降下軽石堆積物が重なっている。

(2) 重鉱物組成と斜方輝石の化学組成

石器包含層及びその上下層の9層準から試料を採取し (図46)、その重鉱物組成と斜方輝石の化学組成を検討した (表22、図47)。

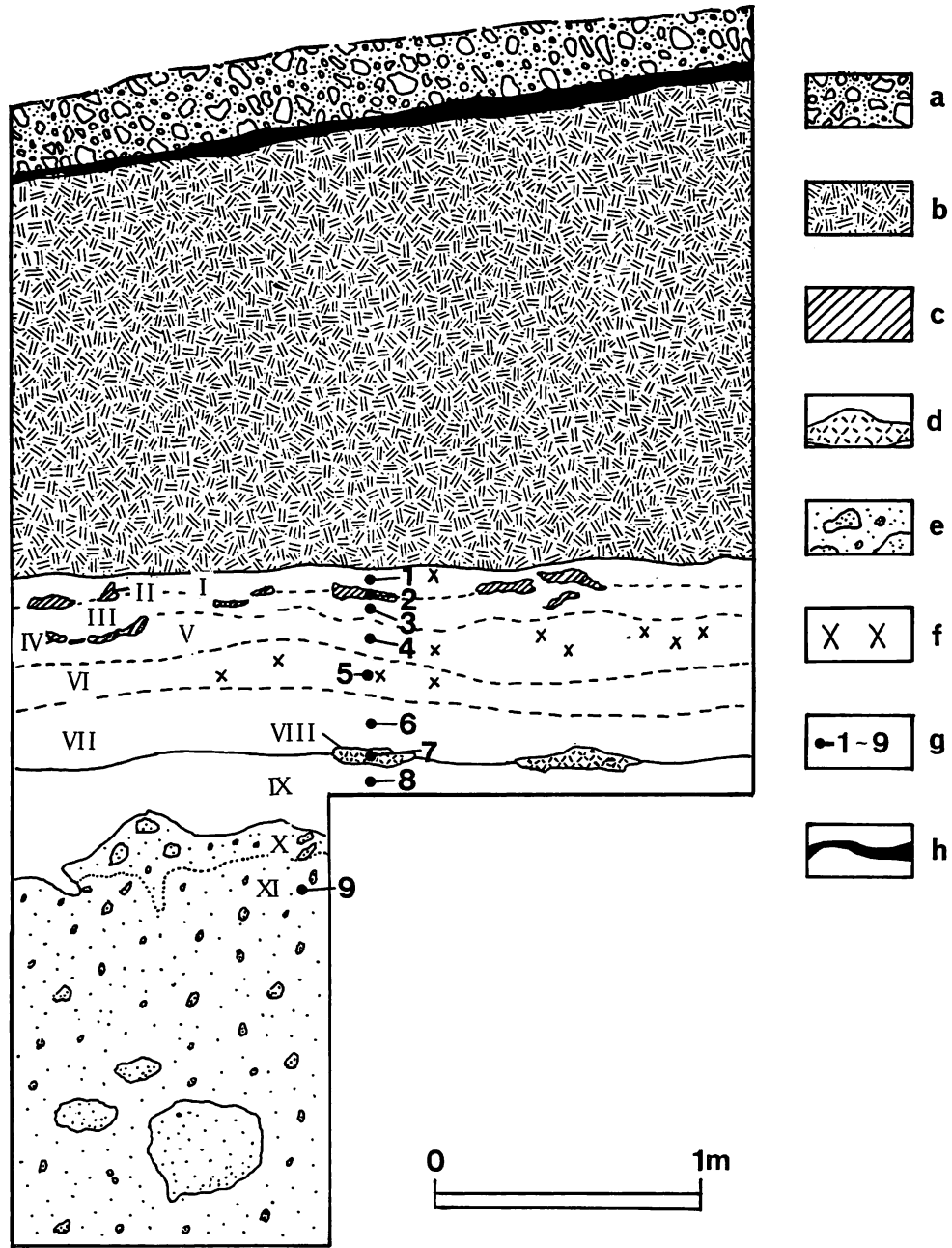


図46 美沢10遺跡土壌断面

a : 樽前 d 降下軽石堆積物; b : 恵庭 a 降下軽石堆積物; c : 暗灰色スコリア質火山灰; d : 羊蹄第 3 軽石・スコリア層 (Yo.Ps-3) の軽石の多い部分; e : 支笏軽石流堆積物 (Spfl) の軽石; f : 石器包含位置; g : 重鉍物組成・斜方輝石の化学組成測定用試料採取層準; h : 腐植層。

9 Spfl 16%以上の褐色角閃石を含んでいる。斜方輝石の $Mg / (Mg + Fe)$ (以下 Mg 値と呼ぶ) は0.45から0.69の広い組成範囲を示し、最頻値は0.46±の値でいちじるしく低い。

8 IXの層準に相当する。角閃石を3%程度含む。斜方輝石の Mg 値は0.62~0.70で最頻値は0.63±に集中し、Spfl より明らかに高い。

7 Yo.Ps-3 (軽石層) 角閃石を含まない。不透明鉱物に富んでいる。斜方輝石の Mg 値は0.60~0.73と高く、Spfl と比べて最頻値も著しく高い。

6~3 VIIからIIIに相当する。角閃石を含まず、斜方輝石の2倍近く含まれる。斜方輝石の Mg 値は6と5が0.60~0.73と高い組成範囲を示し、Yo.Ps-3特有の値を示すが、4と3は0.46~0.72と非常に広い組成を示す。最頻値は4、3とも0.63±程度であることから、多くはYo.Ps-3からの混入を示し、一部に0.46程度の著しく低いSpfl特有の輝石を混入したと考えられる。

2 Sco.Ash スコリア片が多く、角閃石を含まない。単斜輝石に富んでいる。斜方輝石の Mg 値は0.57~0.73とやや広いが、最頻値は0.70±で著しく高く、Yo.Ps-3よりも高い傾向がある。

1 Iに相当する。角閃石をごくまれに含む。斜方輝石の Mg 値は0.62~0.72と高く、Spfl とは明瞭に区別される。

表22 土壌断面の重鉱物組成

	Opx	Cpx	Hor	Opaq
1	58.4	22.8	01.0	17.8
2 Sco. Ash	43.8	11.2		44.9
3	46.2	24.1		29.7
4	54.1	17.4		28.4
5	52.1	21.0		26.9
6	46.7	26.7		26.7
7 Yo. Ps-3	36.5	21.2		42.3
8	42.6	18.1	03.2	36.1
9 Spfl	37.5	12.5	16.7	33.3

Sco. Ash: スコリア質火山灰

Yo. Ps-3: 羊蹄第3軽石・スコリア層

Spfl: 支笏軽石流堆積物

Opx: 斜方輝石; Cpx: 単斜輝石; Hor: 角閃石;

Opaq: 不透明鉱物

本地域の火山灰層の中で、最下位のSpflを除く他のテフラはすべてレンズ状であり、風成二次堆積の影響を何らかの形で受けたことは間違いない。それらのレンズ状テフラの中で図1のVIII層は、鉱物組成、斜方輝石のMg値の特徴からSpflとは明らかに異なる。美沢1遺跡調査報告によれば、Yo.Ps-3の斜方輝石の屈折率とMg値とは密接な相関があり、一方の測定によってもう一方を推定することができる(Deer et al, 1966)。今回得られたMg値の結果は、VIII層がYo.Ps-3に対比されることを示唆している。同様に、XI層のSpflの斜方輝石のMg値も美沢1遺跡調査で得られたSpfl中の斜方輝石の屈折率の測定結果と矛盾しない。斜方輝石のMg値の組成範囲から見る限り、図1のIX層より上位の地層は、ほとんどがYo.Ps-3とそれにとまなうSco.Ashおよびそれらの二次堆積物とみられる。ただしVとIII層中にはSpflの風成二次堆積物を僅かながら混入したと考えられる。

Spflの¹⁴C年代は30,000 y.B.P.以前とされており、Yo. Ps-3は27,280±1,410 y. B. P.以前とされていることから(大貫ほか, 1977)、本旧石器文化層の年代はそれらのテフラの年

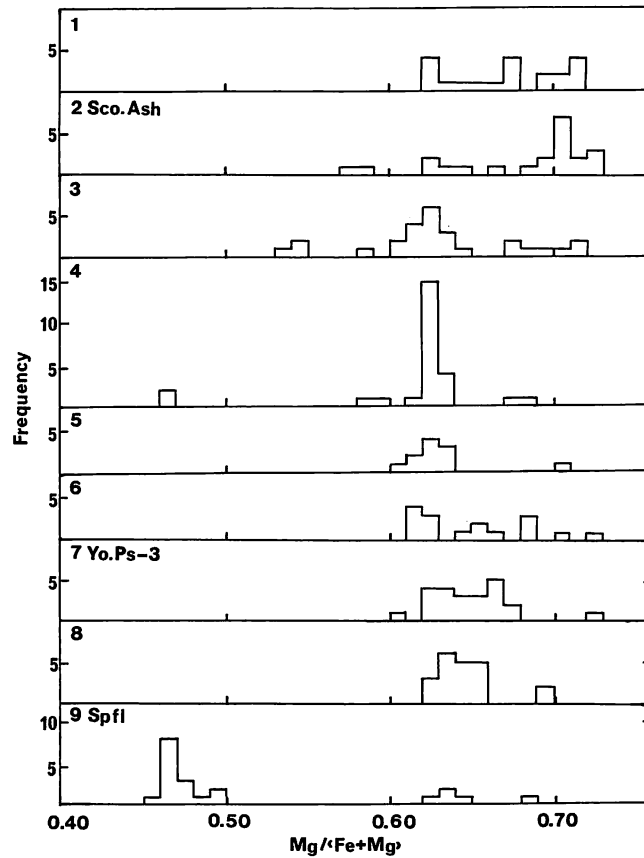


図47 土壌断面の斜方輝石のMg/(Mg+Fe) 値の頻度図。

1-9の層準番号は図46に同じ。

Sco.Ash: スコリア質火山灰; Yo.Ps-3: 羊蹄第3軽石・スコリア層;

Spfl: 支笏軽石流堆積物。

代以降とみられる。この層準は美沢1遺跡の石器包含層とほぼ一致している。

引用文献

Deer et al(1966): An introduction to the rock forming minerals. Long man, p.528.

柏原 信ほか (1976): 羊蹄火山のテフラ. 第四紀研究、15、75-86.

春日井 昭 (1978): 美沢1遺跡における En - a 下位のテフラ. 美沢川流域の遺跡群Ⅲ、513-517.

大貫康行ほか (1977) "N, Us-c" 降下軽石層の¹⁴C年代. 地球科学、31、87-89.

7 まとめ

美沢10遺跡は、これまで述べてきたように、旧石器時代から縄文時代後期にかけての複合遺跡である。しかしながら、今年度は流域沿いに広がると考えられる本遺跡のうちの一部しか調査していない。このため、今回の調査によって本遺跡の内容、性格などを全て明らかにできたとは言えない。従って、ここでは、おもに各時期における遺構、遺物の分布について、美沢川遺跡群やフレペツ遺跡群などの調査結果と比較し、本遺跡を解明するための手がかりとしたい。

(野中一宏)

(1) ローム質粘土層出土の石器群について

美沢10遺跡の Spfl 層上部から出土した15点の石核と剝片は、かつて美沢1遺跡(道教委1979)で発掘された石器群と出土層位、チャート・めのう、黒曜石など各種の石材を利用していること、定形的な石器が乏しく遺物量が少ないこと、遺跡が段丘の突端部に立地することなど多くの類似点をもっている。しかし、美沢1遺跡の石器群が水和層で18,500±1,000 y.B.P. と示され、祝梅三角山遺跡(千歳市教委1974)の石器群と比較されたのに対し、今回の水和層で16,100±1,000、17,000±900 y.B.P. という年代はそのまま三角山遺跡の石器群と比較できる値ではない。この値は、白滝13遺跡(吉崎昌一1961)やホロカ沢1遺跡(白滝団研1963)、そして最近調査された広郷8遺跡(北見市1985)の一部の年代に近いが、これらの石器群は石刃技法を技術基盤としており、美沢10遺跡の石器群とは様相を異にしている。

ここでは、美沢10遺跡下層の石器群が北海道の先石器時代石器群の中でどのような位置を占めるのか、その見通しについて述べたい。

近年、美利河1遺跡(道埋文1985 a)の層位や湯の里4遺跡(道埋文1985 b)、暁遺跡(帯広市教委1985)などの年代側定によって、北海道の細石刃石器群は峠下型のものが最も古く、その年代は14,000 y.B.P. 頃であることが明らかにされつつある。美沢10遺跡の石器群は、層位の上からもまた測定値の上からもそれらよりは古く位置づけられ、細石刃より古い段階の石器群であると予想される。

一方、美沢1遺跡の石器群は、Spfl層から出土したことやインバースリタッチのスクレイパーの存在などから祝梅三角山遺跡と比較されたが、両者の間には10kmたらずの至近距離でありながら石材選択のしかたに大きな違いがあり、年代測定値にもかなりの差がある。今回の美沢10遺跡の資料の中には完成された道具はみられないが、出土層位、石材選択のしかたでは美沢1遺跡と強い類似性がみられ、年代測定値には差があるものの、基本的には同一の石器群とみなしうるものである。

そこで、15,000~18,000 y.B.P. の石器群はというと、白滝13遺跡、ホロカ沢1遺跡などで代表されるいわゆる前期白滝石器群や最近調査されたナイフ形石器をもつ広郷8遺跡の石器群

があげられる。しかし、これらの石器群はいずれも石刃技法を技術基盤としており、黒曜石原産地に近いせいか石材は圧倒的に黒曜石が多い。美沢1遺跡や美沢10遺跡では今のところ石刃技法はみられないが、今後その存在が確認される可能性は十分予測される。ただし、千歳・苫小牧周辺は石器の原材料となる石の乏しい地域であり、その追及は決して容易ではないだろう。また、段丘の突端部に小規模な遺跡が分布するパターンもこの地域での特色といえるが、それゆえに美沢10遺跡や美沢1遺跡などの石器群の組成を明らかにすることも同様に容易ではないものの、道南と道東北をつなぐ意味で今後も新しい石器群の発見に努めたいと考えている。

(畑 宏明)

(2) 縄文時代早期の遺構、遺物の分布について

今回の調査からは、土壌4個の遺構と土器2,356点およびこれらに伴うと考えられる石鏃、つまみ付ナイフなどの石器等が検出された。土器はb-2~4類に細分でき、2・3類(平底土器群)と4類(尖底土器群^{註1})では出土量や分布域が大きく異なっている。

1) 土壌について

前述のごとく、いずれも台地縁にあり、石器制作に関連すると考えられる1個(P-28)を除き、用途は不明である。このうち、P-4・28は出土遺物からみてb-3類期に属すると考えられる。

2) 土器について

早期に分類される土器群は全体の32%を占めており、前期、中期のものに次ぐ。この中ではおもに、捺糸文が施された尖底土器群が58%と最も多く、平底土器群は29%、他は細分不能の小破片である。平面および垂直分布では平底土器群と尖底土器群とは差が認められる。前者は斜面中腹に多く分布しており、台地上における垂直分布ではTa-d₁層上面付近から出土している。一方、後者は台地上に多く分布し、おもにII黒層中位~下位から出土しているが、その上位からも検出されるケースがみられ、前者に比べ、垂直分布における移動が大きい。台地上における分布を細かくみると(図48)、平底土器群は基本区画のCライン付近と台地縁辺部に集まっており、台地縁辺部では3類が多くみられる。一方、尖底土器群は台地縁と台地縁から20~30m離れた地区に集中している。これらの接合関係をみると、斜面出土のものに5~10mと離れたものが接合するケースがみられるが、台地上では同一スポット内のものに限られ、石錘や礫のようにかけ離れたものが接合する例はない。

3) 石器等について

この時期に伴うものとしては、A₃類石鏃(1~18)とつまみ付ナイフの一部(68・71~73)などがある。このうち、A₃類石鏃では、美沢川遺跡群の2・3類期と4類期の住居跡出土の

資料と比較して、柳葉形(1~4)、木葉形(5~15)のものが平底土器群に、五角形のもの(16~18)が尖底土器群に伴うと考えられる。これらの平面分布は、柳葉形のもの斜面に、木葉形、五角形のもの台地上に多い。台地上に分布するものの垂直分布をみると、木葉形のは下位~中位に、五角形の中位に分布する傾向が認められ、土器群の分布とほぼ一致する。つまみ付ナイフでは、主剥離面の右側縁に背面からのブランディングを施して身部を薄くする製作方法によって作られているものがこの時期に伴うものと考えられる。これらは、いずれも台地上に分布しており、II黒層の中~下位から出土している。美沢川遺跡群では、これら



図49 縄文早期の土器分布頻度

の石器のほかに、この時期のものとして、蛇紋岩を多用した擦り切り石斧や三角柱状の礫の稜を擦ったすり石などが住居跡に伴って検出されているが、本遺跡からは、これらの礫石器は出土していない。

4) 小括

今回の調査で検出された土器、石器等については、美沢川遺跡群のものと大差ないようである。しかし、台地上から検出された土壌は、そのあり方や機能について不明な点が多く、今後この時期の集落や墓のあり方などとともに十分に検討していかなければならない。また、本遺跡は大規模な集落が発見された美沢1・2遺跡、美々5遺跡と立地条件が近似しており、集落が存在する可能性が高い。今後、本遺跡および同様の地形に立地する遺跡を調査する際には、この存在を想定しておく必要性があろう。

註1 b-4類には、吉野遺跡のV群土器、口縁部に微隆起線がめぐり、捺糸文が施された平底土器群も含まれているが、今回の調査では、この種の土器は出土していないことから、ここでは便宜的に尖底土器群(b-4類)と平底土器群(b-2・3類)とに区分した。

(3) 縄文時代前期の遺構、遺物の分布について

縄文時代前期に属するものには、14個の土壌と土器3,354点およびこれらに伴うと考えられる石鏃、北海道式石冠、石錘などの石器などがある。

1) 土壌について

いずれも台地上にあり、その機能については不明である。これらはいずれも楕円形を呈しているが、規模、構造、覆土の堆積状態、出土遺物などから4つに分けられる。

- ① 小型で浅い土壌 2個(P-22・29)あり、H-1北側のb類土器が集中する地区に分布している。覆土は黒色土を主体として1・3層に単純に分かれ、上部から石錘、礫などがまとまって出土している。
- ② 中型で浅い土壌 2個(P-7・14)あり、台地縁に分布している。覆土は黒色土1層で、若干いびつな楕円形のものである。P-14の上部からは、II群b類土器の同一個体の破片が粉々になった状態で検出された。
- ③ 中型の比較的深い土壌 本類が最も多く、8個(P-1・2・8・15・32・36・37・40)が属する。このうち5個は台地縁に、3個は台地縁から20~30m離れた地区に分布している。覆土は黒色土を主体に単純に1・2層に分かれるもので、流れ込みと考えられる遺物しか出土しない一群である。
- ④ 比較的大型の土壌 2個(P-20・27)あり、H-1の北側のb類土器が集中する地

区で切り合っている。覆土は①～③のグループとは異なり、 $Ta-d_1 \cdot d_2$ 混じりの土層が堆積しており、P-27の墳底には有機質を含む黒色土が薄く認められる。P-20の北側墳口付近からは、北海道式石冠、石錘、礫が重なり合った状態で検出された。

2) 土器について

検出された土器ではこの期に属するものが最も多く、全体の42%を占めている。これらは、ほぼ調査区全域に分布しているが、特に、H-1北側の台地上と調査区西側の斜面上部に集中している(図50)。垂直分布では、Ⅱ黒層の中位に最も多く分布しているが、その上位および下位からも出土しており、Ⅰ群b-4類やⅢ群b類土器と明瞭に区別される地点は少ない。これらはa-2類とb類に細分されるが、a-2類(中野式土器)は全体の1%にも満たない。しかも、これらは同一個体の破片(図29-62)で、台地縁からまとまって出土したものである。

b類は、前述のごとく、植苗・大麻V式(A・B類)と円筒下層式(C類)に細分される。植苗・大麻V式土器の中では明瞭に型式区分できなかったが、胎土に砂礫を若干含み、地文がはっきりと施文されたもの(A類)とA類より砂礫を多く含む胎土で、地文がはっきりしないもの(B類)がみられる。b類の中で、この3種に分類されるものは、全体の28%しかなく、72%は細分不能の細片または小破片である。細分できたものでは、A類24%、B類74%、C類2%の割合で、B類が最も多い。これらの分布では、B類がH-1北側に、A・C類が台地縁に集中する傾向が認められ、同一個体の破片がまとまるスポットが、A類では台地縁に2か所、B類では台地縁に2か所、H-1北側に3か所ある(図51)。

A・B類では、胎土や地文の現れ方に違いが認められるほか、口縁部に貼付される幅広の隆帯をもつもの(65-67)がB類にないことや内面に縄文が施される率がA類に多いなどの差がある。しかし、地文の原体や施文法に大きな差は認められない。

3) 石器等について

この時期に伴うと考えられるものには、石鏃、北海道式石冠、石錘などがある。また、本遺跡の特徴とも言える、多量に検出された片麻岩の偏平礫もこの時期に伴うものと考えられる。

石鏃では、a-2類に伴って出土する三角形鏃(A₄類 19-25)が本遺跡からも検出された。これらは、基部が内湾する黒曜石製のもので、多くは斜面下部から出土している。

北海道式石冠や石錘は、石器群の中で最も多量に検出されたものであるが、いずれも破損品または小破片が90%前後を占めており、完形品の出現頻度は極めて少ない。しかし、個体の出土量を復元しても、他の石器より出土頻度は高いものと思われる。これらは、いずれも台地上に多く分布しており、おもにⅡ黒層の中位～下位から出土している。このうち、石錘は、Ⅱ群b類土器の分布と同様に、台地縁とH-1北側に集中している。石錘の中には、複数が重なり合った状態で1か所から検出されたものもあり、これらはセットとして使用されたものであろう。また、破損品および小破片のものは、ほとんどが火熱を受けている。接合関係では、両

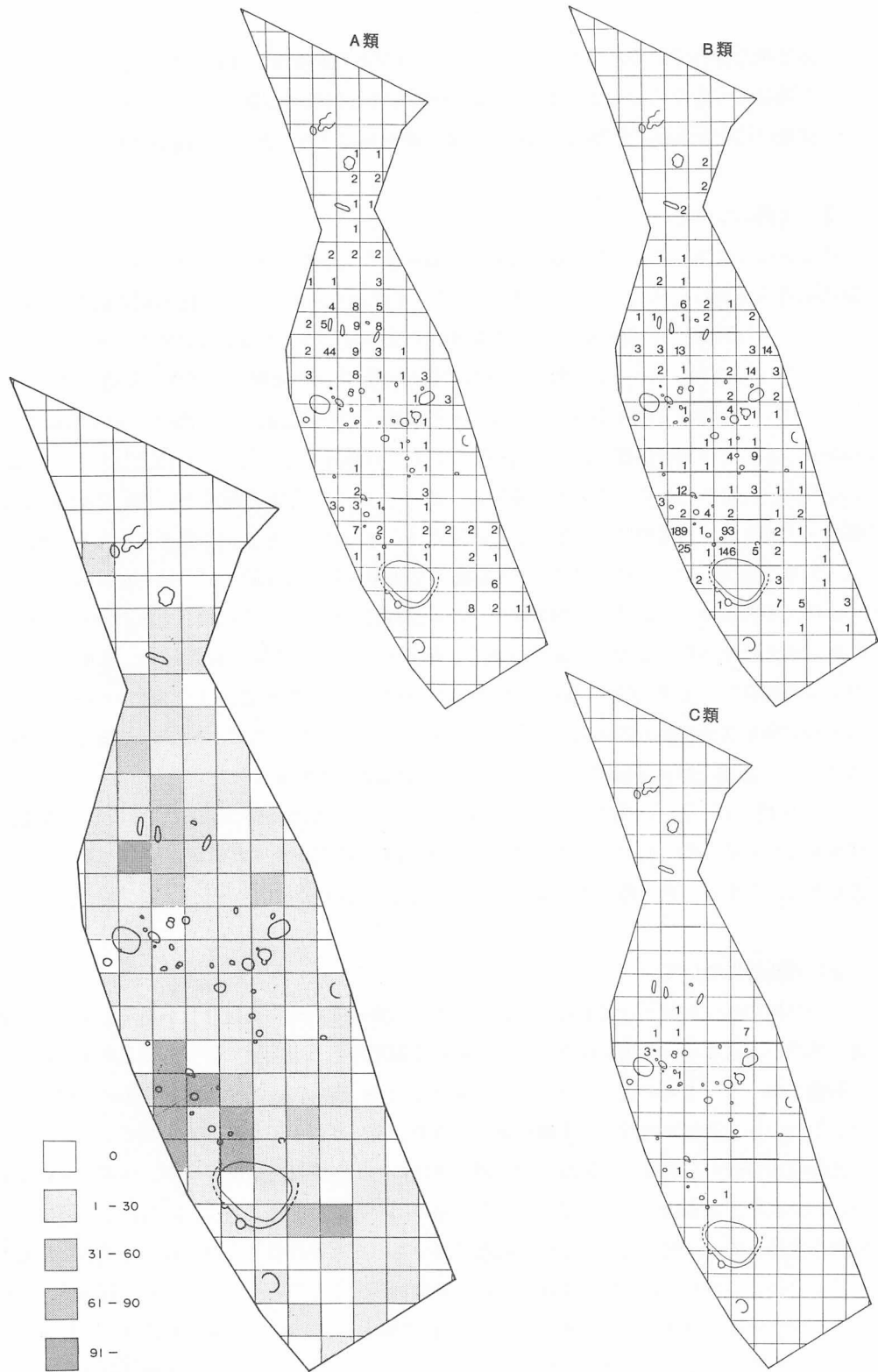


図50 縄文前期の土器分布頻度

者共に、かけ離れたものが接合するケースがみられ、破片の移動が土器や他の石器に比べ大きい（図52）。石材には、石冠では砂岩、安山岩、花崗岩が用いられているが、このうちでは、砂岩が最も多い。一方、石錘では100%に近い状態で片麻岩が用いられている。

これらの石器のほかには、P-20・22から出土した定形的なスクレイパーや石槍またはナイフ、つまみ付ナイフ、擦り切り石斧、台石・石皿の一部に、この期のものが含まれていると考えられる。また、江別市大麻6遺跡の同時期の住居跡からも多量に検出されている掌大程度の焼成粘土塊が目目をひく。これらは、黄褐色を呈し、焼成温度が低いためか非常にもろいものである。しかし、美々5遺跡からこの時期のものと考えられる足形付土版が出土していることから、これらの表面をていねいに観察したが、整形のさいの指跡と思われるもの以外は認められなかった。

このほか、本遺跡からは多量の礫片が検出されており、ほとんどが火熱を受けている。このうち、35%は石錘の石材として用いられている片麻岩の転礫で、台地縁に濃密に分布している（図54）。これらについてもこの時期に属するものであろう。片麻岩以外の礫では、泥岩、砂岩、

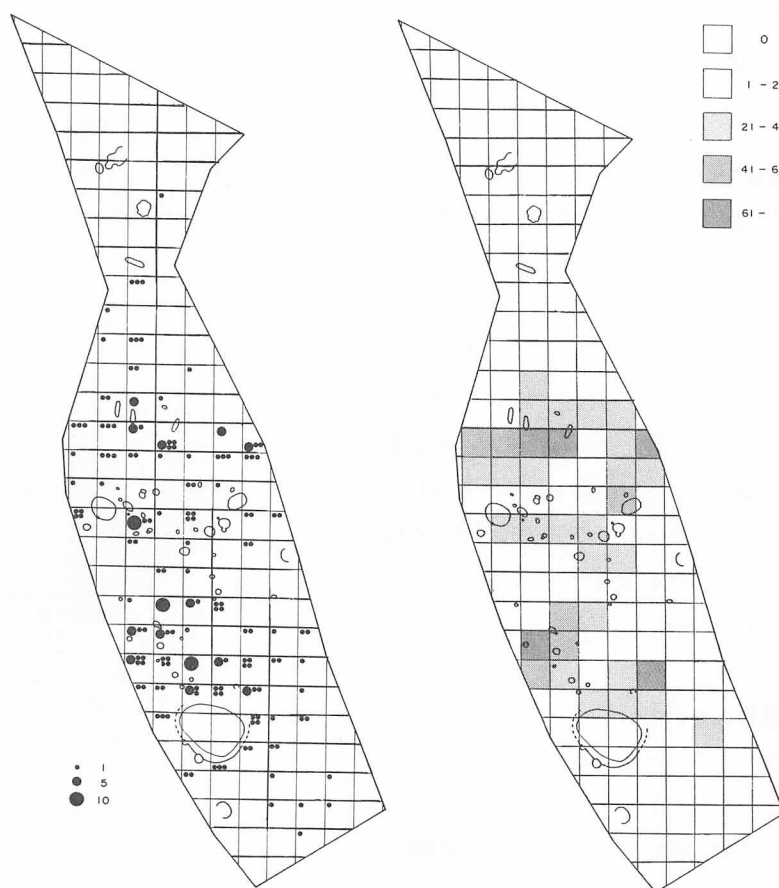


図54 石錘、礫・礫片の分布頻度

安山岩などがみられ、片麻岩の礫を含めて、50m以上離れたものが接合する例が多数みられ、石錘や石冠と同じような状態を示している。(図53)

(4) 縄文時代中期の遺構、遺物の分布について

この時期に属するものは、住居跡 5 軒、土壇 9 個の遺構と 2,636 点の土器およびこれらに伴うと考えられる石器等である。

1) 遺構について

前述のごとく、いずれも台地上に分布している。住居跡はⅢ群 b-2 類期と考えられるもので、長径11mほどの卵形をした大型住居 1 軒と楕円形の中型住居 2 軒、小型の円形住居 2 軒からなる。これらの住居跡が同時期の所産と考えられるにもかかわらず、規模や構造に差が認められるのは、時間差はいうまでもなく、文化伝播の違いや集落内における構造物の機能などに起因するものであろう。土壇は大部分が円形を呈し、比較的浅いものばかりで、用途についてはいずれも不明である。

2) 土器について

この時期に属する土器は、全体の31%を占め、a類と b-1~3類に細分される。このうち55%が b-2類で、a類、b-1・3類はそれぞれ1%ほどしか出土しておらず、他は細分不能の破片である。これらは、おもに台地上から検出されており、台地縁から10~20mほど離れた地区の調査区中央部に集中している(図55)。垂直分布では、Ⅱ黒層の上位から出土するものが多いが、その下位から出土しているものもあり、Ⅱ群土器と明瞭には区分できない。

3) 石器等について

この時期に伴うと考えられる石器群には、A₇類石鏃の一部や砂岩製の多面砥石などが考えられるが、美沢川遺跡群においてもこの時期の石器組成は、あまり明らかではなく、今回の資料の中でも明確にはできなかった。

(野中一宏)

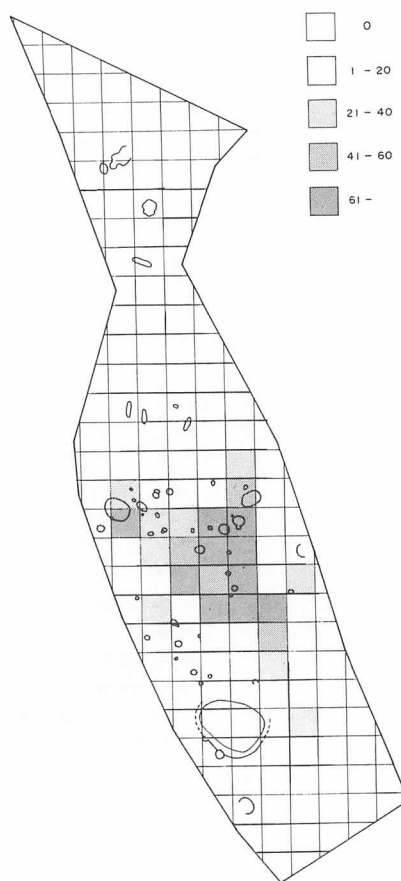
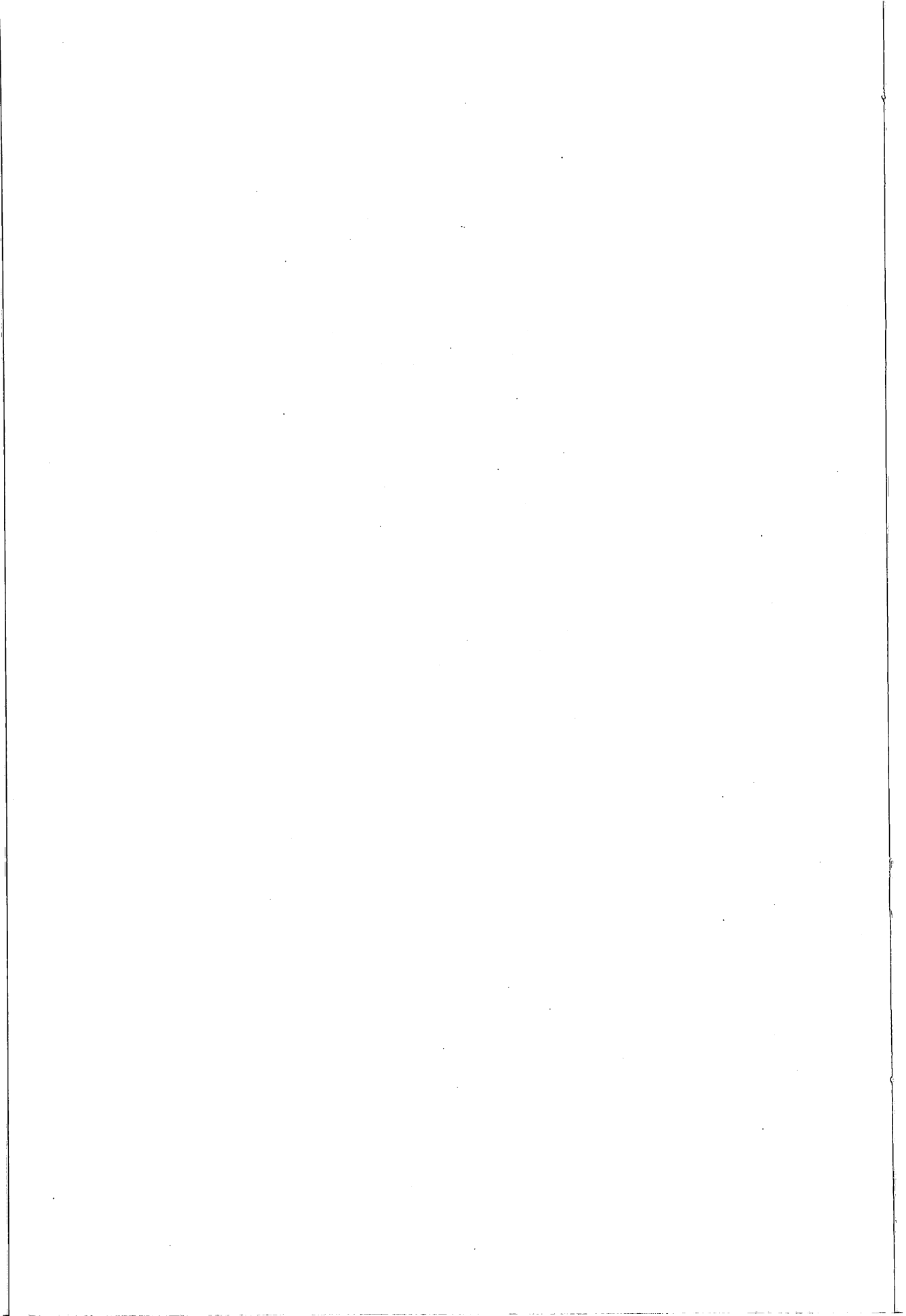


図55 縄文中期の土器分布頻度

写真図版





△①遠景（北東から）



△②近景（斜面部：南から）

美沢10遺跡の調査

—調査前風景—

③近景（平坦部：北から）▽





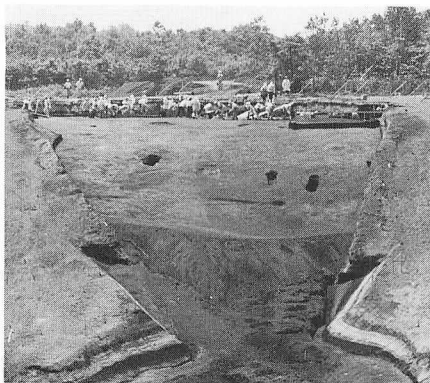
△①斜面部調査風景（北から）



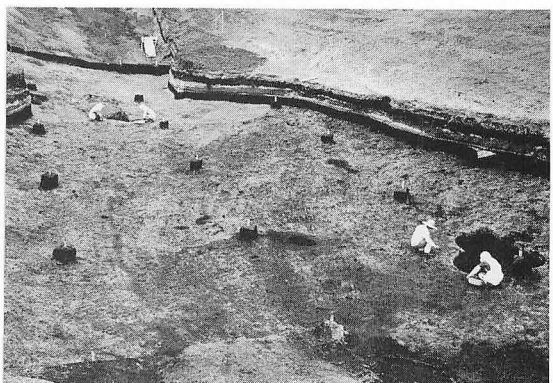
△②平坦部調査風景（南から）△



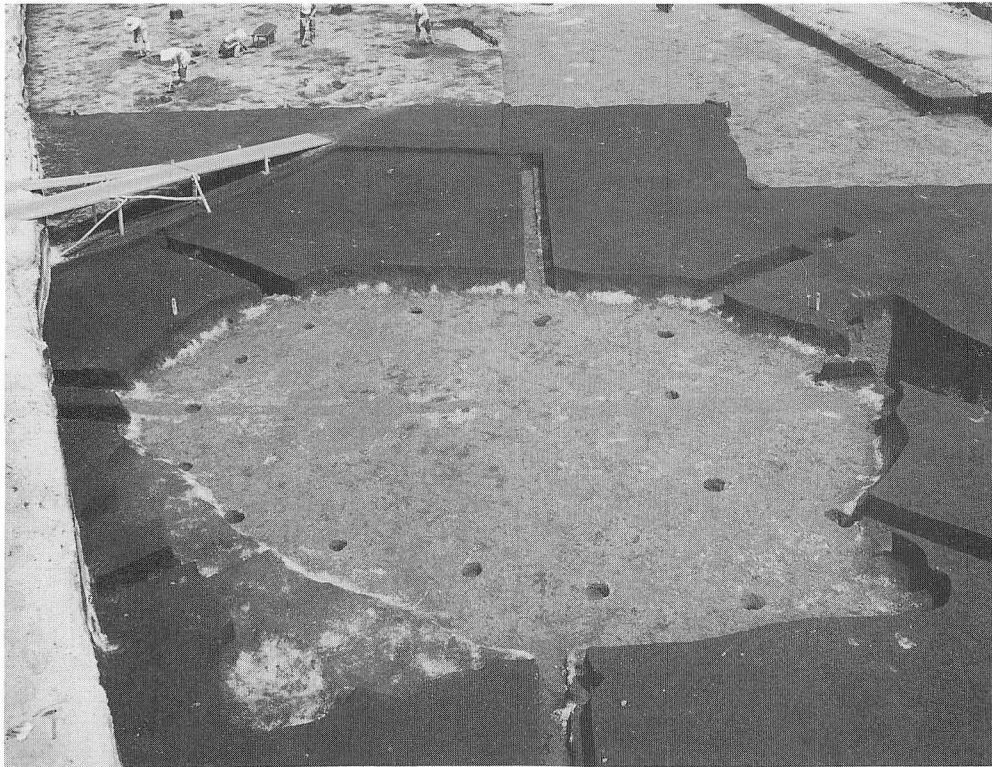
③平坦部（南から）



△④斜面上部（北から）



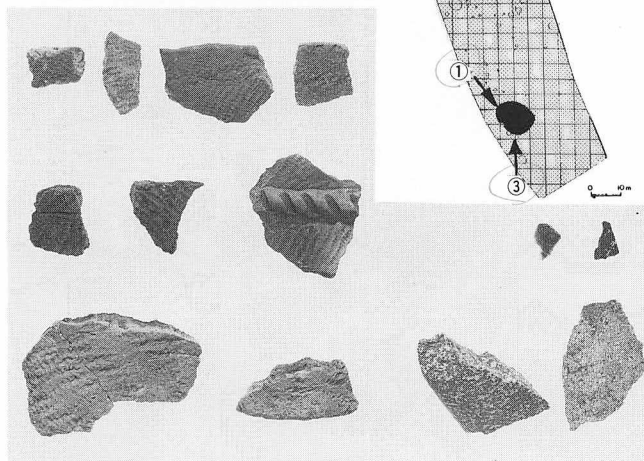
△⑤斜面下部（北から）△



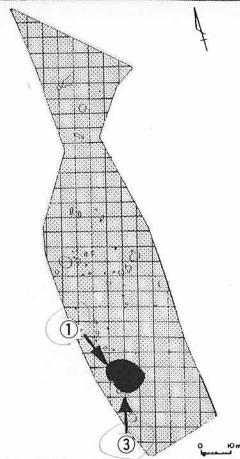
△①H-1 (南から)

住居跡(1)

—大型住居跡 (H-1) —



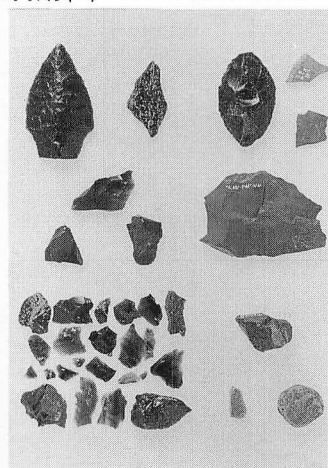
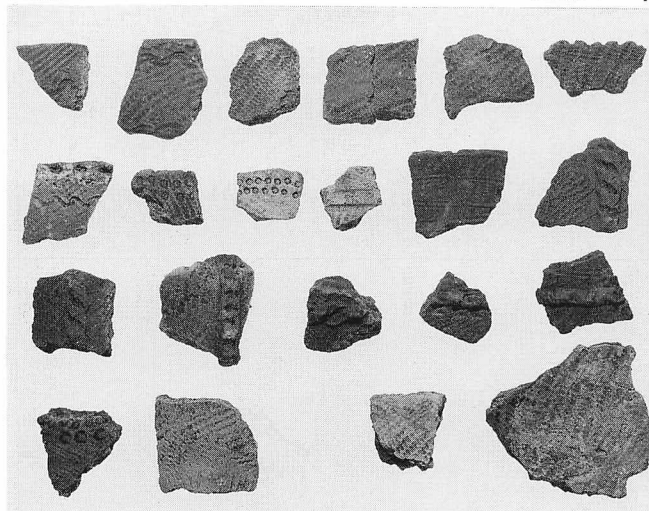
△②床面の遺物



△③遺物出土状況 (北西から)

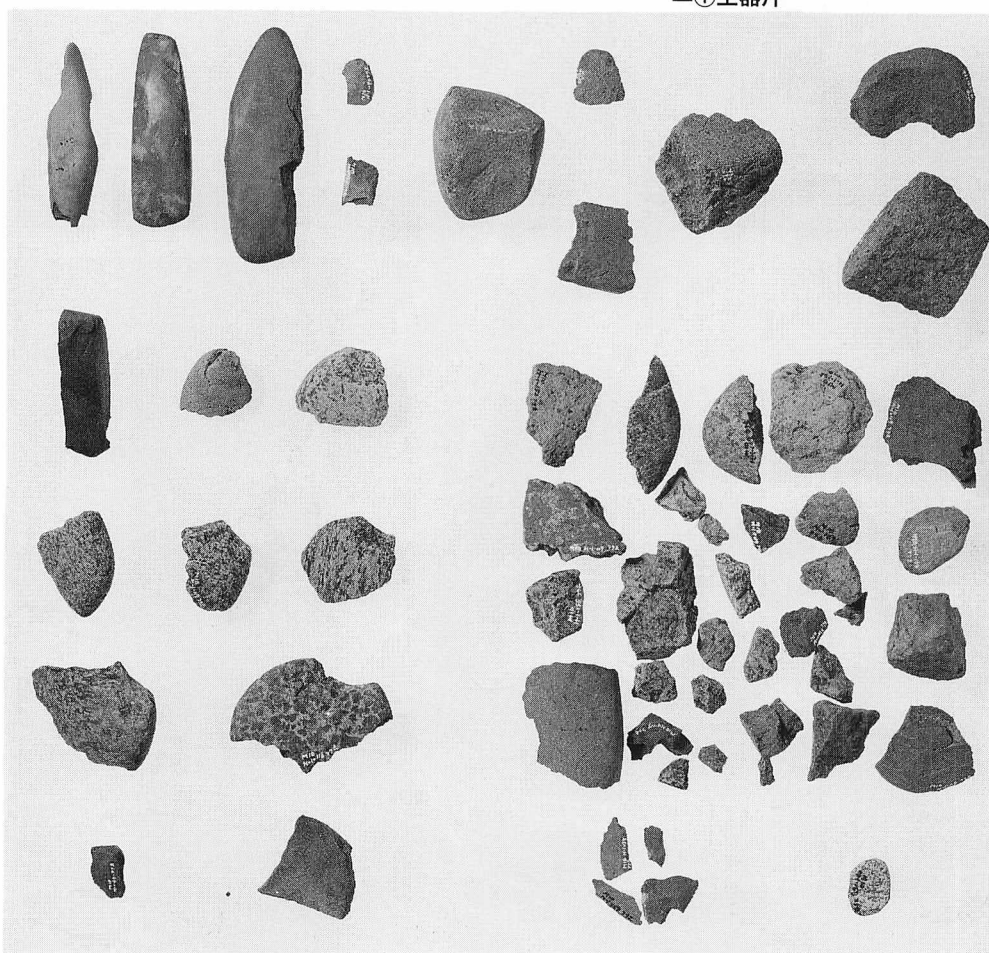
図版 4

図版 4 住居跡(2)-H-1 覆土の遺物-



△②剥片石器△

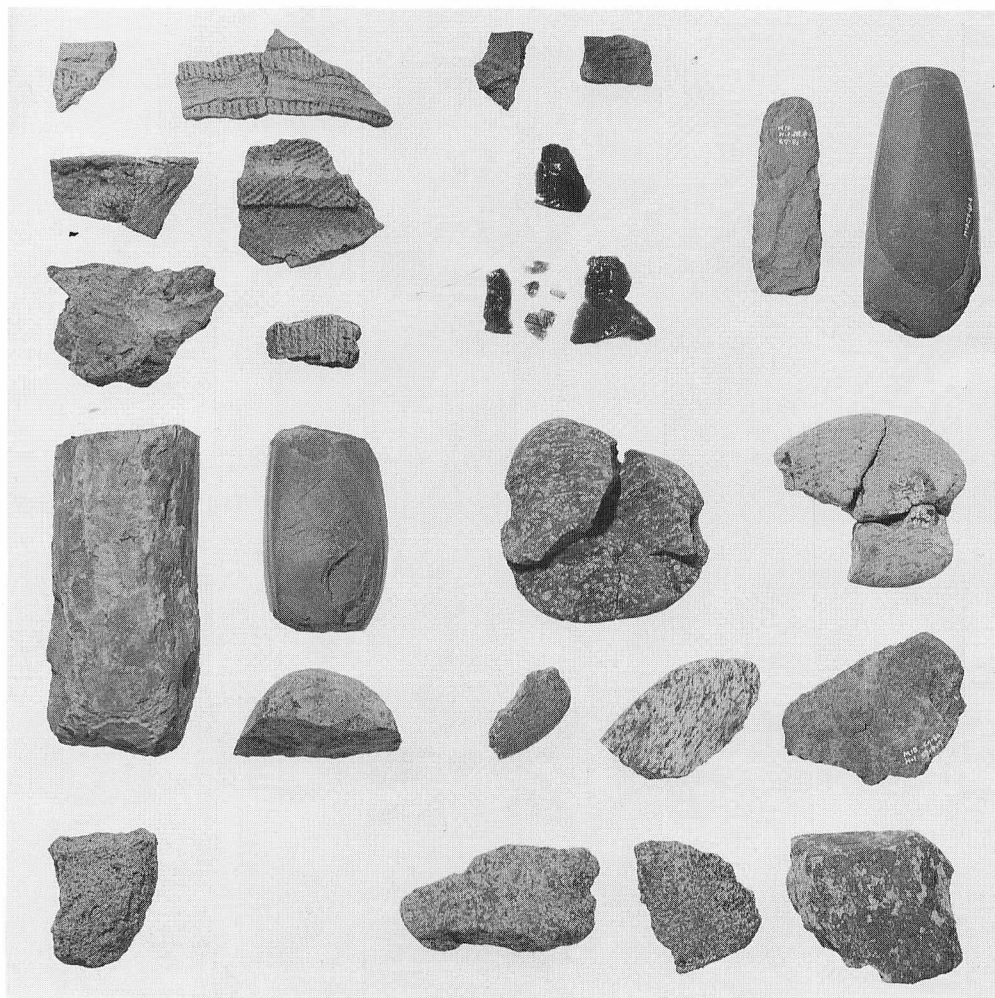
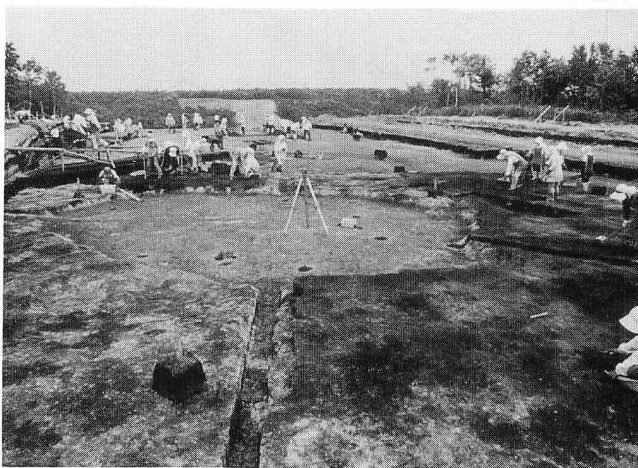
△①土器片



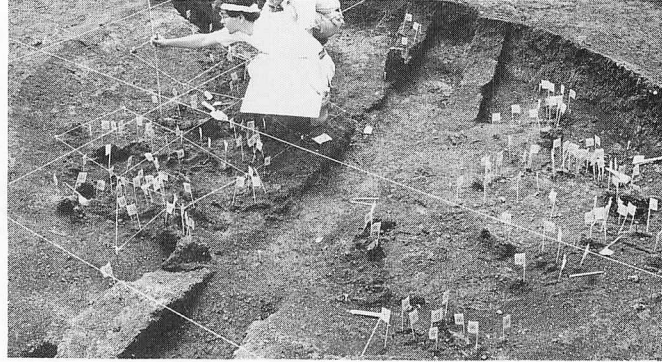
△礫・礫石器

①調査風景 (南から)▷

—H-1 排土の調査—

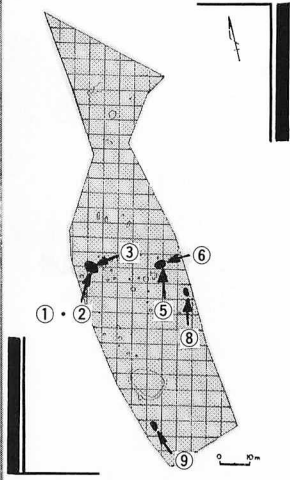


△②H-1 排土の遺物

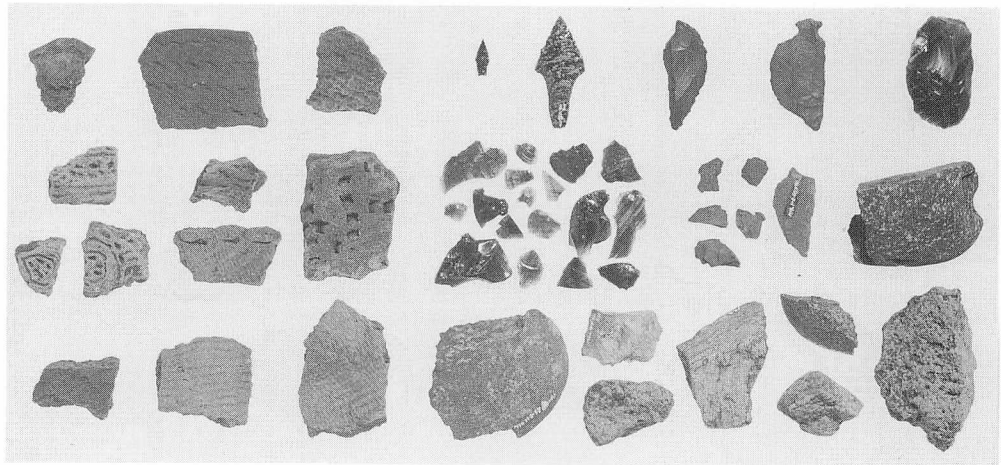


②H-2 炭化材実測風景△

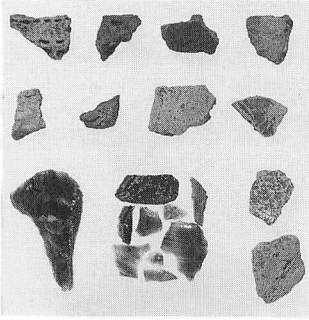
△①H-2



△③H-2 炭化材出土状況



△④H-2 の遺物

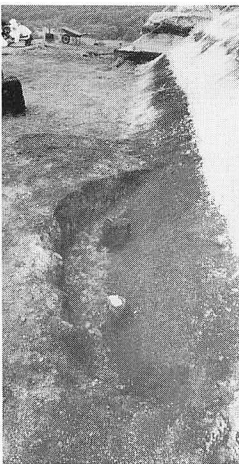


△上：⑤H-5 調査風景
下：⑦H-5 の遺物

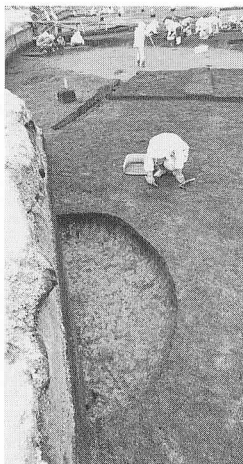
⑥H-5 炭化材出土状況△

住居跡(5)

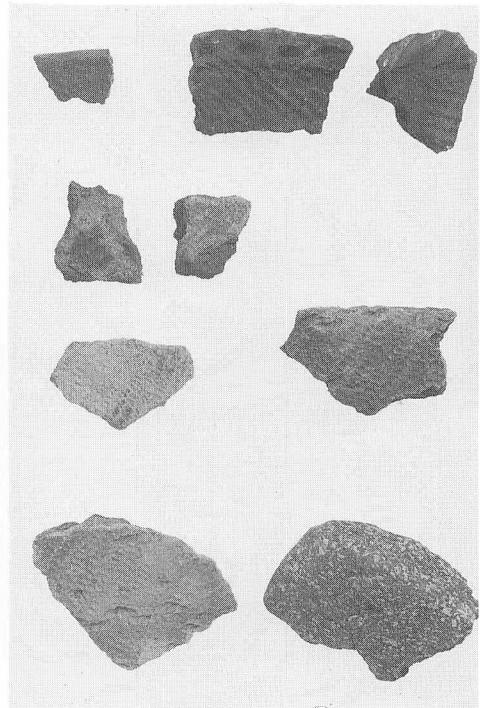
—火災住居跡とその他の住居跡 (H-3・4) —



△⑧H-4



△⑨H-3

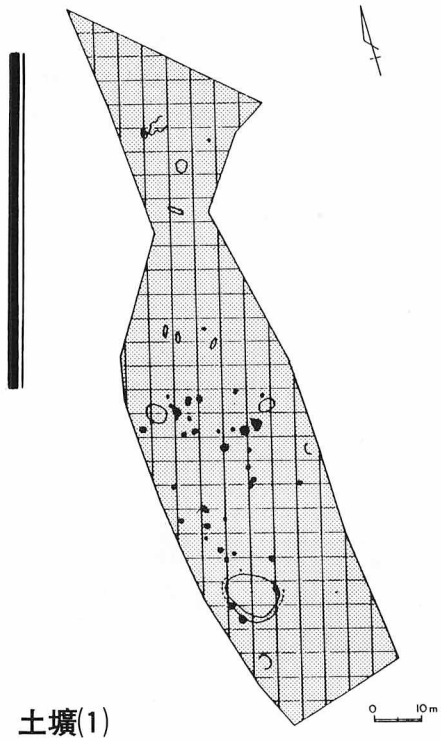


⑩H-4 の遺物△

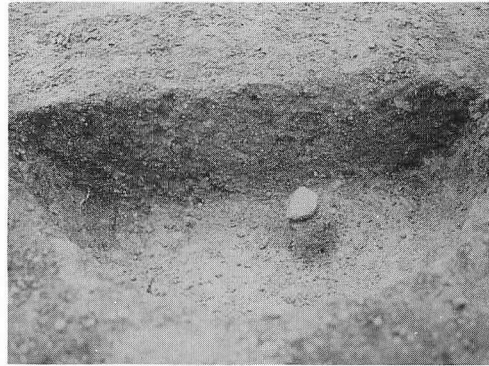
図版 8



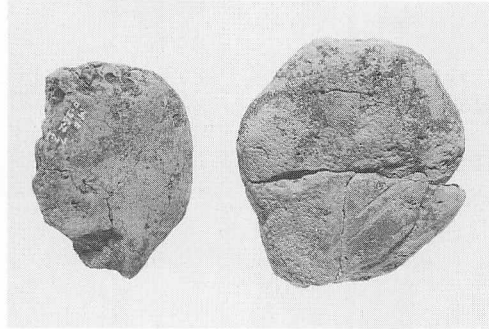
△①土壌群 (北東から)



土壌(1)



△②P-26遺物出土状況

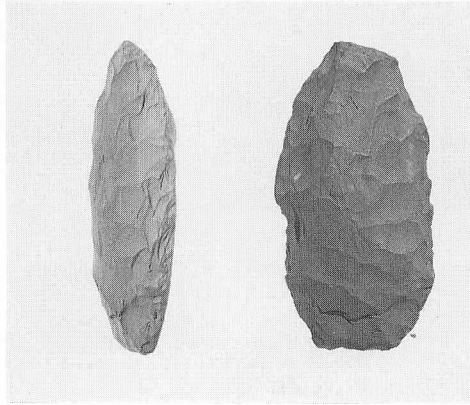
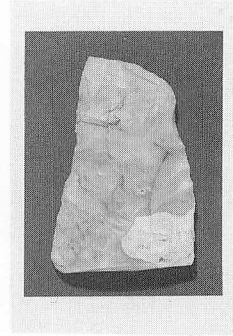
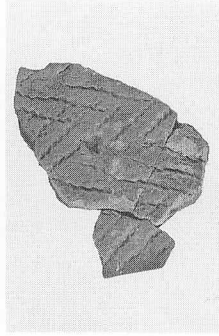


△③P-26の焼成粘土塊



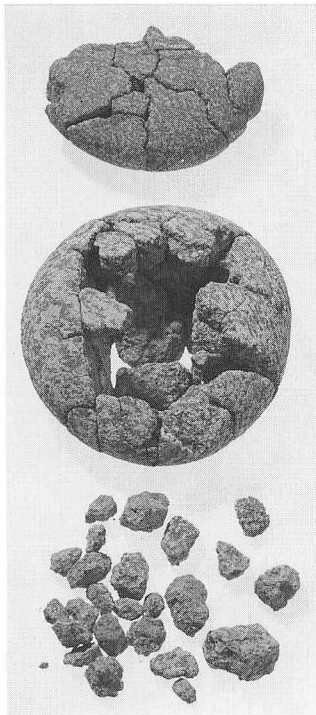
△①南から

左：②土器片
右：③ナイフ

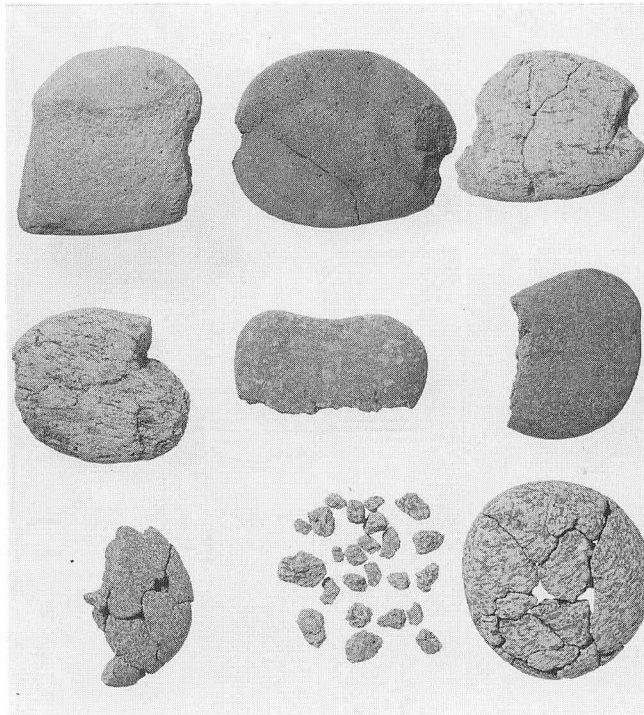


④スクレイパー▷

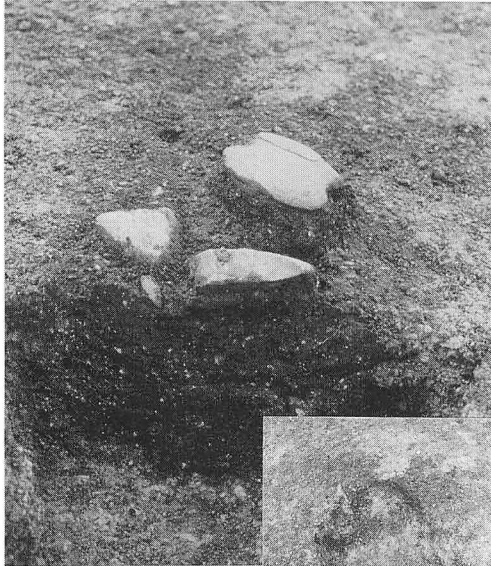
土壙(2) —P-20と遺物—



△⑤礫接合資料

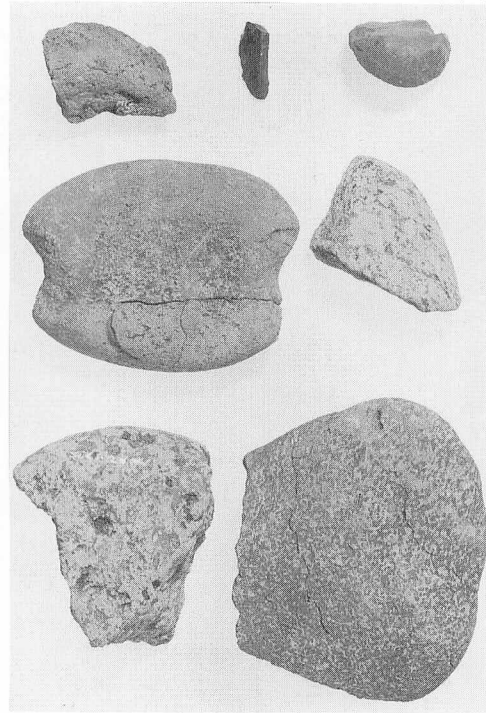


⑥礫石器△

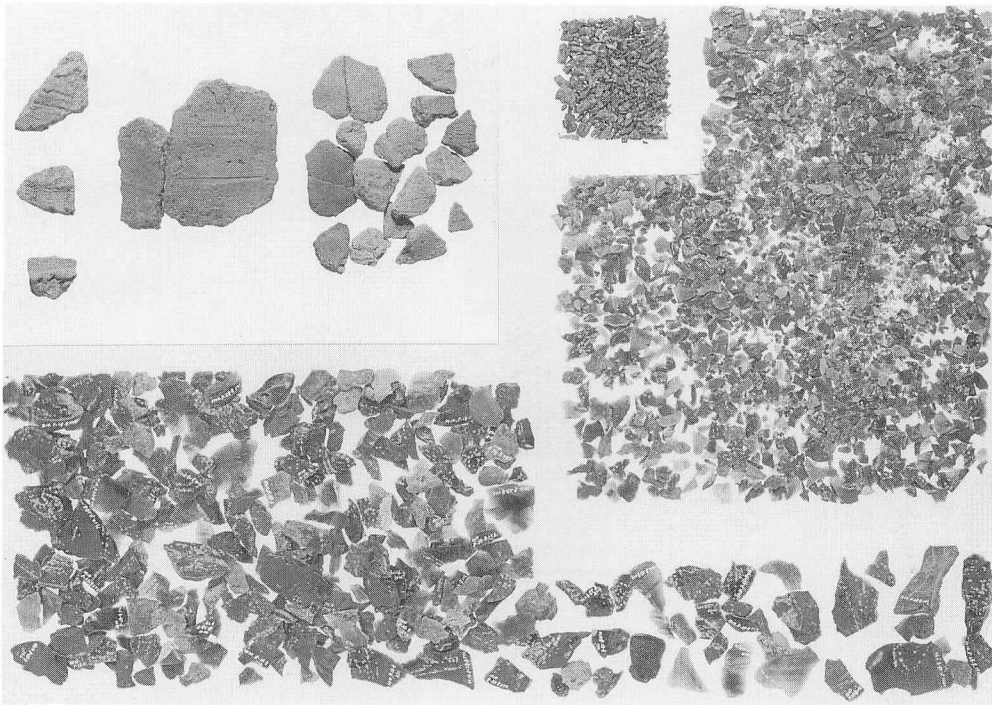


△①P-22遺物出土状況
(南から)

②P-22▷
(南から)



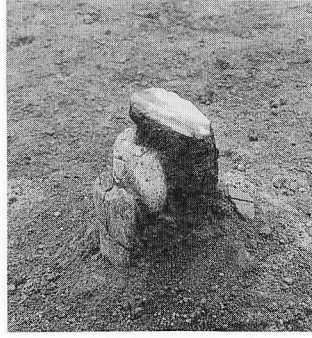
△③P-22の遺物



④P-28の遺物



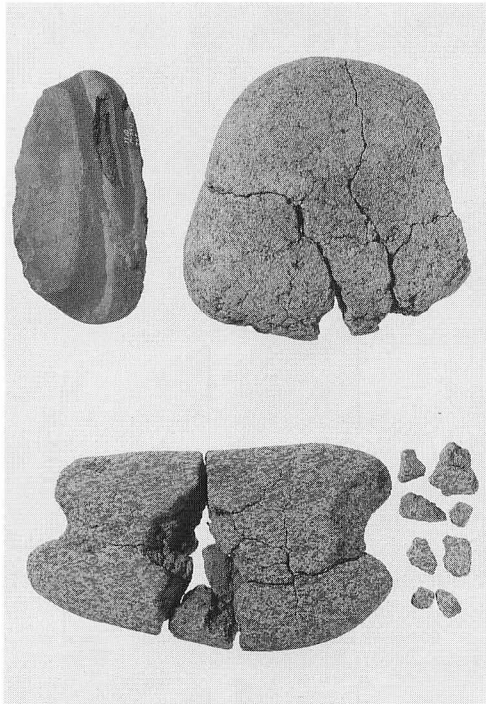
①



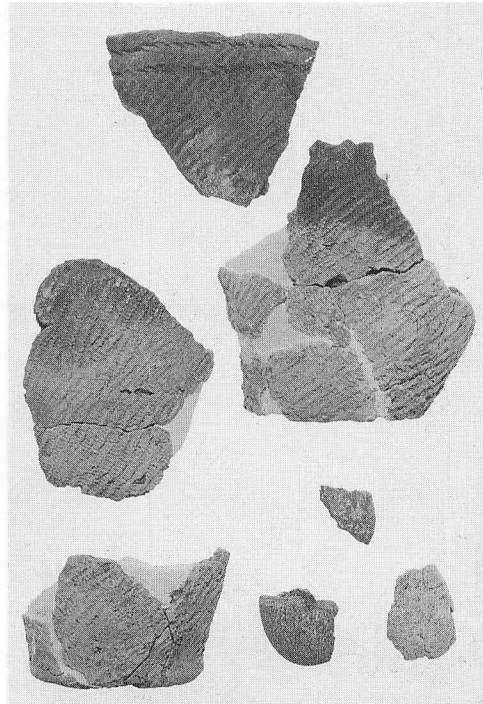
②



③

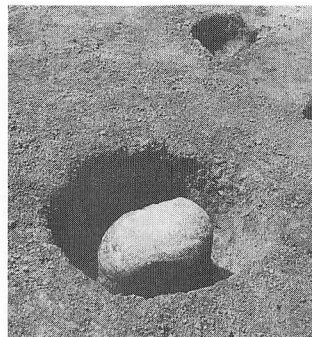


④

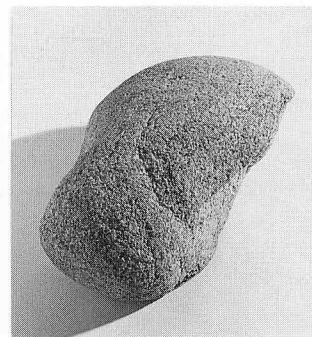


⑤

- ①P-28遺物出土状況（東から）
- ②P-29遺物出土状況（西から）
- ③P-36遺物出土状況（北から）
- ④P-29の遺物
- ⑤P-36・39の遺物
- ⑥P-42遺物出土状況（北東から）
- ⑦P-42の遺物

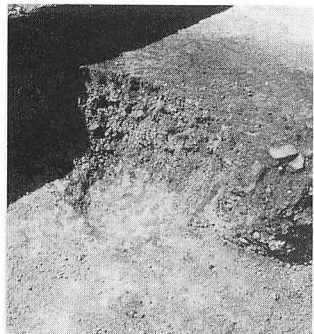


⑥

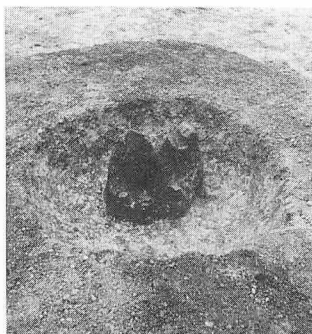


⑦

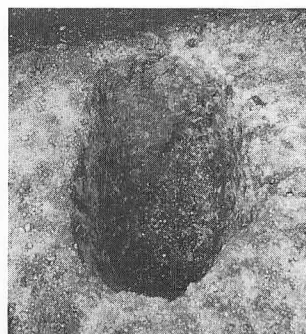
図版12



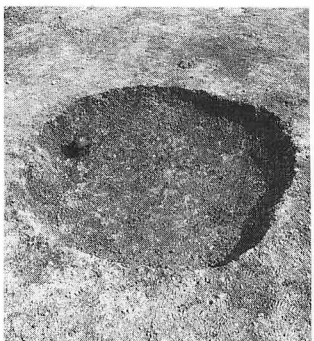
△①P-1 (南東から)



△②P-3 (西から)



△③P-8 (南から)



△④P-10 (北から)

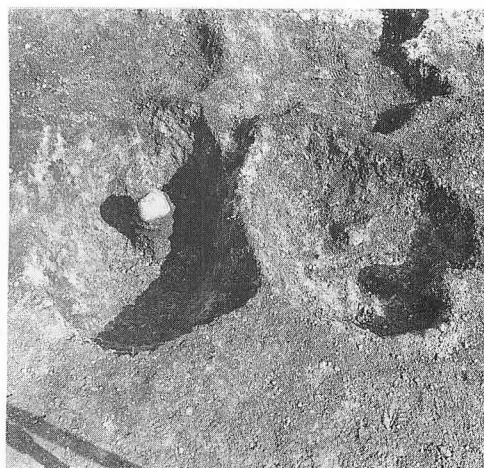


⑤P-4・5 (東から) △

土壇(5)



△⑥P-12・13 (北東から)



⑦P-14・15 (西から) △



△①P-23 (東から)



△②P-20・27 (北西から) △



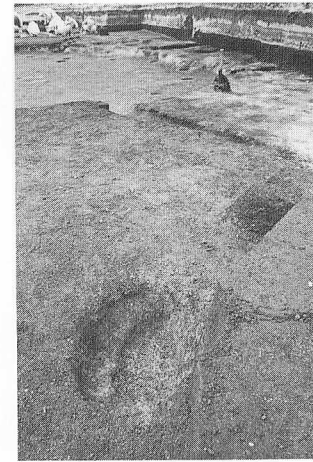
土壌(6)



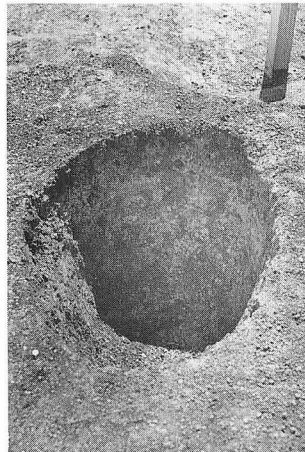
△③P-30 (北から)



△④P-31 (北から)



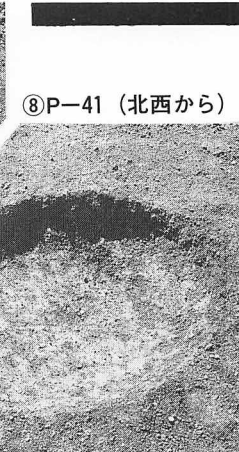
⑤P-32 (北から) △



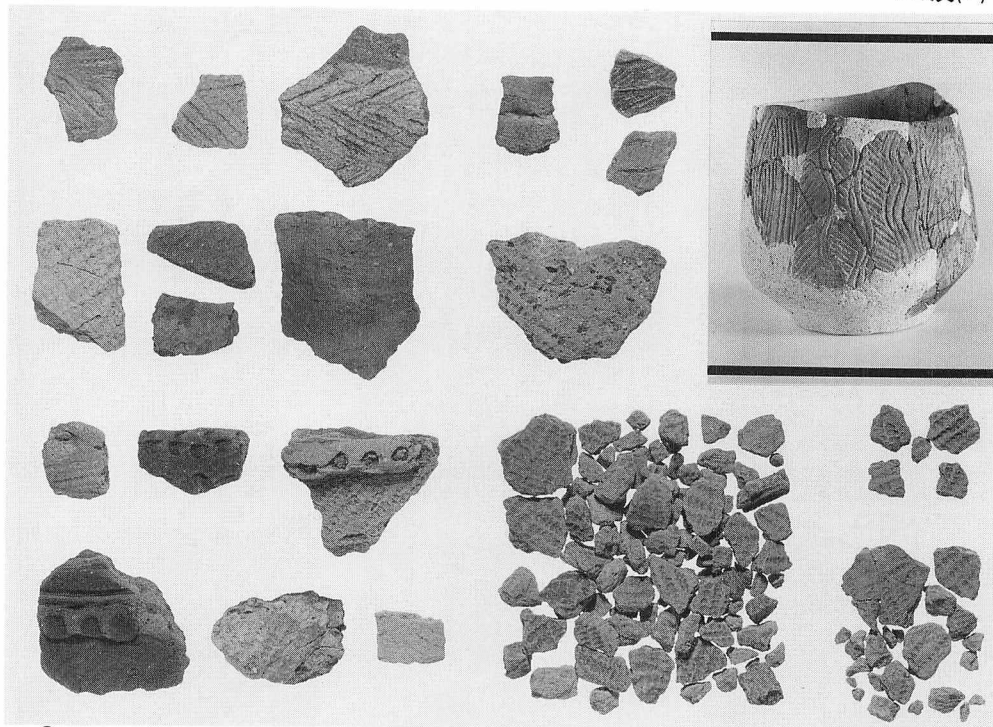
△⑥P-40 (北西から)



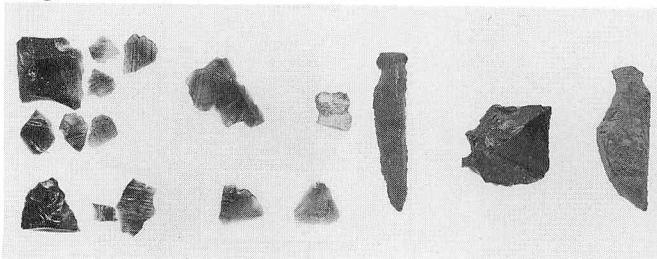
△⑦P-35 (北西から)



⑧P-41 (北西から) ▽

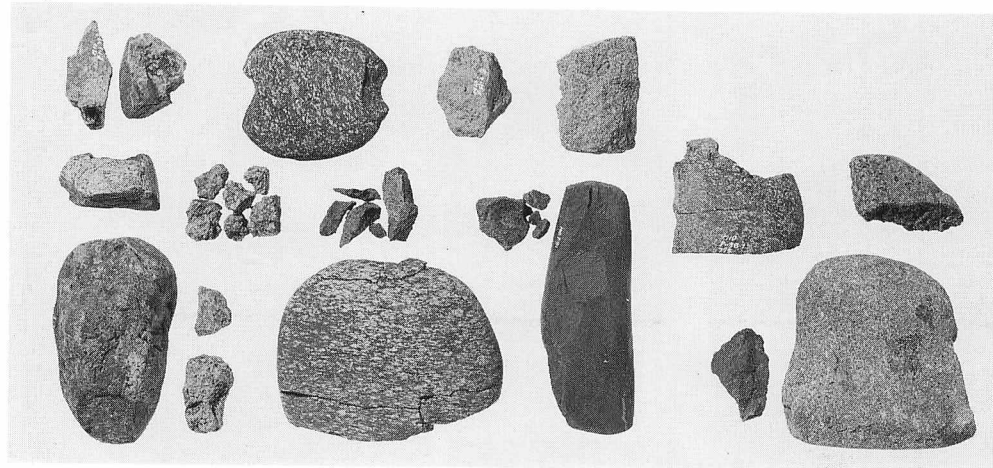


△①



△②

- ①土器
- ②剥片石器
- ③礫石器



—土壌の遺物—

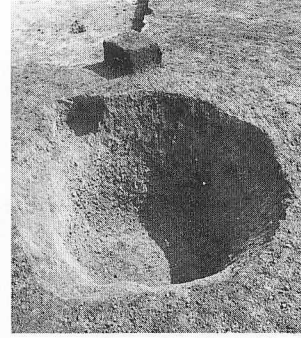
△③



△①P-7 (東から)



△②P-9 (北西から)



③P-11 (北から) △

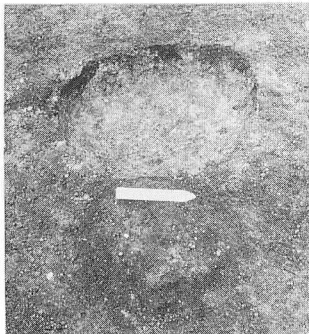


△④P-16 (南から)



△⑤P-17 (北から)

土壌(8)



△⑥P-19 (南から)



△⑦P-21 (東から)



△⑧P-24 (東から)



△⑨P-25 (東から)



△⑩P-35 (北西から)



⑪P-43 (南東から) △

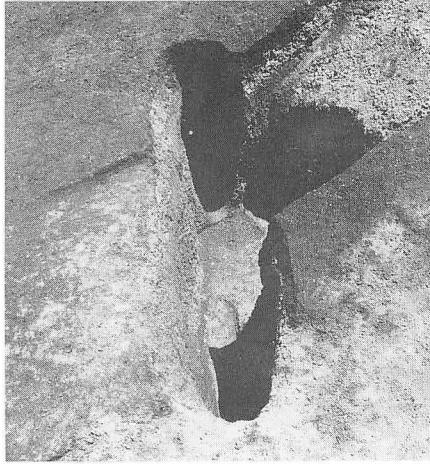


△①斜面上部のTピット群（北西から）

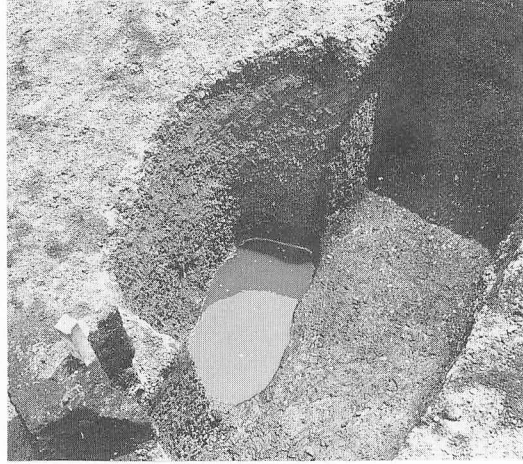
Tピット



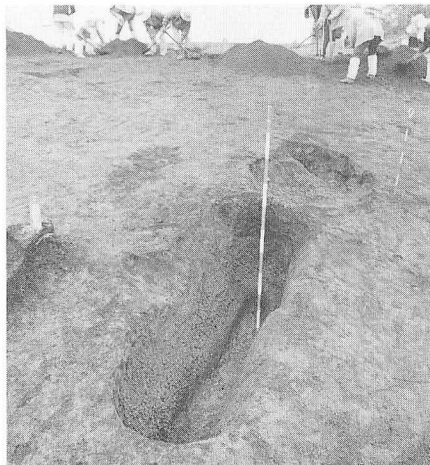
②斜面下部のTピット（北から）



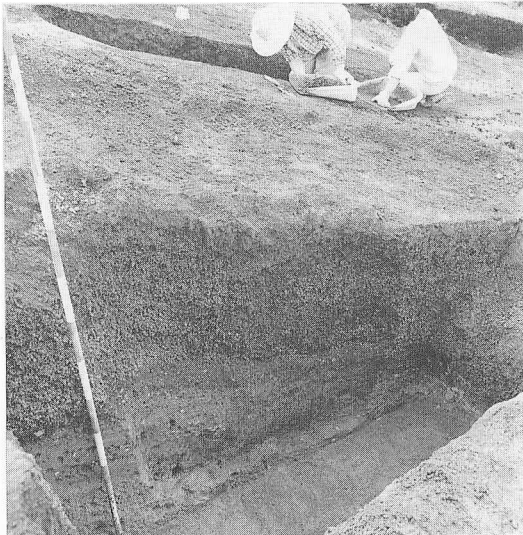
△③T-1 (北西から)



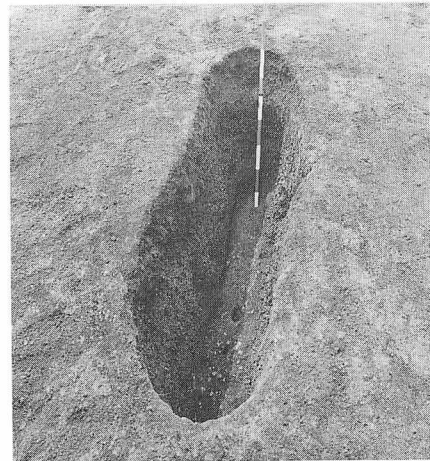
④T-2 (北西から) △



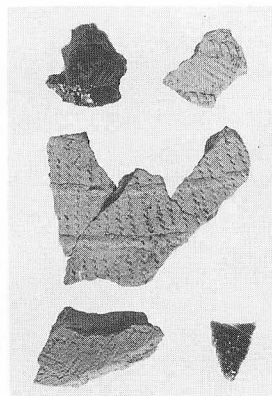
△⑤T-3 (北東から)



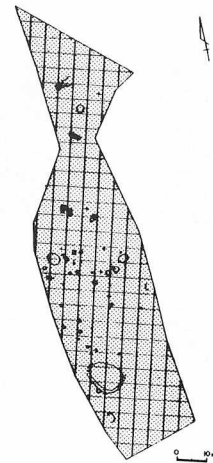
△⑥T-4 (南東から)



△⑦T-5 (北から)



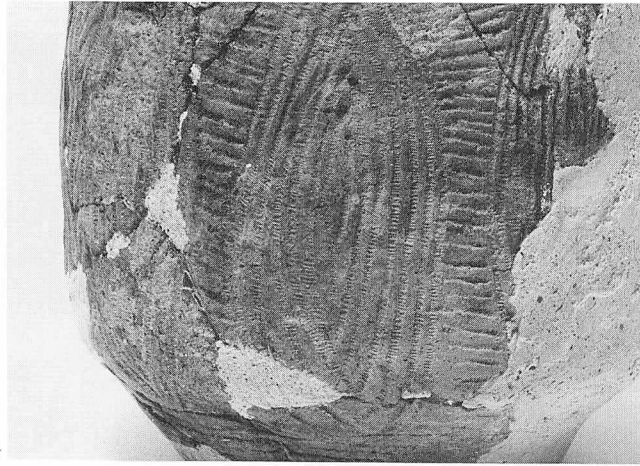
△⑧T-1・4・5の遺物



図版18



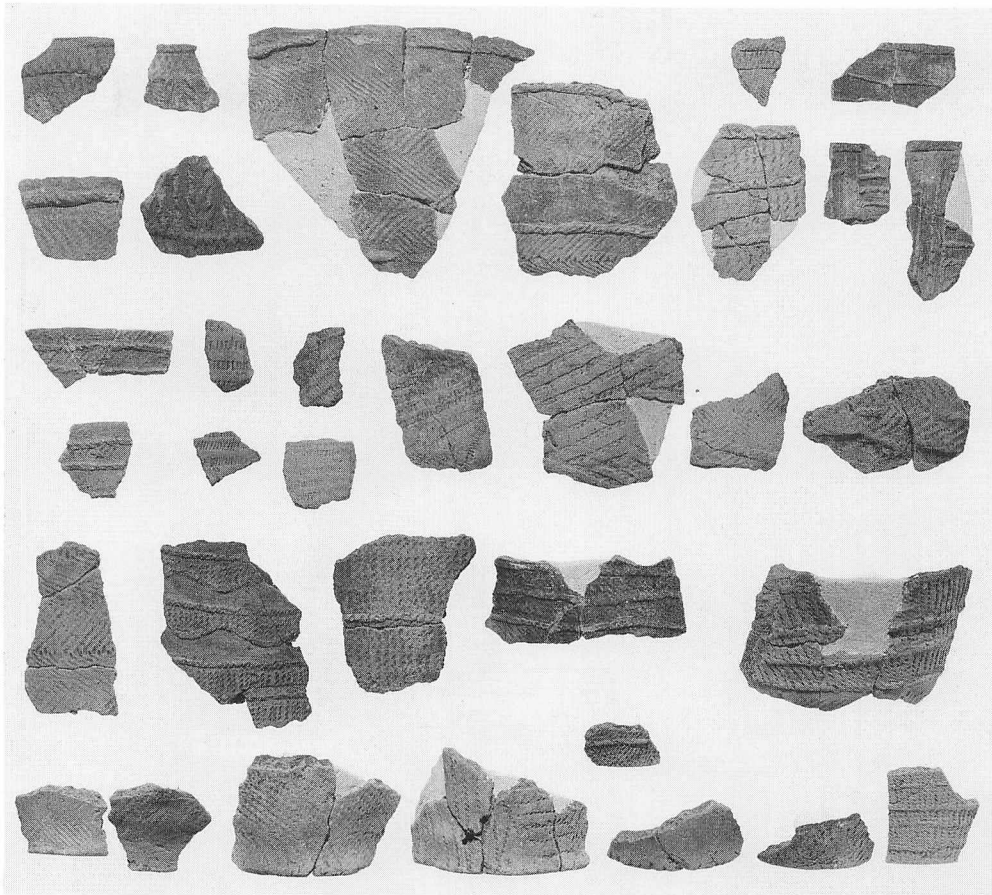
△①P-4のIb-3類土器



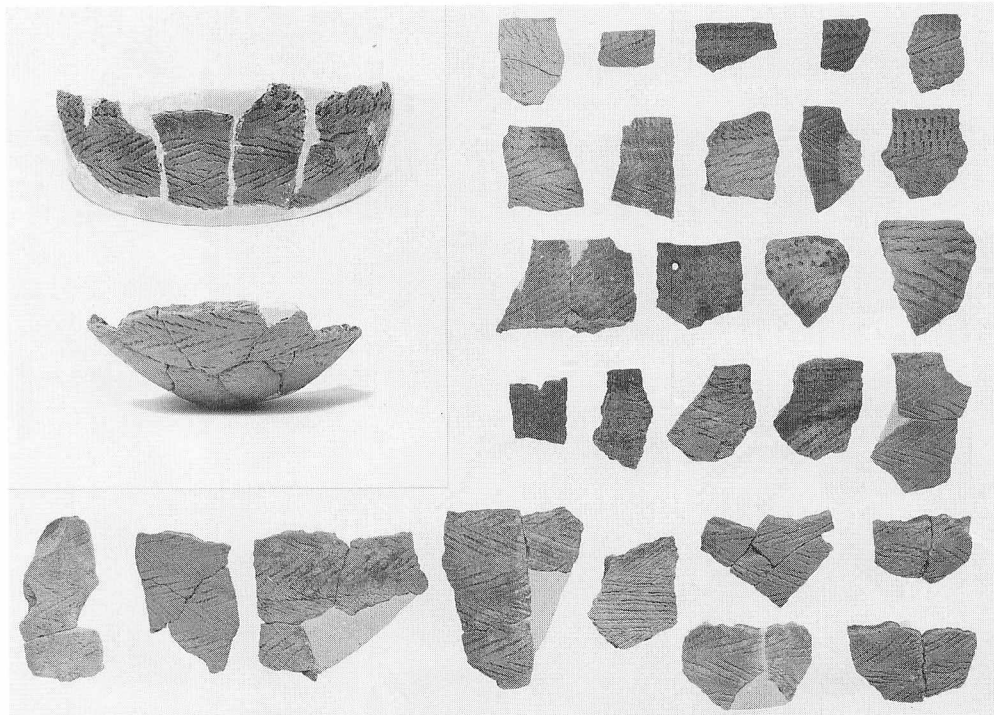
②文様部の拡大▶

包含層の遺物

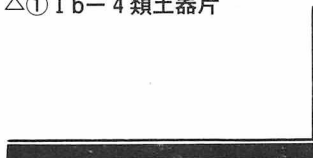
—土器(1)—



③Ib-2・3類土器片△

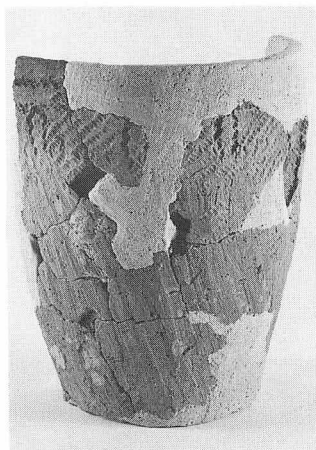


△① I b-4 類土器片

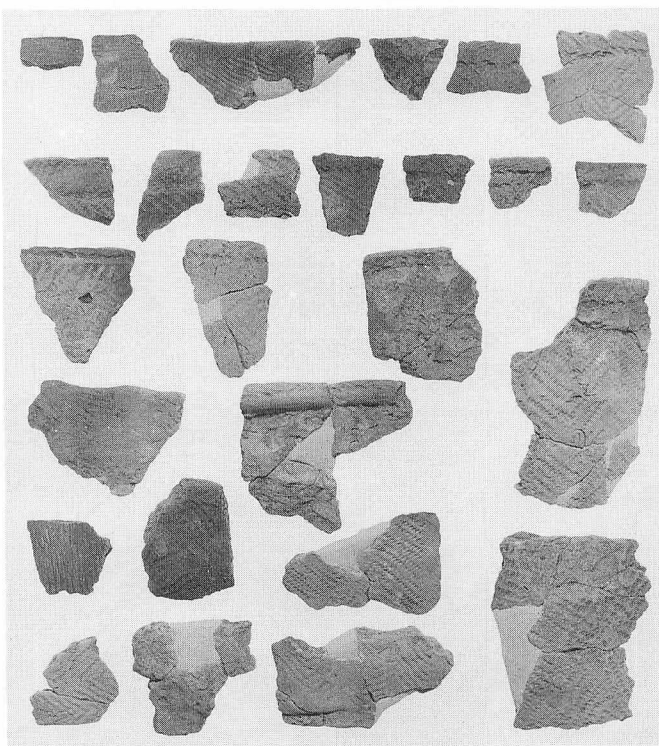


② II b類復元土器

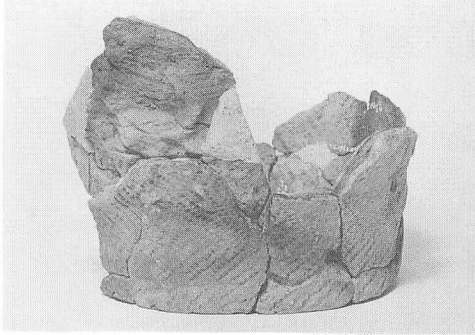
③ II 群土器片



△②



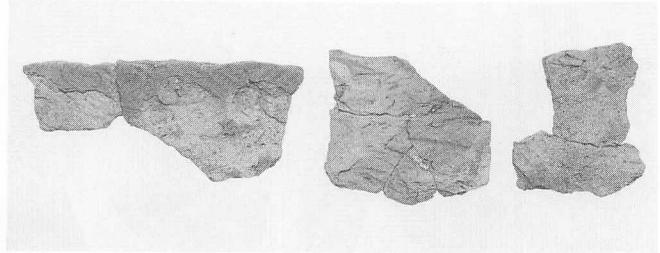
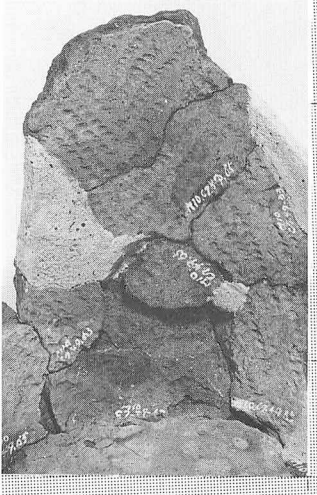
③△



△① II b類の底部

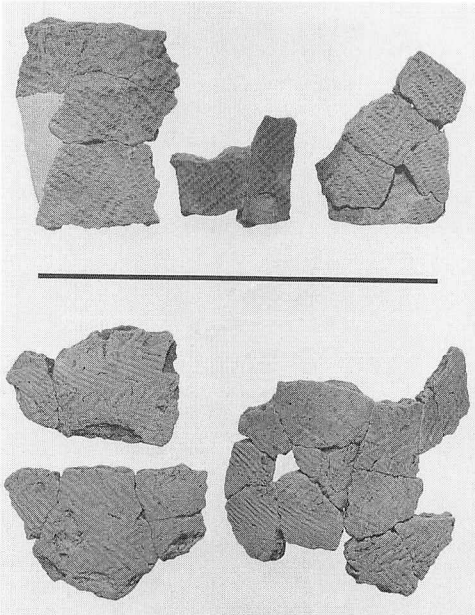
②同左胎土中に含まれた植物性繊維▲

◀③同上内面の縄文

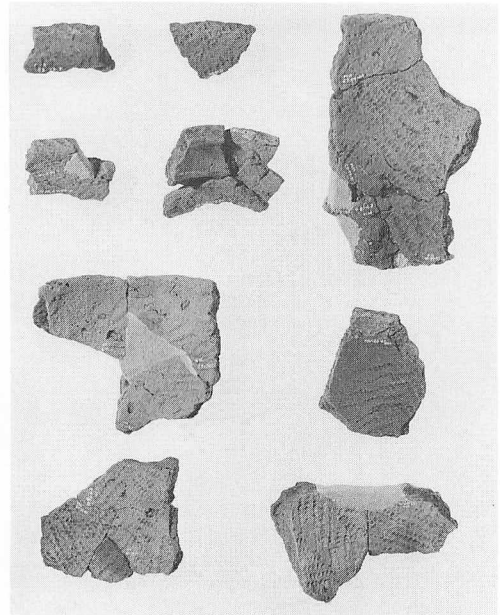


④ II b類土器胎土中に含まれた植物性繊維△

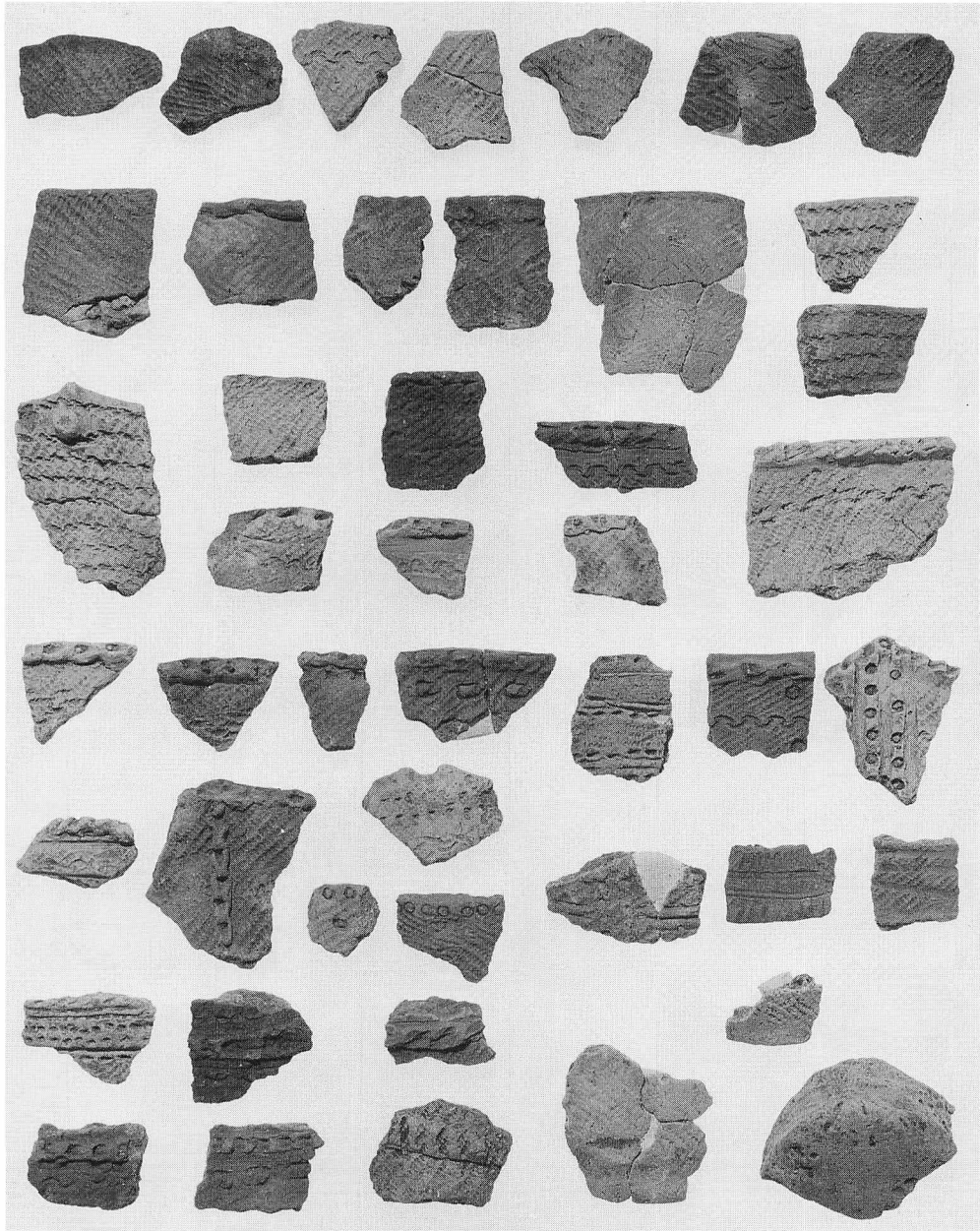
—土器(3)—



△⑤ II b類土器地文の相違 (上：A類, 下：B類)

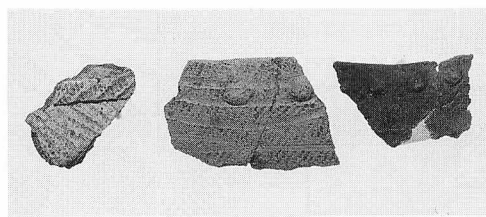


⑥ II b類土器内面の縄文△

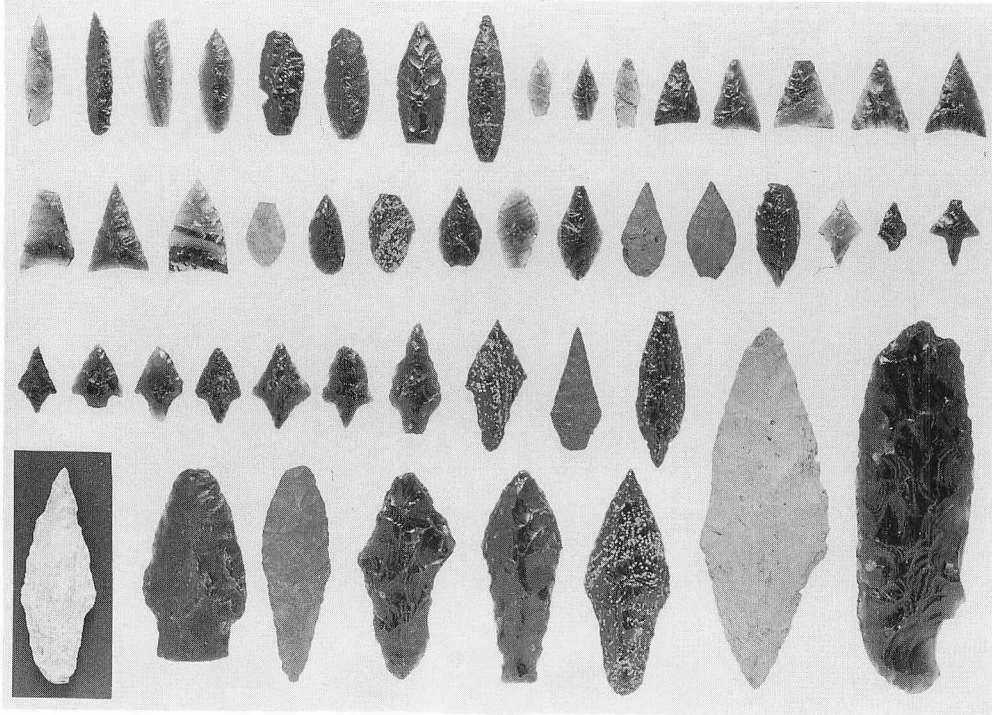


△①Ⅲ群土器片

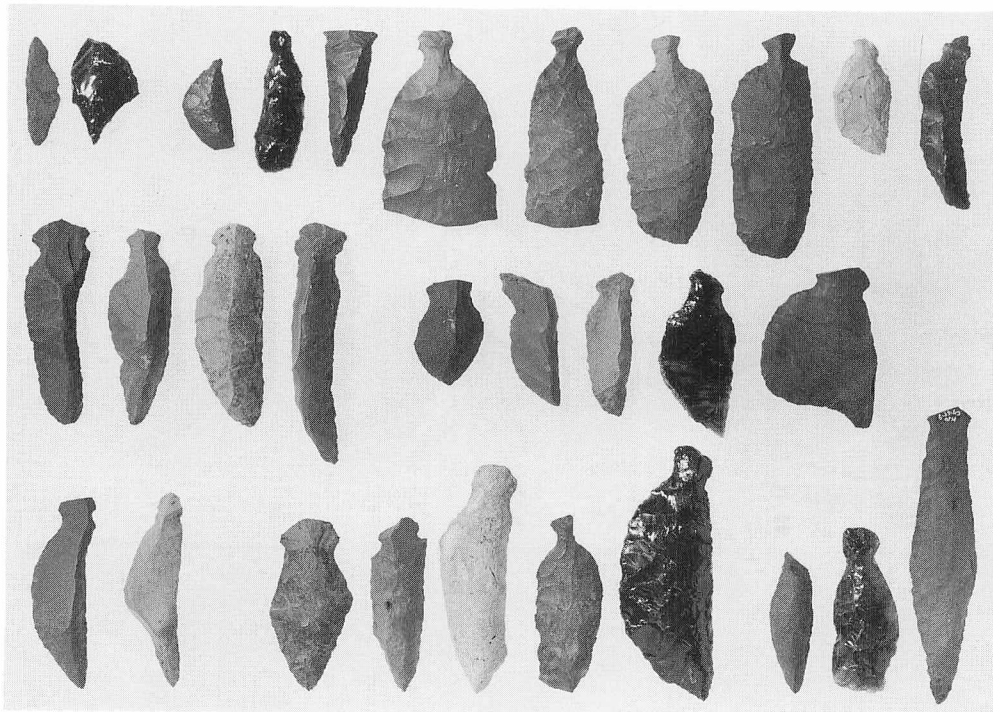
—土器(4)—



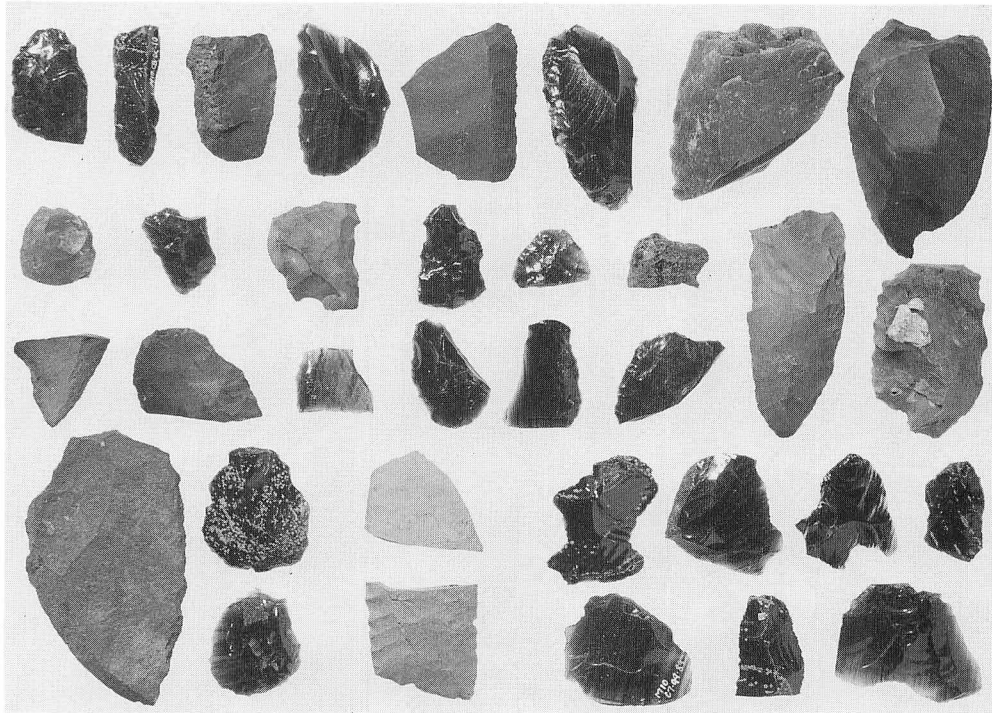
△②Ⅳ群土器片



△①A・B類石器



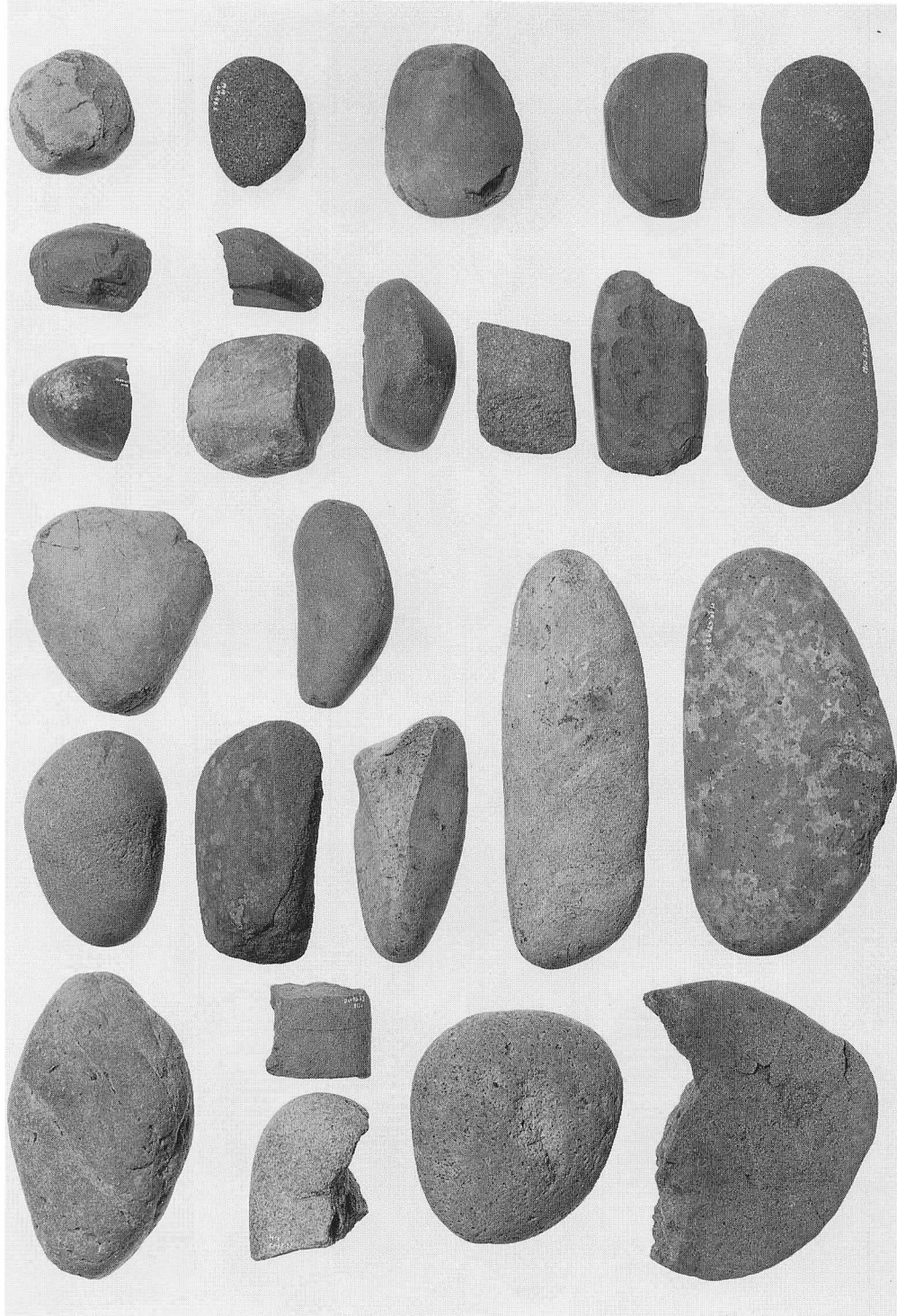
△②C・D類石器



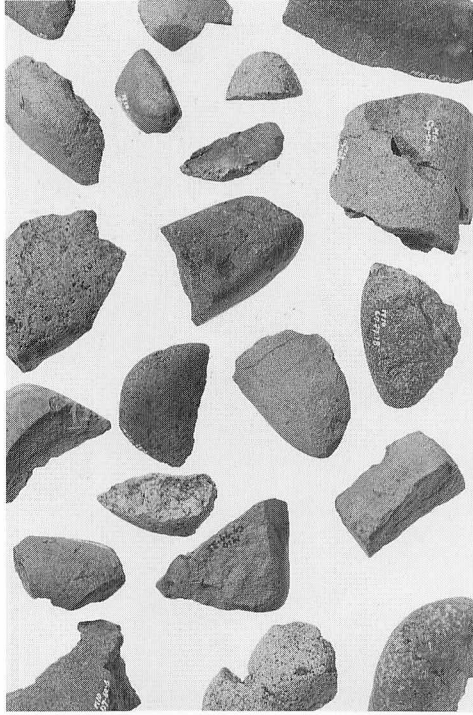
①E・01a類石器△



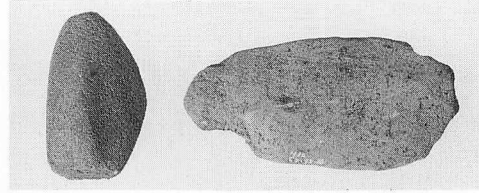
△②01・02類



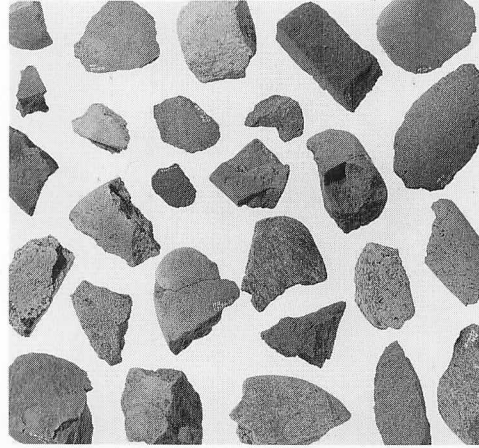
G類石器



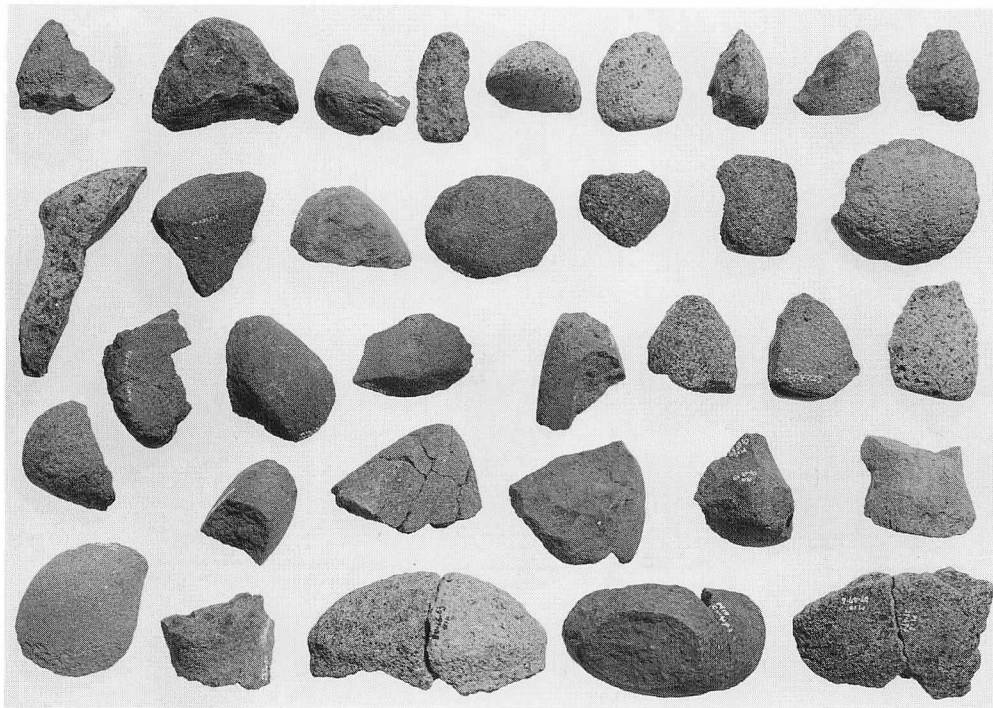
△①G類片



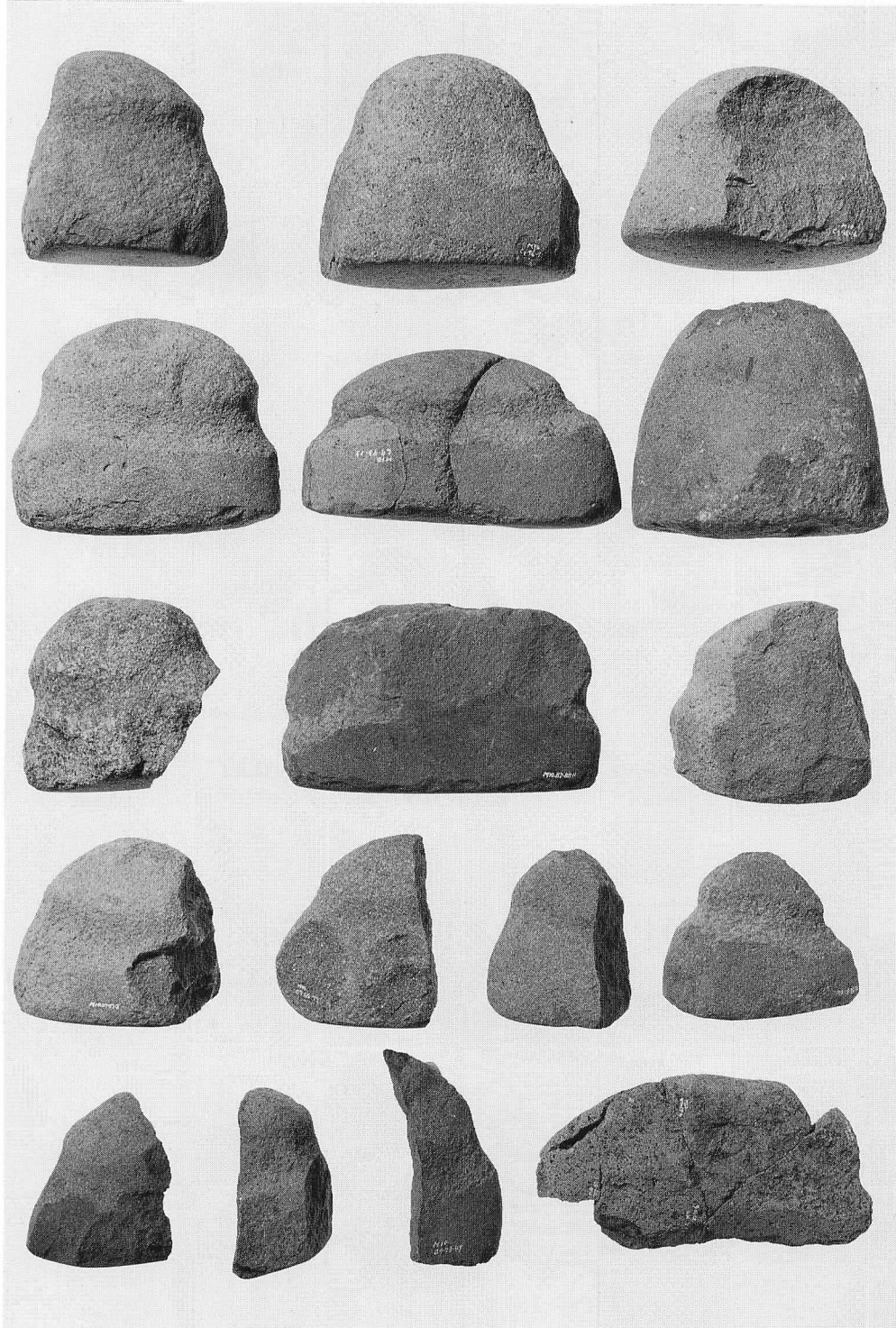
②J類石器△



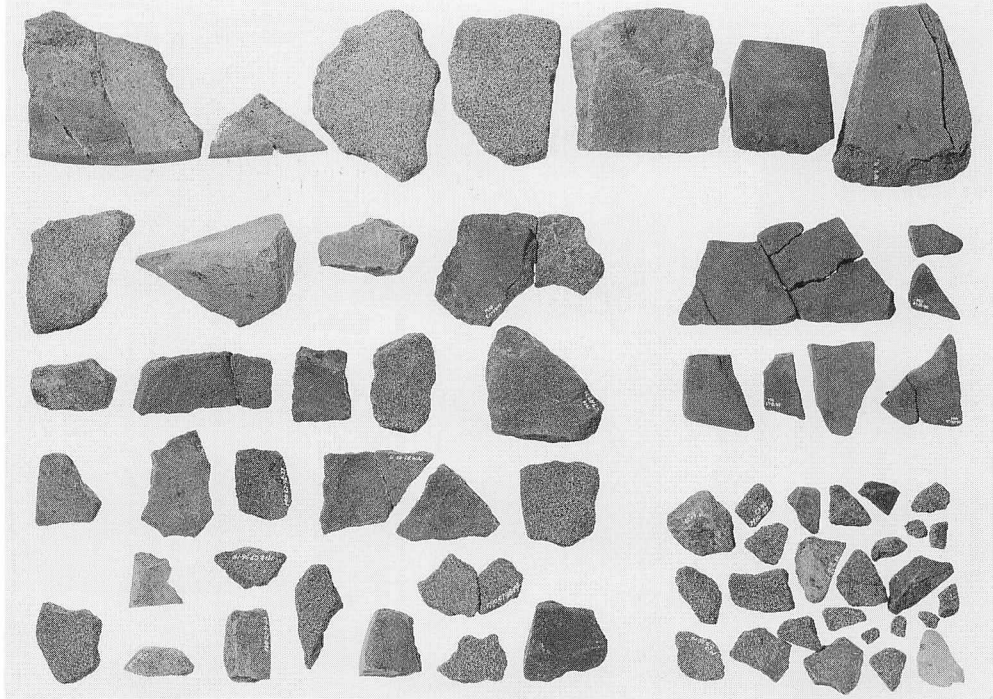
③J類片△



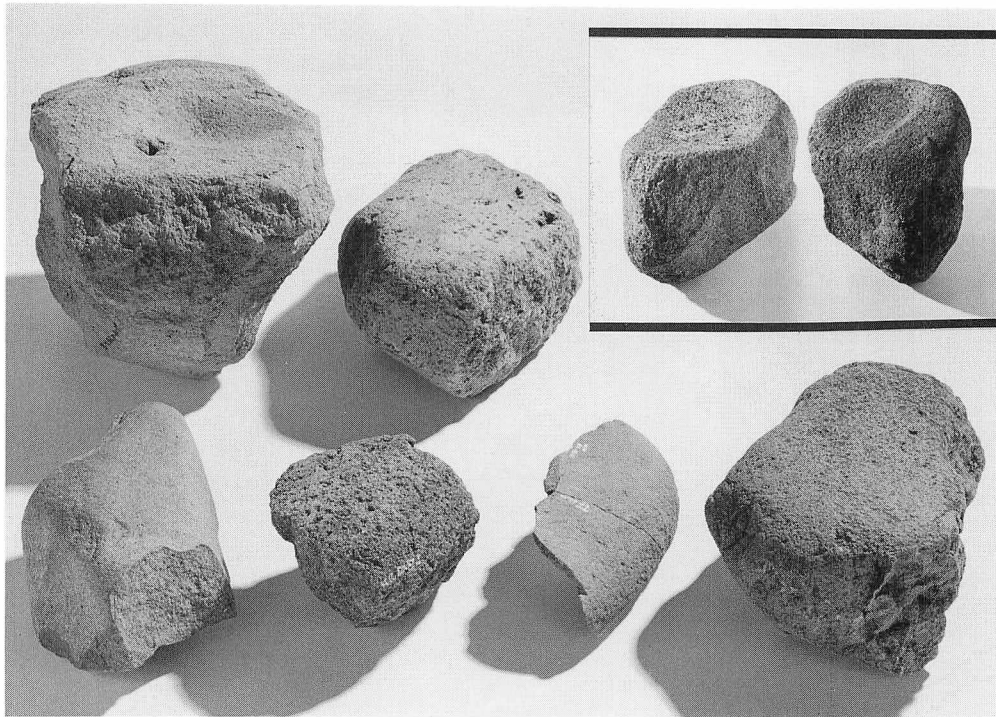
△④J 4類片



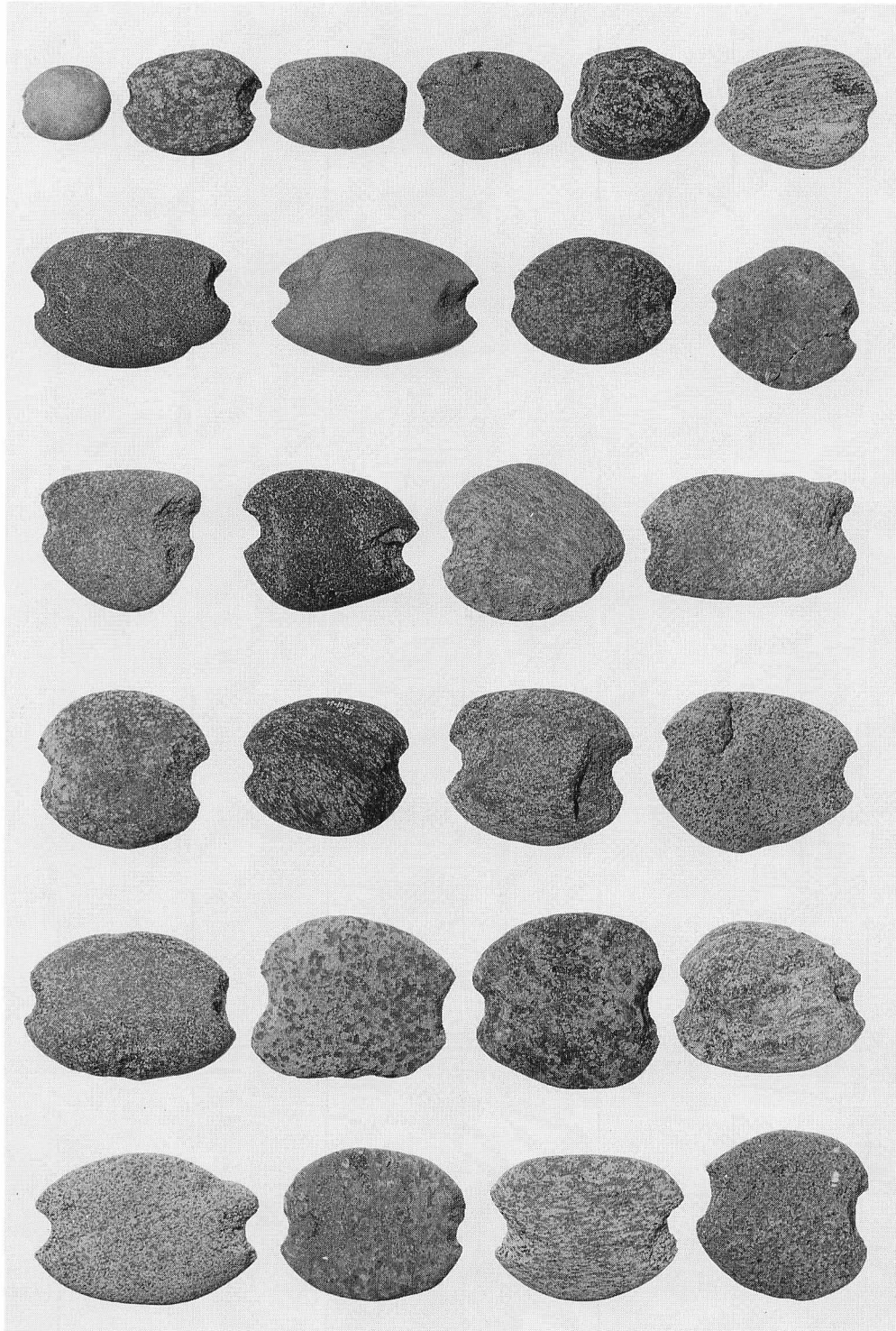
J 4 類石器



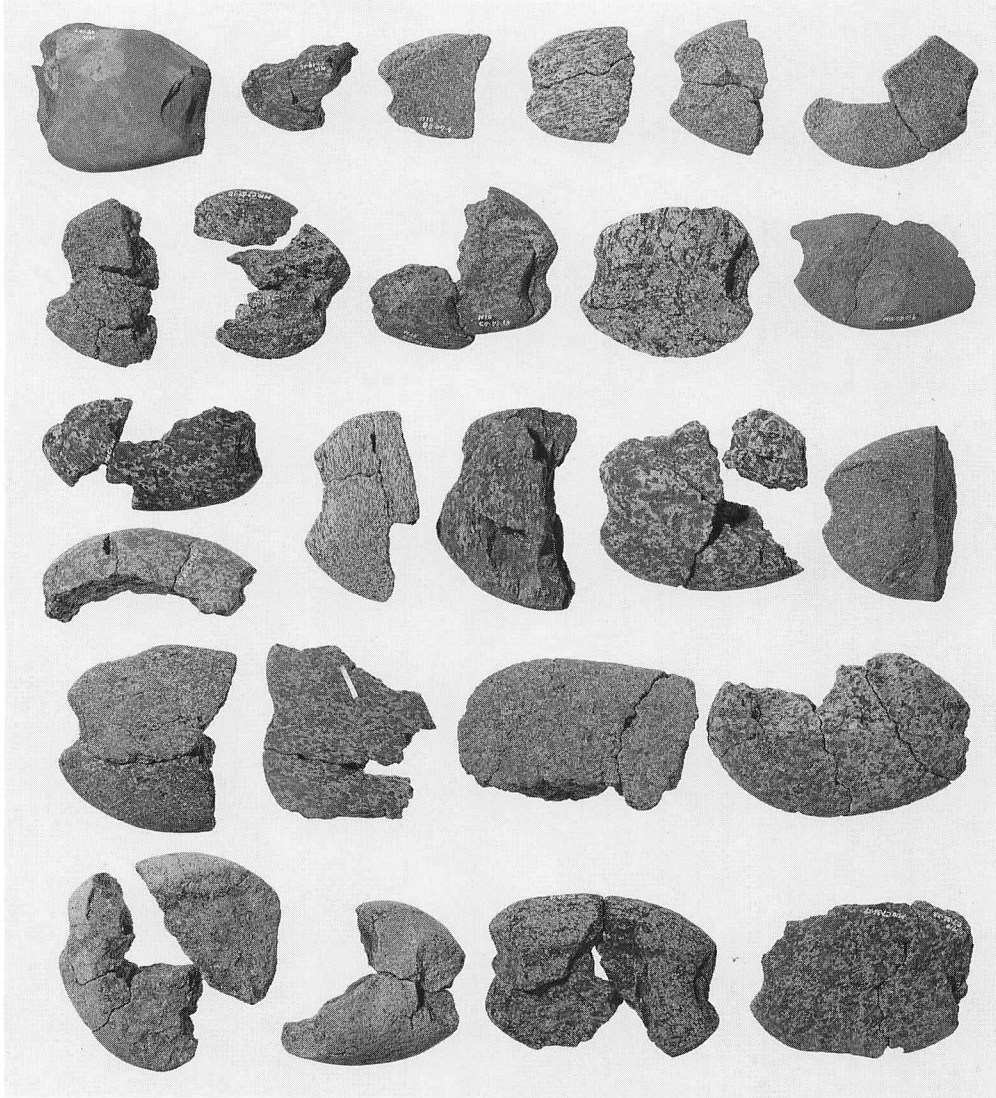
△①K・L類石器



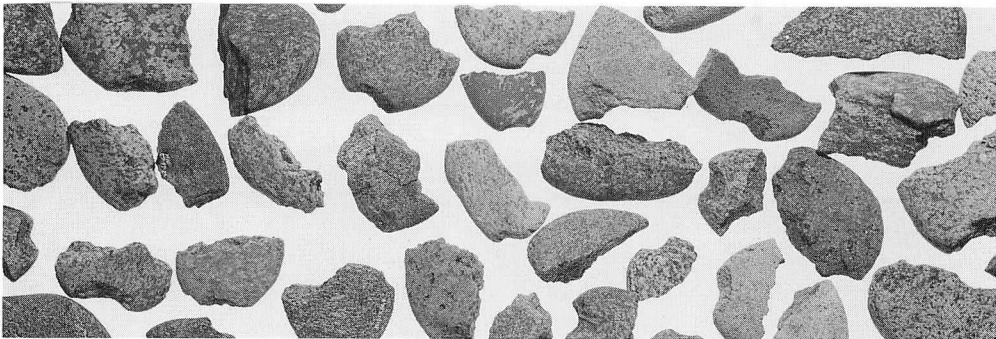
②M類石器△



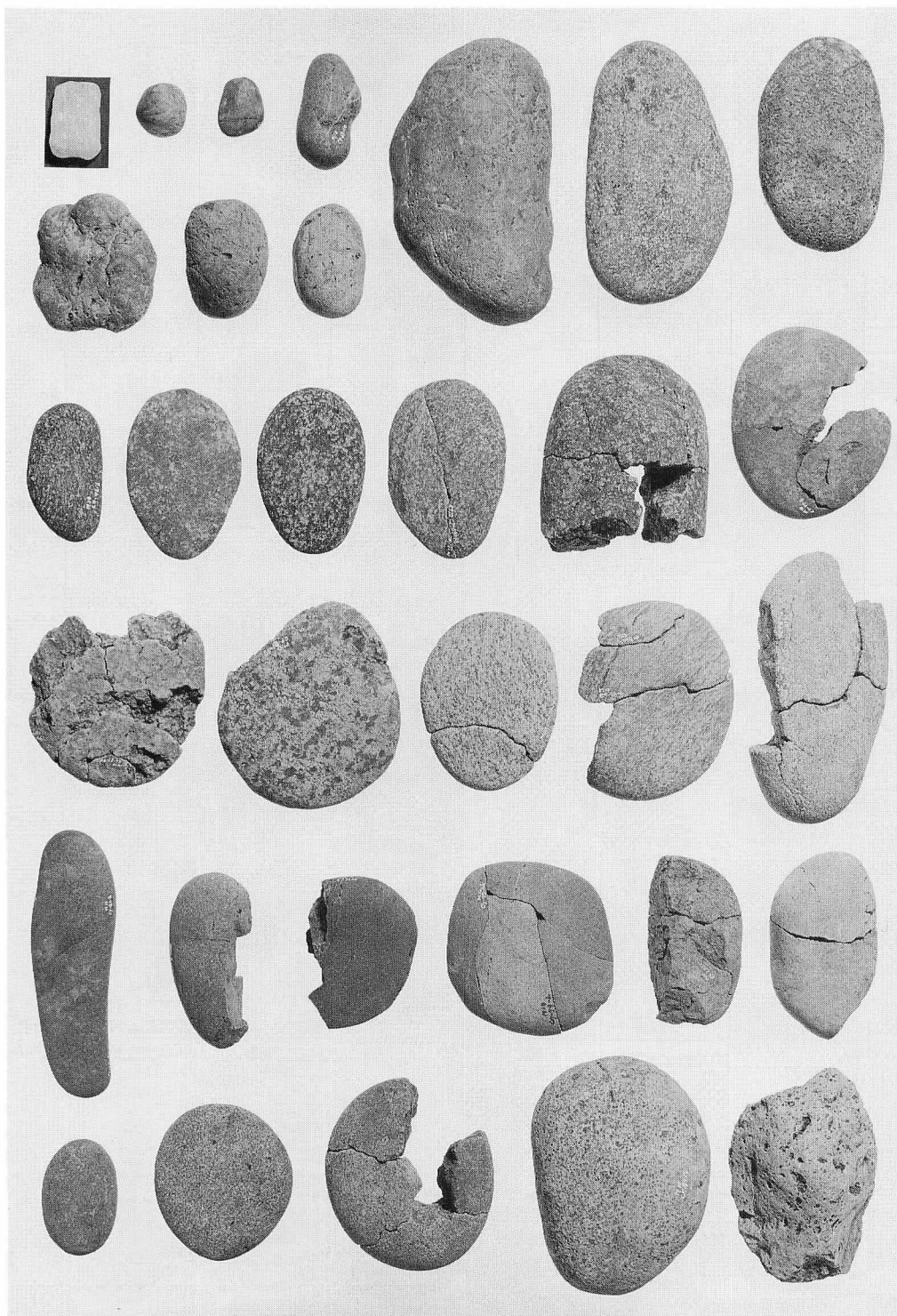
N類石器



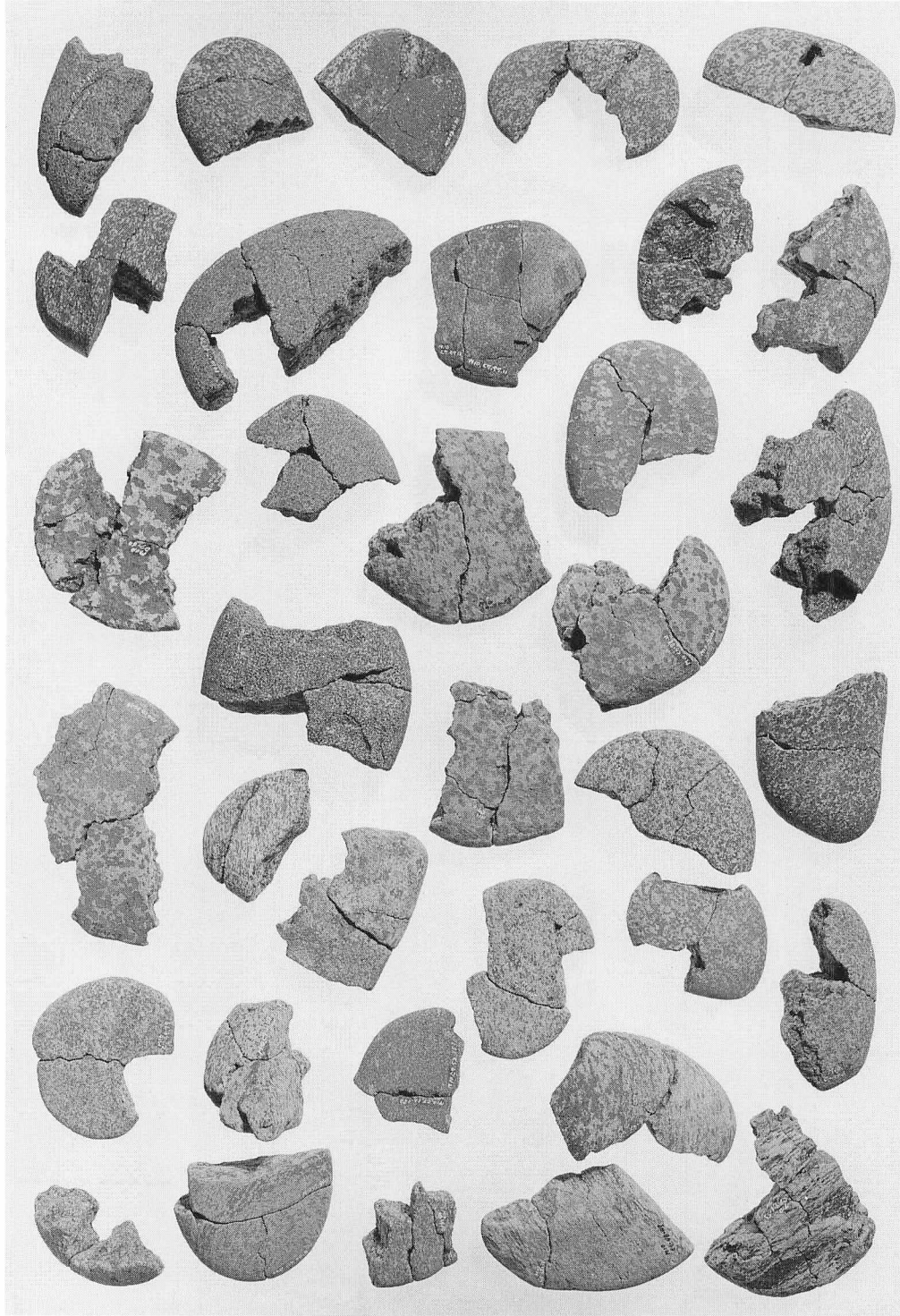
△①N類接合資料



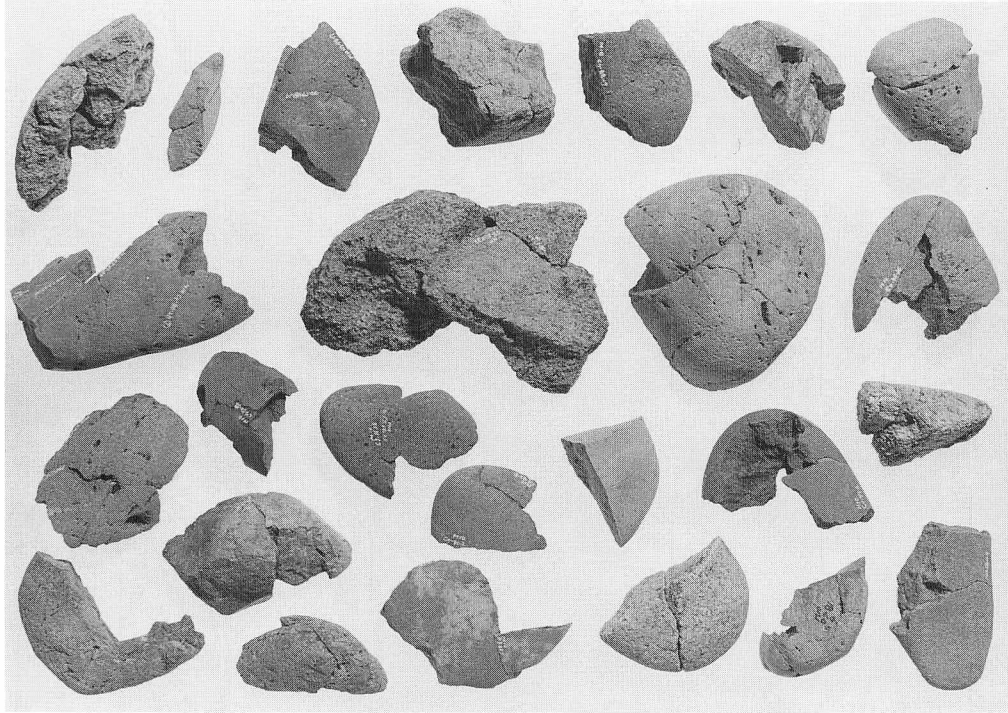
②N類片△



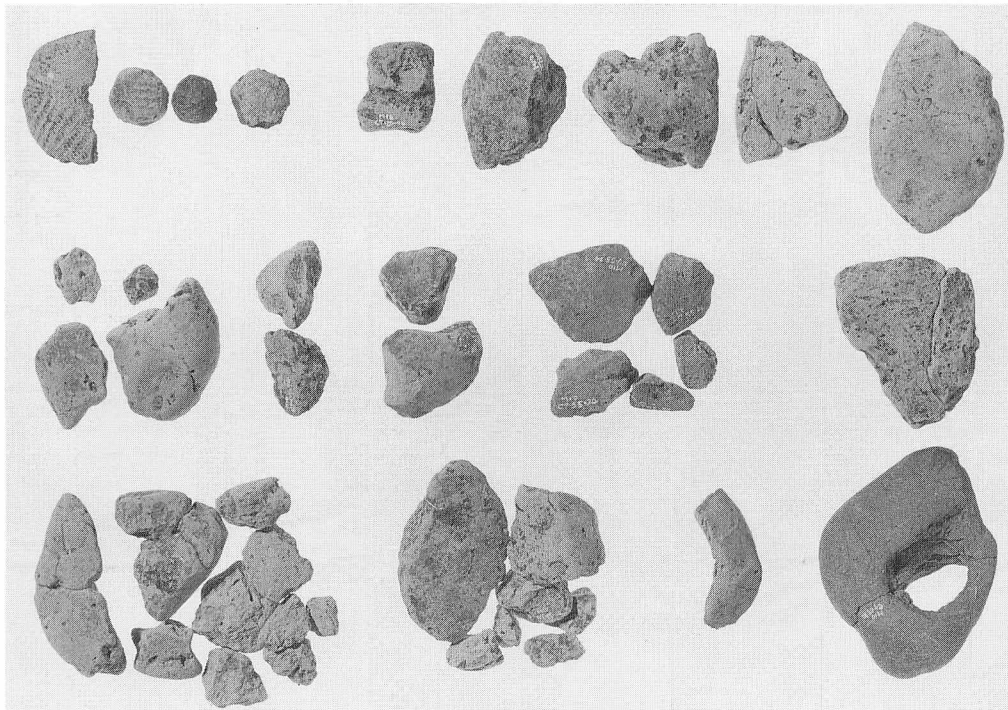
X群



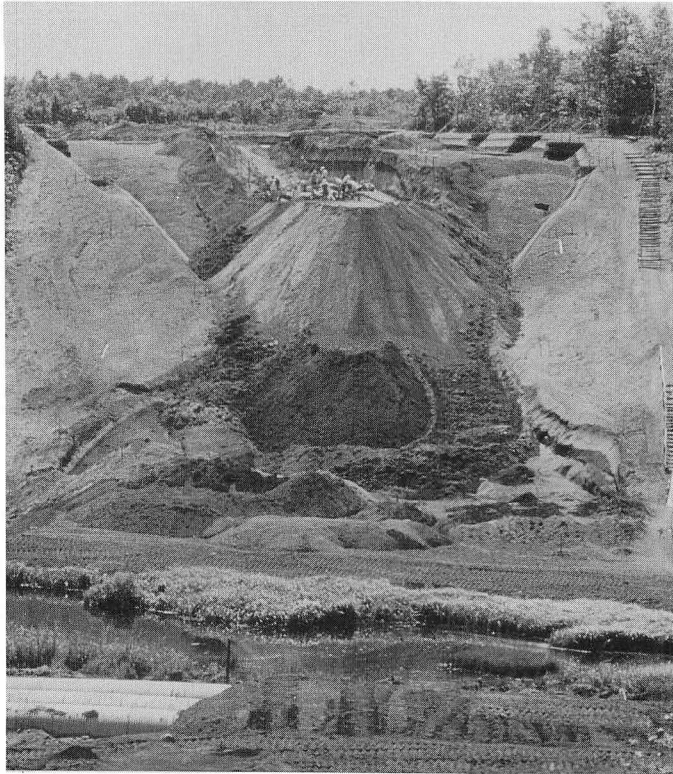
礫片接合資料 (片磨岩接合資料)



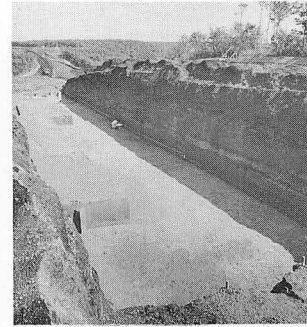
① 碟片接合資料△



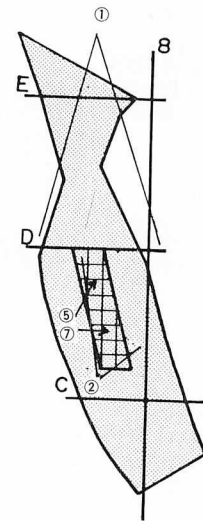
△② 土・石製品



△①調査風景

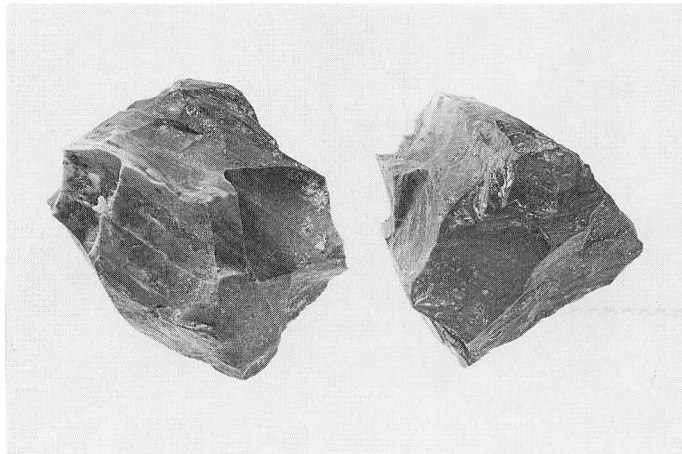


△②調査後の風景

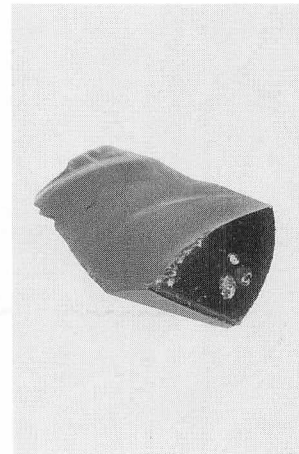


旧石器確認調査

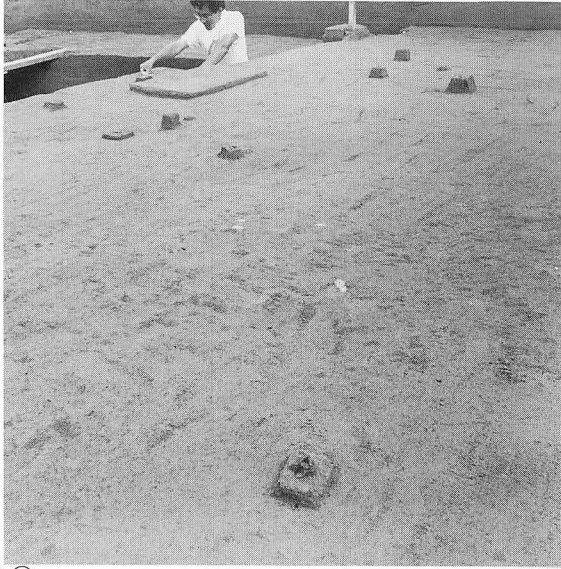
—ローム質粘土層の調査—



△③石核



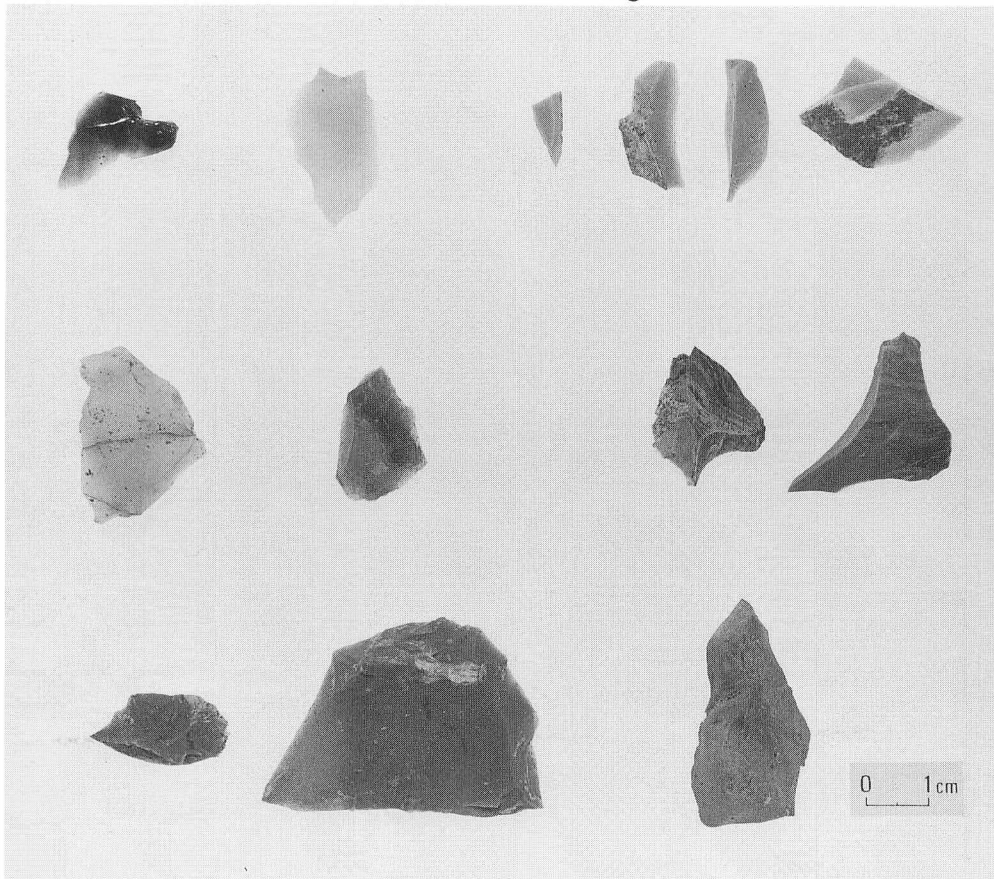
△④細かい剥離がみられる黒耀石石片△



△⑤



△⑥

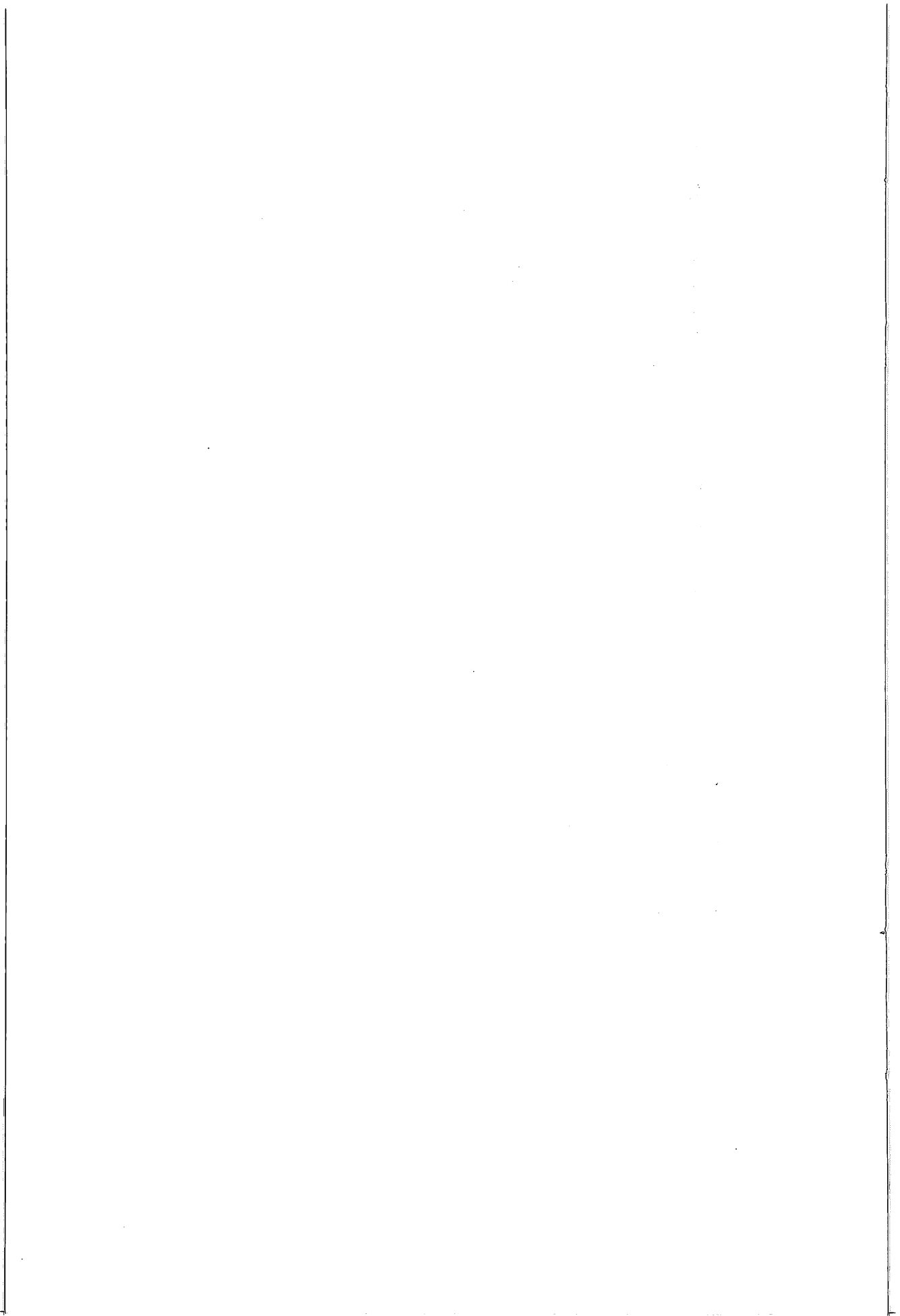


△上左：⑤遺物出土状況（手前は石核）

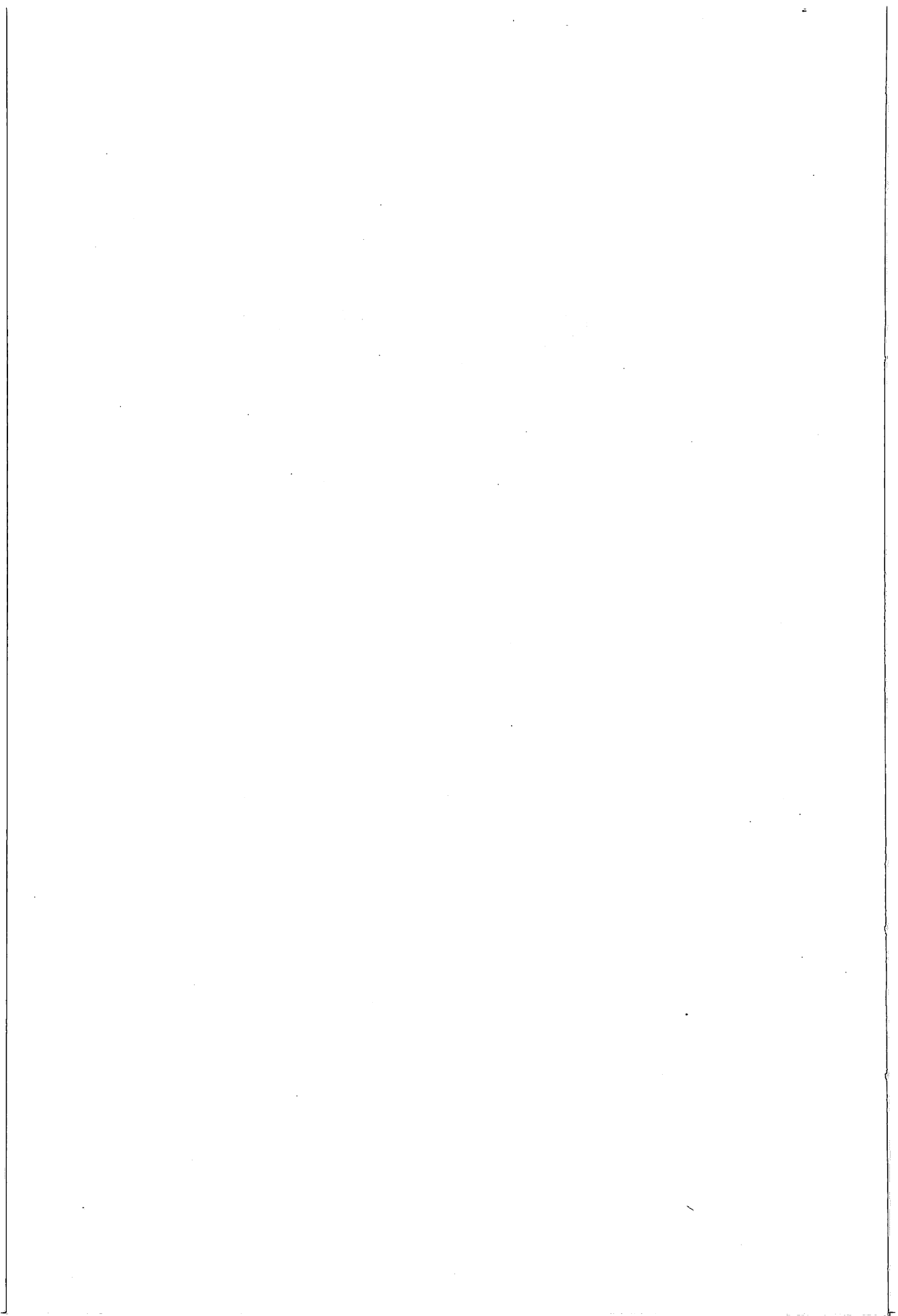
上右：⑥調査風景（西から）

下：⑦遺物

⑦△



Ⅱ 美沢11遺跡の調査



Ⅱ 美沢11遺跡の調査

1 概要

美沢11遺跡は、美沢10遺跡の対岸にあり、標高25mほどの台地上からペンケナイ川に向かう舌状地の斜面にかけて立地している。遺跡は付替道路用地内だけで8,040㎡にのぼり、周辺の地形から判断すると、さらに広がりをもつものと考えられる。

本年度の調査は、用地内のうち、工事が急がれる斜面部分1,570㎡について実施した。調査は当初、Ⅱ黒層が主な対象であったが、Ta-c層を人力で除去している時点で、Ⅰ黒層の遺構が発見されたことから、これらをⅡ黒層の発掘に先立って調査した。また、Ⅲ黒層、ローム質粘土層については、台地上の平坦地を調査する次年度以降にまとめて実施することにした。

Ⅰ黒層からは16個の土壙とその覆土中から71点の土器、石器等が検出された。これらは調査区中央付近に集中して分布する傾向がみられる。このうちの1個は縄文期の土壙墓(P-10)と考えられる。土壙は大きく、深い楕円形を呈し、苫小牧市タブコブ遺跡で発見された後北C₂・D式土器を伴う大型の土壙墓に近似している。

その他の土壙は、いずれも用途不明で、時期を特定できたものも1個だけである(P-12)。P-12は、覆土下部から大洞A式土器とタンネットウL式に類する土器の大型破片と一緒に投棄されたと考えられる状態で検出されている。このほかに、遺物が出土した土壙は2個(P-1・2)あるが、いずれも時期を特定するまでには至らなかった。

Ⅱ黒層からは、住居跡6軒、土壙10個、柱穴様ピット9個、焼土3か所の遺構とともに縄文早期～晩期の土器、石器等3,033点が検出された。

住居跡は、調査区中央部の尾根上に4軒、調査区北東隅の一段低いテラス部分に2軒検出された。尾根上にあるものは縄文前期(H-1～4)に属する。H-1は外形が五角形、内形が隅丸方形を呈し、北側に一段高い床面を有した非常に深い住居跡である。H-2～4は、H-1を取りまくように分布しており、いずれも隅丸長方形のものである。一段低いテラス部分から検出されたものは、切り合っており、H-6の方が新しい。しかし、両者ともに竪穴の一部が調査区外に及んでいるため構造などを明らかにすることはできなかった。

10個の土壙のうち6個は調査区北東隅の斜面および一段低いテラスに分布している。縄文晩期末葉に属するもの(P-101)と前期に属するもの(P-110)を除けば、いずれも時期・用途は不明である。平面形は円形のもの(P-101・106)と楕円形のものがある。

柱穴様ピットは、調査区北東隅のP-108周辺にあるが、時期・用途ともに不明である。

焼土は、H-1上部のⅡ黒層上面に1か所、H-5・6の覆土中に2か所ある。焼土には、

わずかに炭化物や焼骨片が混じっている。また、H-1 上部の焼土周辺からは、V群C類土器に伴うとされるタイプの有茎石鏃が多量に検出されている。

3,033点検出された遺物のうち、土器は早期から晩期末にかけてのものが1,734点出土した。このうち、II群a-2類、III群、V群C類が主体を占めており、石器等についてもこれらに伴うものが多いと考えられる。II群a-2類は、北東部の斜面に集中している。遺構出土のものを含めると、ほとんどが中野式であるが、春日町式に類似した土器片も出土している。III群およびV群C類土器は、包含層出土のものも多く、ほぼ調査区全域から出土している。

石器等では、1,299点出土したうち954点が剝片・礫・礫片である。石器の中では、石鏃、石斧、石錘の出土頻度が高いが、石斧、石錘はほとんどが破損品または破片である。石鏃は、形態からみて早期、前期、晩期に属するものがある。美沢10遺跡の石器組成と比較すると、スクレイパー、たたき石、すり石の出現頻度が極端に低い点は共通しているが、4か所に打ち欠きをもつ石錘は、美沢10遺跡ではほとんどみられない。(野中一宏)

表23 遺構一覧

	I 黒層	II 黒層	計
住居跡		6	6
土塚墓	1		1
土壇	15	10	25
柱穴様ピット		9	9
焼土		3	3
計	16	28	44

表24 遺物一覧

分	類	I 黒		II 黒		合計	分	類	I 黒		II 黒		合計			
		遺構	遺構	包含層	計				遺構	遺構	包含層	計				
土器	I	b			10	10	10	I	B	1	2	9	11	12		
			2		9	9	9			II	C	破片	2	8	10	10
			3	1	3		4					1	1	2	2	
			4	26	53	79	79					2	2	1	1	1
			1	1	1	破片		1	1			1				
	II	a	1		1	1	1	III	D		5	11	16	16		
			2	420	95	515	515			破片	2	1	3	3		
			b	17	69	86	86			E	2	9	11	11		
					5	8	13			破片	2	5	7	7		
	III	a			6	105	111	111	IV	F	2		1	1	1	
					34	217	251	251			破片	4	46	50	50	
			b	2	1	9	10	10			G	3		3	3	3
			3	1	3	29	32	33				破片	1	9	10	10
	IV	a			1	16	17	17	J	破片		1	1	2	2	
		c			4	4	4	4			V	K	1		1	1
V	c	54	308	283	591	645	645	M	破片				1	1	1	1
		VI	9				9	9	VI	N		2	7	9	9	
計	64	823	911	1,734	1,798	1,798	X	0				4	24	28	28	
石器	O	0		1	1	1			1	1	2	40	348	388	390	
		1・2	3	137	429	566	569	土製品				1	1	1		
		1a		2	10	12	12	12	計	7	241	1,058	1,299	1,306		
	I	A	3		1	1	1	1	合計	71	1,064	1,969	3,033	3,104		
			4		4	10	14	14	14							
			6		1	1	1	1	1							
7		11	20	31	31	31	31									
破片	1	9	22	31	32	32	32									

2 I 黒層の遺構と遺物

16個検出された土壌のうち、1個は縄文期の土壌墓と考えられる。他は、覆土が自然堆積の状態を示しており、用途についても不明である。これらの土壌内から出土した遺物は、いずれも投棄されたかまたは流れ込みによるもので、掘り込みの際にII黒層から引き上げられたものもある。

1) 土壌墓

P-10 (図56)

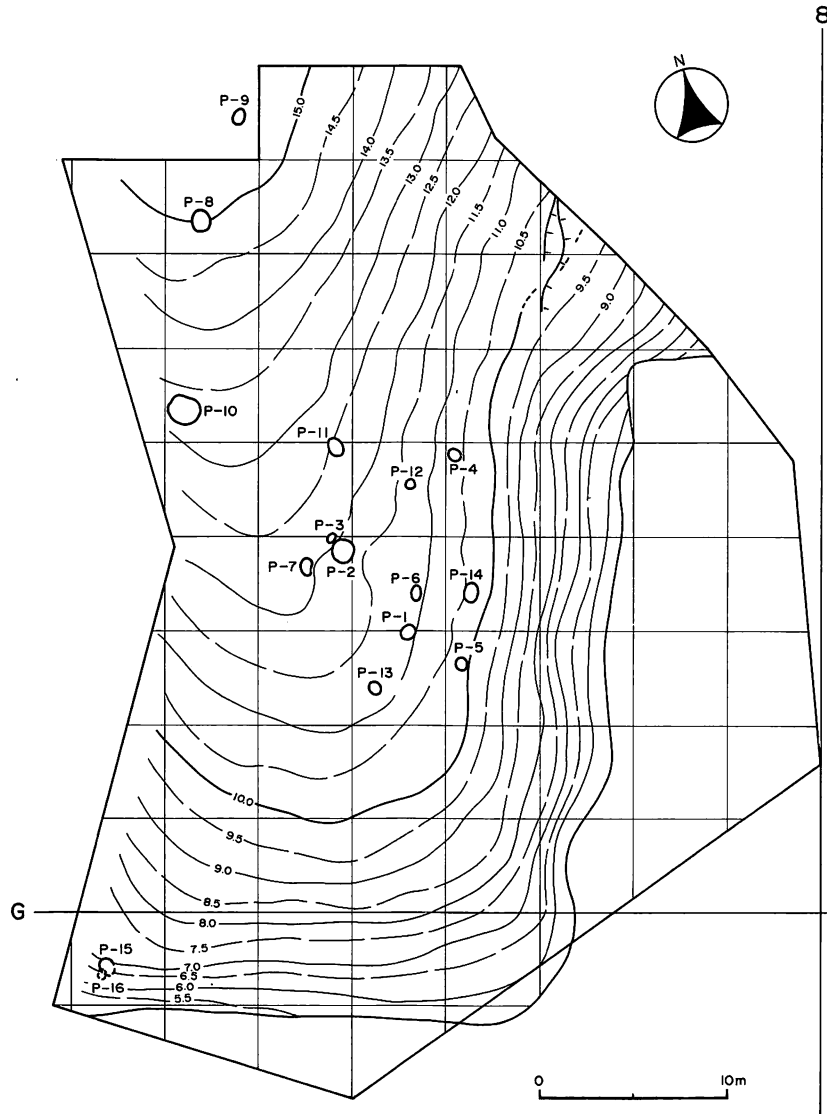


図56 I 黒層の遺構位置図

調査区西寄りの尾根上で検出された。覆土の堆積状態から墓と考えられ、南側壁付近の上部からは、同一個体の後北C₁式土器片が出土した(図中●印)。他にV群C類土器片7点、黒曜石の剥片2点、礫片1点が検出されたが、人骨や副葬品はない。

位置 G 7-35

平面形 楕円形

規模 2.00×1.53/1.30×1.14/0.8

長軸方向 N-81°-W

覆土 1 黒色 (I黒)

2 黄褐色 (C₁)

3 暗茶褐色 (黒色土 > C₂)

4 暗褐色 (黒色土 + d₂風化層)

5 暗褐色 (黒色土 + d₂ > C)

6 暗茶褐色 (黒色土 + d₂)

7 黒褐色 (黒色粘質土 + d₂)

8 暗褐色 (黒色土 > C₁ + d₂)

9 黒褐色 (黒色土 + d₂)

10 黒褐色 (黒色土 > d₂)

11 暗赤褐色土 (黒色土 > d₂パミス)

12 暗褐色 (黒色土 > d₂ + C₁)

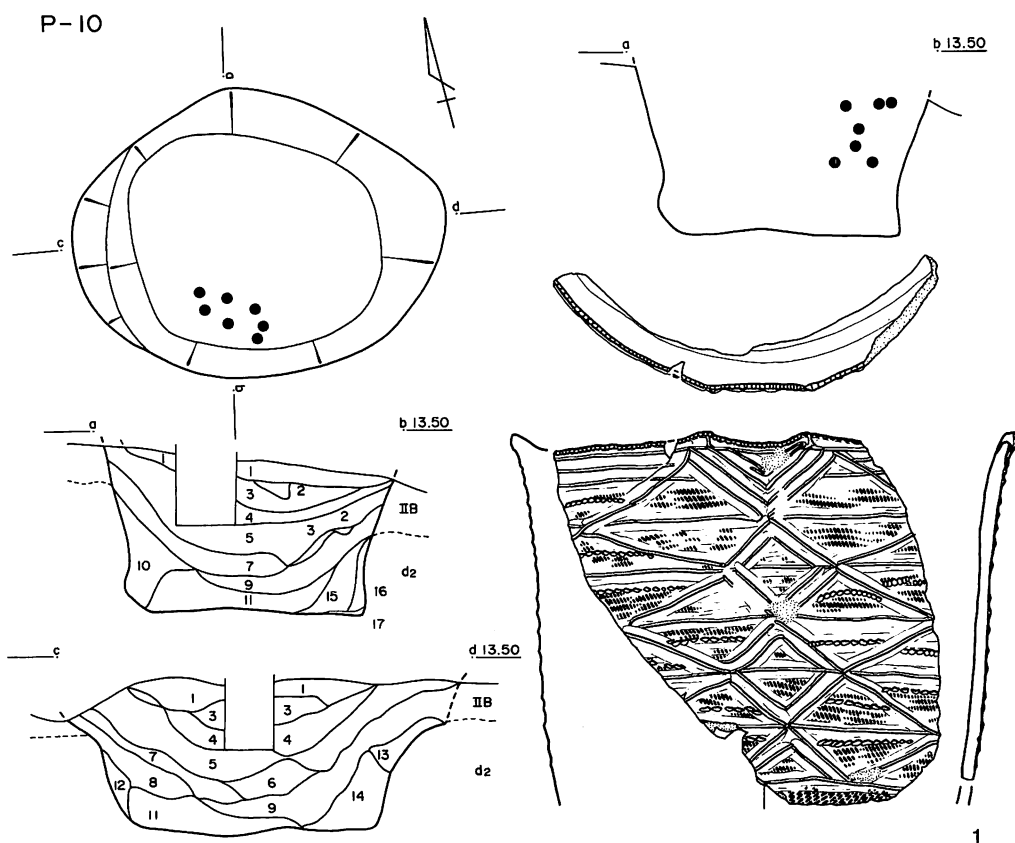


図57 P-10と遺物

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 13 暗褐色 (黒色土 > d ₂ /パミス) | 14 暗褐色 (黒色土 > C ₁) |
| 15 黒褐色 (黒色土 + C >> d ₂) | 16 暗茶褐色土 (黒色土 + d ₂ 、粘性あり) |
| 17 黒色 (有機質) | |

遺物 (1) 2個1対の小突起が付され、口唇には刻みが巡る。口縁から胴上部にかけてはほぼ等間隔に6本の微隆起線が横走し、その間に段違いの山形微隆起線が施文されており、結果として連続する菱形文を描き出している。突起下部の山形文は2条を単位として構成されている。この菱形文の中にはRLの帯縄文が施文され、三角列点文もみられる。

2) その他の土壌

P-1 (図57)

位置 G 7-52・53

平面形 楕円形

規模 0.77×0.73/0.38×0.30/0.38

長軸方向 N-72°-W

覆土 1 黄白色 (C₁)

2 黒褐色 (黒色土 >> C₂)

3 茶褐色 (C₂>黒色土)

4 暗茶褐色 (d₂>黒色土)

5 暗褐色 (黒色土 > d₂)

P-2 (図58)

北側に隣接してP-3があり、上部では切り合っていたものであろう。

位置 G 7-43・53

平面形 楕円形

規模 1.23×1.09/1.09×0.90/0.41

長軸方向 N-3°-W

覆土 1 黒色 (黒色土 >> C₁)

2 黄褐色 (C₁)

3 黒褐色 (C₁>黒色土)

4 黒色 (黒色土 + C₁)

5 黄褐色 (C₁)

遺物 (図58-1~3) 1はⅢ群b類で結束第1種のLRの斜行縄文が施されている。2は黒曜石製の無茎石鏃、3はかえしが明瞭な黒曜石製の石槍である。形態からみてⅡ黒層から引き上げられたものであろう。

P-3 (図58)

位置 G 7-43・44

平面形 楕円形

規模 0.51×0.38/0.38×0.27/0.11

長軸方向 N-61°-E

覆土 1 黒褐色 (C₁+黒色土)

P-4 (図58)

位置 G 7-64

平面形 不整楕円形

規模 0.70×0.66/0.66×0.56/0.16

長軸方向 N-45°-W

覆土 1 暗褐色 (c₁>>黒色土)

P-5 (図58)

位置 G 7-62

平面形 円形

規模 0.60×0.59/0.37×0.36/0.31

- | | |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| 覆土 1 黄色 (c ₁) | 2 暗褐色 (黒色土 + c ₂) |
| 3 黒褐色 (黒色土 >> d ₂) | 4 黄白色 (c ₁) |
| 5 暗褐色 (黒色土 > d ₂) | 6 黒褐色 (黒色土 >> d ₂ 、やや粘性あり) |

P-6 (図59)

位置 G 7-53

平面形 楕円形

規模 0.63×0.52/0.51×0.36/0.13

長軸方向 N-35°-E

P-7 (図59)

東側壁はⅡ黒層の風倒木痕を切っており、南側が一段高い底面をもつ二重構造である。

位置 G 7-43

平面形 円形

規模 0.83×0.64/0.43×0.41/0.23

長軸方向 N-8°-W (確認面)

P-8 (図59)

位置 G 7-37

平面形 楕円形

規模 1.07×1.05/0.75×0.57/0.30

長軸方向 N-46°-W

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 覆土 1 橙褐色 (d ₂) | 2 暗茶褐色 (c ₂ > 黒色土) |
| 3 黒褐色 (黒色土 >> c ₂) | 4 暗褐色 (c ₂ + 黒色土) |
| 5 黒褐色 (黒色土 >> c ₂) | 6 暗黄灰色 (c) |
| 7 暗茶褐色 (d ₂ > 黒色土) | |

P-9 (図59)

塘底中央部に0.19×0.18m、深さ0.1mの柱穴様ピットが検出された。

位置 G 7-38

平面形 不整形円形

規模 0.74×0.57/0.47×0.46/0.37

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 覆土 1 暗茶褐色 (黒色土 >> c) | 2 褐色 (c) |
| 3 茶褐色 (黒色土 >> c) | 4 暗茶褐色 (黒色土 > d ₁) |
| 5 黒褐色 (黒色土 >> d ₁) | |

P-11 (図60)

位置 G 7-44・45

平面形 楕円形

規模 0.92×0.87/0.69×0.62/0.31

長軸方向 N-11.5°-E

- | | |
|--|---|
| 覆土 1 黄褐色 (c ₂ >> I黒) | 2 黒褐色 (I黒 > c ₁ >> d ₂) |
| 3 黄褐色 (c ₁ > I黒) | 4 黒色 (I黒 + II黒 >> c ₁ > d ₂) |
| 5 黒色 (II黒 >> c ₁ + d ₂) | |

P-12 (図60)

塘底付近から、大洞 A 式の深鉢片 (図中●印) とタンネトウ L 式の深鉢片 (○) が重なり合っ
て出土した。しかし本土壙に伴うものではなく、共に投棄されたと考えられる。

位置 G 7-54

平面形 円形

規模 0.46×0.46/0.26×0.24/0.21

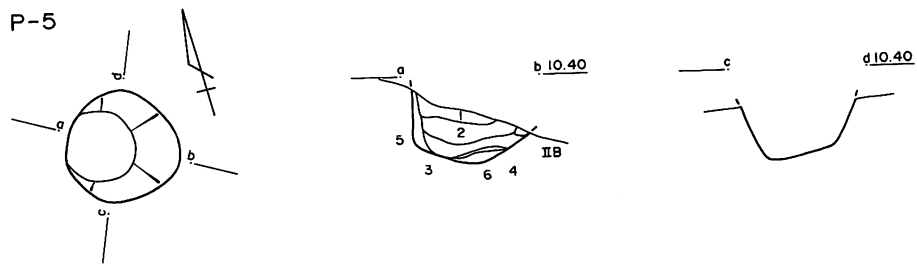
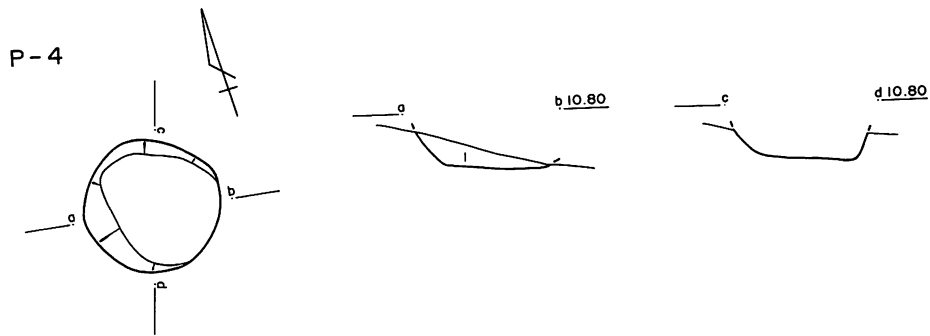
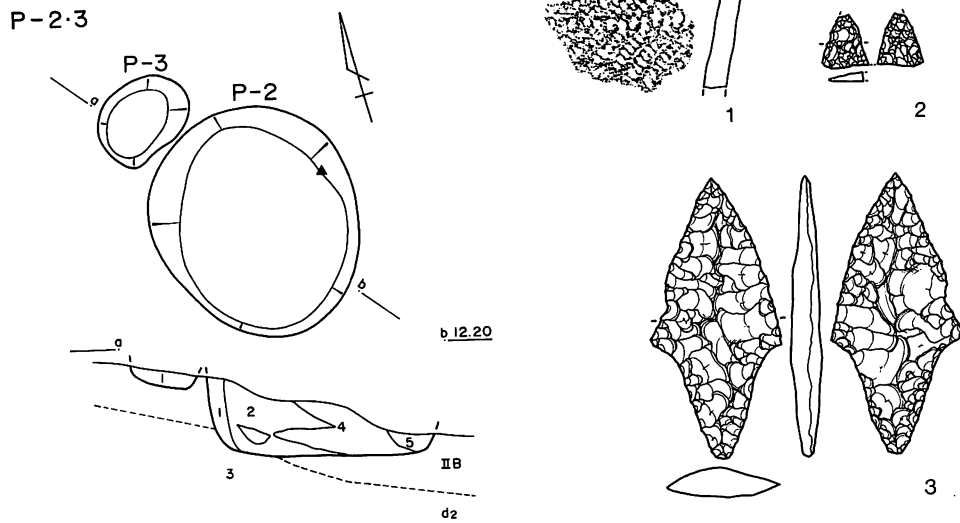
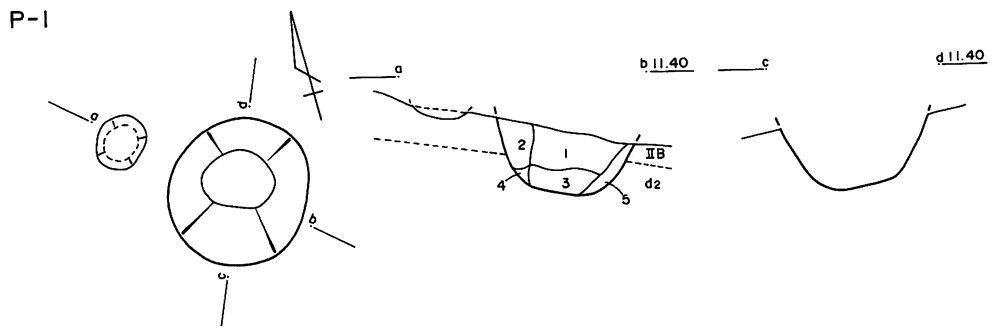
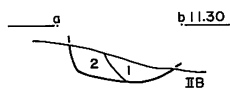
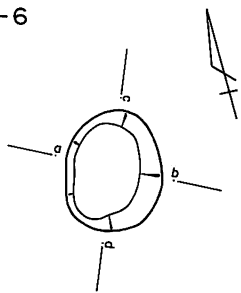
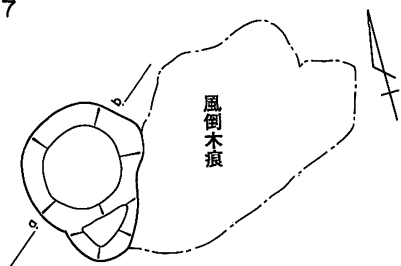


図58 P-1・2・3・4・5と遺物

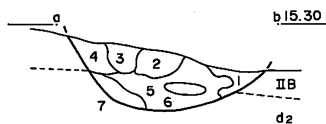
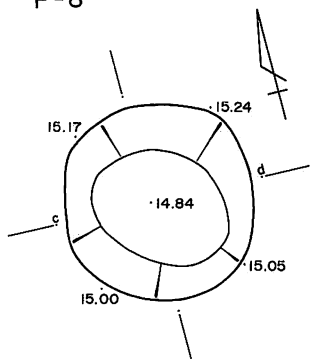
P-6



P-7



P-8



P-9

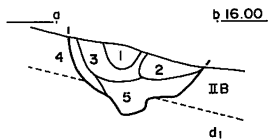
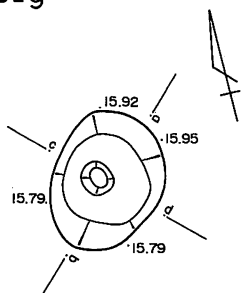


图59 P-6 · 7 · 8 · 9

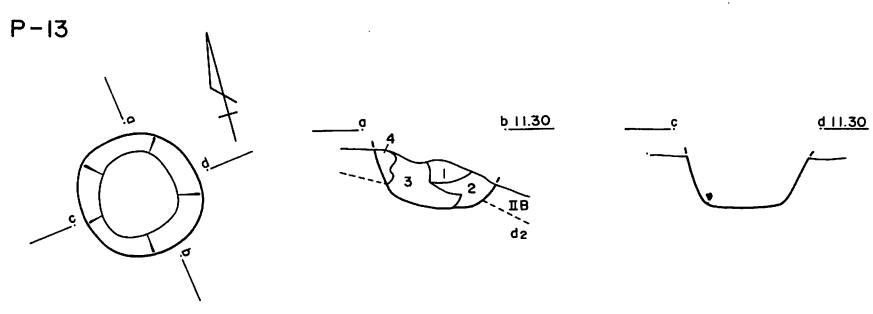
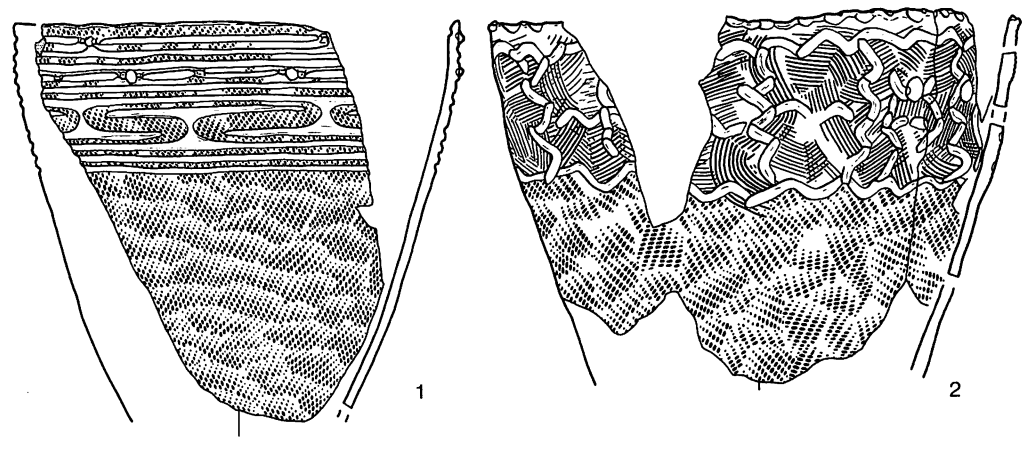
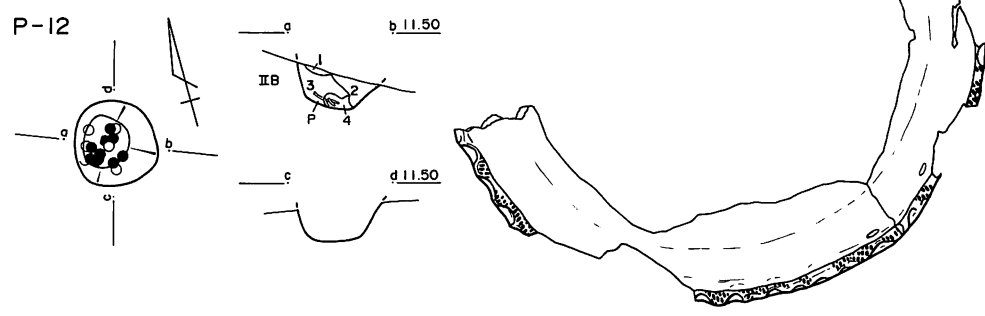
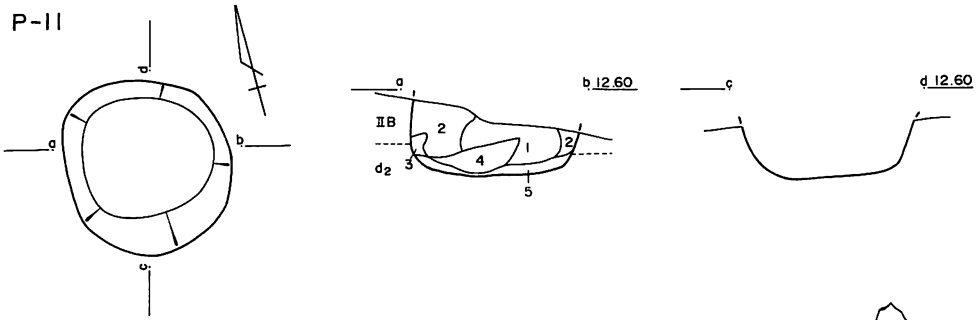


図60 P-11・12・13と遺物

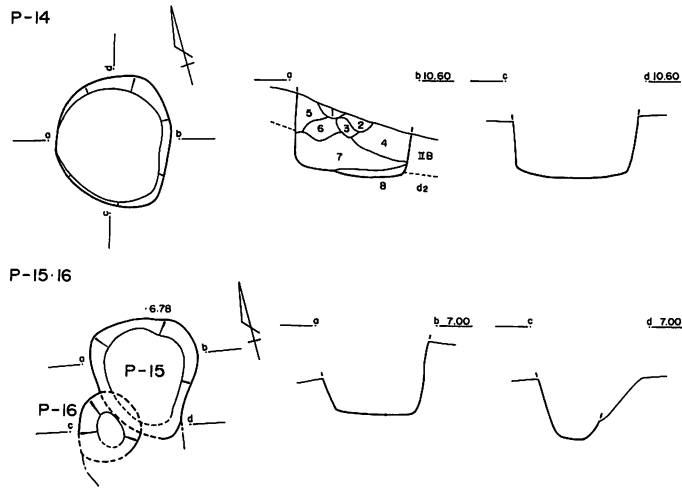


図61 P-14・15・16

表25 土 墳 一 覧

名 称	位 置	平 面 形	規 模 (m)			長 軸 方 向	備 考
			確 認 面	底 面	最大深		
P-1	G7-52・53	橢 円 形	0.77×0.73	0.38×0.30	0.38	N-72°-W	
P-2	G7-43・53	〃	1.23×1.09	1.09×0.90	0.41	N-3°-W	
P-3	G7-43・44	〃	0.51×0.38	0.38×0.27	0.11	N-61°-E	
P-4	G7-64	不整橢円形	0.70×0.66	0.66×0.56	0.16	N-45°-W	
P-5	G7-62	円 形	0.60×0.59	0.37×0.36	0.31	——	
P-6	G7-53	橢 円 形	0.63×0.52	0.51×0.36	0.13	N-35°-E	
P-7	G7-43	円 形	0.83×0.64	0.43×0.41	0.23	——	
P-8	G7-37	橢 円 形	1.07×1.05	0.75×0.57	0.30	N-46°-W	
P-9	G7-38	不整円形	0.74×0.57	0.47×0.46	0.37	——	
P-11	G7-44・45	橢 円 形	0.92×0.87	0.69×0.62	0.31	N-11.5°-E	
P-12	G7-54	円 形	0.46×0.46	0.26×0.24	0.21	——	
P-13	G7-52	〃	0.69×0.68	0.46×0.43	0.27	——	
P-14	G7-63	橢 円 形	0.98×0.87	0.85×0.78	0.45	N-13°-W	
P-15	F7-29	不整橢円形	(0.90)×0.77	(0.73)×0.58	0.53	N-9.5°-E	P16と切り合う
P-16	F7-29	橢 円 形	(0.50×0.47)	(0.26)×0.18	0.43	N-6°-W	P15と切り合う

表26 土墳別出土遺物一覧

遺 構 番 号	土 器			石 器 等			計	
	Ⅲ	V	VI	O群	I 群			X
	b				A	B		
P-1	3	C		1・2	4		1	
2	1				1	1	3	
12		47					47	
合 計	1	54		3	1	1	2	71

表27 土墳の掲載実測土器一覧

図 番 号	遺 構 番 号	名 称	分 類	大 き さ (cm)			層 位	写 真 図 版 番 号	備 考
				器 高	口 径	底 径			
60-1	P-12	深鉢	VC	(21.1)	(24.2)	—	覆土	3-②	図上復元
-2	P-12	〃	VC	(19.7)	(28.4)	—	〃	3-③	G7-54出土と接合

表28 土墳の掲載拓影土器一覧

図 番 号	遺 構 番 号	分 類	部 位	層 位	写 真 図 版 番 号	備 考
58-1	P-2	Ⅲb	胴	覆土	——	

表29 土墳の掲載石器等一覧

図 番 号	遺 構 番 号	名 称	分 類	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	層 位	写 真 図 版 番 号	備 考
58-2	P-2	石 鏃	1A4	(1.4)×(1.2)×0.3	(0.4)	Obs.	覆土	——	
-3	P-2	石 槍 または ナイフ	B1	7.4×3.5×0.8	12.5	Obs.	〃	——	

3 II 黒層の遺構と遺物

II 黒層からは、住居跡 6 軒、土壇10個、柱穴様ピット 9 個、焼土 3 か所の遺構とともに 3,033 点の土器および石器等が検出された。

(1) 遺構

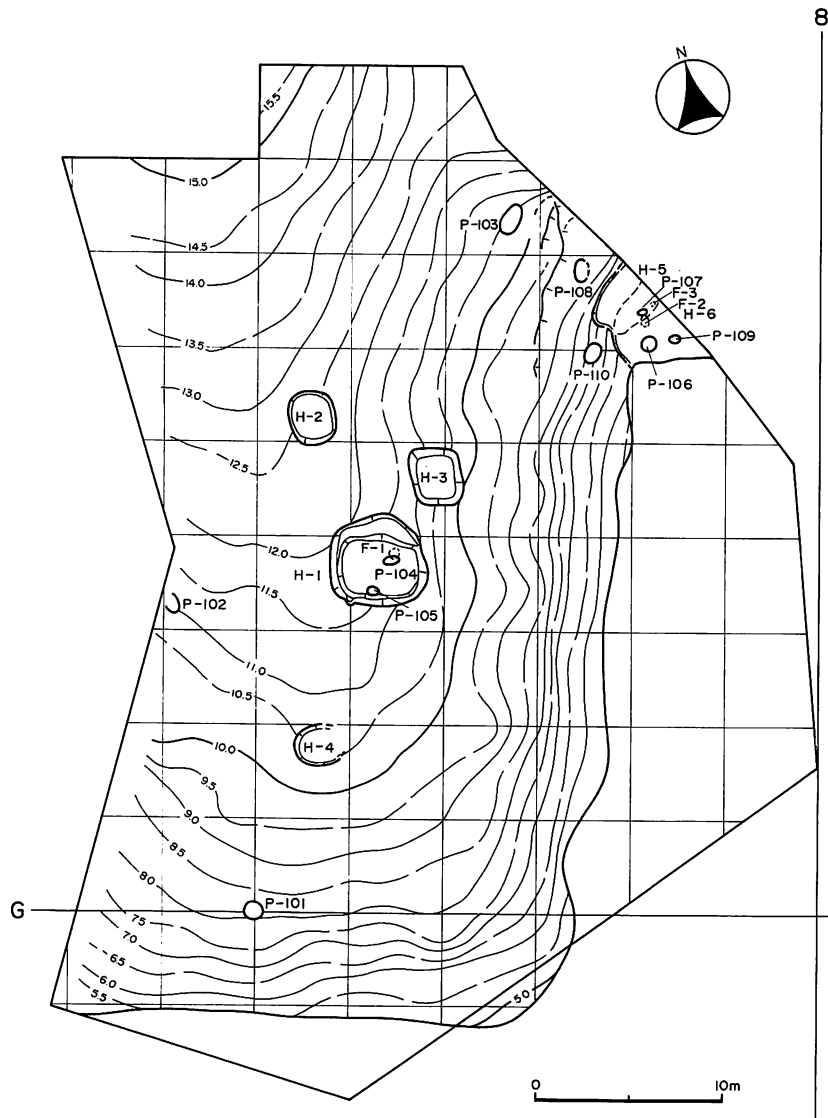


図62 II 黒層の遺構位置図

1) 住居跡

6軒の住居跡のうち、4軒は尾根上に分布しており、他の2軒は調査区北東隅の一段低いテラス部分で切り合って発見された。

H-1は、確認面の平面形は五角形であるが、北側に一段高いベンチが設けられているため、床面では隅丸長方形を呈している。床面の形状からみても縄文前期のものと考えられる。炉跡はなく、壁柱穴が確認されている。伴出遺物はないが、流れ込みと考えられるI群b-4類土器片が床面直上層から出土した。また、覆土中の遺物分布をみると、この住居が放棄されたあとには、縄文前期(中野式期)、中期中葉~後葉、晩期末葉(タンネトウL式)の3期にわたって埋まりきらないくぼ地を利用していることが判明した。

H-2・3・4は、平面形がいずれも隅丸長方形のもので、H-4は若干胴張りのものである。規模は長軸が2.5~3mの小型~中型のもので、炉・柱穴は確認されていない。伴出遺物は非常に少ないが、H-3の床面から無茎の石鏃が検出されている。

H-5・6は、竪穴の一部が調査区外に及んでいることもあり、時期、構造ともにはっきりとしなかった。両者の新旧関係はH-6が新しい。H-5は、確認できた壁の状況から隅丸方形である可能性が高く、前期に属するものかもしれない。H-6は、壁の一部を検出しただけである。調査区の境界付近から、わずかに炭化物と焼骨を含んだ焼土が検出された。柱穴は9個検出されたが、配列もはっきりせず、いずれに伴うものか不明である。(野中一宏)

H-1 (図63・64)

調査区中央部の尾根上に位置する。II黒層の上面では皿状の浅いくぼみとして確認された。くぼみの部分の土は黒色土で、その周囲の土はII黒とTa-d₁、Ta-d₂が混じることからおよそのプランを想定して調査を進めた。調査の結果、北東側に幅70cmの広いテラスがあり2段の構造をもつことが確認された。外形は五角形で、床面は隅丸長方形である。床面の西側半分は支笏軽石流堆積物(Spfl)を、東側半分はTa-d₂を掘り込んでつくられている。炉跡はない。柱穴は床面の長軸上に3個、西壁から南壁にかけて6個、住居跡の外周の東側に1個の計10個が確認されている。壁の立ち上がりは、東壁がゆるやかなほかはすべて急である。住居跡の南西隅に柱穴とは異なる丸く掘りこまれた部分がある。

時期は、床面からI群b-4類の土器片が3点出土しているが、美々5遺跡で検出されたII群a-2類の住居跡(AH-3)に、その規模、平面形(底面)、柱穴の配置について類似性があり、この時期のものと思われる。

覆土中に2枚の黒色土(5層、6層)の堆積が確認された。下の6層からはII群a-2類の尖底深鉢(図64-1)、前期の土器片、無茎の石鏃が出土し、上の5層からはIII群b類の土器片が出土している。この2枚の面においても改めて住居跡として再利用されていた可能性もあるが、それに伴う炉跡、柱穴、あるいは床面などは確認されなかった。

遺物は床面からI群b-4類の土器片が3点とつまみナイフが1点出土している。覆土からは、土器が464点、石器等が123点出土している。土器はII群a-2類が最も多く、ついでIII

群 b 類、I 群 b-4 類の順である。石器は無茎と有茎の石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパーなどが出土している。

なお、H-1 の調査中に、6 層中で P-105 が、8 層上面で P-104 が確認されている。

位置 G 7-43・44・53・54 **平面形** 五角形（確認面）、隅丸長方形（底面）

規模 5.00×4.84/4.05×2.80/1.28 N-75°-W

覆土 1	黒色（II B）	2	暗褐色（d ₁ ）
3	黒褐色（II B >> d ₂ ）	4	暗茶褐色（II B > d ₂ ）
5	黒色（II B）	6	黒色（II B >> d ₂ ）
7	暗茶褐色（II B + d ₂ ）	8	暗黄褐色（EnL + d ₂ ）
9	橙色（d ₂ ）	10	黄褐色（EnL > d ₂ ）
11	暗橙色（d ₂ > EnL）	12	黒褐色（II B > d ₂ ）
13	橙色（d ₂ ）	14	暗黄褐色（EnL + d ₂ ）
15	暗橙色（d ₂ > EnL）	16	黒色（II B）

HP-1 1 橙褐色（d₂ >> II B）

遺物（図64） 1 は住居跡西側でまとまって出土した II 群 a-2 類の尖底深鉢である。胴部の破片は脆く細片となっているため接合することができず、図上で復元した。口唇は平縁で、ナデ調整によって口唇の両側に粘土がはみ出している。器形は口縁部から底部にかけてすばまり、底部は丸くなっている。口縁部から底部まで LR の斜縄文が浅く施文されている。口縁部には補修孔が 5 か所穿たれている。2 は I 群 b-3 類の、3-5 は I 群 b-4 類の胴部破片である。3-5 の裏面はいずれも黒色をしており、炭化物が付着している。裏面の調整も良好に行なわれており、その痕が線状になって認められる（図64-3）。6・7 は II 群 a-2 類の胴部破片で、LR の斜縄文が施されている。7 は施文が浅く、胎土中に繊維混入の痕が認められる。8 は III 群 b-3 類の胴部破片である。表面は赤褐色をしており、胎土に白っぽい砂を多量に含んでいる。土器破片の中央部には横位の無文帯があり、その上下には斜縄文と棒状工具による横位の押し引きが施されている。9 は III 群 b 類の胴部破片である。表は赤褐色をしており、LR の斜縄文が浅く施文されている。10 は IV 群 a 類の胴部破片で、横位の貼付帯と羽状縄文が施されている。11 は V 群 c 類の口縁部破片で、無文である。12 は北側の床面より出土したつまみ付ナイフである。背面の両側縁のみを加工したもので、左下縁部を大きく欠損している。13-31 まで覆土出土の石器である。13-15 は無茎の石鏃で覆土 6 層より出土しており、前期の土器に共伴するものである。16-26 は有茎の石鏃で覆土 1 層より出土している。この中で、16・18・26 のように腹面に一次剝離面を大きく残したものは晩期に特長的なものである。27 は石槍の基部破片である。28 は石錐で、尖頭部を欠損している。29 は背面のほぼ全面と腹面の右側縁から下端部にかけて加工が施されたつまみ付ナイフである。31 は背面の両側縁を加工したスクレイパーである。石器の素材は 29・31 が頁岩でこのほかはすべて黒曜石である。

（佐川俊一）

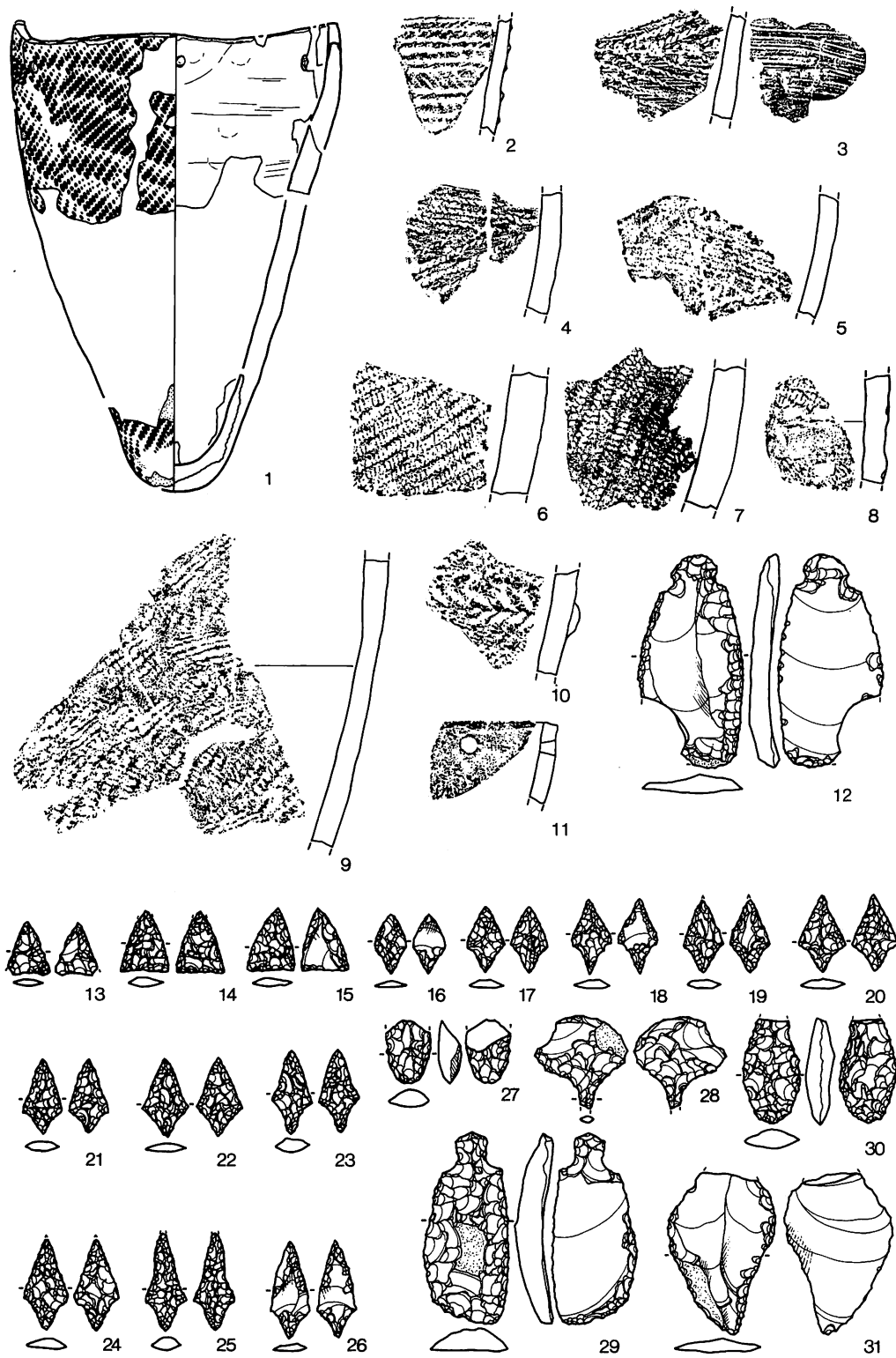


図64 H-1の遺物

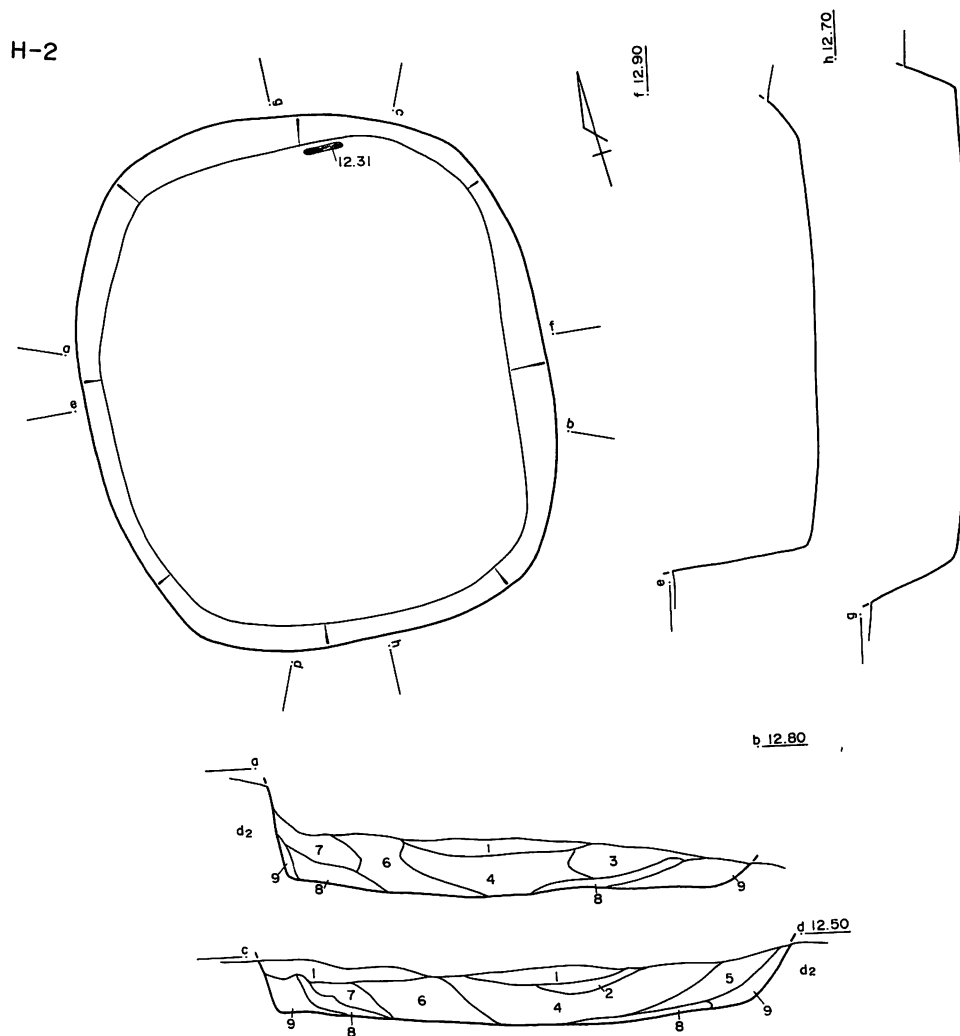


図65 H-2

H-2 (図65)

縄文前期に属する住居跡のうち、尾根上の最も高い位置に作られている。平面形は、西側壁が若干膨らむ隅丸長方形で、長軸が等高線に沿っている。床面は平坦で、柔かく、壁は南半部（斜面下位）がゆるやかに立ち上がる。覆土は、黒色土を多く含む土層と Ta-d₂ を多く含む土層とに大きく二分され、互層をなしている。また、各土層ともに保水率が高い。炉跡や柱穴はない。土器、石器等の人工遺物は全く検出されず、北側壁付近の覆土下部から炭化物が検出されただけである。

位置 G 7-44・45

平面形 隅丸長方形

規模 2.82×2.47/2.54×2.15/0.81

長軸方向 N-0°-W

H-3

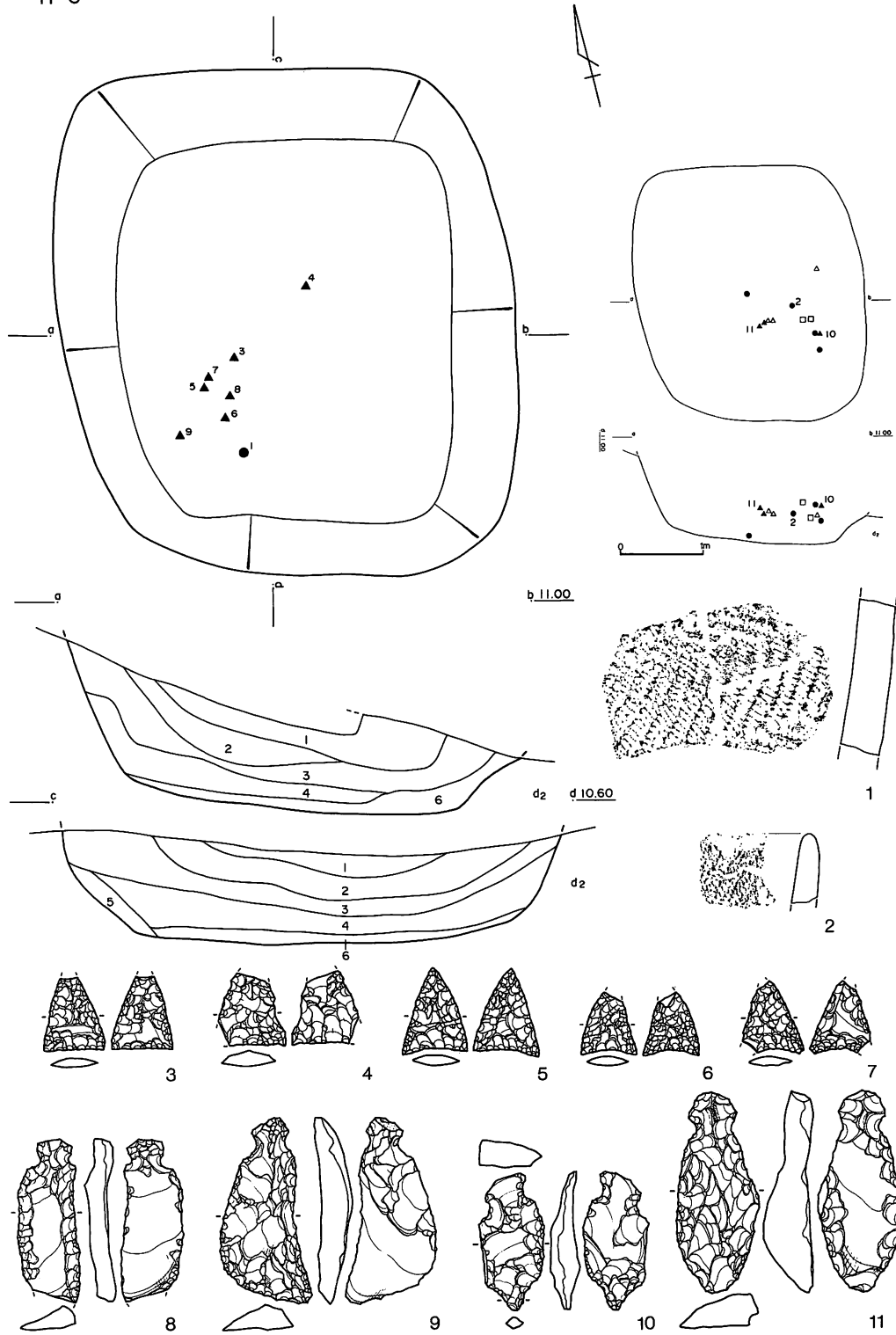


図66 H-3と遺物

- | | | | |
|------|-------------------------------------|---|---------------------------------------|
| 覆土 1 | 暗褐色 ($d_2 + \text{II黒} + d_1$) | 2 | 黒色 ($\text{II黒} \gg d_1$) |
| 3 | 暗橙褐色 ($d_2 > d_1 \gg \text{II黒}$) | 4 | 黒褐色 ($\text{II黒} + d_2 \text{パミス}$) |
| 5 | 暗褐色 ($d_1 > d_2$) | 6 | 暗橙褐色 ($d_2 + d_1 \gg \text{II黒}$) |
| 7 | 橙褐色 (d_2) | 8 | 黒色 ($\text{II黒} \gg d_1$) |
| 9 | 橙褐色 (d_2) | | (野中一宏) |

H-3 (図66)

H-1 北東方向1.5mほどの尾根の縁に作られており、長軸方向はH-2同様に等高線に沿っている。床面は平坦で柔かく、壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。炉跡や柱穴はない。覆土はH-2同様、黒色土を主体とする土層とTa-d₂を主体とする土層に大きく二分され、床面直上には厚さ10cmほどの暗黒褐色土が一面に堆積している。床面からはII群a-2類土器片2点とA4類5点、D類2点の石器が出土した(1・3~9)。これらは、床面南西部に集中して分布している(遺構平面図中のマーク)。覆土からは、28点の遺物が出土した。これらは中央部から東側にかけて多く分布し(分布図)、ほとんどが覆土1~3層に含まれている。

位置 G7-54・64

平面形 隅丸長方形

規模 3.03×2.77/2.26×2.03/1.03

長軸方向 N-15°-E

- | | | | |
|------|----------------------------|---|-------------------------------|
| 覆土 1 | 黒色 (II黒) | 2 | 橙褐色 ($d_2 \gg \text{II黒}$) |
| 3 | 黒褐色 ($\text{II黒} > d_2$) | 4 | 暗橙褐色 ($d_2 > \text{II黒}$) |
| 5 | 橙褐色 (d_2) | 6 | 暗黒褐色 ($\text{II黒} \gg d_2$) |

遺物 床面 1はII群a-2類胴部破片で、胎土に砂礫と繊維を多く含む。体部の色調は暗褐色で、節が細長いRL・LRの原体を交互に横転させた羽状縄文が施されている。3~7は4類の石鏃で、基部が平坦なもの(3・4)と若干内湾するもの(5~7)がある。石材はいずれも黒曜石で、一側縁が湾曲した左右非対象のものである。8・9はD類で、ともに頁岩が用いられている。8は比較物薄手の素材を用い、背面の周囲と腹面のつまみ部に入念な二次加工を施したもので、腹面の側縁にも断続的に細かい剥離がみられる。9は刃部下端が平坦なもので、背面全面に二次加工が施されている。また、左側縁と右側縁下部に非常に細かい剥離が認められる。

覆土 2は、II群a-2類の口縁部破片。口唇の断面形はU字形で、内面に炭化物が付着している。胎土には繊維を含むが、砂礫の混入はない。体部の色調は褐色で、LRの比較的細かい斜行縄文が施されているが、回転圧が弱いせいか、判然としない。10は黒曜石製のC類で、つまみ付ナイフの刃部を再加工したものである。11は肉厚の頁岩製素材を用いたD類で、背面には入念な二次加工が全面に施されており、腹面にもつまみ部と側縁の一部に簡単な二次加工がみられる。(野中一宏)

H-4 (図67)

縄文前期に属する住居跡のうち、最も低い位置に作られており、分布調査時に確認されたものである。平面形は、胴張りの隅丸長方形で、長軸方向はH-2・3同様に等高線に沿っている。

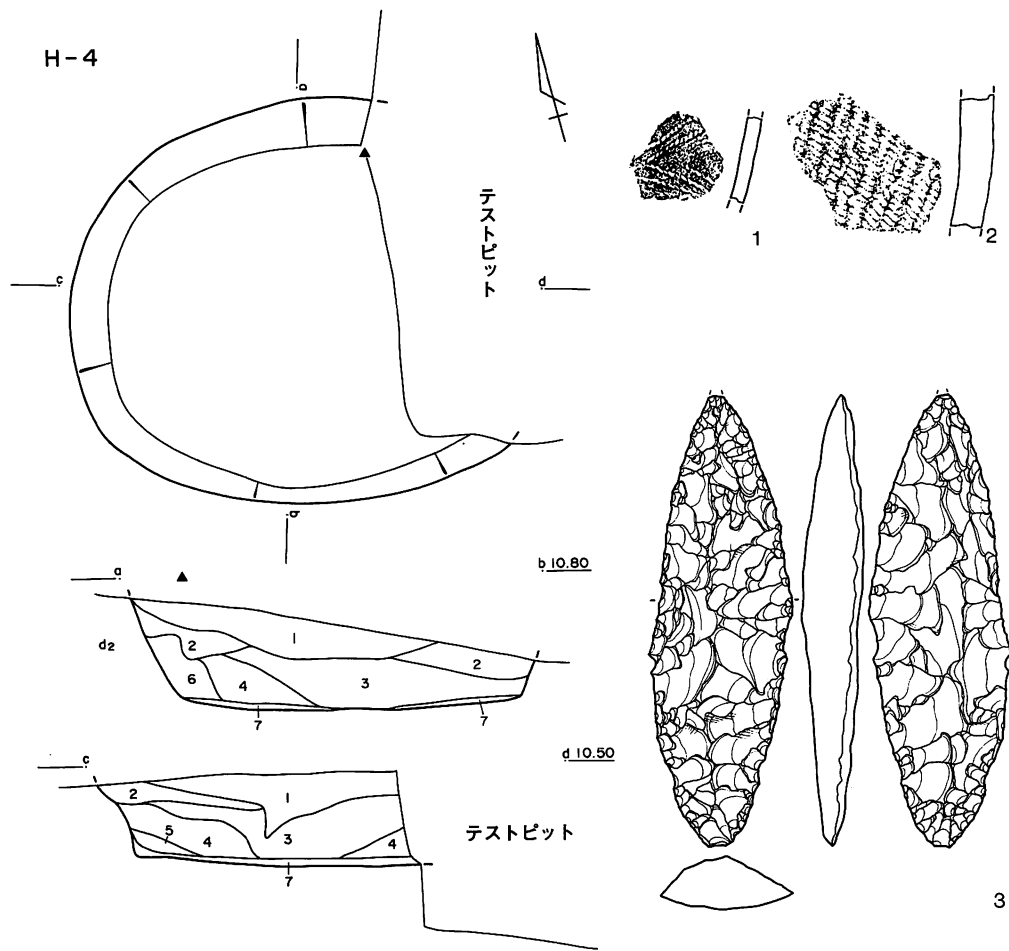


図67 H-4と遺物

床面は非常に硬くしまっており、壁は急角度で立ち上がる。柱穴や炉跡はない。覆土はそれぞれ黒色土と Ta - d₂ を主体とする土層に分化でき、床面直上には黒色土が一面に薄く堆積している。床面から検出された遺物はなく、覆土から I 群 b - 4 類 1 点、II 群 a - 2 類 4 点の土器片と B 類 1 点の石器が出土しただけである。

位置 G 7-41

平面形 隅丸方形

規模 —×2.13/—×1.78/0.60

長軸方向 N-75°-W

覆土 1 黒色 (II 黒>> d₂/パミス)

2 暗褐色 (d₁>d₂)

3 暗橙褐色 (d₂>II 黒)

4 暗橙褐色 (d₁>d₂)

5 黒褐色 (II 黒+d₂)

6 橙褐色 (d₂)

7 黒色 (II 黒+d₁)

遺物 1はI群b-4類胴部破片で、胎土に細砂粒を含む。体部の色調は明暗褐色を呈し、地文はRの燃糸文である。2はII群a-2類の胴部破片。胎土には石英を多く含む砂礫が多量に混入しており、繊維の量は少ない。体部の色調は暗褐色～黒褐色で、LRの斜行縄文が施されている。3は頁岩製のB2類。左右非対象で、背面の側縁に非常に細かい剝離が認められる。(野中一宏)

H-5・6 (図68)

調査区北東隅の一段低いテラスに位置する。両者の新旧関係はH-6が新しい。H-5は、全体の1/2を検出できたに過ぎず、伴出遺物や柱穴、炉跡はない。南西部のコーナーの形状からすると隅丸長方形を呈する可能性がある。H-6は、西側壁の一部を確認できただけで、プランは不明である。調査区外との境界付近から焼骨片と炭化物を含む地床炉が検出された。柱穴は9個確認されたが、配列が不規則で、H-5と重複する部分から検出されたものはどちらに伴うものかわからなかった。

- 覆土**
- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 褐色 (II黒+d ₂ 、H-6覆土) | 2 暗褐色 (II黒>d ₂ 、H-6覆土) |
| 2 黒色 (II黒、H-6覆土) | 4 橙褐色 (d ₂ >II黒、H-6覆土) |
| 5 茶褐色 (d ₂ +II黒、H-6覆土) | 6 橙褐色 (d ₁ 、H-6覆土) |
| 7 黒色 (II黒、H-6覆土) | 8 黒褐色 (II黒>>d ₂ 、H-5覆土) |
| 9 暗茶褐色 (d ₂ +II黒、H-5覆土) | 10 明橙褐色 (d ₂ >>II黒、H-5覆土) |

遺物 3・7はH-5覆土、5・11はH-6覆土出土のもので他は不明である。1～4はII群a-2類で、斜行または横位、縦位の羽状縄文が施されている。5はIII群b類で、結束第1種の羽状縄文が施され、内面や底面はていねいに研磨されている。6は黒曜石製のB3類、7・8は頁岩製のD類である。7は一側縁にのみ二次加工が施されただけ、8は片面全面加工のものである。9・10は安山岩、砂岩のJ類、11は片麻岩製のN類。(野中一宏)

表30 住居跡一覽

名称	位置	平面形	規模 (m)			長軸方向	備考
			確認面	底面	最大深		
H-1	G7-43・44・53・54	確認面：五角形 底面：隅丸長方形	5.00×4.84	4.05×2.80	1.28	N-75°-W	
2	G7-44・45	隅丸長方形	2.82×2.47	2.54×2.15	0.81	N-0°-W	
3	G7-54・64	〃	3.03×2.77	2.26×2.03	1.03	N-15°-E	
4	G7-41	〃	—×2.13	—×1.78	0.60	N-75°-W	
5	G7-76・86	—	—	—	0.22	—	H-6に切られる
6	G7-76・86	—	—	—	0.33	—	H-5を切る

表31 住居跡出土遺物一覧

遺構番号	層位	土 器												石 器 等												計					
		I			II			III			IV	V	O 群			I 群			II 群	III 群	IV 群	V 群	VI 群	X							
		b	a	b	a	b	a	b	a	c	1a	1b	2	4	7	A	B	C	D	E	F	G	J	N	0		1				
		3	4	2	3	4	2	3	3	4	1	4	1	2	4	7	1	1	1	1	2	1	1	1	1		1	1			
H-1	床		3																								4				
	覆土	1	23	383	5		5	1	3	34	4	1	4		68	5	11	1	2	1	1	3	1	2	1		3	24	587		
H-3	床			2											5						2							9			
	覆土			4		1								1	16			1		1	1						3	28			
H-4	床																														
	覆土			5													1										1	7			
H-5	床																														
	覆土			12	12					1	1				2			1		2	1	1		2	5	4	10	54			
計		1	26	406	17	1	5	1	3	35	5	1	4	1	86	10	11	2	4	1	1	7	4	1	3	1	2	5	7	38	689

表32 住居跡の掲載実測土器一覧

図番号	遺構番号	名 称	分 類	大 き さ (cm)			層 位	写 真 図版番号	備 考
				器 高	口 径	底 径			
64-1	H-1	尖底深鉢	II a-2	(28.0)	(19.5)	—	覆土	5-②	

表33 住居跡の掲載拓影土器一覧

図番号	遺構番号	分 類	部 位	層 位	写 真 図版番号	備 考	図番号	遺構番号	分 類	部 位	層 位	写 真 図版番号	備 考
64-2	H-1	I b-3	胴	覆土	5-③		66-1	H-3	II a-2	胴	床	7-①	
-3	H-1	I b-4	〃	〃	〃		-2	H-3	〃	口	覆土	〃	
-4	H-1	〃	〃	〃	〃		67-1	H-4	I b-4	胴	〃	〃	
-5	H-1	〃	〃	〃	〃		-2	H-4	II a-2	〃	〃	〃	
-6	H-1	II a-2	〃	〃	〃		68-1	H-5	〃	口	〃	〃	
-7	H-1	〃	〃	〃	〃		-2	H-5	〃	胴	〃	〃	
-8	H-1	III b-3	〃	〃	〃		-3	H-5	〃	〃	〃	〃	
-9	H-1	III b	〃	〃	〃		-4	H-5	〃	〃	〃	〃	
-10	H-1	IV a	口	〃	〃		-5	H-5	III b	底	〃	〃	G, -86-32-44出土と接合
-11	H-1	V c	胴	〃	〃								

表34 住居跡の掲載石器等一覧

図番号	遺構番号	名 称	分 類	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	層 位	写 真 図版番号	図番号	遺構番号	名 称	分 類	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	層 位	写 真 図版番号
64-12	H-1	つまみ付きナイフ	D	6.3×3.1×0.5	(10.2)	Obs.	床	5-④	66-4	H-3	石 鏃	IA4	(2.2)×(1.9)×0.5	(1.9)	Obs.	床	7-②
-13	H-1	石 鏃	IA4	1.5×1.2×0.2	(0.4)	Obs.	覆土	〃	-5	H-3	〃	〃	2.5×1.9×0.3	1.1	Obs.	〃	〃
-14	H-1	〃	〃	(1.8)×1.4×0.3	(0.6)	Obs.	〃	〃	-6	H-3	〃	〃	(1.9)×1.7×0.3	(0.9)	Obs.	〃	〃
-15	H-1	〃	〃	1.9×1.4×0.3	0.6	Obs.	〃	〃	-7	H-3	〃	〃	(2.1)×(1.9)×0.3	(0.7)	Obs.	〃	〃
-16	H-1	〃	IA7	1.7×0.9×0.2	0.2	Obs.	〃	〃	-8	H-3	つまみ付きナイフ	D	(4.9)×1.8×0.6	(6.3)	Sh.	〃	〃
-17	H-1	〃	〃	1.9×1.1×0.3	0.4	Obs.	〃	〃	-9	H-3	〃	〃	5.7×2.4×0.9	11.6	Sh.	〃	〃
-18	H-1	〃	〃	2.2×1.2×0.2	0.4	Obs.	〃	〃	-10	H-3	石 鏃	C	4.2×1.9×0.8	5.8	Obs.	覆土	〃
-19	H-1	〃	〃	(2.1)×1.1×0.3	(0.4)	Obs.	〃	〃	-11	H-3	つまみ付きナイフ	D	6.1×2.5×1.3	14.8	Sh.	〃	〃
-20	H-1	〃	〃	2.2×1.4×0.3	0.6	Obs.	〃	〃	67-3	H-4	石鏃またはナイフ	B	(11.9)×3.6×1.3	(52.5)	Sh.	〃	〃
-21	H-1	〃	〃	2.2×1.1×0.3	0.5	Obs.	〃	〃	68-6	H-5	〃	〃	(6.5)×3.5×0.9	(16.9)	Obs.	〃	〃
-22	H-1	〃	〃	2.3×1.4×0.3	0.6	Obs.	〃	〃	-7	H-5	つまみ付きナイフ	D	4.5×2.0×0.5	(4.8)	Sh.	〃	〃
-23	H-1	〃	〃	2.4×1.2×0.4	0.8	Obs.	〃	〃	-8	H-5	つまみ付きナイフ	D	5.8×2.0×0.6	8.1	Sh.	覆土	〃
-24	H-1	〃	〃	(2.7)×1.3×0.3	(0.7)	Obs.	〃	〃	-9	H-5	す り 石	J	4.2×6.4×2.8	107.2	And.	〃	〃
-25	H-1	〃	〃	(2.9)×1.2×0.4	(0.9)	Obs.	〃	〃	-10	H-5	〃	〃	(6.0)×(6.4)×4.3	(155.6)	Sa.	〃	〃
-26	H-1	〃	〃	2.9×1.1×0.2	0.6	Obs.	〃	〃	-11	H-5	石 鏃	N	7.1×9.3×1.6	191.3	Gmi.	〃	〃
-27	H-1	石鏃またはナイフ	B	(1.9)×(1.3)×(0.6)	(1.4)	Obs.	〃	〃									
-28	H-1	石 鏃	Cl	(2.8)×2.8×0.8	(3.5)	Obs.	〃	〃									
-29	H-1	つまみ付きナイフ	D	5.7×2.6×0.7	11.4	Sh.	〃	〃									
-30	H-1	スクレイパー	E	(3.1)×1.7×0.7	(3.4)	Sh.	〃	〃									
-31	H-1	〃	E	4.9×3.2×0.5	8.2	Sh.	〃	〃									
66-3	H-3	石 鏃	IA4	(2.2)×1.8×0.4	(1.2)	Obs.	床	7-②									

2) 土壌

10個検された土壌のうち、時期が特定できたものは2個（P-101・110）だけで、他は不明である。また、用途についても、いずれも不明である。これらの土壌は、調査区北東隅の斜面及び一段低いテラスに集中している。以下個別に記す。

P-101 (図69)

川沿いの低位置にある。Ta-c層除去中に土器片がまとまって検出されたことから、下部に土壌が存在することを予想して調査したものである。土器は同一個体の破片で、ほぼ完全に近い形で復元できた。破片は、大部分が内面を上にした状態で検出されており、覆土1層中から壙口部にかけて分布している。

位置 F 7-39・49、G 7-30・40

規模 0.90×0.85/0.70×0.69/0.33

覆土 1 暗褐色（Ⅱ黒>>d₂パミス）

3 明橙色（d₂パミス>>Ⅱ黒）

平面形 不整円形

2 暗茶褐色（Ⅱ黒+d₂パミス）

遺物 (図64-1) V群C類土器。胎土に砂礫を含み、体部の色調は明黄褐色、内面は灰褐色または黒褐色をしており、炭化物の付着が認められる。また、補修孔が3か所みられる。口唇の断面は切り出し形である。口縁には5個の突起が付され、突起下には幅広の隆帯が垂れ下がる。文様帯は口縁部に限られており、上位に横走沈線、下位に幅広の沈線と刺突列をめぐらすことによって文様帯が区画されている。文様帯内には半裁竹管による細線が平行に幾筋も引かれ、細線上には弧線と直線を交互に施文している。地文はRLの斜行縄文で、底面にも施されている。

P-102 (図70)

西側壁上部が調査区外に及んでいる。

位置 G 7-33

規模 —×0.81/1.15×0.72/0.20

覆土 1 黒褐色（Ⅱ黒>>d₂）

3 暗橙褐色（d₂>Ⅱ黒）

平面形 不整楕円形

長軸方向 N-44°-W

2 橙褐色（d₂）

P-103 (図70)

位置 G 7-67

規模 1.64×0.93/1.45×0.84/0.32

覆土 1 橙褐色（d₂パミス>Ⅱ黒）

3 暗橙褐色（d₂パミス>>Ⅱ黒）

平面形 不整楕円形

長軸方向 N-46°-E

2 黒褐色（Ⅱ黒>d₂パミス）

P-104 (図70)

位置 G 7-53

規模 0.82×0.42/0.71×0.36/0.09

覆土 1 黒褐色（Ⅱ黒>d₂パミス）

平面形 楕円形

長軸方向 N-89°-E

P-105 (図70)

位置 G 7-53

規模 0.63×0.52/0.42×0.30/0.05

覆土 1 黒褐色 (II黒 > d₂パミス)

平面形 楕円形

長軸方向 N-87.5°-E

P-106 (図70)

位置 G 7-86

規模 0.88×0.82/0.56×0.55/0.78

覆土 1 暗褐色 (II黒 > d₂パミス)
3 暗茶褐色 (II黒 + d₂パミス)

平面形 円形

2 明橙褐色 (d₂パミス > II黒)

4 黒褐色 (II黒 >> d₂パミス)

P-107 (図71)

位置 G 7-86

規模 0.41×0.36/0.18×0.15/0.81

覆土 1 黒褐色 (II黒 >> d₂)
3 暗褐色 (II黒 > d₂パミス)

平面形 楕円形

長軸方向 N-39°-W

2 淡橙褐色 (d₂ >> II黒)

P-108 (図71)

東側壁は木の根の攪乱によって壊されている。南側壁付近には0.14×0.8cmの小ピットがある。また、周辺からも柱穴様ピット9個が検出されたが、本土墳に伴うものかはわからなかった。

位置 G 7-76

規模 1.08×0.80/0.89×0.65/0.21

覆土 1 黒褐色 (II黒 >> d₂)

平面形 楕円形

長軸方向 N-11°-E

2 暗黄茶褐色 (d₂ > II黒)

P-109 (図71)

位置 G 7-75・76

規模 0.47×0.42/0.29×0.25/0.55

覆土 1 暗橙褐色 (d₂ > II黒)
3 暗茶褐色 (II黒 + d₂パミス)

平面形 楕円形

長軸方向 N-58°-E

2 黒褐色 (II黒 >> d₂パミス)

4 暗褐色 (II黒 > d₂)

P-110 (図71)

北東壁付近からII群 a-2類土器片6点、N類1点と南西壁付近からA₄類1点の石器が出土した。いずれも墳底付近から検出されたものである。

位置 G 7-75・76

規模 1.03×0.82/0.94×0.73/0.18

覆土 1 暗褐色 (II黒 > d₂パミス)

平面形 楕円形

長軸方向 N-55°-E

2 橙褐色 (d₂パミス >> II黒)

遺物 1・2は春日町式類似の同一個体の口縁部破片で、II群 a-2類に分類される。胎土に繊維を多量に含み、体部の色調は黒褐色を呈する。口唇の断面形はU字形で、口縁下に3条の平行沈線がめぐる。地文はLRの斜行縄文である。3は黒曜石製のA₄類石鏃。基部がわずかに内湾している。4は流紋岩製の石錘で、4ヵ所に抉入がある。(野中一宏)

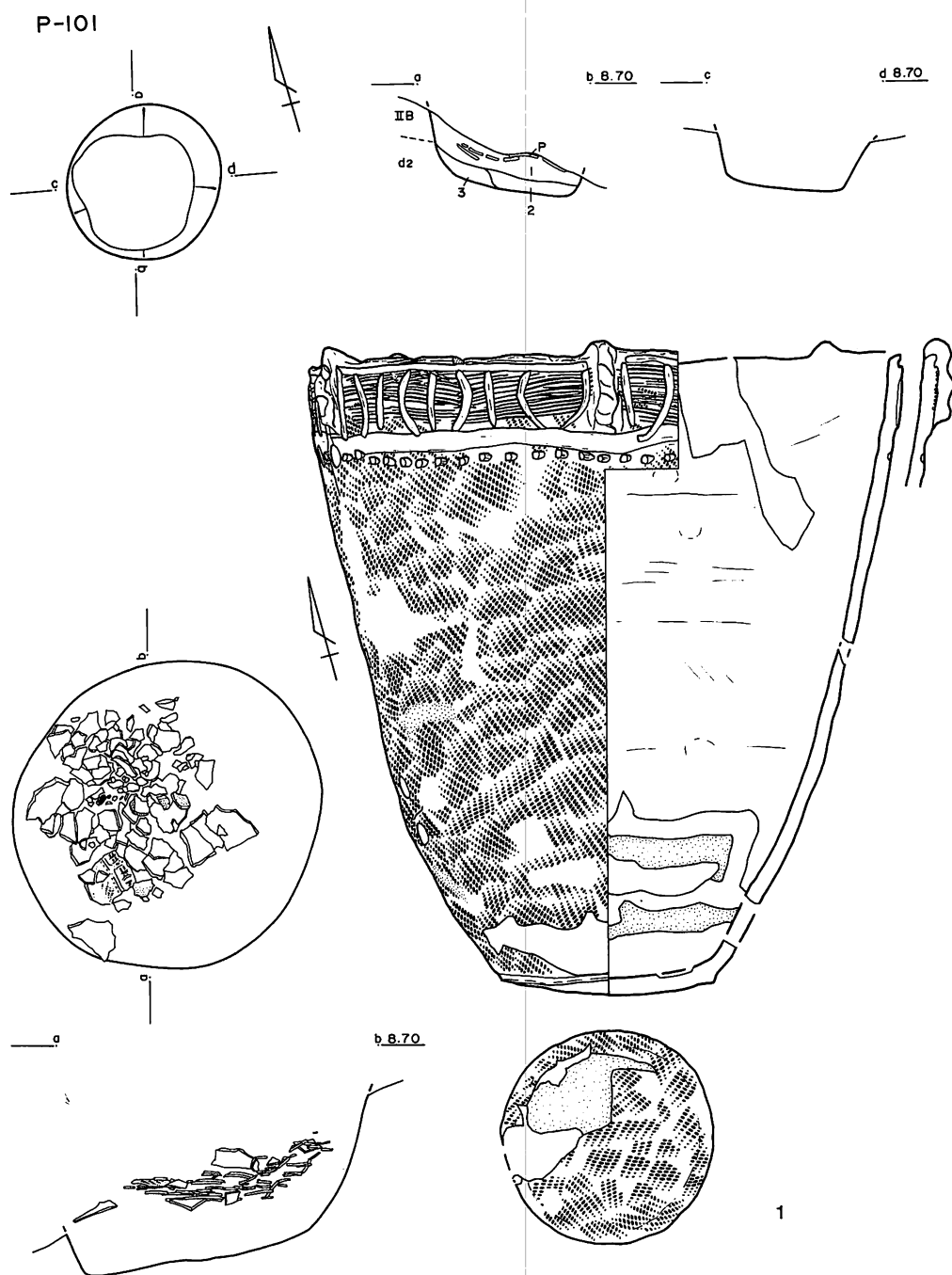


図69 P-101と遺物

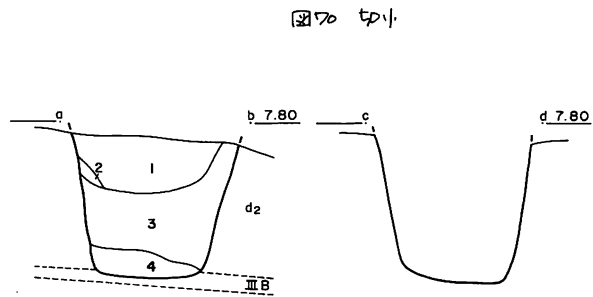
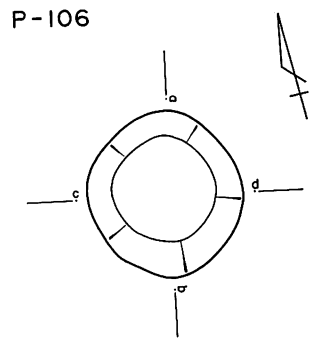
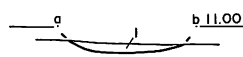
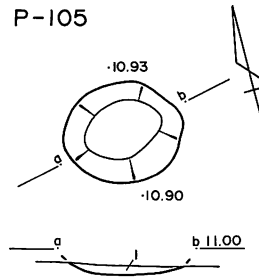
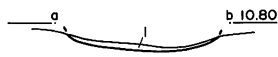
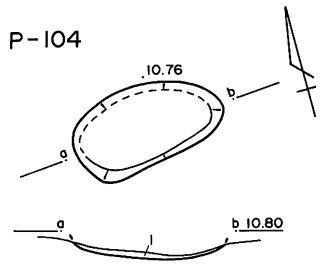
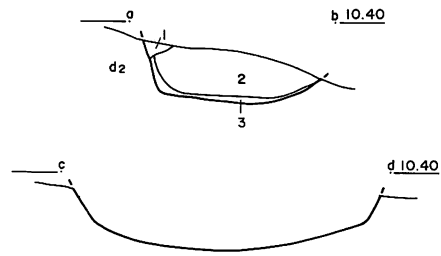
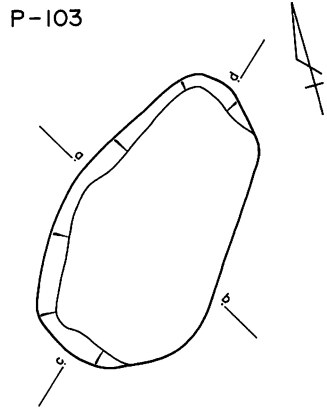
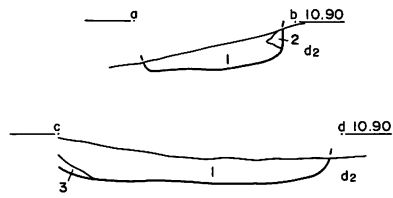
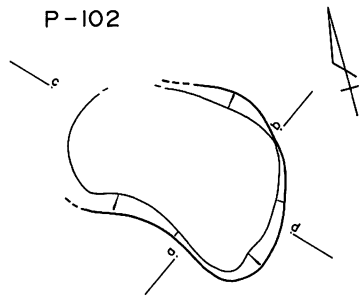
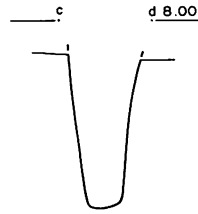
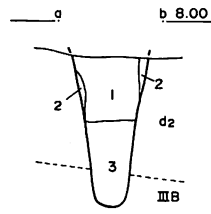
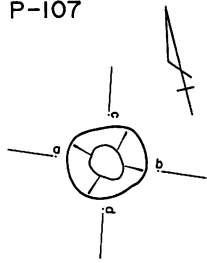
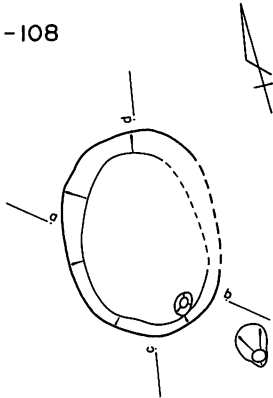


图70 P-102 · 103 · 104 · 105 · 106

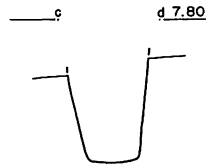
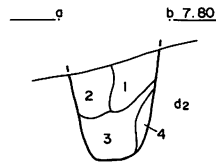
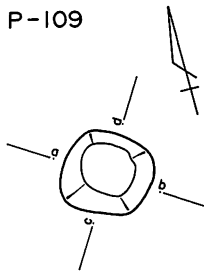
P-107



P-108



P-109



P-110

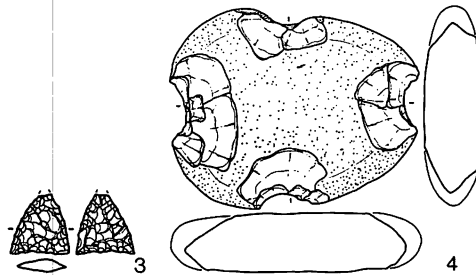
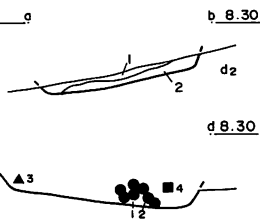
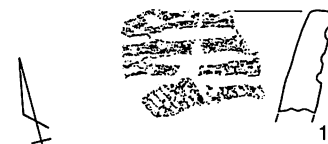
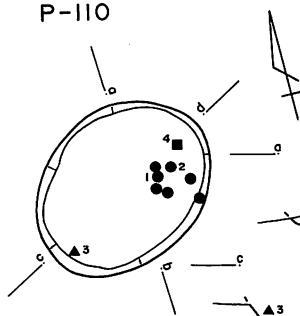


図71 P-107・108・109・110と遺物

表35 土 壤 一 覧

名 称	位 置	平 面 形	規 模 (m)			長 軸 方 向	備 考
			確 認 面	底 面	最 大 深		
P-101	F7-39・49、G7-30・40	不 整 円 形	0.90×0.85	0.70×0.69	0.33	—	
P-102	G7-33	不 整 楕 円 形	—×(0.81)	1.15×0.72	0.20	N-44°-W	
P-103	G7-67	〃	1.64×0.93	1.45×0.84	0.32	N-46°-E	
P-104	G7-53	楕 円 形	0.82×0.42	0.71×0.36	0.09	N-89°-W	
P-105	G7-53	〃	0.63×0.52	0.42×0.30	0.05	N-87.5°-E	
P-106	G7-86	円 形	0.88×0.82	0.56×0.55	0.78	—	
P-107	G7-86	楕 円 形	0.41×0.36	0.18×0.15	0.81	N-39°-W	
P-108	G7-76	〃	1.08×0.80	0.89×0.65	0.21	N-11°-E	
P-109	G7-86	〃	0.47×0.42	0.29×0.25	0.55	N-58°-E	
P-110	G7-75・76	〃	1.03×0.82	0.94×0.73	0.18	N-55°-E	

表36 土 壤 別 出 土 遺 物 一 覧

遺 構 番 号	土 器		石 器 等					計	
	II	V	O 群		I 群	V 群	VI 群		X
	a	c	1a	1・2	A	J	N		1
P-101		304							304
104			1				1		2
106				50					50
108								1	1
109				1					1
110	14				1			1	17
計	14	304	1	51	1	1	1	2	375

表37 土 壤 の 掲 載 実 測 土 器 一 覧

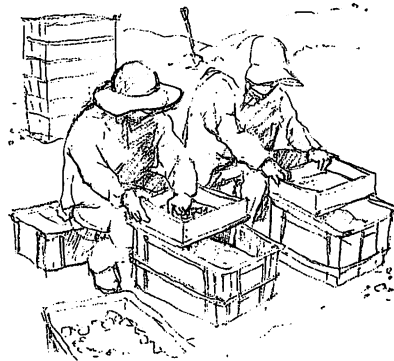
図 番 号	遺 構 番 号	名 称	分 類	大 き さ (cm)			層 位	写 真 番 号	備 考
				器 高	口 径	底 径			
69-1	P-101	深 鉢	VC	36.7	33.7	12.0	覆 土	8-④	

表38 土 壤 の 掲 載 拓 影 土 器 一 覧

図 番 号	遺 構 番 号	分 類	部 位	層 位	写 真 番 号	備 考	図 番 号	遺 構 番 号	分 類	部 位	層 位	写 真 番 号	備 考
71-1	P-110	II a-2	口	覆 土	8-③		71-2	P-110	II a-2	胴	覆 土	8-③	

表39 土 壤 の 掲 載 石 器 等 一 覧

図 番 号	遺 構 番 号	名 称	分 類	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	層 位	写 真 番 号	備 考
71-3	P-110	石 鏃	1A4	(1.6)×1.6×0.4	(0.7)	Obs.	覆 土	8-②	
-4	P-110	石 錘	N	8.0×9.6×2.3	286.2	Rhy.	〃	〃	



3) 柱穴様ピット (図72)

調査区北東隅にあるP-108の周辺から9個の柱穴様ピットが検出された。これらは配置が不規則で、遺物も全く出土していない。このため、時期、用途は不明である。また、これらがすべて同時期のものかどうかについてもわからない。

(野中一宏)

表40 柱穴様ピット一覧

名称	位置	平面形	規模 (m)			長軸方向	備考
			確認面	底面	深さ		
SP-1	G7-76	楕円形	0.22×0.17	0.17×0.10	0.18	N-75°-W	傾斜する。
SP-2	G7-75	楕円形	0.17×0.15	0.09×0.06	0.08	N-23°-W	
SP-3	G7-75	楕円形	0.18×0.14	0.12×0.09	0.08	N-61°-W	
SP-4	G7-75	円形	0.18×0.15	0.08	0.05	—	
SP-5	G7-75	円形	0.15	0.08	0.02	—	
SP-6	G7-75	円形	0.17×0.15	0.04	0.10	—	
SP-7	G7-75	円形	0.17×0.11	0.05	0.03	—	
SP-8	G7-75	楕円形	0.23×0.17	0.06×0.05	0.11	N-4°-W	
SP-9	G7-75	楕円形	0.20×0.16	0.12×0.09	0.05	N-7°-W	

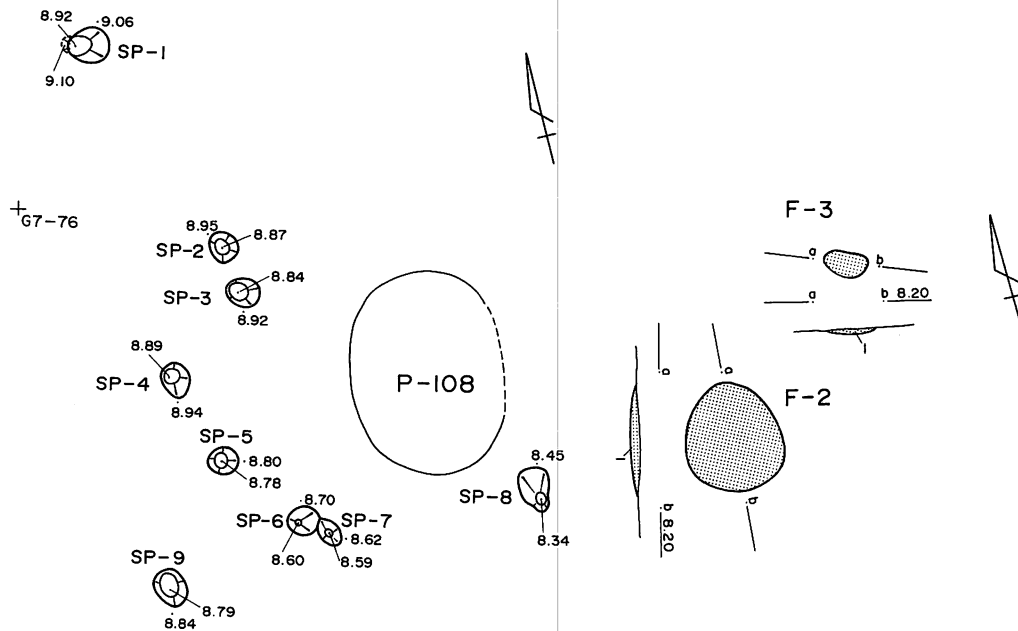


図72 柱穴様ピットとF-2・3

4) 焼土 (図72~74)

F-1 (73・74)

G7-53区を中心としたくぼ地内にある。焼土内には炭化物が少量混入しているが、焼骨や人工遺物はない。この焼土周辺からはV群C類土器22点とともに、石鏃24点を含む40点の石器が検出された。これらの石器のほとんどはV群C類土器に伴う可能性が高く、その分布状態から、本焼土に関連する遺物と考えられる。

位置 G 7-53

平面形 楕円形

規模 0.68×0.48/0.08

遺物 1～4はV群C類土器破片。1には縄線文が1条みられる。5・6はA 6類、7～22はA 7類の石鏃で、石材はすべて黒曜石である。A 7類にはかえしが不明瞭なもの(7～11)と、明瞭なもの(12～22)があり、後者には形態にばらつきがみられる。

F-2 (図72)

位置 G 7-86

平面形 楕円形

規模 0.58×0.50/0.05

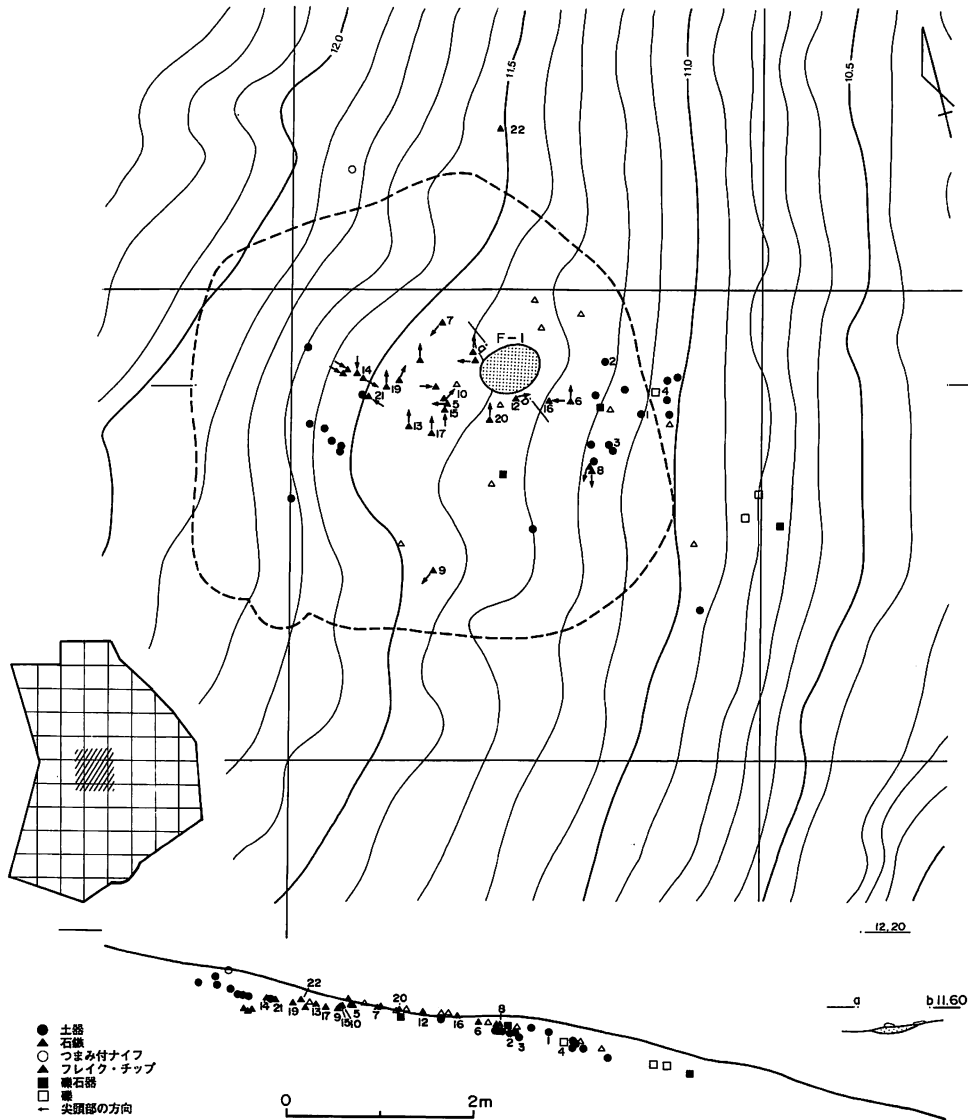


図73 F-1と周辺の遺物分布

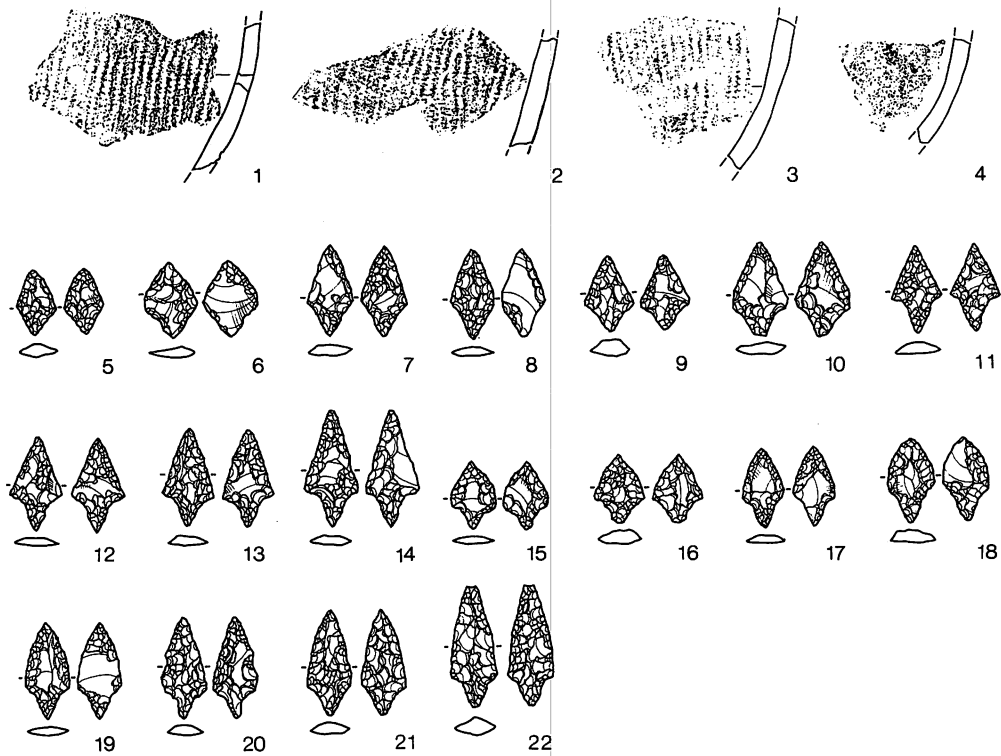


図74 F-1 周辺の遺物

表41 焼土一覽

名称	位置	平面形	規模 (m)		備考	名称	位置	平面形	規模 (m)		備考
			確認面	深さ					確認面	深さ	
F-1	G7-53	楕円形	0.68×0.48	0.08		F-3	G7-86	不整楕円形	0.24×0.13	0.03	
F-2	G7-86	楕円形	0.58×0.50	0.05							

表42 F-1周辺の掲載拓影土器一覽

番号	分類	部位	発掘区	写真図版番号	番号	分類	部位	発掘区	写真図版番号
1	VC	胴	G7-53	10-①	3	VC	胴	G7-53	10-①
2	VC	胴	G7-53	〃	4	VC	胴	G7-53	〃

表43 F-1周辺の掲載石器等一覽

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	写真図版番号	番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	写真図版番号
5	石鏃	IA7	G7-53	1.7×1.1×0.3	0.4	Obs.	10-①	14	石鏃	IA7	G7-53	3.1×1.5×0.3	0.9	Obs.	10-①
6	石鏃	IA7	G7-53	2.0×1.4×0.3	0.6	Obs.	〃	15	石鏃	IA7	G7-53	1.8×1.2×0.2	0.3	Obs.	〃
7	石鏃	IA7	G7-53	2.4×1.2×0.3	0.6	Obs.	〃	16	石鏃	IA7	G7-53	1.8×1.3×0.4	0.7	Obs.	〃
8	石鏃	IA7	G7-53	2.3×1.2×0.2	0.6	Obs.	〃	17	石鏃	IA7	G7-53	2.1×1.1×0.2	0.5	Obs.	〃
9	石鏃	IA7	G7-53	2.0×1.3×0.4	0.7	Obs.	〃	18	石鏃	IA7	G7-53	2.3×1.3×0.3	0.7	Obs.	〃
10	石鏃	IA7	G7-53	2.5×1.5×0.3	0.9	Obs.	〃	19	石鏃	IA7	G7-53	2.6×1.2×0.3	0.6	Obs.	〃
11	石鏃	IA7	G7-53	2.3×1.4×0.3	0.5	Obs.	〃	20	石鏃	IA7	G7-53	2.8×1.2×0.3	0.8	Obs.	〃
12	石鏃	IA7	G7-53	2.5×1.4×0.2	0.4	Obs.	〃	21	石鏃	IA7	G7-53	2.8×1.2×0.3	0.9	Obs.	〃
13	石鏃	IA7	G7-53	2.6×1.4×0.2	0.6	Obs.	〃	22	石鏃	IA7	G7-54	3.3×1.3×0.5	0.3	Obs.	〃

F-3 (図72)

位置 G 7-86

平面形 不整楕円形

規模 0.24×0.13/0.03

(野中一宏)

(2) 遺物

Ⅱ黒層からは、縄文時代早期～晩期末葉の土器911点とこれらに伴うと考えられる石器等1,058点の石器等が検出された。

1) 土器

Ⅱ黒層からは縄文時代の早期から晩期までの土器片が910点出土した。量は中期のものが最も多く、次いで晩期、前期、早期、後期の順である。復元できたものは、東側の斜面で出土したⅢ群 a 類の深鉢 1 個体のみである (図76-32)。これらの土器は前期・中期のものが北東の斜面下に集中する傾向がみられ、晩期のものはほぼ調査区全域に分布している。以下、分類別に説明を記す。

I 群 b-1 類 (1・2) 1 は表裏とも黒褐色をした硬質な感じのする口縁部破片である。表には短縄文と撚糸文が、口唇には短縄文が施文されている。2 は茶褐色を呈した胴部破片で、表には撚りの異なる 2 条一組の撚糸文と短縄文が施文されている。

I 群 b-3 類 (3) 微隆起線と撚糸文が施された小破片である。

I 群 b-4 類 (4~10) 4~9 は撚糸文と短縄文が組み合わされたものである。撚糸文の間隔は等間隔のものが多いが、9 のように 2 条一組で施されたものもある。

Ⅱ群 a-2 類 (11~29) 11~17 は口唇部破片、18~29 が胴部の破片である。11 は上部を欠損しているが、内面の反り具合から口縁に近い部位の破片と思われる。表の横走沈線状のものは胎土に混入した繊維の痕である。13 の裏面には胎土に混入した撚糸の痕が多くみられる。17 は羽状縄文が施された口縁部の破片である。土器の表裏には、胎土に混入した繊維の痕がみられる。21 は LR の斜縄文が浅く施され、表裏には胎土に混入した撚糸の痕がみられる。25 は南側の斜面下部で出土したもので、同一個体の破片が多く出土しているが、復元できなかった。

Ⅱ群 b 類 (30・31) 表裏に羽状縄文が施された植苗式の胴部破片である。施文の方向は、表が横位に裏は縦位である。

Ⅲ群 a 類 (32) 口径22.2cm、現存高17.2cmの円筒上層式の深鉢である。口縁部には波状、楕円状の貼付文があり、その上に撚糸の圧痕がある。地文は結束羽状縄文で、表面は磨耗が激しく剝離した部分もある。

Ⅲ群 b-2 類 (33~40) 35は無節の斜縄文と細い沈線が施されている。36はLRの斜縄文、縦位には4条の沈線があり、横位には2段の刺突が施文されている。37は破片上部に結束第2

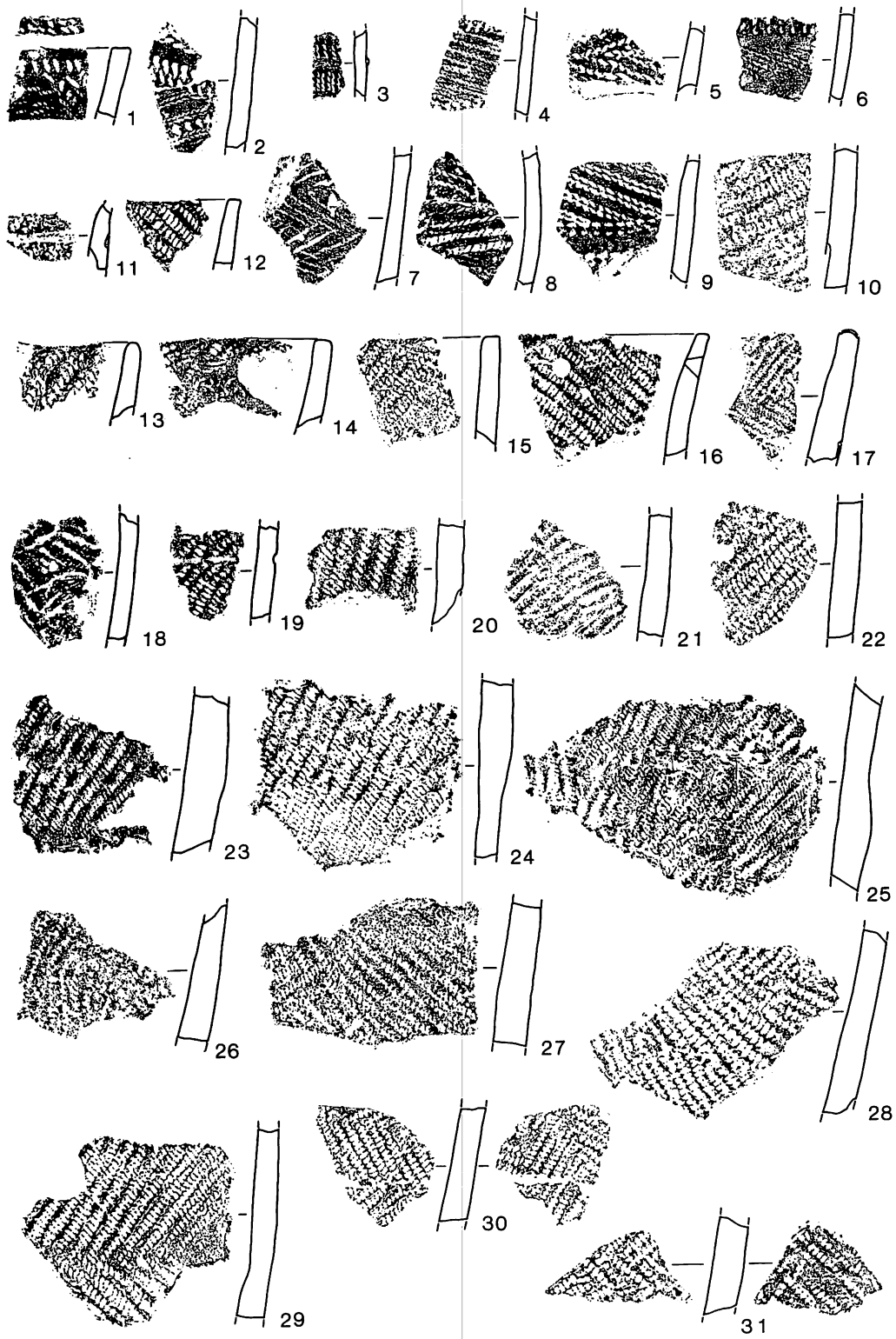


図75 包含層の土器(1)

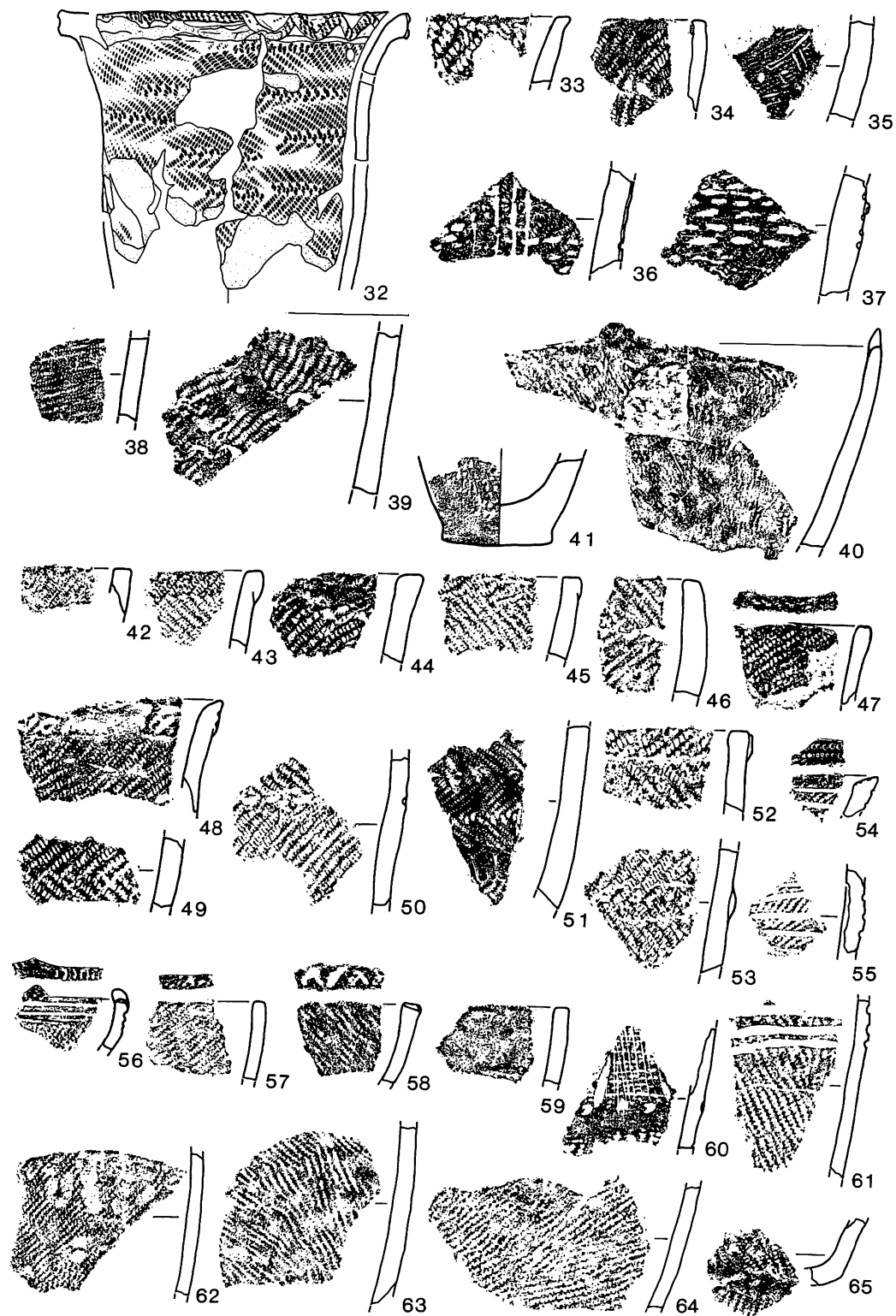


図76 包含層の土器(2)

種の文様が見られる。粘土紐を横位に貼付しており、貼付带上および粘土紐より上に2条、下に3条の刺突列が施されている。36・37は接合しないが、胎土、文様の施文のしかたから同一個体のもと思われる。40は無節の斜縄文、縦走縄文が施文されている。口縁部には突起が1か所現存する。41は40と同一個体と思われる土器の底部である。底部の側面はナデで調整しているため無文となっているが、調整前に縄文が施文されたものとみられる。底部は「く」の字状に外へ張り出している。41はH-5の覆土出土の土器片と接合した。

Ⅲ群 b-3類 (42~51) 43は口縁部に貼付帯がある。施文は貼付帯の部分がLRの斜縄文、その下はRLの斜縄文である。胎土には白っぽい砂が多量に含まれており、特長的な土器である。45、50も43と同様の胎土を使用しており、同一個体の可能性がある。47は口唇上にLRの圧痕が施されている。48は肥厚帯の上に半截竹管状工具で押し引き文を施している。

Ⅳ群 a類 (52・53) 52の胎土には白っぽい砂を多量に含んでいる。53は貼付帯のある胴部破片である。いずれも表面は暗茶褐色をしている。

Ⅳ群 C類 (54・55) 54の口唇は切り出し形で、内面には細い竹管状工具により右斜め上から刺突が2段施されている。55はLRの斜縄文に5条の横走沈線が施されている。54・55は表裏とも黄褐色で胎土中には黒っぽい砂を含んでおり、同一個体の可能性がある。

Ⅴ群 C類 (56~65) 56~59は口縁部の破片である。60・61には格子目文、横走沈線が施されており、口縁部近くの破片と思われる。62~64は胴部の破片である。63・64は62に比べ厚みがある。64の裏には横位の調整痕がみとめられる。65は底部の破片である。RLの斜縄文が底面にも施されている。
(佐川俊一)

2) 石器

石鏃 (1~46) 56点出土したうち有茎のA₇類(16~20)がほぼ半数を占める。いずれも明瞭な「かえり」のないもので、2次調整が浅く、素材の一次剝離面を残すものが多い。これらは形態、分布からⅤ群C類の土器に伴うものが多いと思われる。ついで三角形のA₄類(2~12)が多い。基部の平坦なもの(2・6・8)、わずかに湾入するもの(3~5・7・9~12)がある。形態からみてⅡ群の土器に伴うものと思われる。A₃類(1)、A₆類(13~15)は少数である。

石槍またはナイフ (21~32) 両側縁が非対称で身部と茎部の境界が不明瞭なもの(21~24・26・27・29)、両側縁の対称なもの(25・30)、木葉形のもの(31・32)、左右に張った「かえし」をもつもの(28)がある。23・27・29は原石面を残しており、27は未成品の可能性がある。28は断面が三角形で身部より茎部の幅が広い。32は整った形態で、入念な表面調整が施されている。

石錐 (33・34) いずれも単独の尖頭部を有するもので、33はつまみ部があり、34は棒状である。

つまみ付きナイフ (35~45) 2次調整が背面全体におよぶ35~38と、それが周辺部分に限

られる39～45がある。身部の形態はさまざまであるが、背面右側縁に2次調整が集中しており、主要刃部として意識していることがうかがえる。35～38は腹面右側縁に調整があるが、素材の厚みを取り去るための加工と思われる。38は横剥ぎの剥片を用いている。41、43～45は背面左側が右側に比べ薄い素材を用いている。41の背面左側縁および底面のエッジには微細な調整とグランディングが施されていた。これは使用に際して背面左側縁の薄いエッジが手を傷つけるのを防ぐための刃潰しと考えられる。45の腹面右側縁にも、腹面に対して急傾斜の調整が施されていた。やはり41同様刃潰しと考えられる。

スクレーパー (46～53) 剥片の周辺に2次調整を施し、刃部を設定したもので、53以外は、縦長の形態を有する。47は両面に錯向剥離が、52には腹面右側縁に不規則な調整がみられるが、他はすべて片面調整である。

石核 (54) 節理による原石面をもつもので、その平坦面を打面として剥片を剥離している。打面調整はみられない。

石斧 (55～58) 55は未成品、56は全面磨製のものである。

たたき石 (59～61) 59と61は偏平礫の側縁を、60は円礫の凸部を利用し敲打している。

砥石 (62～64) 砂岩製で2面以上の使用面をもつものである。使用面は研磨によってなめらかになっている。

石錘 (65～72) 偏平円礫の両端ないし四方を打ち欠いて紐かけのノッチを設けたもので、65～67は長軸、短軸に打ち欠きのある+（プラス）型、68～72は長軸の両端に打ち欠きのある-（マイナス）型である。

土製品 (73) 焼成粘土塊である。胎土は粗悪でもろい。 (森 秀之)

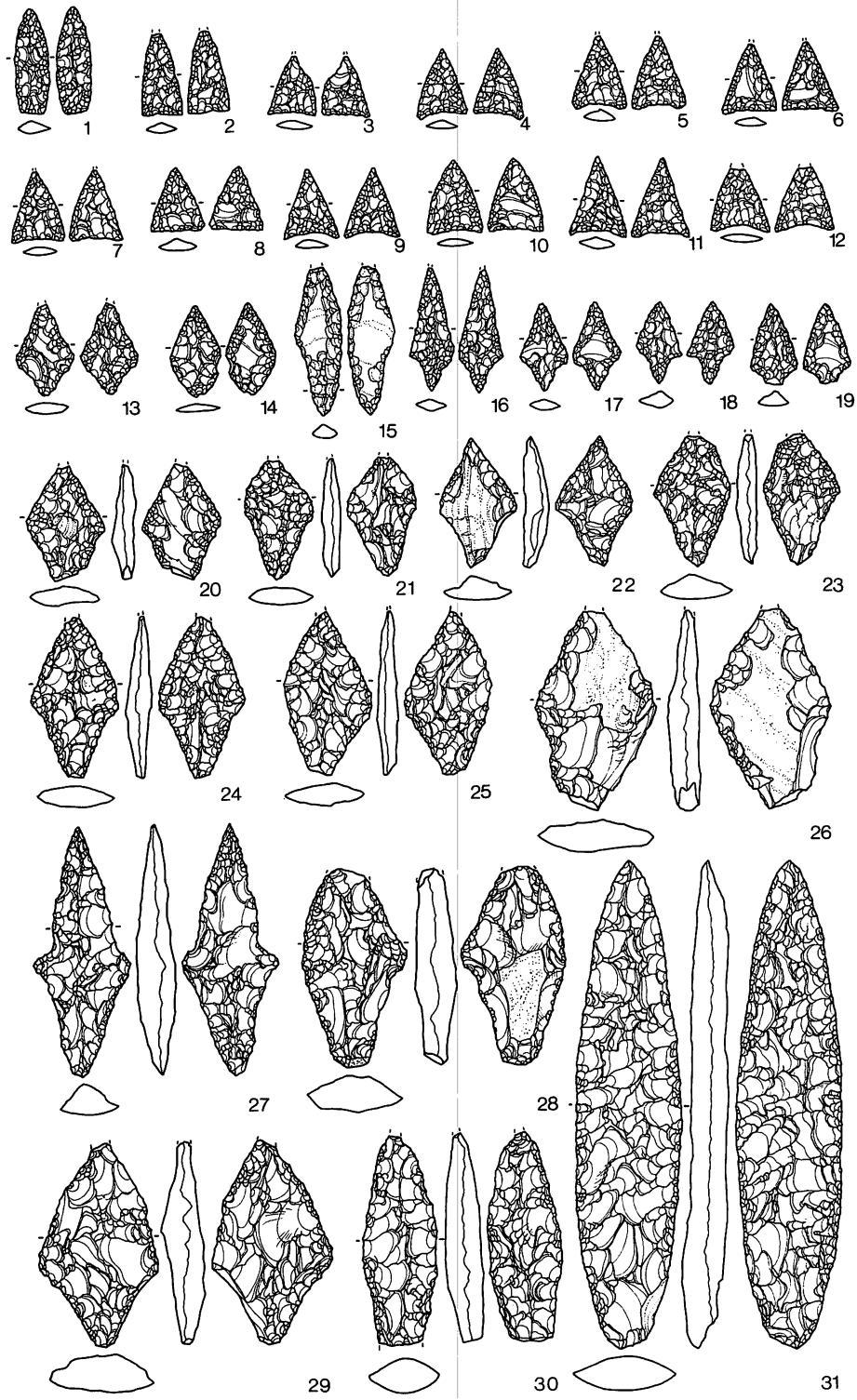


図77 包含層の石器等(1)

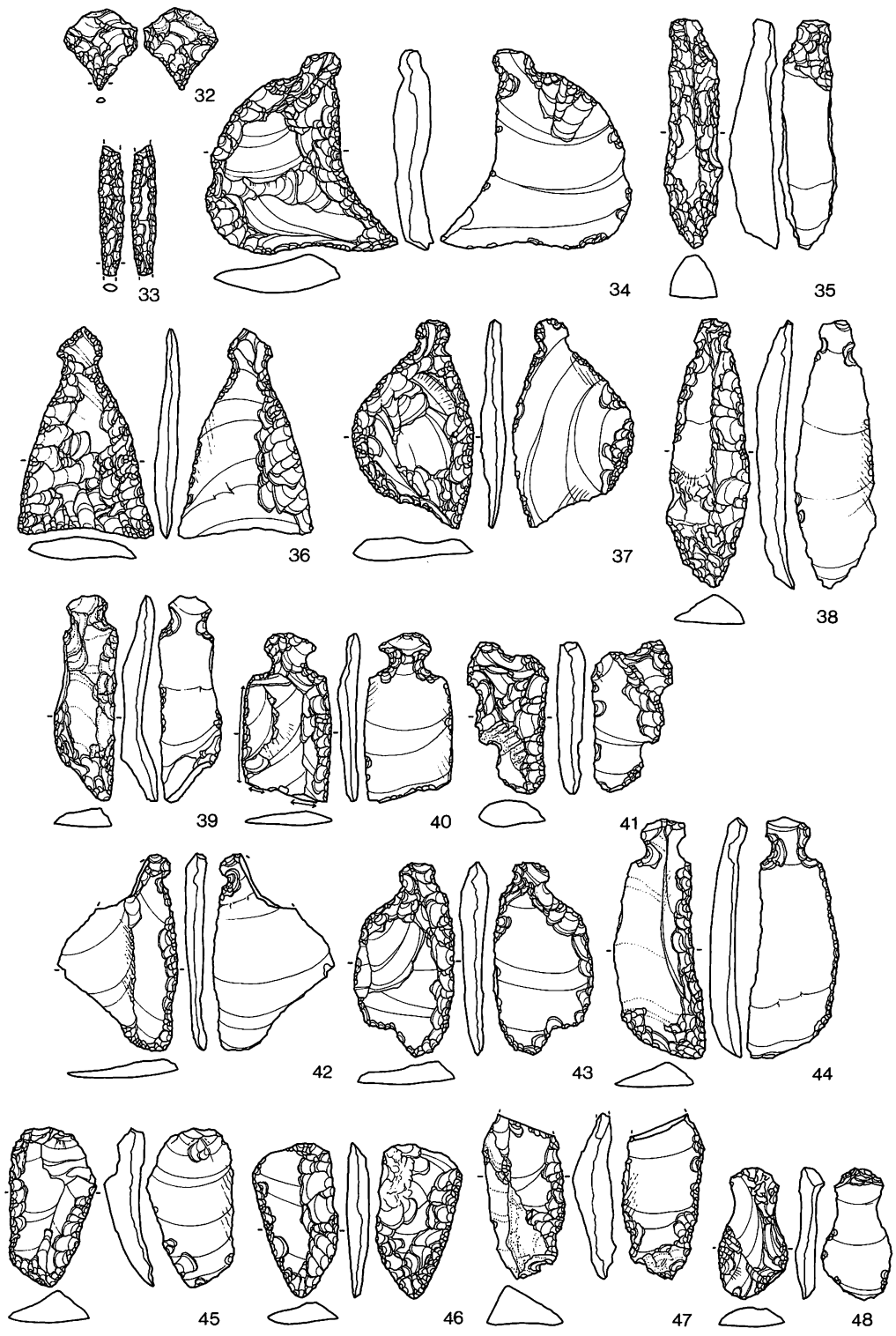


図78 包含層の石器等(2)

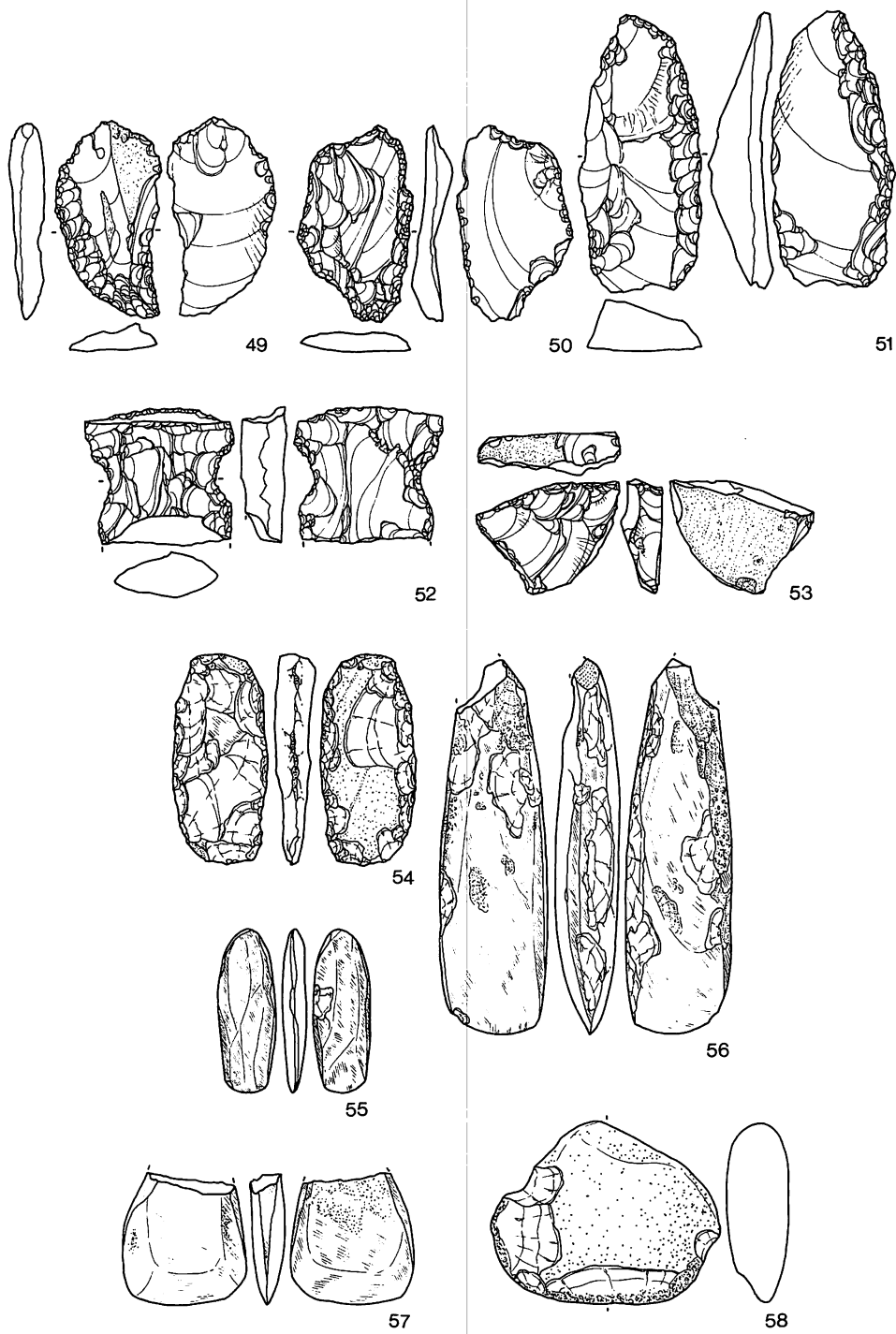


図79 包含層の石器等(3)

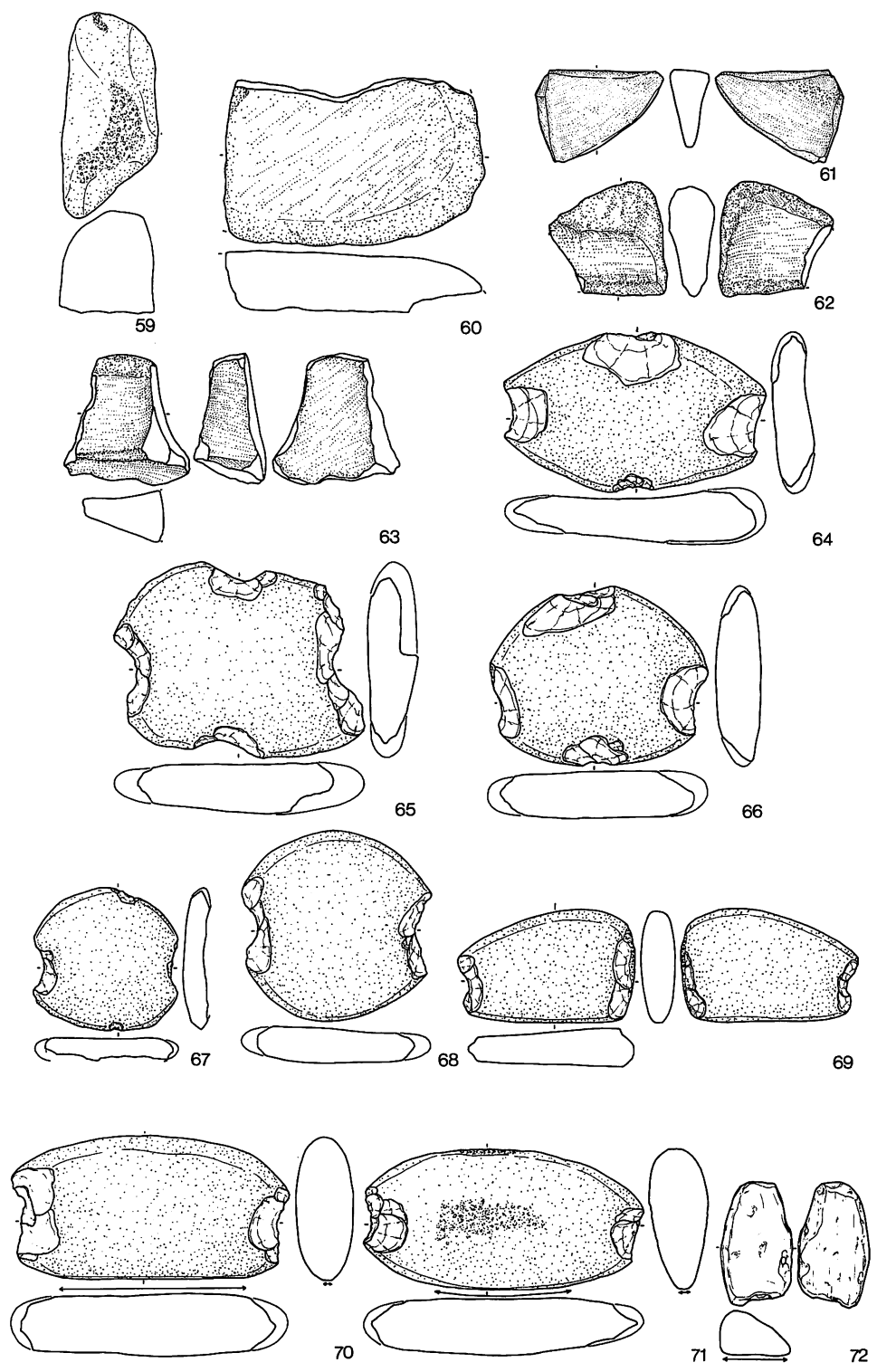


図80 包含層の石器等(4)

表44 掲載実測土器一覧

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)			写真版番号	備考
				器高	口径	底径		
32	深鉢	Ⅲa	G7-54 G7-64	(17.2)	(22.2)	—	12	図上復元

表45 掲載拓影土器一覧

番号	分類	部位	発掘区	写真版番号	番号	分類	部位	発掘区	写真版番号
1	I b-1	口	G7-53	10-②	34	Ⅲb-2	口	G7-86	12
2	〃	胴	G7-30	〃	35	〃	胴	G7-31	〃
3	I b-3	〃	G7-86	〃	36	〃	〃	G7-26	〃
4	I b-4	〃	G7-50	〃	37	〃	〃	G7-30	〃
5	〃	〃	G7-48	〃	38	〃	〃	G7-76	〃
6	〃	〃	G7-42	〃	39	〃	胴	G7-58	〃
7	〃	〃	F7-69	〃	40	〃	口	G7-86	〃
8	〃	〃	G7-64	〃	41	〃	底	G7-86	〃
9	〃	〃	G7-46	〃	42	Ⅲb-3	口	G7-86	〃
10	〃	〃	G7-30	〃	43	〃	〃	G7-54	〃
11	Ⅱa-2	口	G7-86	11-①	44	〃	〃	G7-75	〃
12	〃	〃	G7-86	〃	45	〃	〃	G7-86	〃
13	〃	〃	G7-86	〃	46	〃	〃	G7-52	〃
14	〃	〃	G7-86	〃	47	〃	〃	G7-31	〃
15	〃	〃	G7-76	〃	48	〃	〃	G7-35	〃
16	〃	〃	G7-76	〃	49	〃	胴	G7-76	〃
17	〃	〃	G7-67	〃	50	〃	〃	G7-86	〃
18	〃	胴	G7-54	〃	51	〃	〃	F7-69	〃
19	〃	〃	G7-76	〃	52	Ⅳa	口	G7-76	13
20	〃	〃	G7-58	〃	53	〃	胴	G7-76	〃
21	〃	〃	G7-60	〃	54	Ⅳc	口	G7-43	〃
22	〃	〃	G7-35	〃	55	〃	胴	G7-55	〃
23	〃	〃	F7-69	〃	56	Ⅴc	口	G7-56	〃
24	〃	〃	G7-86	〃	57	〃	〃	G7-45	〃
25	〃	〃	F7-69	〃	58	〃	〃	G7-58	〃
26	〃	口	G7-65	〃	59	〃	〃	G7-55	〃
27	〃	胴	G7-76	〃	60	〃	胴	G7-57	〃
27	〃	〃	G7-76	〃	61	〃	〃	G7-46	〃
29	〃	〃	G7-75	〃	62	〃	〃	G7-44	〃
30	Ⅱb	〃	G7-67	11-②	63	〃	〃	G7-86	〃
31	〃	〃	G7-67	〃	64	〃	〃	G7-41	〃
33	Ⅲb-2	口	G7-76	12	65	〃	〃	G7-54	〃

表46 掲載石器等一覧

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	写真版番号
1	石 鏃	I A3	G7-76	3.0×1.0×0.4	1.0	Obs.	14
2	石 鏃	I A4	G7-64	2.4×1.2×0.3	0.7	Obs.	〃
3	石 鏃	I A4	G7-43	1.7×1.4×0.3	0.4	Obs.	〃
4	石 鏃	I A4	G7-65	2.0×1.4×0.3	0.6	Obs.	〃
5	石 鏃	I A4	G7-86	2.1×1.6×0.4	0.7	Obs.	〃
6	石 鏃	I A4	G7-65	1.9×1.5×0.3	0.6	Obs.	〃
7	石 鏃	I A4	G7-37	2.0×1.5×0.3	0.6	Obs.	〃
8	石 鏃	I A4	G7-37	1.8×1.5×0.4	0.7	Obs.	〃

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写真図版番号
9	石 鏃	IA4	G7-37	2.0×1.6×0.3	0.5	Obs.	14
10	石 鏃	IA4	G7-67	2.1×1.6×0.2	0.8	Obs.	〃
11	石 鏃	IA4	G7-86	2.3×1.2×0.4	0.8	Obs.	〃
12	石 鏃	IA4	G7-68	(1.9)×1.7×0.2	(0.5)	Obs.	〃
13	石 鏃	IA7	G7-41	2.6×1.7×0.3	1.2	Obs.	〃
14	石 鏃	IA6	G7-57	2.6×1.4×0.2	0.7	Obs.	〃
15	石 鏃	IA7	G7-64	(4.2)×1.4×0.4	(2.6)	Sh.	〃
16	石 鏃	IA7	G7-27	3.5×1.3×0.3	1.1	Obs.	〃
17	石 鏃	IA7	G7-54	2.4×1.4×0.3	0.6	Obs.	〃
18	石 鏃	IA7	G7-37	2.3×1.4×0.5	0.8	Obs.	〃
19	石 鏃	IA7	表 採	(2.3)×1.3×0.4	(1.0)	Obs.	〃
20	石槍またはナイフ	IB	G7-34	3.3×2.3×0.6	3.1	Obs.	〃
21	石槍またはナイフ	IB	G7-33	3.4×1.9×0.5	2.9	Obs.	〃
22	石槍またはナイフ	IB	G7-86	3.7×2.2×0.6	3.4	Obs.	〃
23	石槍またはナイフ	IB	G7-34	3.6×2.2×0.7	3.7	Obs.	〃
24	石槍またはナイフ	IB	G7-34	4.6×2.4×0.6	5.2	Obs.	〃
25	石槍またはナイフ	IB	G7-86	4.7×2.5×0.7	5.1	Obs.	〃
26	石槍またはナイフ	IB	G7-86	5.8×3.4×0.9	14.6	Obs.	〃
27	石槍またはナイフ	IB未製品	G7-86	7.2×2.8×1.1	10.9	Obs.	〃
28	石槍またはナイフ	IB	G7-26	5.7×3.0×1.1	14.1	Obs.	〃
29	石槍またはナイフ	IB	G7-86	5.8×3.4×1.1	15.3	Obs.	〃
30	石槍またはナイフ	IB	G7-76	(6.1)×2.2×1.0	(13.7)	Sh.	〃
31	石槍またはナイフ	IB	G7-67	14.0×3.1×1.0	46.9	Obs.	〃
32	石 鏃	IIC	G7-29	2.5×2.2×0.1	3.1	Obs.	〃
33	石 鏃	IIC	G7-37	(3.9)×0.8×0.2	(1.2)	Sh.	〃
34	つまみ付きナイフ	D	G7-57	6.0×5.0×1.2	27.6	Sh.	15
35	つまみ付きナイフ	D	G7-56	6.9×1.8×1.3	16.4	Sh.	〃
36	つまみ付きナイフ	D	G7-77	6.2×4.1×0.7	11.0	Obs.	〃
37	つまみ付きナイフ	D	G7-71	6.3×3.7×0.7	12.2	Obs.	〃
38	つまみ付きナイフ	D	G7-20	8.0×2.5×0.9	16.4	Obs.	〃
39	つまみ付きナイフ	D	G7-43	6.2×2.0×0.6	8.8	Sh.	〃
40	つまみ付きナイフ	D	G7-64	(5.0)×2.6×0.4	(6.2)	Obs.	〃
41	つまみ付きナイフ	D	G7-67	2.4×4.6×0.7	8.0	Obs.	〃
42	つまみ付きナイフ	D	G7-75	5.9×3.6×0.6	7.6	Sh.	〃
43	つまみ付きナイフ	D	G7-25	5.9×3.1×0.7	12.4	Obs.	〃
44	つまみ付きナイフ	D	G7-76	7.2×2.7×0.8	15.0	Sh.	〃
45	スクレイパー	E	G7-86	4.9×2.6×1.0	11.0	Sh.	〃
46	スクレイパー	E	G7-86	4.7×2.6×0.6	6.7	Sh.	〃
47	スクレイパー	E	G7-16	5.0×2.5×1.2	11.6	Sh.	〃
48	スクレイパー	E	G7-54	4.0×2.1×0.6	5.5	Sh.	〃
49	スクレイパー	E	G7-42	5.6×3.1×0.7	13.4	Obs.	〃
50	スクレイパー	E	G7-39	5.5×3.3×0.6	11.4	Obs.	〃
51	スクレイパー	E	G7-50	7.8×3.5×1.4	36.8	Sh.	〃
52	スクレイパー	E	G7-76	3.8×4.2×1.3	22.4	Obs.	〃
53	石 斧	F	G7-41	3.1×4.1×1.2	13.9	Obs.	16
54	石 斧	F	G7-31	8.9×4.1×1.7	75.6	Gr-Mud.	〃
55	石 斧	F	G7-69	6.9×2.5×1.0	24.7	Gr-Mud.	〃
56	石 斧	F	G7-20	15.8×4.5×2.7	304.8	Sch.	〃
57	石 斧	F	G7-31	5.7×5.2×1.4	73.9	Gr-Mud.	〃
58	たたき石	G	G7-66	7.8×9.7×2.7	252.4	Gni.	17
59	たたき石	G	G7-30	9.0×4.2×4.5	204.2		〃
60	すり石	J	G7-76	7.3×11.5×2.6	293.4	Sa.	〃
61	砥 石	K	G7-75	4.0×5.7×1.7	34.6	Sa.	〃

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写真図版番号
62	砥 石	K	G7-36	5.1×5.2×2.0	47.7	Sa.	17
63	砥 石	K	G7-46	5.7×5.6×2.2	76.6	Sa.	〃
64	石 錐	N	G7-63	7.0×11.6×2.2	236.6	And.	18
65	石 錐	N	G7-86	8.6×11.1×2.2	279.1	Gni.	〃
66	石 錐	N	G7-76	7.9×9.6×2.0	269.2	Sa.	〃
67	石 錐	N	G7-76	6.2×6.4×(1.0)	(68.2)	Gni.	〃
68	石 錐	N	G7-86	8.4×8.4×1.5	168.0	Sa.	〃
69	石 錐	N	G7-76	5.0×7.8×1.7	103.9	Gni.	〃
70	石 錐	N	G7-50	6.3×12.4×2.5	336.7	Sa.	〃
71	石 錐	N	G7-76	6.2×12.4×2.6	311.1	Ani.	〃
72	土 製 品		G7-45	5.5×3.1×2.0	21.7	焼成粘土塊	〃

4 まとめ

本遺跡のⅡ黒層からは、縄文時代早期～晩期の土器が出土しているが、主体をなす時期は前、中、晩期であり、石器等もこれらの時期に属するものが多いと推測される。ただし、出土分布からは時期別の土器と石器の対応関係は把握できなかった。

ここでは、個々の石器の形態的な特徴から時期別分類を試みることは困難であるが、他遺跡の調査例を参考に図示した遺物について帰属時期を考えてみたい。

石鏃のうちA₃類(1)は長沼町タンネトウ遺跡(野村、1977)で、「タンネトウE式」との伴出関係が知られ、以来しばしば撚糸文・絡条体圧痕文土器との共伴が報告されているもので、本遺跡の石鏃もこの時期に属すると思われる、新空港用地内でも美々2、美々4遺跡(北埋文、1984、1985)などからⅤ群C類の土器に伴って出土している。原石面を残した小型の石核54と、砂岩製の多面砥石62～64はⅢ群に伴うものと思われる。登別市千歳5遺跡(北埋文、1983)でこれらはⅢ群D-3類と共に出土している。石槍またはナイフ(21～32)のなかにも、この時期に含まれるものがあるかもしれない。

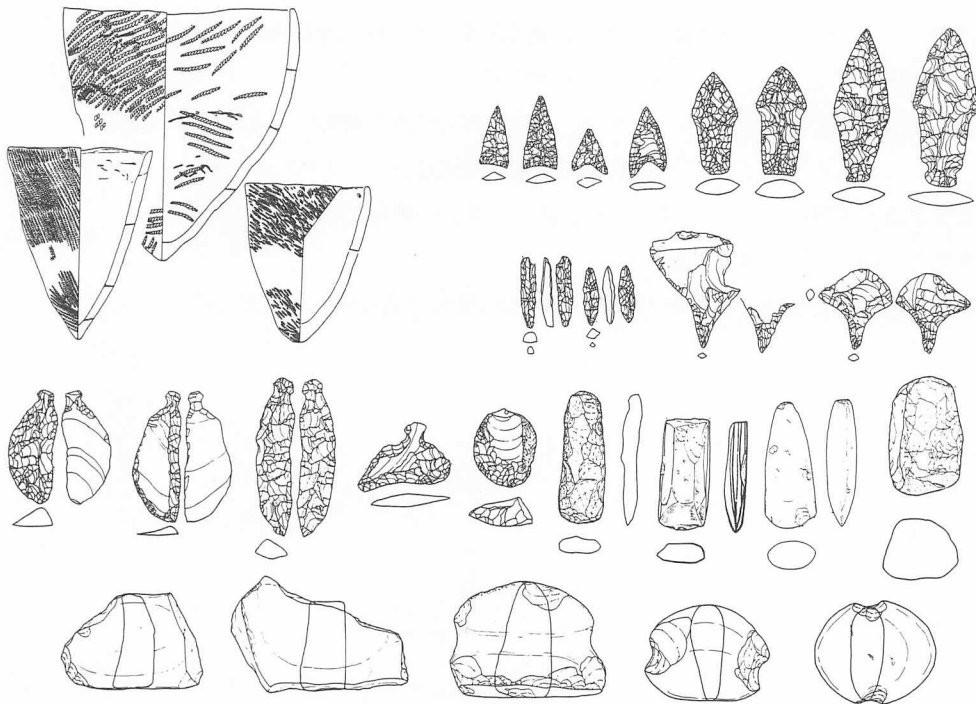
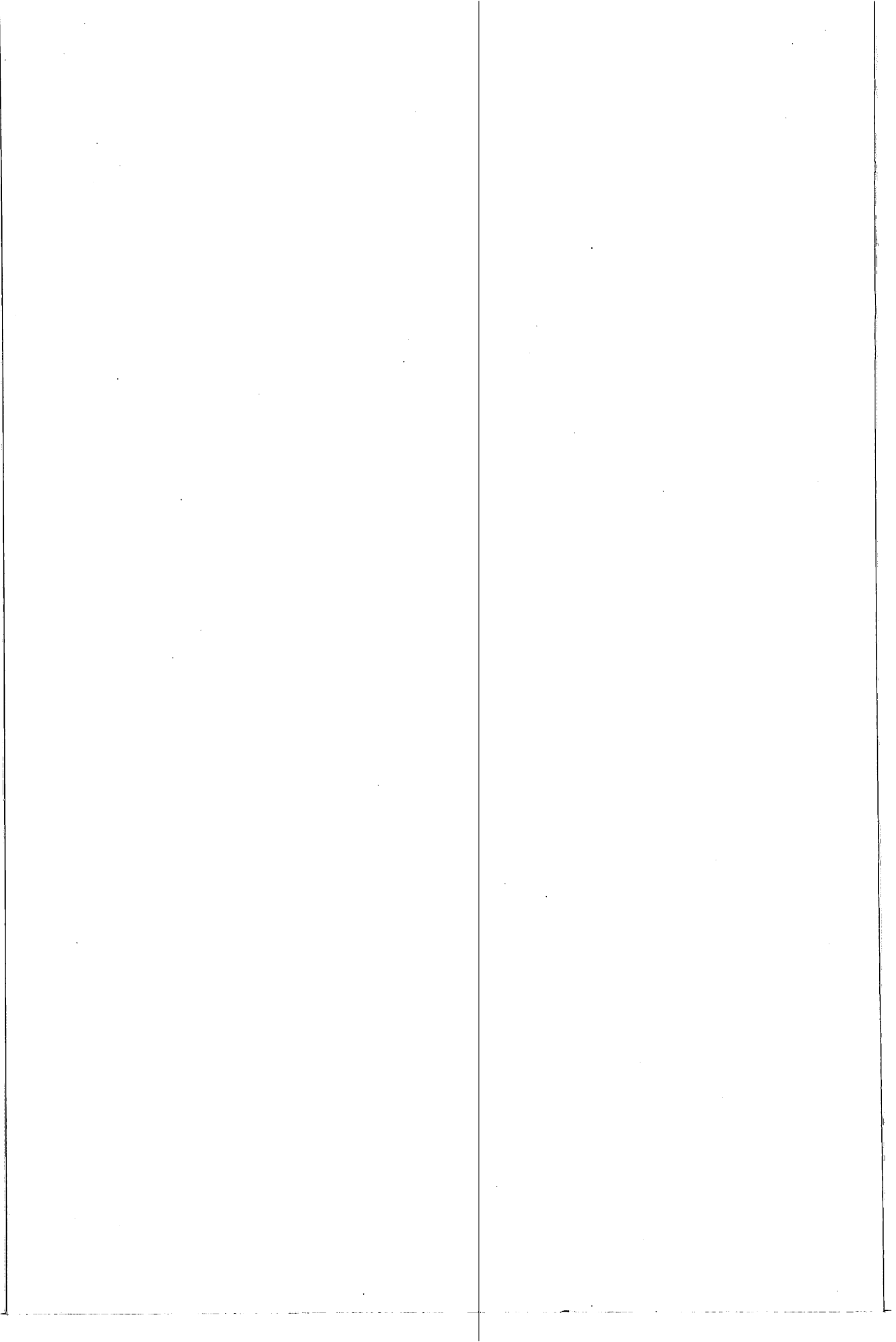


図81 Ⅱ群a-2類に伴う石器—中野A遺跡

写真図版





△①調査前風景（南から）



△②調査風景（南東から）



③調査風景（南東から）△

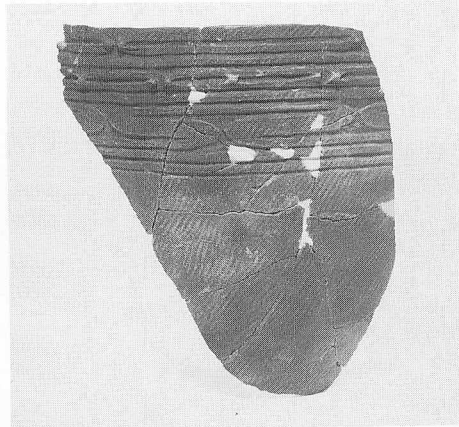
I 黒層の土壌群



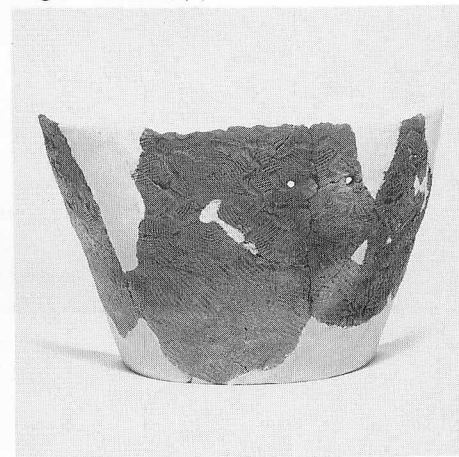
南東から



△①P-12遺物出土状況 (南東から)



△②P-12の土器(1)



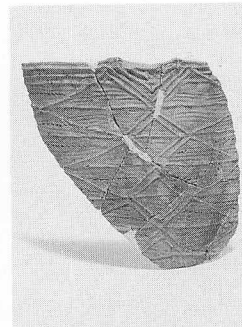
△③P-12の土器(2)



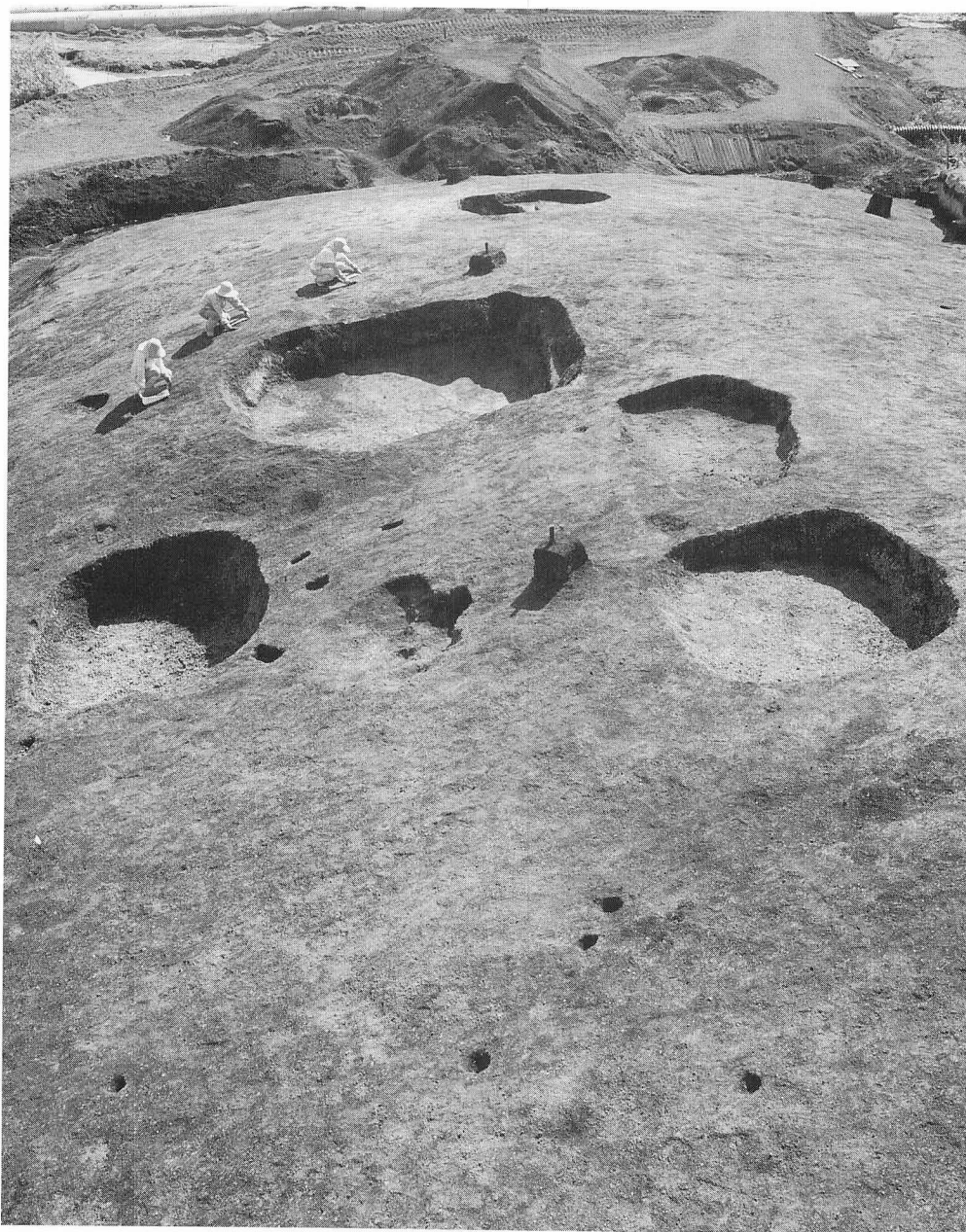
△④P-10 (北西から)



△⑤P-10遺物出土状況 (北西から)



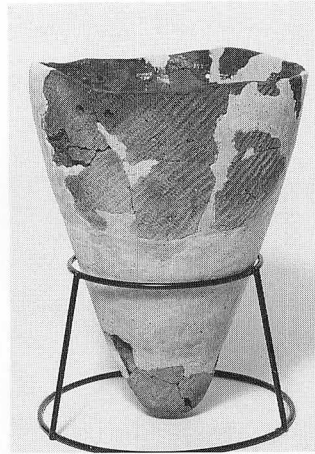
△⑥P-10の土器



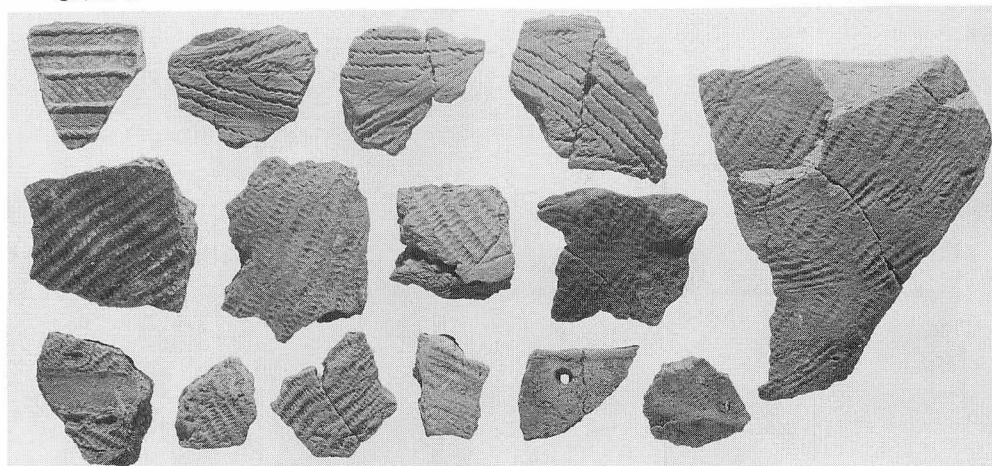
縄文前期の住居跡群（北から）



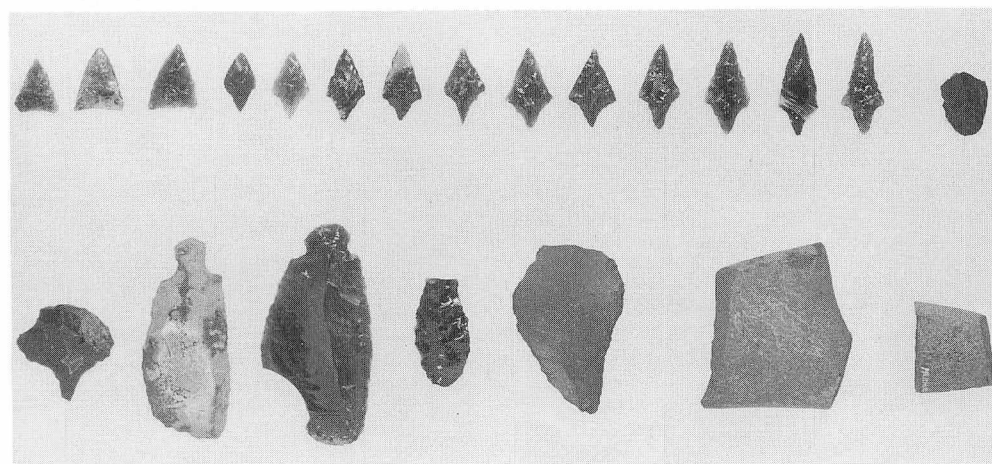
△①東から



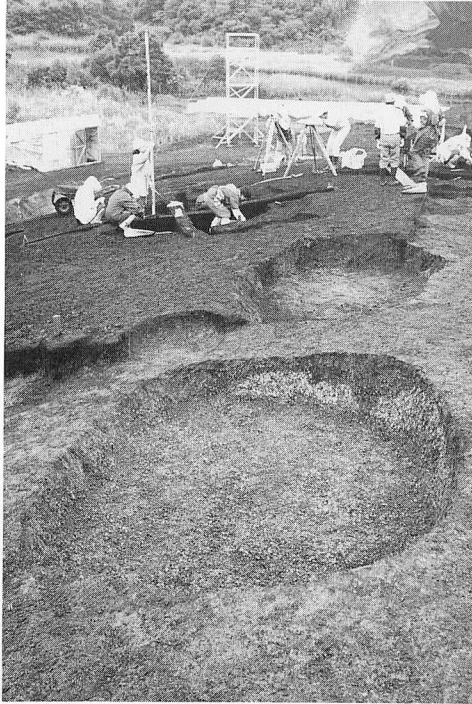
△②覆土の土器



△③覆土の土器片



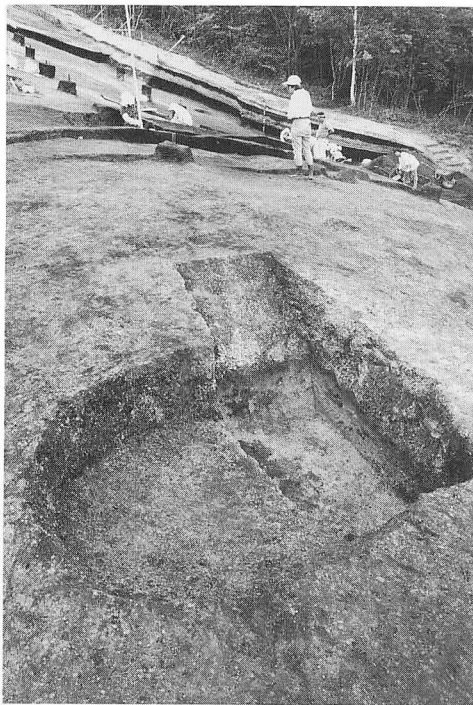
△④石器等



△①H-2 (北から)



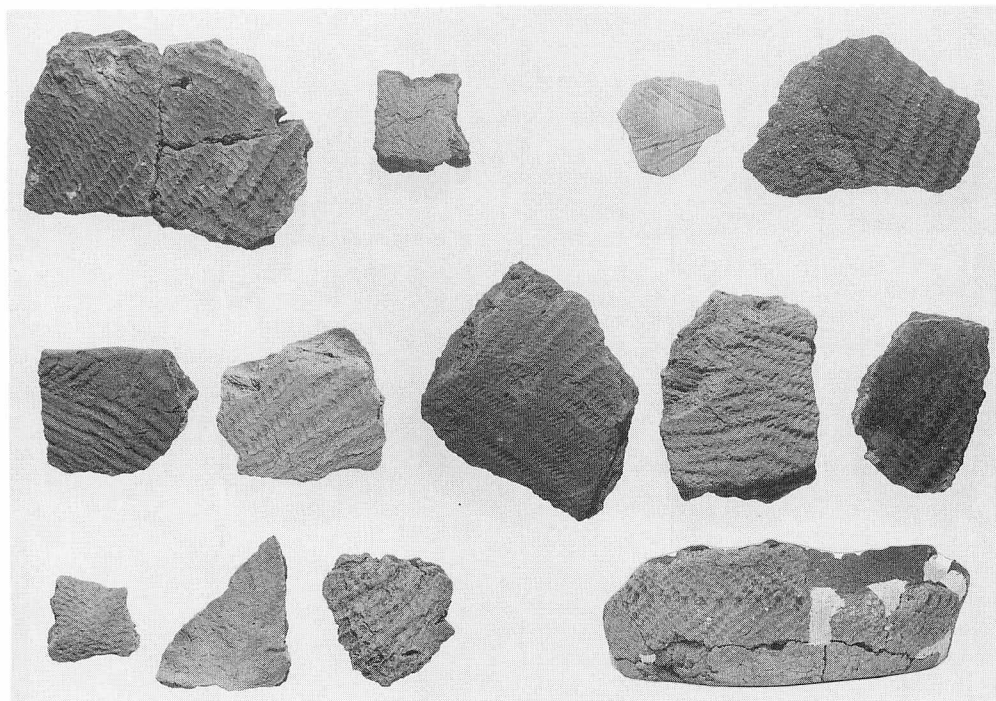
②H-3 (北東から) △



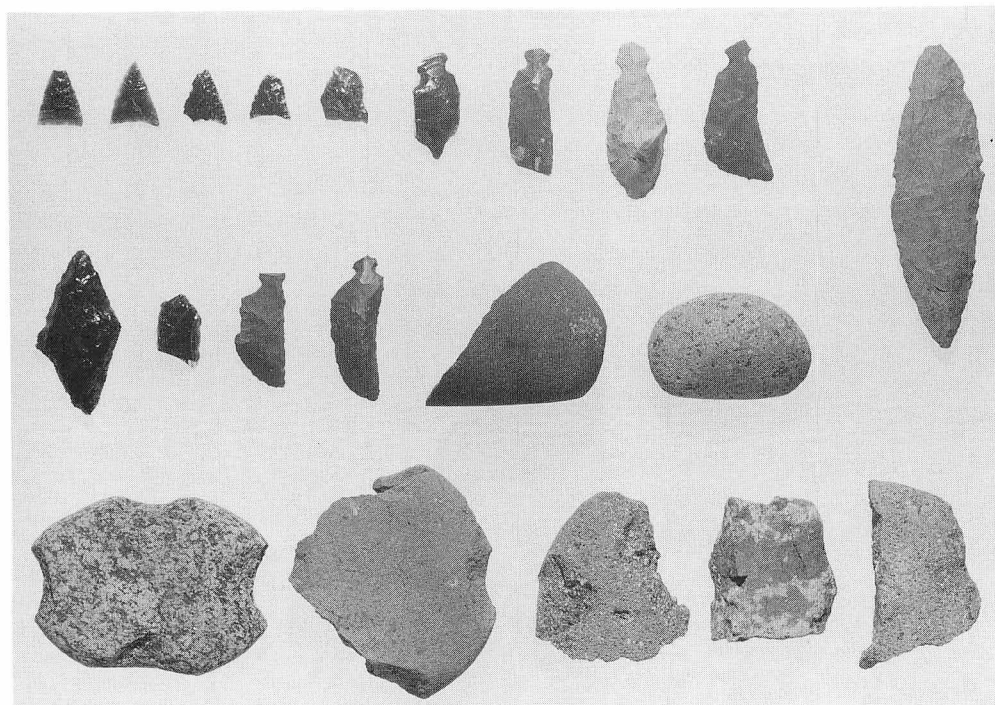
△③H-4 (南西から)



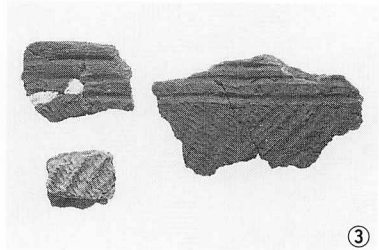
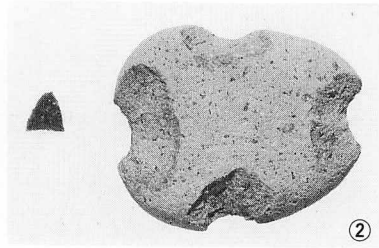
④H-5・6 (東から) △



△①H-3・4・5・6の土器片



②H-3・4・5・6の石器等△



- ①P-110遺物出土状況（東から）
- ②P-110の石器
- ③P-110の土器

①△

④P101の土器

⑤P-101の遺物出土状況（西から）



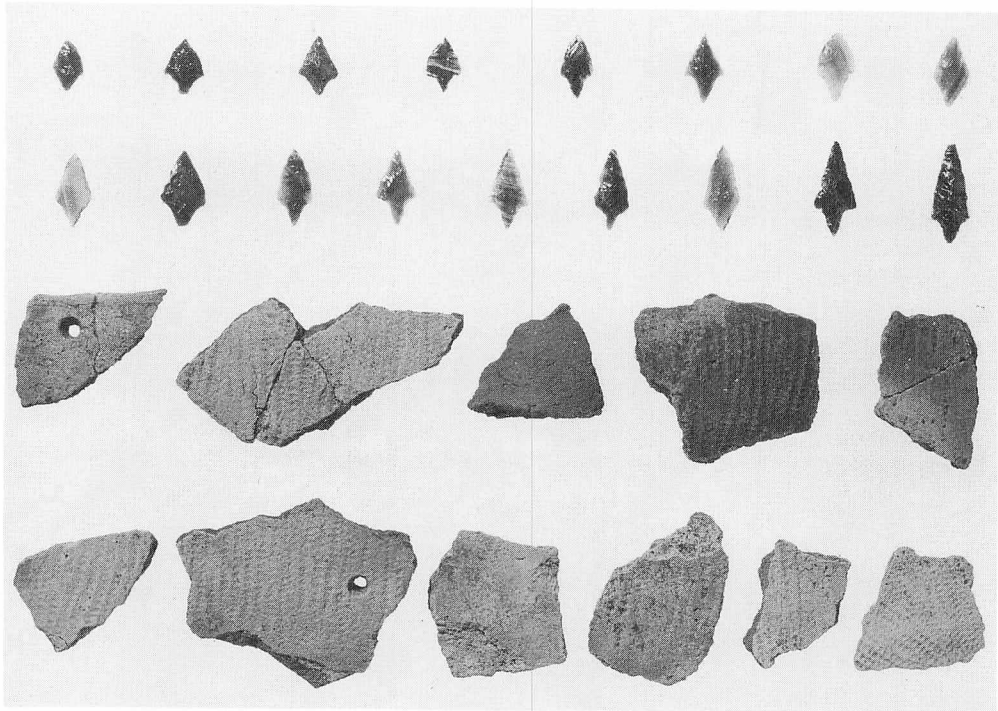
△④



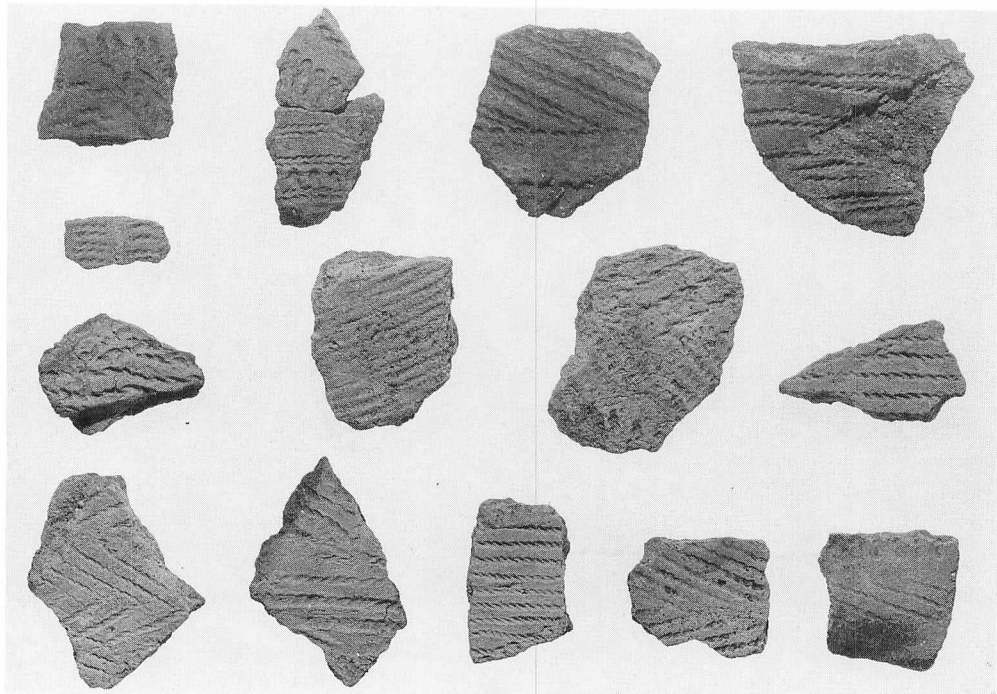
⑤△



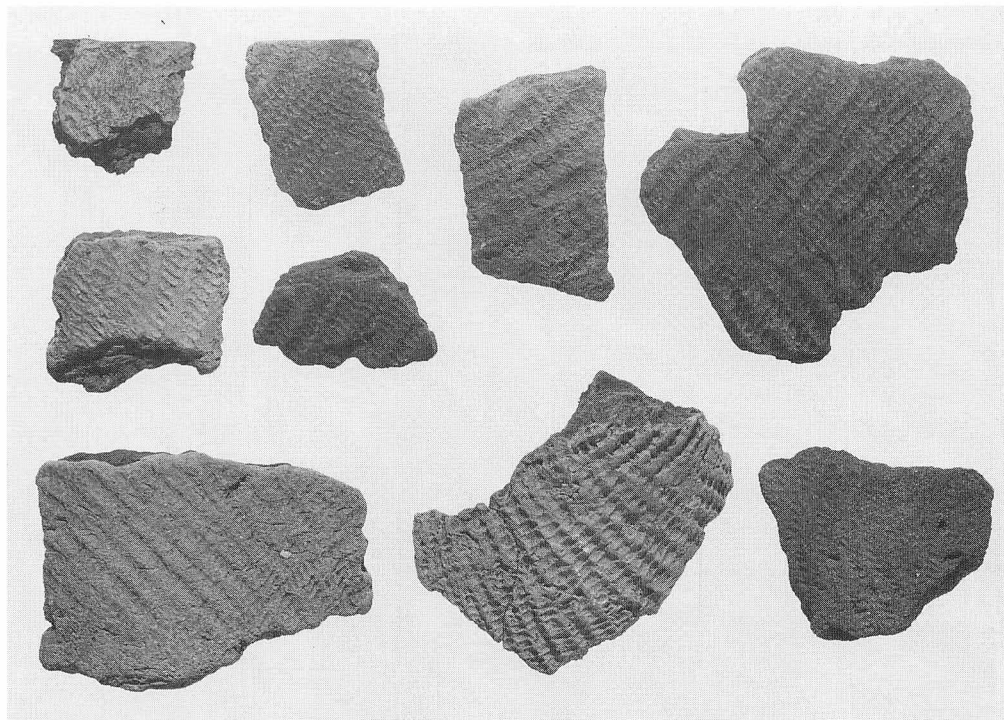
—F-1 周辺の遺物出土状況（北から）—



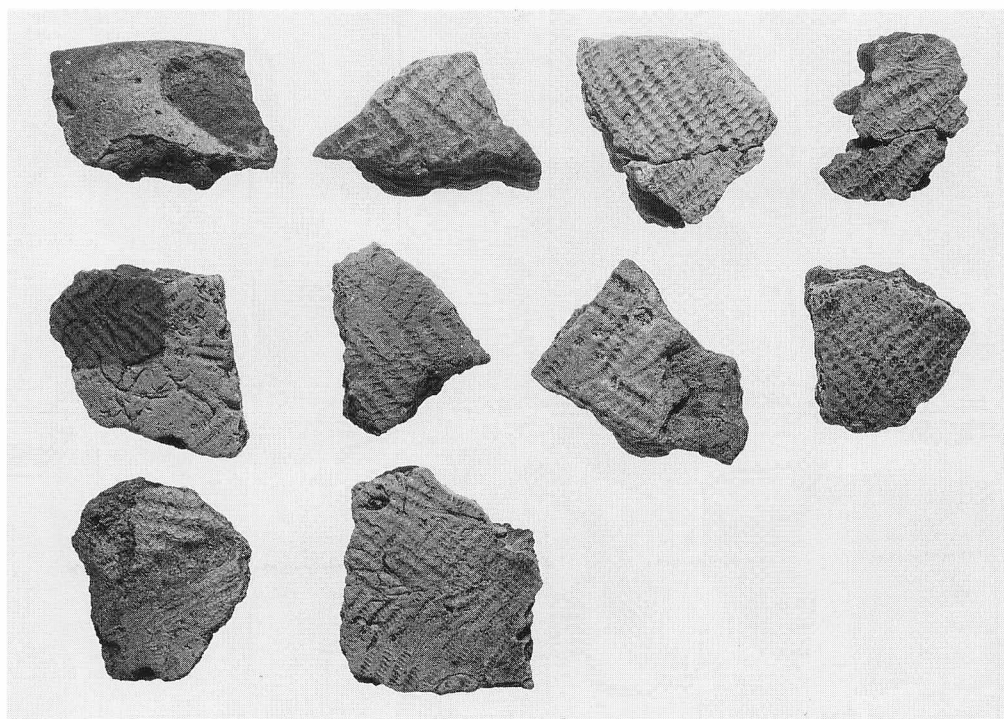
△①F-1 周辺出土の遺物



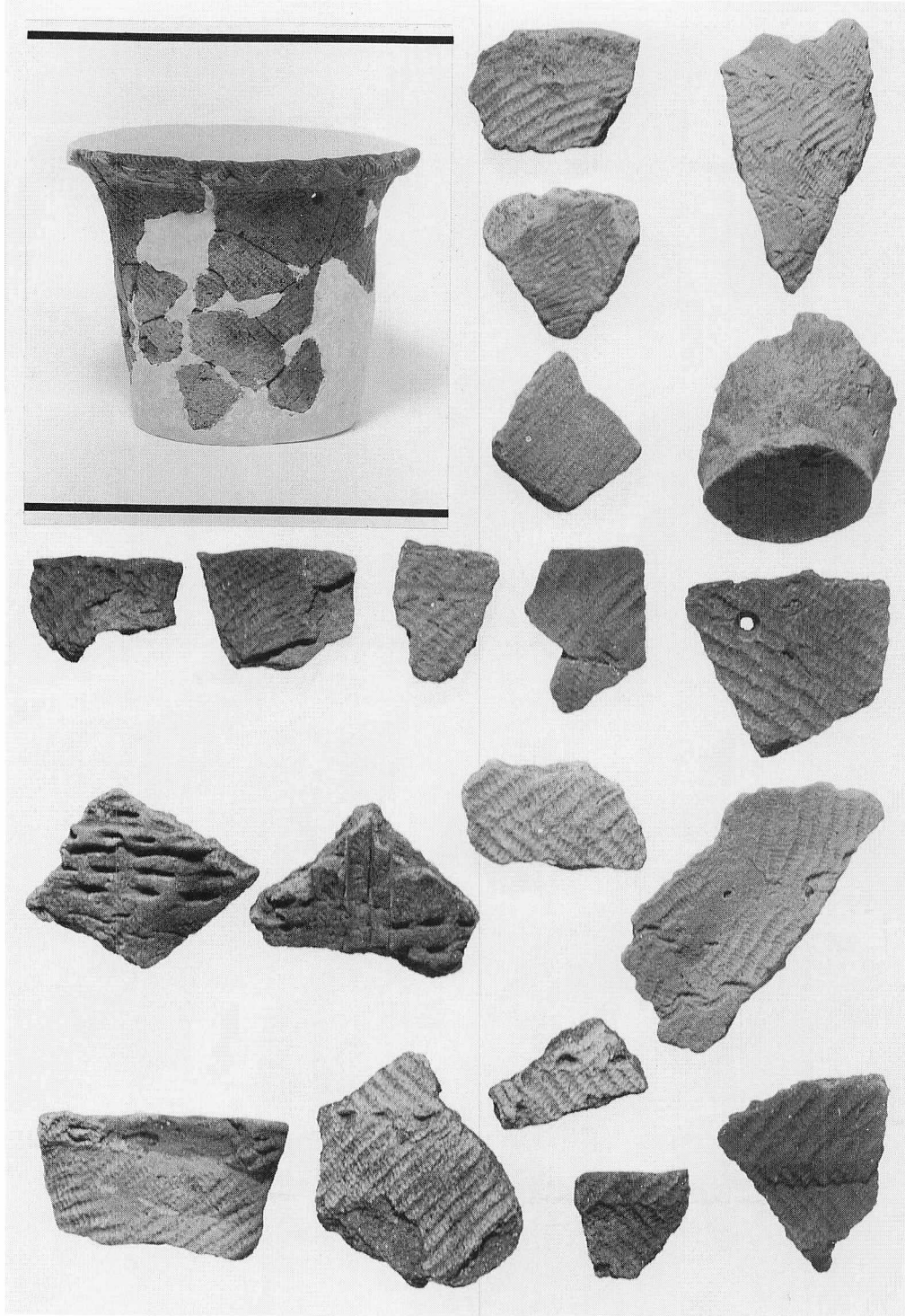
② I b-4 類土器片△



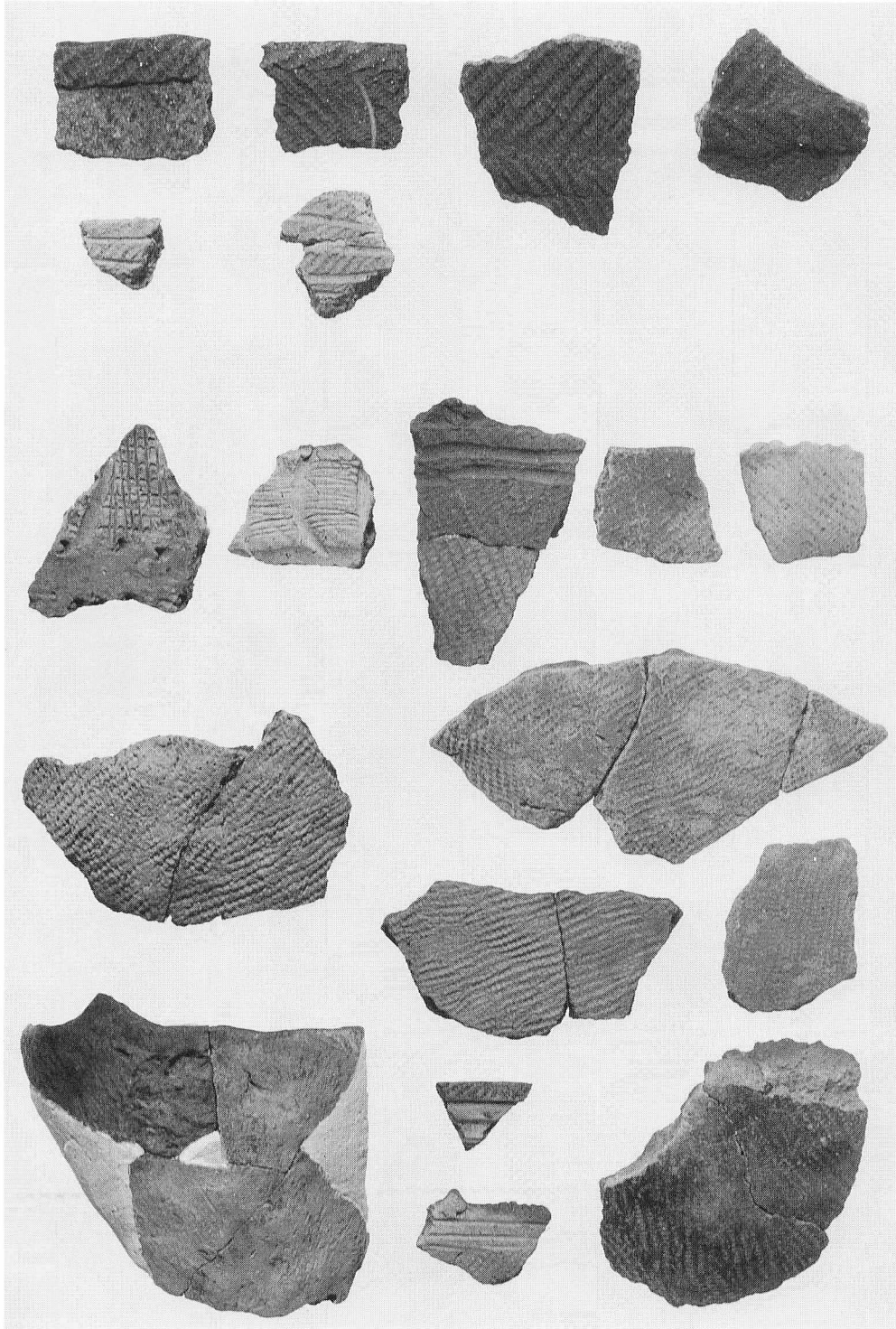
△① I a-2 類土器片



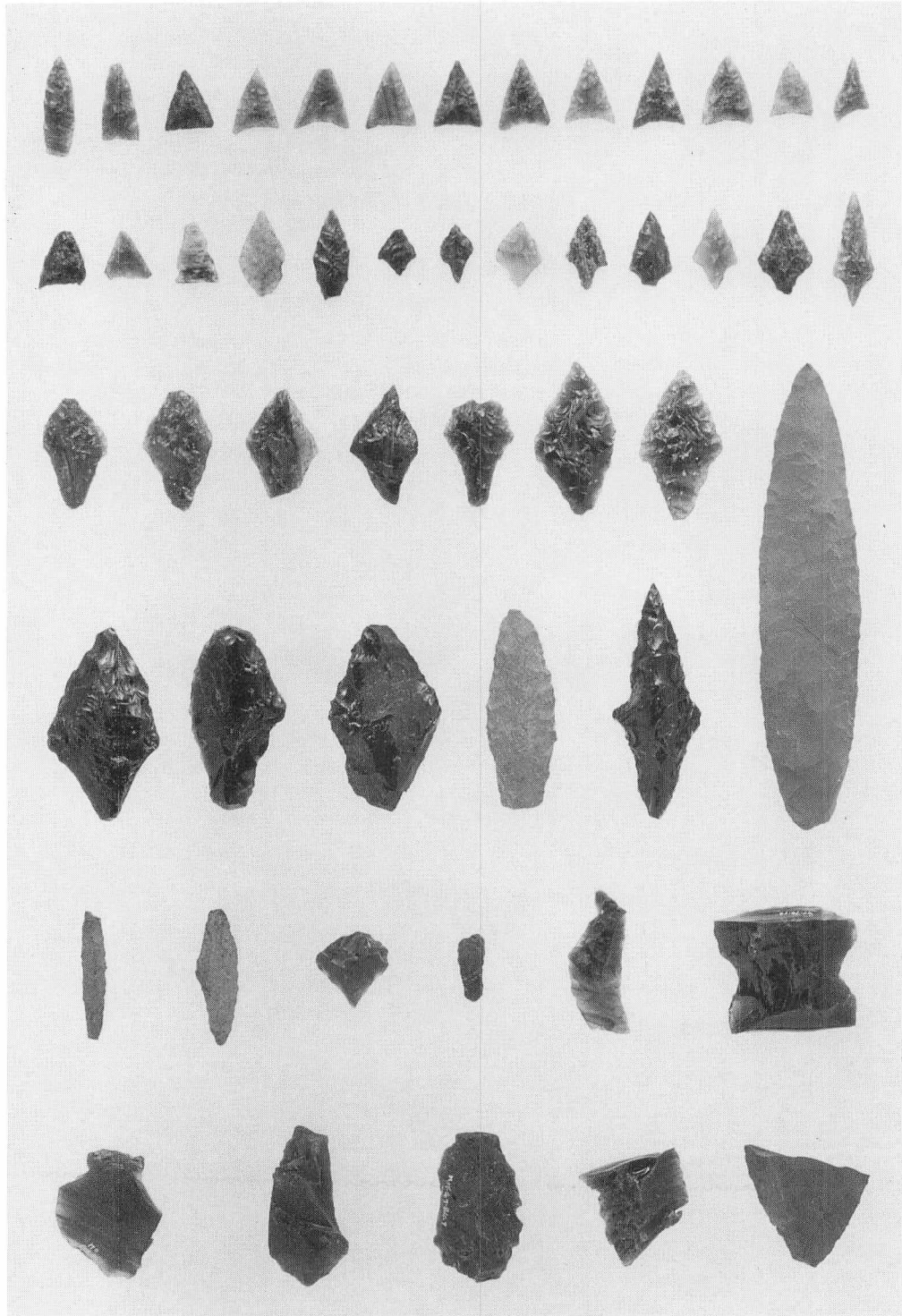
② I b類土器片△



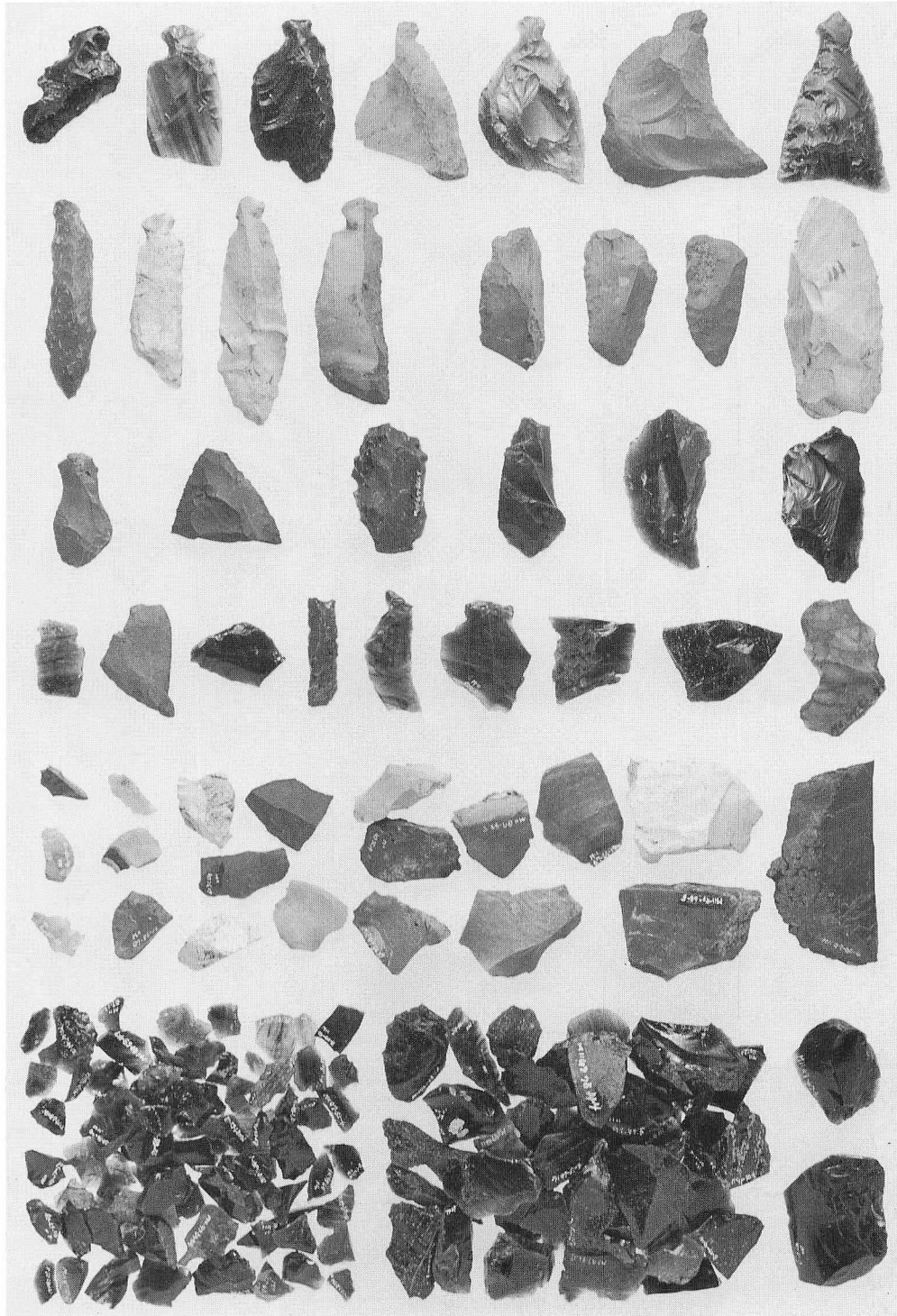
Ⅲ群土器



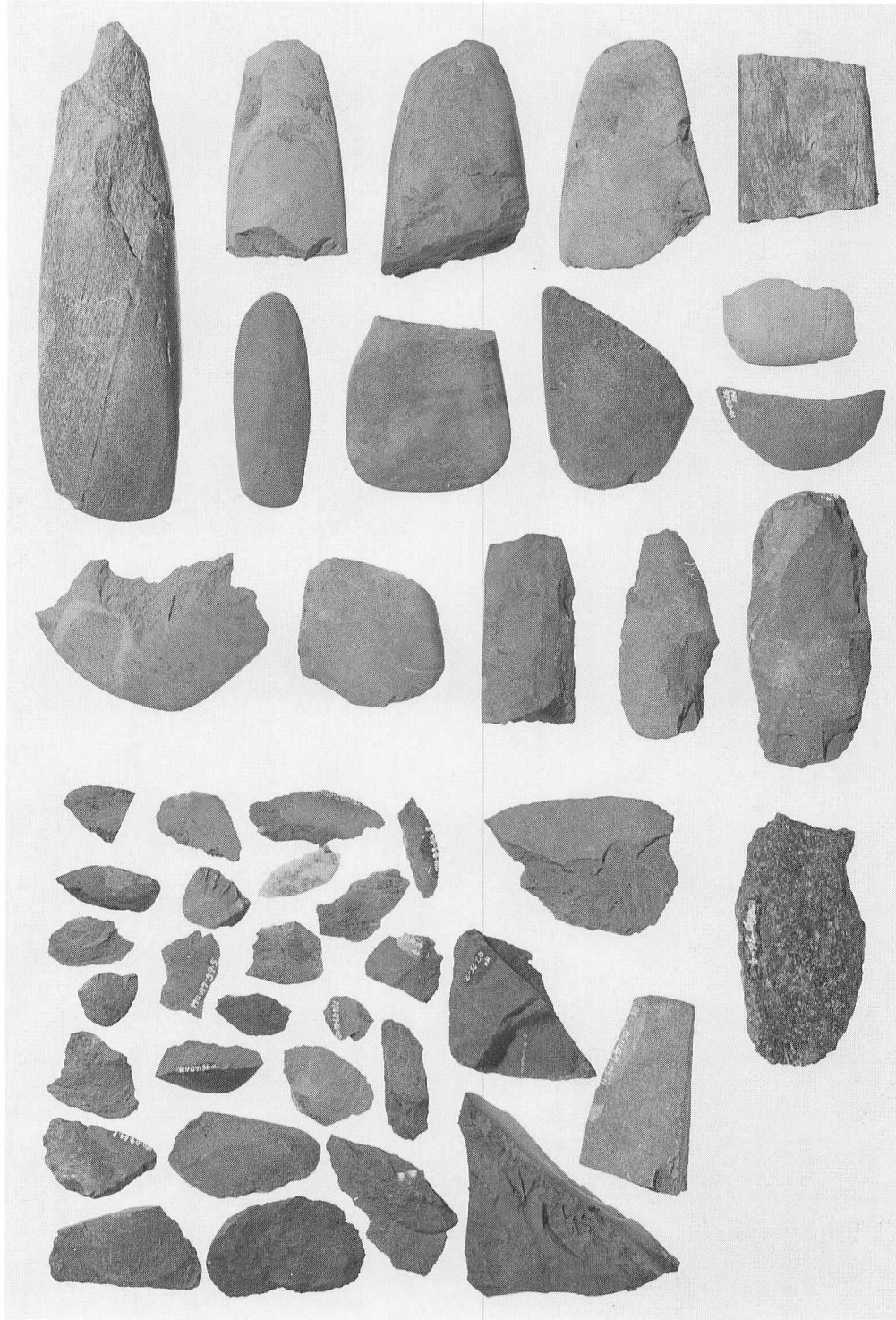
IV・V群土器片



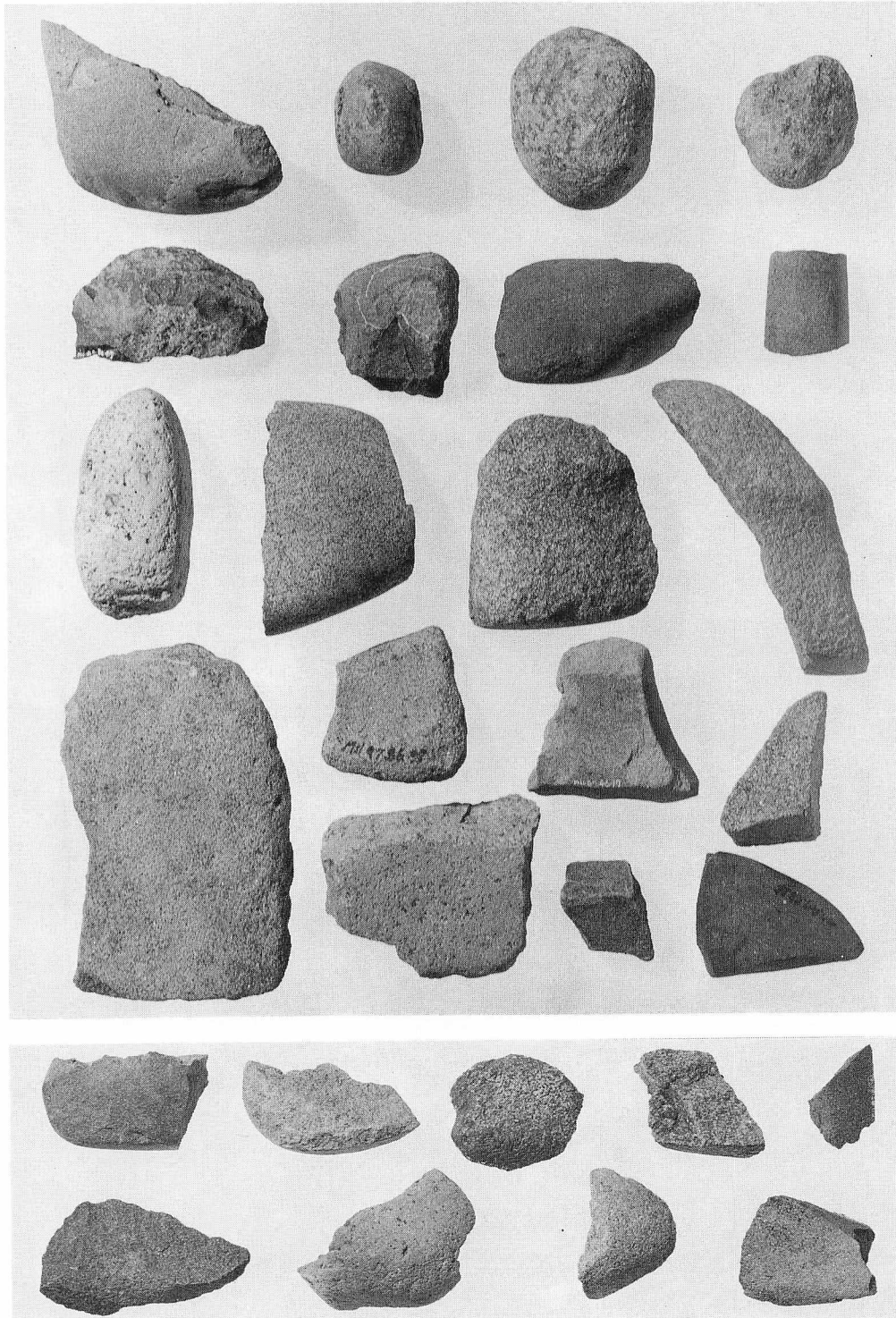
A・B・C・D類石器



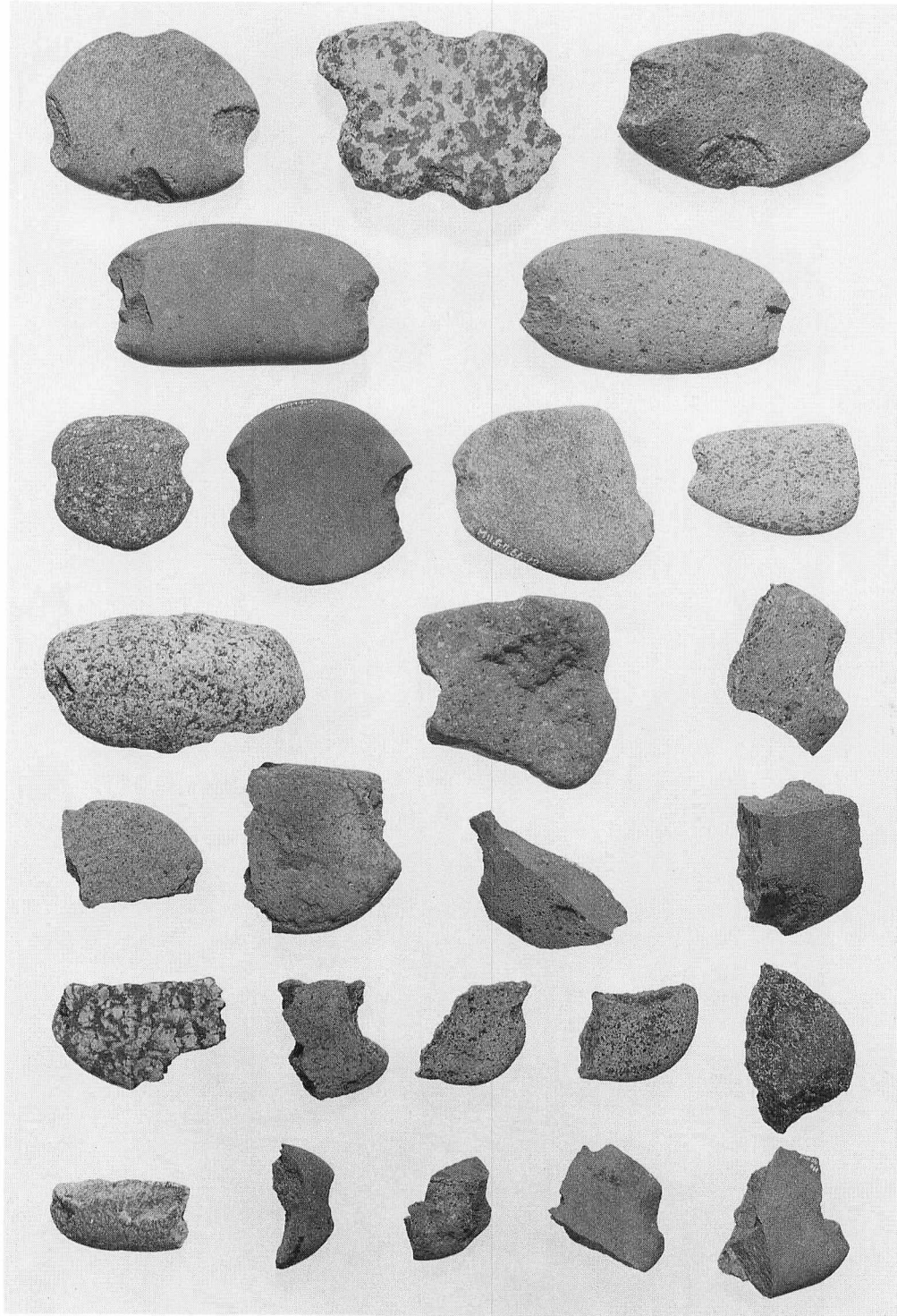
D・E・00・01a・01・02類石器等



F類石器



G・J・K・M類石器



N類石器

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告 第35集
新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
第4分冊 ベンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ

発行日 昭和62年3月26日

発行者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒 064 札幌市中央区南26条西11丁目
Tel. (011)561-3131

印刷者 富士プリント株式会社
〒 064 札幌市中央区南16条西9丁目
Tel. (011)531-4711

